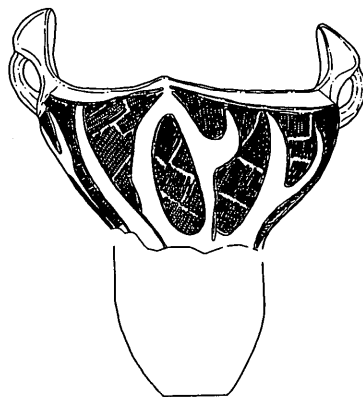
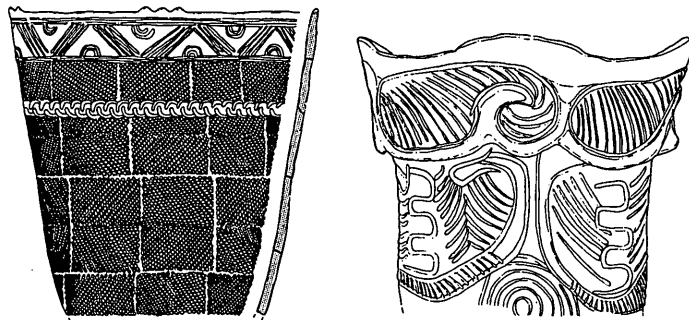


よ っ か い ち い せ き

四日市遺跡II

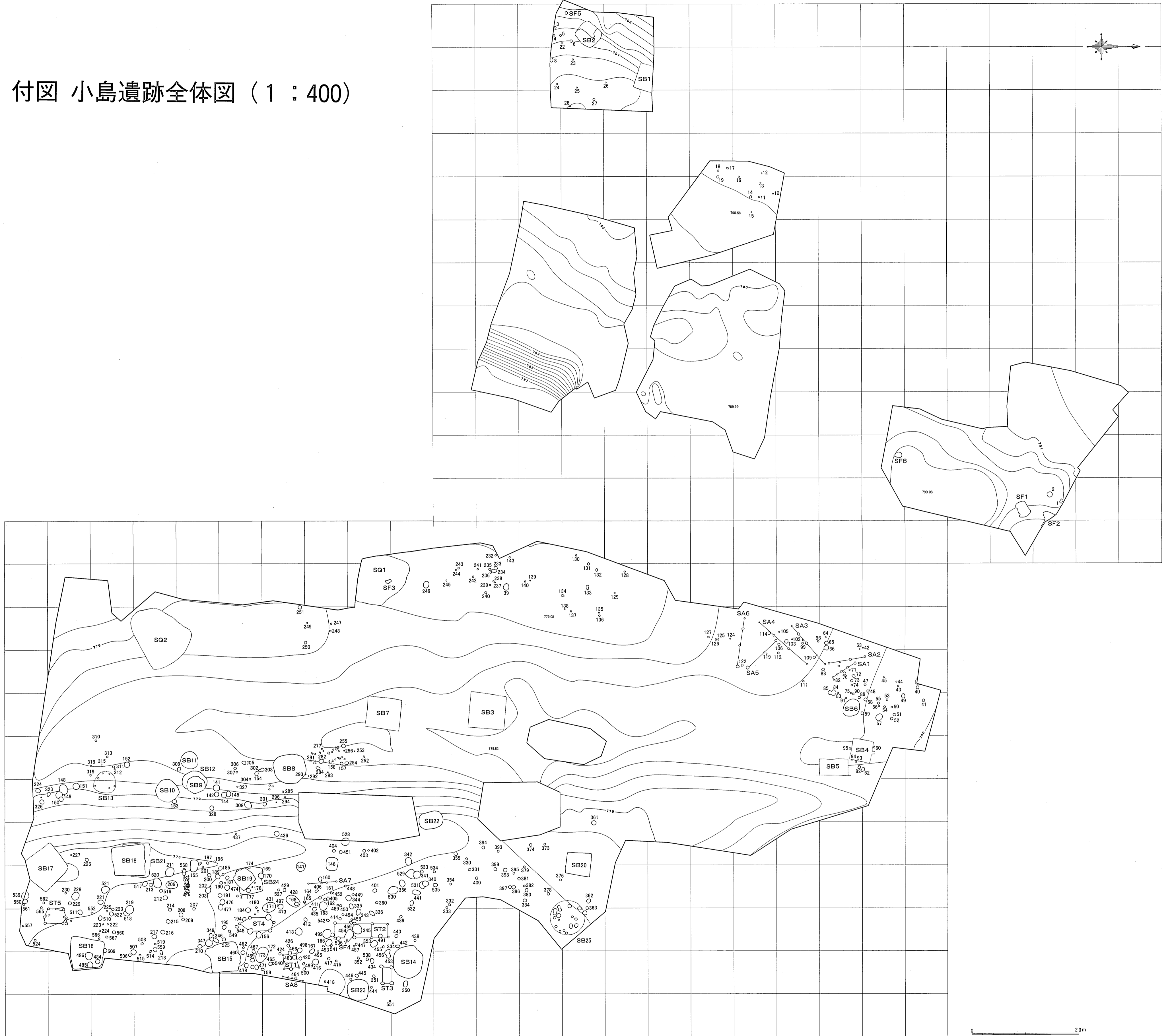
——横尾地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書——



1996

上小地方事務所
真田町教育委員会

付図 小島遺跡全体図 (1 : 400)



YOKKAICHI SITE

よ っ か い ち い せ き

四日市遺跡II

——横尾地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書——

1996

上小地方事務所
真田町教育委員会



四日市遺跡A地区遠景（北から）

四日市遺跡A地区は標高675mの神川の河岸段丘上に占地する縄文時代中期後葉～平安時代の複合遺跡で、今回の調査で多くの住居址とそれに伴う遺物が検出された。なかでも縄文時代の柄鏡型住居址の検出は、当町では初例ということで注目された。



四日市遺跡 A 地区空中写真



96号住居址



埋甕



炉



四日市遺跡B地区遠景（西から）

四日市遺跡B地区はA地区の西300m付近に位置する、縄文時代前期～平安時代の複合遺跡である。縄文前期の関山式土器がみられ、良好な資料を得ることができた。他に瑛状耳飾りなどが出土している。



四日市遺跡B地区空中写真



4号住居址出土古墳時代後期土器

B地区4号住居址から、多数の完形資料が出土した。土器の特徴から時期は古墳時代後期と考えられる。この住居址からは他に鉄製刀子（小刀）が1点出土した。

序

真田郷には昔から松代や群馬に通ずる交通路があり、縄文文化もこの要衝の地に発達してきました。四日市遺跡は真田町の中心の位置にあります。以前から土器の破片が田畑に散見され、関係機関では埋蔵文化財の包蔵地として注目されてきたところでもあります。

真田町では近年各所で圃場整備が行なわれるようになっておりますが、四日市遺跡A地区及びB地区は、横尾地区県営圃場整備事業として整備されることとなったことから、限られた時間の中で真田町教育委員会が平成5年度と6年度の2か年にわたって発掘調査をしたものであります。

四日市遺跡は、既に平成元年度に新消防署庁舎敷地の発掘調査が行なわれておりますが、この隣接地をA地区、JA農機・オートセンター西側をB地区として調査したものであります。今回の調査では縄文時代前期から平安時代にかけての約6,000年にわたる時代の住居址が次々と見つかり、この遺跡は相当広い範囲において非常に長い期間、住居が散在していたことが分かりました。また出土品も縄文土器や石器のほか块状耳飾りなどの珍しい出土品もあり、町の遙か昔の文化を知る貴重な手掛かりとなった次第であります。

今後、保育園敷地及びJA農機・オートセンター敷地の調査が進みますと四日市遺跡は約3ヘクタールの大規模遺跡としてその全容が明らかになりますが、この縄文時代からの広範な集落跡は上田・小県地方はもちろん東信地方を代表する遺跡と言えるでしょう。そして当地方の歴史研究の上で今後貴重な役割を果たすものと期待されます。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり多大なご指導を賜りました長野県教育委員会文化課、上小地方事務所土地改良第一課、そして快く作業に協力して下さった(社)上田地域シルバー人材センターの皆様方ほか協力いただいた大勢の皆様方に深甚なる敬意と感謝を申し上げ、序にかえる次第であります。

平成8年3月

真田町教育委員会
教育長 三井 俊男

例 言

- 1 本書は長野県小県郡真田町大字長字四日市における四日市遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は県営ほ場整備事業横尾地区の実施に先立ち、上小地方事務所の委託を受けて行った。
- 3 調査は真田町（真田町教育委員会社会教育係）が国庫補助事業として行った。
- 4 調査は発掘調査から遺物整理・報告書刊行まで含めて1993年5月7日から1996年3月22日まで実施した。
- 5 発掘調査に係る作業分担は以下のとおりである。
 - ◎ 遺構実測 和根崎剛・川上麻子・田畑しず子・柳沢和代・横沢初枝
 - ◎ 遺物復元 相馬敬子・田畑しず子・横沢初枝
 - ◎ 遺物拓本 横沢初枝・相馬敬子・田畑しず子・柳沢和代・荻原喜久江
 - ◎ 遺物実測 和根崎剛・川上麻子・相馬敬子・(株)新日本航業甲信越支店・(有)写真測図研究所
 - ◎ トレース 川上麻子・田畑しず子・荻原喜久江
 - ◎ 遺構・遺物写真 和根崎剛・(有)写真測図研究所
 - ◎ 遺物観察表 和根崎剛・川上麻子・相馬敬子
- 6 本文の執筆は和根崎剛・川上麻子が分担して行った。文責は別途記載してある。
- 7 調査に係る基準点測量及び空中写真測量を、四日市遺跡A地区については(株)新日本航業甲信越支店、B地区については(有)写真測図研究所に委託した。
- 8 遺物の自然科学分析調査を(株)パリノ・サーヴェイに委託して行った。
- 9 調査に係る資料は真田町教育委員会が保管している。
- 10 本書の編集・刊行は事務局（真田町教育委員会社会教育係）が行った。
- 11 本書が上梓されるまでには、多くの方々や諸機関のご理解・ご協力を賜った。以下ご芳名を記して深く感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

大竹憲昭・尾見智志・金子浩昌・川上 元・川崎 保・児玉卓文・小林幹男・桜井秀雄・塩入秀敏・清水洋和・助川朋広・田畑和秀・廣瀬昭弘・三上徹也・宮下健司・綿田弘実・長野県教育委員会文化課・上小地方事務所土地改良第一課・真田町農林課・(有)上田地域シルバー人材センター

凡 例

- 1 遺構の略号は下記のとおりである。

SB 竖穴住居址	ST 掘立柱建物址	SK 土坑址	Pit ピット
-----------	------------	---------	----------
- 2 遺構番号は時代別とはせず、発見順に任意で命名した。なお、欠番がある。
- 3 実測図の縮尺は、下記を基本としたが、縮尺の異なるものもあり、各図毎に示した。

竖穴住居址・掘立柱建物址・土坑址	1/80	炉・竈	1/40		
完形土器	1/4	拓本資料	1/3	打製石斧・磨製石斧	1/2
小形石器（石鏃等）	1/1・2/3	磨石	1/3	石皿・蜂巢石	1/4
- 4 挿図中におけるスクリーン・トーンは下記のを示す。

遺構	//////	遺構構築土	■■■■	焼土				
遺物	■■■■	含繊維土器断面	■■■■	須恵器断面	■■■■	黒色処理	■■■■	灰釉陶器
- 5 土層の色調は、「新版 標準土色帖」に基づいている。

目 次

巻頭図版	2 古墳時代の遺構と遺物……………86
序 真田町教育長 三井俊男	3 平安時代の遺構と遺物……………93
例言・凡例・目次	4 時期不明の遺構 ……………100
第1章 調査の経過 川上麻子	
第1節 調査に至る経過……………1	第5章 遺物観察結果一覧 川上麻子
第2節 調査団の構成……………1	
第3節 調査の概要と経過……………2	第6章 自然化学分析 パリノ・サーヴェイ(株) 早稲田大学 金子浩昌
1 各年度の経過……………2	第1節 四日市遺跡A地区における自然科学分析調査…118
2 調査日誌(抄)……………2	はじめに……………118
	1 埋甕等の内容物推定……………118
第2章 遺跡周辺の環境 川上麻子	2 古墳時代および平安時代のカマドの燃料材推定…120
第1節 地理的環境……………4	3 土器胎土分析……………123
第2節 歴史的環境……………4	4 動物遺体鑑定……………127
第3章 四日市遺跡A地区の調査結果 和根崎剛	第2節 四日市遺跡B地区における自然科学分析調査…131
第1節 発掘調査の概要……………7	はじめに……………131
1 遺跡及び調査対象地点の概観……………7	1 調査課題……………132
2 調査の方法……………7	2 試料……………132
3 遺構・遺物の概観……………7	3 分析方法……………132
4 基本層序……………8	4 土器の内容物推定……………133
5 検出された遺構・遺物……………8	5 燃料材の推定……………134
第2節 調査の結果……………9	第7章 調査の成果と課題 和根崎剛
1 縄文時代の遺構と遺物……………11	第1節 四日市遺跡A地区……………137
2 古墳時代の遺構と遺物……………40	1 縄文時代……………137
3 平安時代の遺構と遺物……………44	2 古墳時代……………147
	3 平安時代……………147
第4章 四日市遺跡B地区の調査結果 和根崎剛	第2節 四日市遺跡B地区……………148
第1節 発掘調査の概要……………54	1 縄文時代……………148
1 遺跡及び調査対象地点の概観……………54	2 古墳時代……………152
2 調査の方法……………54	3 平安時代……………153
3 遺構・遺物の概観……………54	
4 基本層序……………55	小中学生のためのページ……………157
5 検出された遺構・遺物……………55	おわりに……………161
第2節 調査の結果……………56	
1 縄文時代の遺構と遺物……………58	写真図版

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

平成3年度において、真田町農林課農村整備係担当職員から「県営ほ場整備事業横尾地区」の計画があるとの連絡を受けた。真田町教育委員会において事業地域内の埋蔵文化財の有無について調査したところ、周知の四日市遺跡が存在することが判明し、上小地方事務所土地改良第一課及び長野県教育委員会文化課との協議の結果、発掘調査のうえ記録保存する方向で合意した。

平成4年11月には長野女子短期大学教授の小林幹男氏に依頼し、四日市遺跡の範囲と遺構の密度を確認するために表面採集、及び試掘調査を実施した。その結果、従前から知られていた四日市遺跡の範囲から西方へ300mほど離れた箇所に新たに遺物散布地が発見された。そのため再び協議をもち、従前の四日市遺跡を四日市遺跡A地区、新たに確認された箇所についてはB地区と呼称し、A地区を5年度、B地区を6年度調査とすることとなった。

平成5年度には調査担当者2名を採用し、平成5年4月27日付けで上小地方事務所と発掘調査委託契約を締結し、調査に着手した。

第2節 調査団の構成

(事務局) 真田町教育委員会

教 育 長 松尾一久 (平成5年10月31日退任)

三井俊男 (平成5年11月1日着任)

教 育 次 長 三井俊男 (平成5年10月31日退任)

芳沢孝夫 (平成5年11月1日着任)

社会教育係長 高寺昭三郎 (平成5年6月7日退任)

神林信義 (平成6年3月31日退任)

荒井今朝信 (平成6年4月1日着任)

社会教育係 小宮山治仁・和根崎剛・川上麻子

(調 査 団)

担 当 者 和根崎剛 (真田町教育委員会主事、長野県考古学会会員)

調 査 員 川上麻子 (真田町教育委員会主事)

調 査 補 助 員 荻原喜久江・相馬敬子・田畑しず子・柳沢和代・横沢初枝 (真田町臨時職員)

発掘調査参加者 山岸知子・樋口啓一・渋谷久枝・草井やよい・渋谷玉江・青木幸子・山崎和子・

田中栄吉・小林幸雄・坂口いと・北沢教子・渋谷正一・渋谷里治・柳沢さち子・

半田孝雄・岡嶋庄平・一之瀬貞美・関口嘉弘・柳沢君世・小林みよ子・大久保きよ・

桜井好平・木島久男・三井正明 (順不同) (以上、(社)上田地域シルバー人材センター)

真田町役場職員、町内小学生

第3節 調査の概要と経過

1 各年度の経過

(1) 平成5年度の経過

本年度の発掘調査及び整理作業に係る総事業費は17,200千円（農政部局負担80.6%・文化財保護部局負担19.6%）であった。A地区の発掘調査を実施したところ、縄文時代中期・古墳時代後期・平安時代の住居址等が検出された。現場における発掘作業は5月7日から8月31日まで行なわれ、10月4日から整理作業を実施した。梅雨の長雨のため、現場調査が停滞した。

(2) 平成6年度の経過

本年度の発掘調査及び整理作業に係る総事業費は16,717千円（農政部局負担80.6%・文化財保護部局負担19.6%）であった。B地区の発掘調査を実施したところ、縄文時代前期・古墳時代後期・平安時代の住居址等が検出された。現場における発掘作業は8月29日から11月10日まで行なわれ、12月1日から整理作業を実施した。

(3) 平成7年度の経過

本年度の報告書作成作業に係る総事業費は4,283千円（農政部局負担80.6%・文化財保護部局負担19.6%）であった。作業は7月3日から行なわれ、平成8年3月22日に報告書を刊行して調査を終了した。

2 調査日誌（抄）

平成5年度

1993年（平成5年）

- 5月7日 調査着手 重機でトレンチを掘削した。プレハブ設営。機材搬入。作業員5名体制。
- 5月17日 重機による表土剥ぎ作業開始（～20日）。
- 5月20日 グリッド杭打ち開始（～24日）。
- 5月21日 発掘調査開始の式。作業員13名体制。
- 5月25日 住居址の掘り下げ開始。
- 7月1日 柄鏡型住居址の一部を検出するも、石棺墓と誤認。
- 7月29日 発掘体験教室（真田町教育委員会主催）を実施。町内小学生60名参加。
- 8月5日 西区の表土を重機により除去。
- 8月17日 真田町役場職員が研修の一環として発掘調査参加（～30日）。
- 8月19日 柄鏡型住居址の調査を開始。
- 8月22日 現地説明会を開催。来場者38名。
- 8月30日 ラジコンヘリによる航空写真測量を実施。
- 8月31日 プレハブ・機材撤収。現場での作業を終了する。
- 10月4日 町文化会館郷土資料室にて遺物の整理作業を開始。

1994年（平成6年）

3月24日 平成5年度の作業を終了する。

平成6年度

1994年（平成6年）

8月29日 重機による表土剥ぎ作業開始（～31日）。

9月1日 発掘調査開始の式。

9月2日 住居址の掘り下げ開始。

9月7日 グリッド杭打ち。

9月12日 4号住居址から古墳時代の多量の完形土器が出土。

10月19日 20号住居址から玦状耳飾りが出土。

10月31日 ラジコンヘリによる航空写真測量を実施。

11月10日 プレハブ・機材撤収。現場での作業を終了する。

12月1日 町文化会館郷土資料室にて遺物の整理作業を開始。

1995年（平成7年）

3月23日 平成6年度の作業を終了する。

平成7年度

1995年（平成7年）

7月3日 町文化会館郷土資料室にて遺物の整理及び報告書作成作業を開始。

1996年（平成8年）

3月22日 四日市遺跡A地区・B地区の発掘調査報告書を刊行。平成7年度の作業を終了する。



B地区SB2 発掘風景



整理作業

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

真田町は長野県の北東部に位置し、町の東側は群馬県嬭恋村と県境を接する。総面積は181.90km²を有し、北東には四阿山(2,332.9m)・根子岳(2,128m)が連なり、町の大部分を山地が占めている。山麓の菅平高原に源を発する神川沿岸には谷平野が発達している。

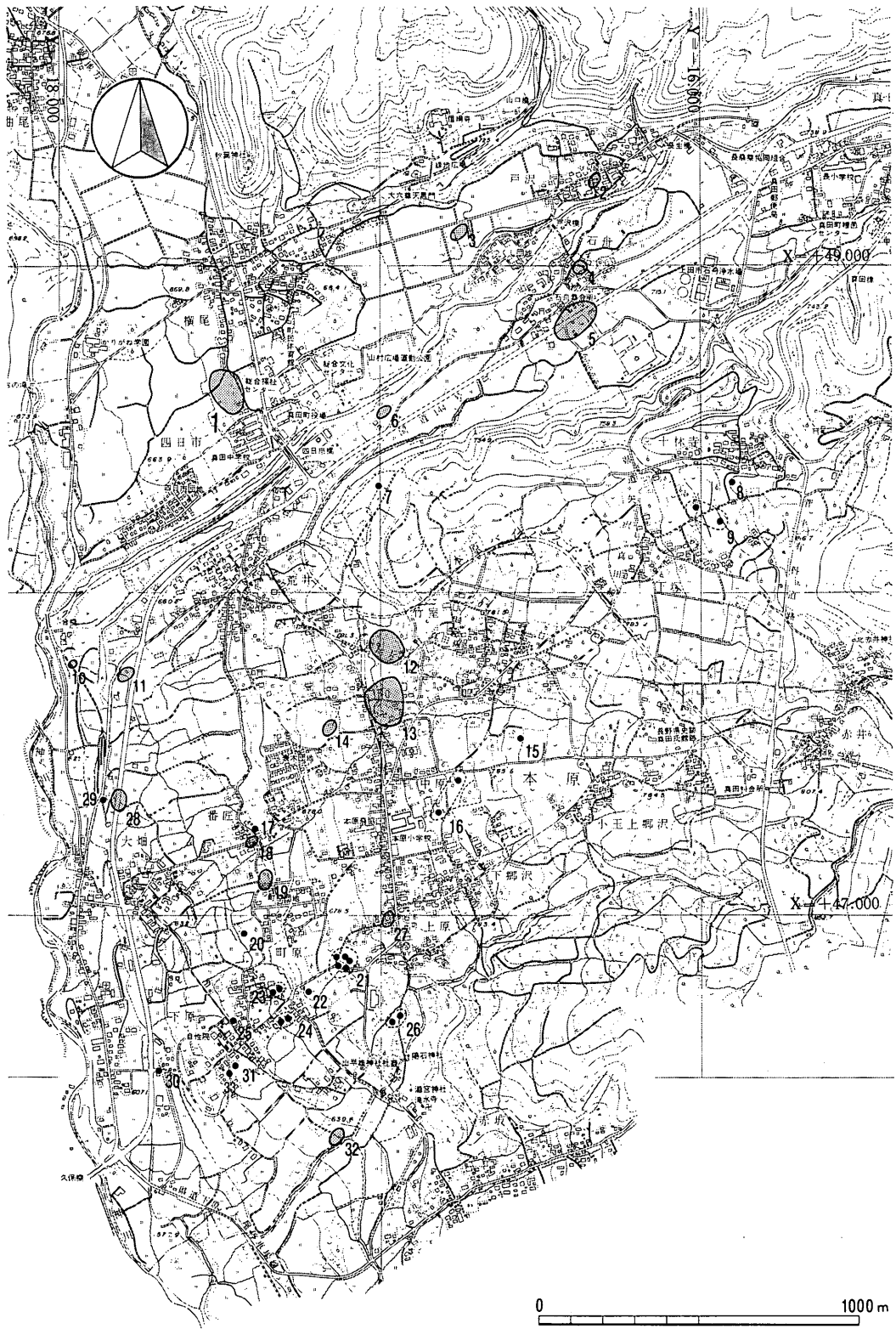
四日市遺跡の位置する横尾・四日市地区は、^{かんがわ}神川の堆積平坦面上にある。上田市との境界付近で神川と合流する^{そまひ}傍陽川や^{せま}洗馬川の扇状地面とも接しており、広く開けている地域である。町役場、町民グラウンド、体育館、真田中学校といった施設が集中し、これらの建設当時から付近一帯に遺跡が存在することが知られてはいたものの、十分な調査が行なわれていたとはいいがたく、遺跡の概要等については不明な点が多かった。平成元年度になって役場庁舎の新築に係り四日市遺跡の一部が発掘調査され、縄文時代中期及び平安時代の集落の存在が明らかになり、この発掘調査が契機となって横尾・四日市地区の遺跡の重要性が改めて認識されることとなった。なお、本遺跡は現在の集落の中心からやや南に外れた神川右岸の河岸段丘端に位置している。近年、団地造成や大規模ほ場整備事業によって開発が急速に進んでおり、埋蔵文化財保護の現状は決して良好であるとは言えない。

第2節 歴史的環境

真田町は真田氏発祥の地として知られる。また、群馬、松代への交通路としての役割は大きく、古代においても交通の要衝として重要な場所であったと思われる。当町の歴史を考える場合にはこの点を踏まえておく必要がある。

原始・古代を概観してみよう。菅平高原の遺跡については小原氏等によって早くから注目され、資料が蓄積された。小原氏の地道な研究活動に対して深く敬意を表したい。旧石器時代の遺物は菅平小中学校遺跡、唐沢B遺跡等からの出土が知られている。学校遺跡出土の石器は東山系文化に属するものと考えられている。また、唐沢B遺跡は^{みこしばがたせきふ}神子柴型石斧を出土した遺跡として知られている。なお、四日市遺跡の位置する平野部では、旧石器時代の遺跡は発見されていないが、先にふれた境田遺跡から^{やりさきがたせんとうき}黒耀石製の槍先型尖頭器らしい石器が1点出土している。ローム層上面からの単独出土であり、遺構は検出されなかった。

つづく縄文時代になると菅平高原の東組E遺跡、石戸山A遺跡などに草創期・早期の生活の痕跡が認められる。菅平地区では過去に何度か発掘調査が行なわれ、^{おしがたもんけいどき}押型文系土器の出土がみられ、それに伴う石器も多数見つかっている。しかし、住居址の検出には至っていない。前期になると平野部でも遺跡の数が増え、四日市遺跡で^{けつじょう}塊状耳飾りをはじめとして^{はなづみかそう}花積下層式～^{くろはま}黒浜式併行期の資料が見つかっている。住居址も検出されており、注目される。四日市遺跡は中期終末の^{かそり}加曾利E式土器・^{からくきもんけい}唐草文系土器の時期が最盛期で、敷石住居址がみられ、典型的な^{えかがみがた}柄鏡型住居址も検出されている。縄文時代中期の浅間山山麓には四日市遺跡をはじめ、小諸市の^{ごうど}郷土遺跡、東部町の久保在家遺跡といった大きな集落が分布しており、ひとつの文化圏として捉えられる可能性を秘めている。四日市遺跡の土器様相には唐草文系土器や加曾利E式土器、^{そり}曾利式土器の



第1図 四日市遺跡周辺の遺跡分布図

No.	名称	時代	所在地	備考	No.	名称	時代	所在地	備考
1	四日市遺跡	縄文～	横尾 四日市	平成元年調査	20	鶴の子田古墳(円)	古墳	本原 下原鶴の子田	
2	柳又遺跡	縄文	戸沢 柳又		21	町下1号墳(円)	〃	〃 上原町下	
3	松葉田遺跡	〃	〃 松葉田			町下2号墳(円)	〃	〃	
4	石舟遺跡	〃	石舟 石舟			町下3号墳(円)	〃	〃	
5	雁石遺跡	〃	〃 雁石	昭和49・59～60年調査		町下4号墳(円)	〃	〃	
6	山遠家遺跡	〃	横尾 山遠家			町下5号墳(円)	〃	〃	
7	荒井古墳(円)	古墳	本原 荒井		22	矢倉城古墳(円)	〃	〃 下原東出早	
8	的岩古墳(円)	〃	〃 西畝		23	九久館1号墳(円)	〃	〃 九久館	
9	下塚1号墳(円)	〃	〃 下塚			九久館2号墳(円)	〃	〃	
	下塚2号墳(円)	〃	〃		24	西出早1号墳(円)	〃	〃 西出早	
10	北白庭遺跡	〃	〃 北白庭		西出早2号墳(円)	〃	〃		
11	南荒井遺跡	〃	〃 南荒井		25	村中古墳(円)	〃	〃 村中	
12	山崎遺跡	縄文	〃 山崎		26	桜林1号墳(円)	〃	〃 上原東出早	
13	竹室遺跡	〃	〃 竹室			桜林1号墳(円)	〃	〃	
14	表木遺跡	〃	〃 表木		27	南町上遺跡	縄文	〃 中原南町上	
15	殿蔵院古墳(円)	古墳	〃 殿蔵院		28	藤沢遺跡	古墳～	〃 大畑藤沢	昭和49年調査
16	広山寺1号墳(円)	〃	〃 中原南町上		29	藤原古墳	古墳	〃	〃
	広山寺2号墳(円)	〃	〃		30	羽毛田古墳(円)	〃	〃 下原羽毛田	壊 滅
17	北番匠古墳(円)	〃	〃 北番匠		31	小沼長者古墳(円)	〃	〃 西田	平成5年確認調査
18	北番匠B遺跡	古墳～	〃 南番匠		32	境田遺跡	古墳～	〃 境田	平成6年調査
19	北番匠A遺跡	〃	〃		33	西田遺跡	中世～	〃 西田	平成6年調査

表1 四日市遺跡周辺の遺跡地名表

影響もうかがえ、興味深い。後期の遺跡は雁石遺跡^{がんせき}が知られ、称名寺系^{しょうみょうじけい}の大深鉢や亀型土製品、土製耳飾、石棒などの出土を見た。中でも亀型土製品は貴重な例である。土笛としての機能が推定され、中空で腹部に穴が2つ開いている。晩期の遺跡については菅平の唐沢、陣の岩といった岩陰遺跡から土器、石器とともに骨角器の出土が知られている。また、平野部の雁石・四日市・境田遺跡からも佐野式土器や氷式土器の破片が出土している。

弥生時代の遺跡はキャンプサイトとしての前述の岩陰遺跡と若干が知られるのみで、竪穴住居址については検出例がない。また、遺物についても岩陰遺跡を除くと、後期の箱清水式土器の破片が散在的に見られる程度であり、水稻耕作を基盤とした集落の存在は無かったものと推定される。

古墳時代の集落が展開するのは後期の鬼高式期になってからである。後期円墳の典型である藤沢古墳や本原地区の多数の小円墳と時期的に一致する。近年、四日市や境田遺跡で住居址の検出例が増えている。境田遺跡では石製模造品が出土した。当時の集落規模及び経営基盤については不明であるが、耕地拡大の動向と合わせて検討課題である。

奈良・平安時代の様相については四日市や境田遺跡で平安時代の集落址がみついている以外は、断片的な情報しかない。しかし、おそらく平安時代になると大規模かつ長期的な集落が平野部に存在していたと思われる。四日市では墨書土器^{ぼくしよ}が多数出土しており、また、隣接する四日市遺跡C地区で鍛冶製鉄遺構が検出されている。

第3章 四日市遺跡A地区の調査結果

第1節 発掘調査の概要

1 遺跡及び調査対象地点の概観

本遺跡は神川右岸の河岸段丘端に占地している。遺跡範囲の詳細については確かではないが、内容物については平成元年度の調査によって明らかになっている。それによると今回の地点も幾多の時代にわたる複合遺跡であることが推定され、調査が慎重かつ困難なものになることが予想された。

調査対象地点の面積は約3,500㎡を数える。旧地形は南に向かって緩やかに傾斜しており、切土・盛土して畑地となっていたり、自然の土砂流失も認められた。そのため、一部では耕作土直下がローム層となる場合があり、多くの遺構が失われているものと推定される。また、主要地方道長野・真田線等により少なからず、遺跡の破壊がみられた。遺跡の遺存状況は決して良好とは言えないものであった。

2 調査の方法

四日市遺跡A地区は、平成元年度に今回の調査地区に隣接する約1,180㎡の部分が既に調査され(真田町教育委員会1990)、その調査結果との整合性、調査が将来、周辺まで及ぶ可能性を考慮して、元年度調査で採用された国家座標に基づくグリッド法を用いることとした。調査地区が広大であったため、8m×8mのグリッドを組んで調査した。東西列を東からA・B・C……K、南北列を北から1・2・3……13とし、グリッドの北東交点を基にA-1、B-2のようにグリッドナンバーを付した。遺構の検出位置及び遺構外遺物の一部の取り扱い、このグリッド単位で行なっている。

なお、調査区の設定は道路によって発掘区域が分断されるため、東からI区・II区とした。

遺構全体図はラジコンヘリを用いた航空写真測量法により作成した。個々の遺構の実測は簡易遣り方で行なった。

また、過去の調査で遺構確認面が2面存在することが確認されていたが、1m幅で任意のトレンチを設定し、遺構の密度と土層の状況を把握した上で面的調査を実施した。



空中写真測量ラジコンヘリ

3 遺構・遺物の概観

遺跡は縄文時代中期後葉、古墳時代後期、平安時代の集落址である。平成元年度の調査では住居址34軒(縄文25・古墳1・平安8)と夥しい数の土坑を検出した。今回の調査では住居址43軒(縄文31・古墳1・平安11)を検出した。この調査結果からみると集落として大きく展開していたのは縄文時代中期後葉と平安時代であると言えよう。特筆すべきは今回、縄文時代中期後葉の柄鏡型住居址3軒と敷石住居址が2軒検出されたことである。

縄文時代の遺構は縄文時代中期後葉のものが検出されたのみであった。従って遺物も中期後葉のものが圧

倒的に多い。しかし、早期の表裏条痕土器の破片が遺物包含層から出土している他、前期、後期の土器片が僅かながら出土している。前回の調査で検出された晩期の遺構・遺物は今回は検出できなかった。調査結果のみから推定すると、A地区については主体的な生活の場として利用されていたのは中期後葉のみであったようである。

続く弥生時代の遺構は検出されていないが、遺物は後期箱清水式の壺の破片と思われるものが2～3点出土している。また、大型の打製石斧が1点出土し、弥生時代の遺物である可能性もある。

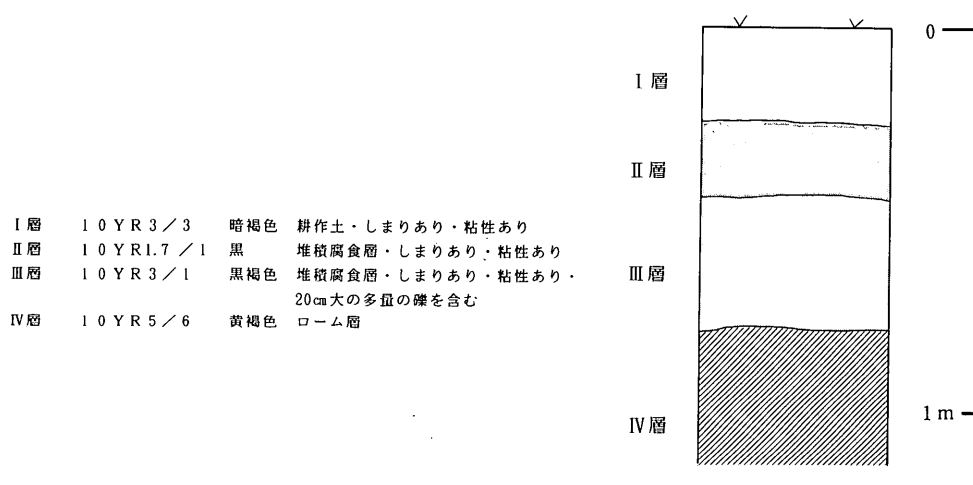
古墳時代の遺構・遺物は住居址が1軒確認された。また、遺構外遺物は皆無であった。A地区付近は集落の中心部ではなかったと推定される。余談ではあるが、後章で報告するB地区では2軒、また、A地区とB地区の間に位置するD地区では10軒近くの後期の住居址が確認されている（平成8年度報告予定）。

平安時代の遺構は住居址を11軒確認した。概ね10世紀代のものと考えている。調査区全体に散在しており、まとまった集落の存在が予想できる。遺構・遺物の遺存状況は比較的良く、鉄製品を含めた良好な一括資料を得ている。墨書土器も多数出土している。

4 基本層序

もっとも多いところで4層に細分できた。I層は表土ないし耕作土、II層（黒色土）とIII層（黒褐色土）が堆積腐食土層、IV層がローム層である。I～III層は20～30cmの層厚を保つ。III層中には大小の円礫が多量に含まれる部分があった。平安時代の遺構はII層上面から、縄文時代の遺構はIII層上面から掘り込まれているようであるが、平安時代の遺構の覆土とII層の色が酷似しており、実際に平安時代の遺構の検出を行なったのはIII層上面となった。また、削平・流出によりI層直下にIV層が存在する部分がある。

それに加え、調査区南部からIV層上面で南西に流下する自然流路を検出した。III層中の円礫はこれに関連するものと推定される。



第2図 A地区基本土層図

5 検出された遺構・遺物

四日市遺跡A地区から検出された遺構・遺物は下記のとおりである。

遺構 縄文時代中期 竪穴住居址 43軒（縄文31・古墳1・平安11）

	古墳時代後期	土坑址	8基	(縄文7、平安1)
	平安時代	屋外埋甕	2基	(縄文)
		集石遺構	2基	(縄文)
		竪穴状遺構	1基	(縄文)
遺物	縄文土器	早期～後期土器		
	土師器	甕・坏・高坏・皿・甑・耳皿		
	須恵器	甕・坏		
	灰釉陶器	坏		
	土製品	焼成粘土塊・土偶		
	石器	石鏃・石匙・石錐・打製石斧・磨製石斧・石皿・すり石・石棒・蜂の巣石		
	石製品	軽石製品・砥石		
	鉄製品	鎌・紡錘車・鉄鏃		

第2節 調査の結果

四日市遺跡A地区は縄文時代中期後葉から平安時代にわたる複合遺跡である。発掘現場における混乱を避けるため、各遺構の番号は時代に係わりなく、発見順に付与した。平成元年度の調査地区と同一の遺跡であり、遺構番号の重複を避けるため、元年度調査の際の遺構番号に続けて、住居址は35、土坑は66から番号を



第3図 A地区周辺の地形と発掘区



第 4 図 四日市遺跡A地区遺構配置図

付した。なお、調査の途中で遺構ではないことが判明したものもあるため、番号に欠番がある。住居址に関する記述の順序は、①位置 ②調査の経過 ③覆土 ④壁面 ⑤床面 ⑥柱穴とピット ⑦炉・竈 ⑧規模と形態 ⑨出土遺物と所属時期となっており、その他の遺構についてもこれに準じている。

遺構は住居址43軒、土坑8基を確認できた。調査期間の短さに加え担当者の経験不足により、必ずしも精査できたとは言えない面がある。実際にはこの数以上の遺構があったと思われるが、土坑の確認作業まで手が回らず、わずかな数の土坑を確認したにすぎなかった。批判されて当然の結果に終わったことに責任を感じる。調査期間を延長してでも、調査を続行させることの出来なかった自分の非力さを悔やんでならない。

今回の調査では多くの遺構、遺物を検出したが、紙面・時間の制約からここでは主要な遺構・遺物の記述に留めることをご容赦願いたい。

1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代中期末葉の住居址31軒(土器溜まり1を含む)、屋外埋甕2基、土坑7基、集石遺構2基、及び竪穴状遺構1基を確認することが出来た。また、包含層中から膨大な数の土器片や石器を検出した。

I 早・前期の遺構と遺物 (第5・6図)

該期の遺構は確認されず、出土した遺物は後世の遺構の覆土内、あるいは包含層から出土したものである。

第5図-1・2は早期末の条痕文系土器に比定されるもので表裏ともに条痕がみられ、胎土に微量の繊維を含む。

3~20は前期のものと考えられる土器片で、胎土に繊維を含む。単節の斜縄文あるいは羽状縄文を施文するものが多くみられる。19には隆帯がみられる。第6図-1~5は前期前半の関山式に比定されるもので、多段ループ文やコンパス文がみられる。7はRLの単節の縄文を地文とし、半裁竹管による刺突と山形文を施文し、口縁部文様帯を形成している。類例は後述するB地区のSB17にて出土している。関山式に併行する在地の土器であろうか。

10はSB60の覆土から出土したものである。一応石鏃とみたが、形態や押圧剝離による両面加工の整形が早期押型文土器に伴うといわれる異形局部磨製石器に似ているので、縄文時代でも比較的古い部分に属すると考えた。しかし、本石器は磨耗部分がなく、脚部の横の張出がみられず、直ちに異形局部磨製石器との関連を考えるのは性急であるかもしれないが、製作技法に古い要素がみられるのは確かである。類例を知らず、今後の資料の増加が期待される。なお、異形局部磨製石器は菅平高原の三日城遺跡から出土している。11はトレンチ調査の際に包含層から出土したものである。明確な時期決定ができないが、製作技法の特徴や形態から一応この項で扱っておく。

II 中期の遺構と遺物

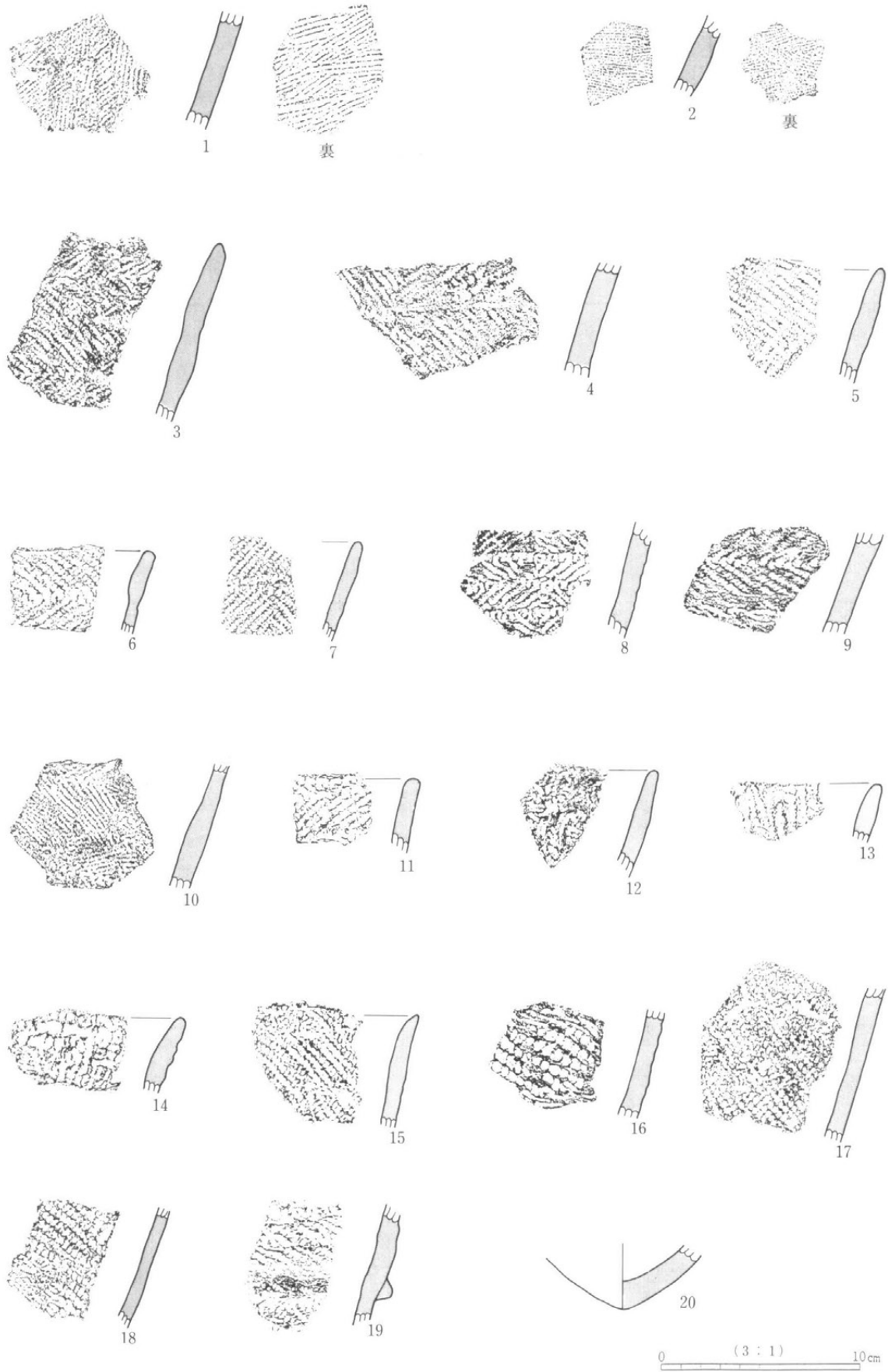
該期の遺構は住居址31軒(廃絶住居土器溜まり1を含む)を確認することが出来た。ここでは重複関係が分かるなどの主要な遺構について記述することとする。

住居址

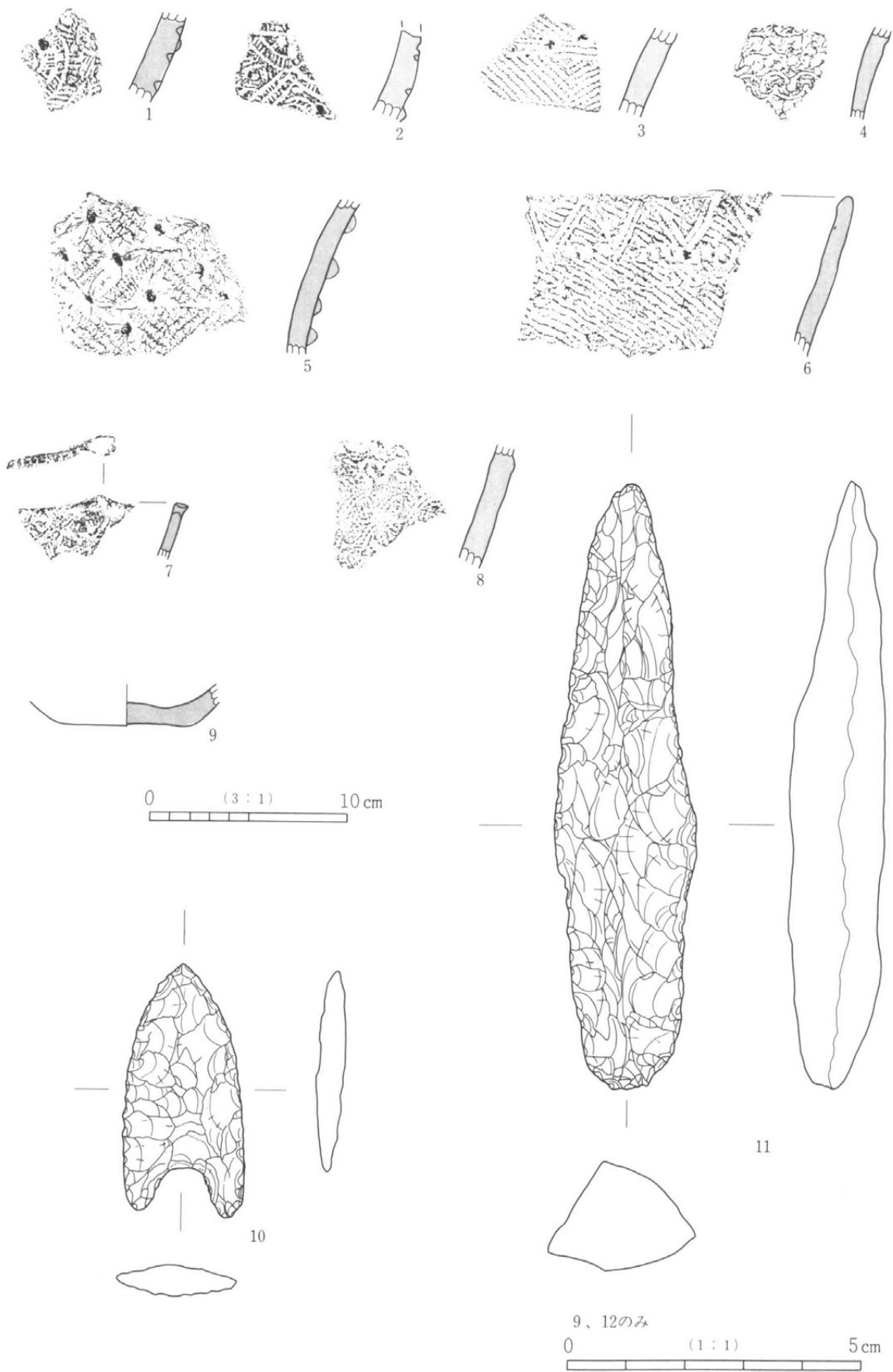
(I) 48・49号住居址 (SB48・49) (第7図)

位置：G-8、H-8 Gridにある。SB50(平安)と重複する。

調査の経過：III層上面にて黒色土の落ち込みを検出したため、セクションベルトを残して掘り下げにかか



第5図 縄文時代早・前期の出土遺物実測図および拓影(1)



第6図 縄文時代早・前期の出土遺物実測図および拓影(2)

る。掘り下げの途中、SB48内において、集石を確認したため、住居内集石の可能性を考慮し、集石を図面におとして石の搬出にかかる。住居址2軒が重複しているが、新旧関係はSB49が古く、SB48が新しい。

SB48

覆土：黒色土(1)の堆積がみられる。一部床面付近に暗褐色土(2)がみられる。

壁面：壁高20～30cmを計る。

床面：III層中に床面を作っている。締まってはいるものの、硬化していない。SB49より床面のレベルは約20cm低い。

柱穴とピット：6基のピットを確認した。

炉：精査したが確認できなかった。

規模と形態：長軸4.5m、短軸3.5m程の楕円形を呈する。

出土遺物と所属時期：出土土器から縄文時代中期末葉の四日市遺跡第4段階に比定される。集石内から蜂の巣石4個体を検出した。また、集石の下から床面直上で第8図-1の両耳広口壺と、図化しなかったが、両耳広口壺の口縁部とみられる無文の大破片を検出している。覆土内からは4の圧痕隆帯文系土器などの出土がみられた。石器も打製石斧を中心に出土が多い。

SB49

覆土：黒色土(1)の堆積がみられる。

壁面：壁高は約15cmを計る。

床面：III層中に床面を作っている。締まってはいるものの、硬化していない。

柱穴とピット：1基のピットを確認した。

炉：精査したが確認できなかった。

規模と形態：不明。

出土遺物と所属時期：四日市遺跡第3段階の所産であると思われる。加曾利E3式の深鉢の口縁部大破片の入ったピットを検出した。全体に遺物の量は少なかった。

(2) 53号住居址 (SB53) (第11図)

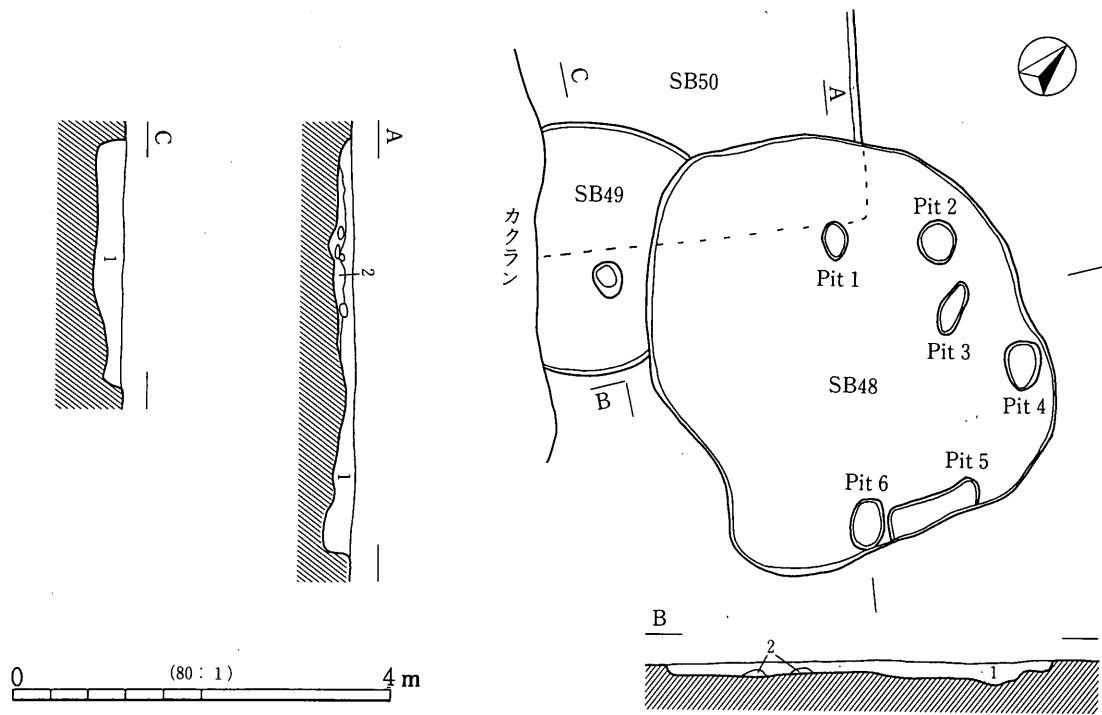
位置：G-6、H-6 Gridにある。一部調査区外に存在する。

調査の経過：III層上面にて夥しい数の土器片の集中を検出したため、周辺を精査したところ、黒色土の落ち込みがみつきり、円形の平面形を呈する竪穴状の遺構であることが判明した。土器片が層状に積み重なっている可能性を考え、とりあえず表面に見えている土器片を図面に落として取り上げ、セクションベルトを設定して一部を掘り下げたこととした。その結果、土器集中の下から集石が現れ、土器が集石の上に平面的に散らばっていることが分かった。この時点で廃絶住居に土器を廃棄した遺構である可能性が考えられた。しかし、限られた調査期間のなかで、残り時間が少なくなってしまい、やむを得ず、集石部分の平面図作成をあきらめ、遺構の本来の性格を確認することを優先させた。断面図作成後、石を取り除いて底部を確認することを急いだ。その結果集石の下から炉址を検出、床面直上遺物を確認し、廃絶住居内に土器を廃棄したものと認定した。

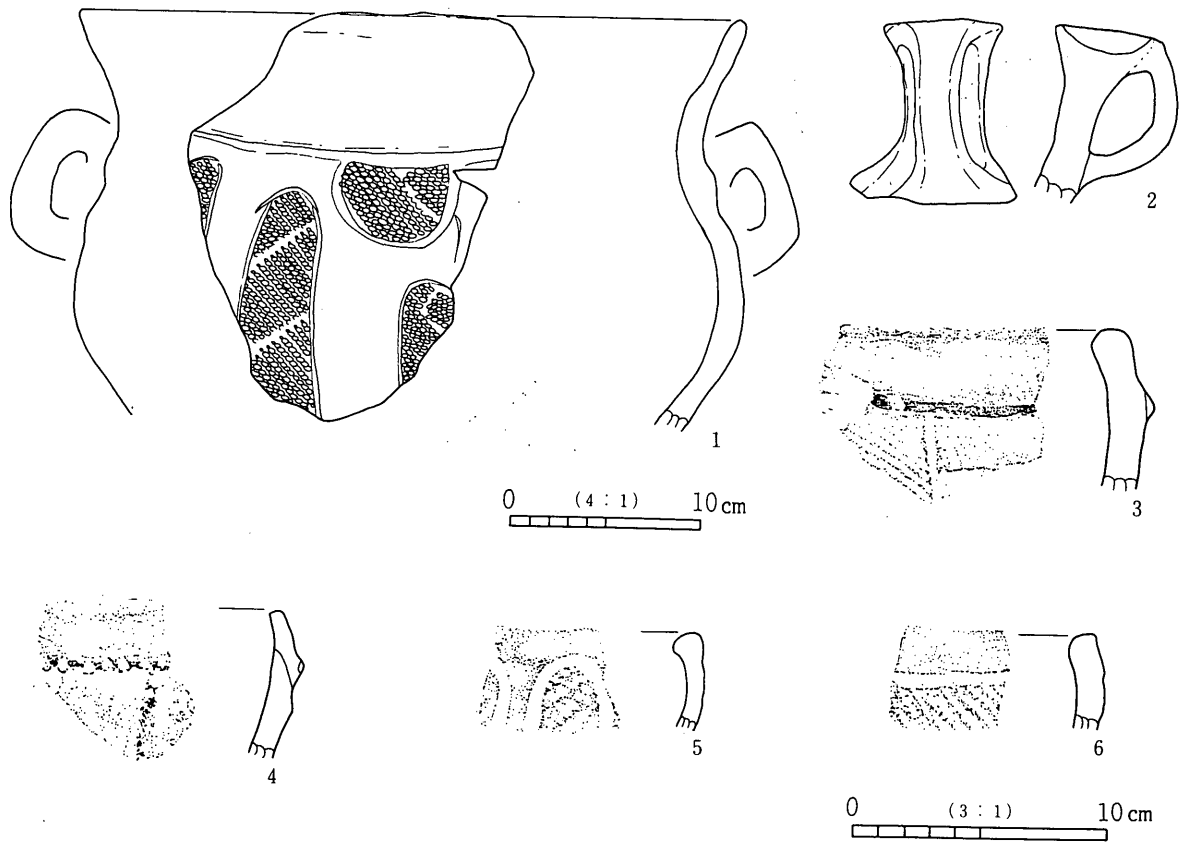
覆土：黒色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：一部崩壊していた。壁高は20～30cmを計る。

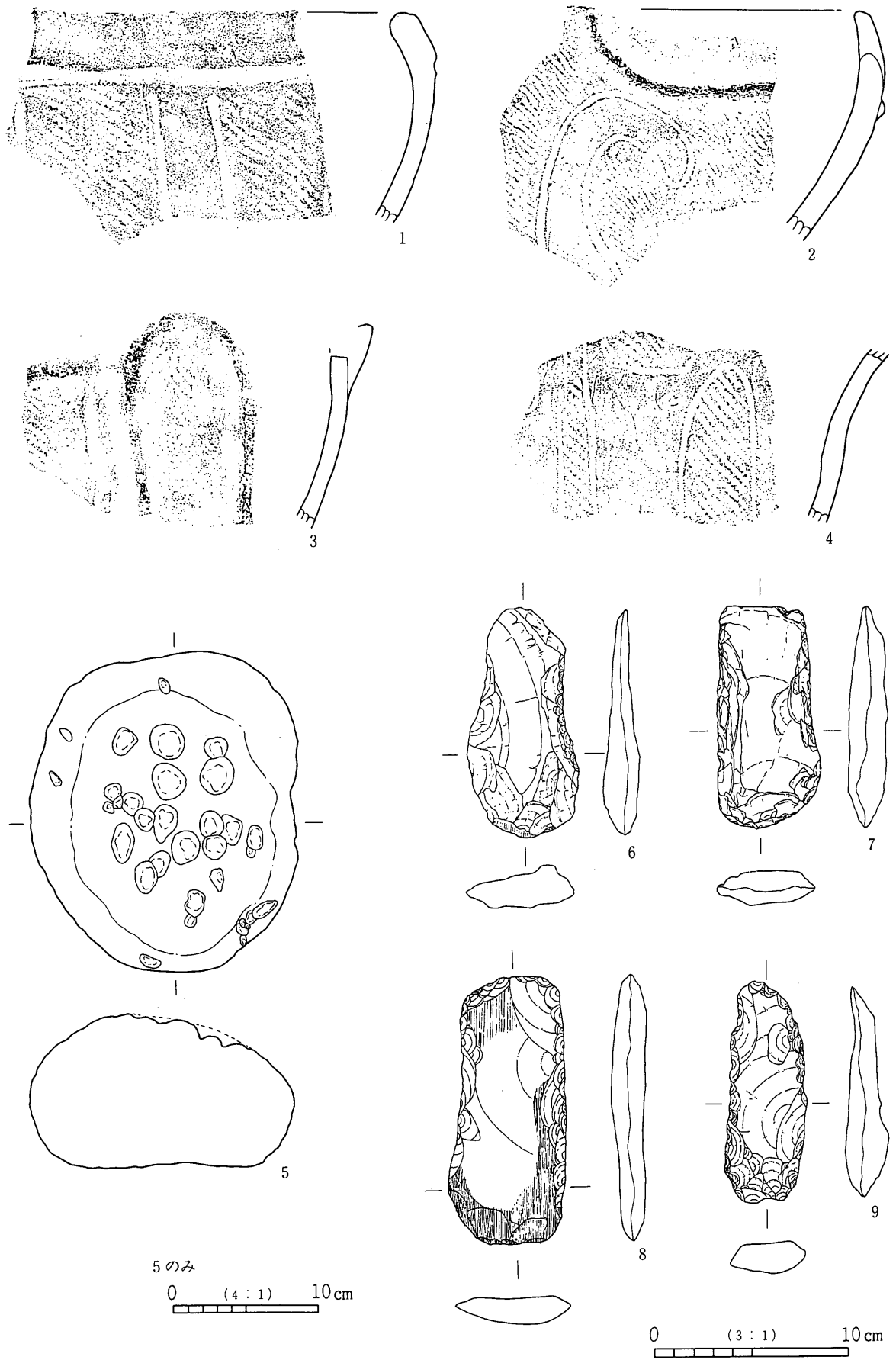
床面：締まっている。III層中に床面を作っている。



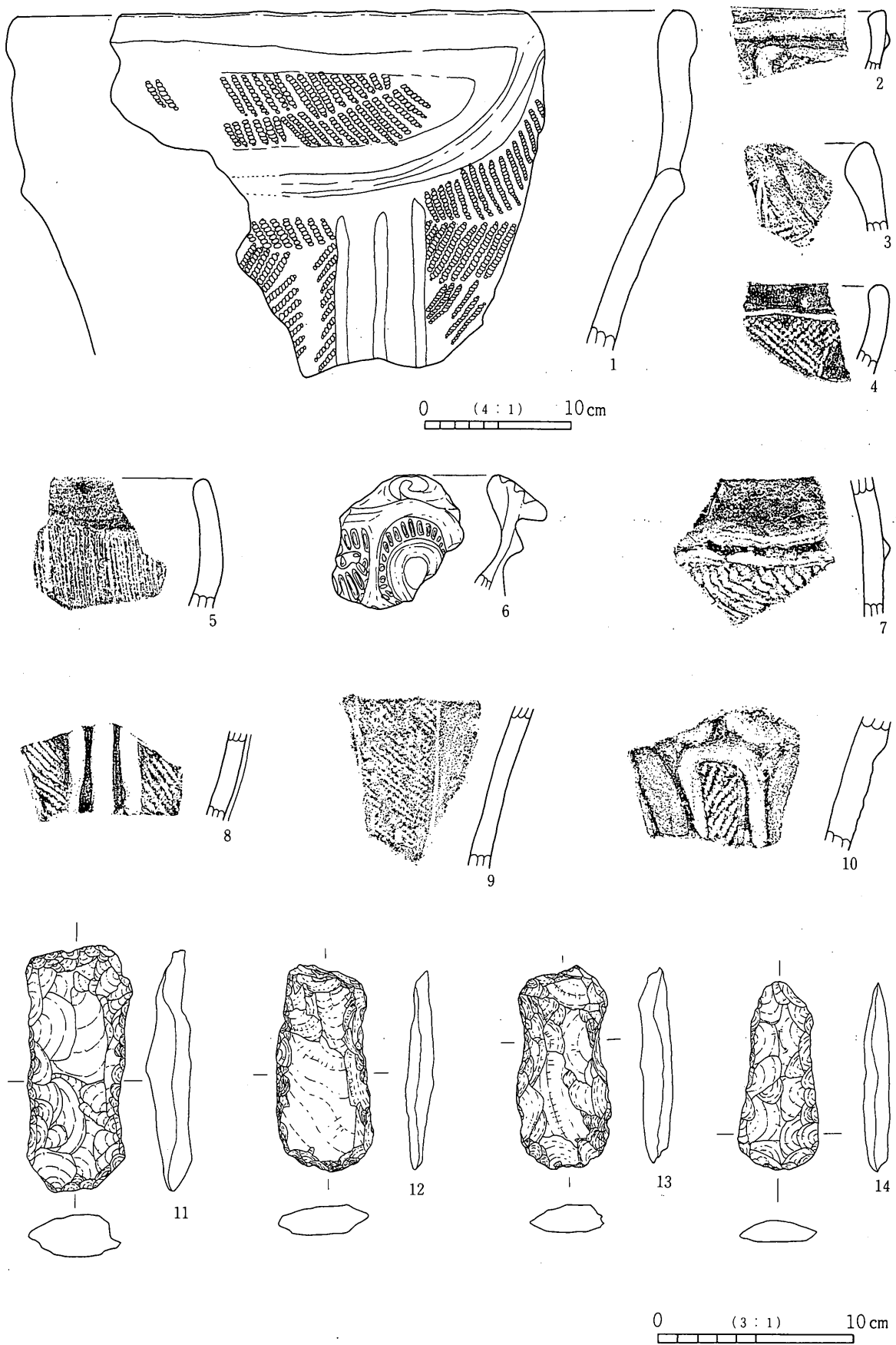
第7図 48・49号住居址実測図



第8図 48号住居址実測図および出土遺物実測図(1)



第9図 48号住居址出土遺物実測図(2)



第10图 49号住居址出土遗物实测图

柱穴とピット：ピット1基を検出した。

炉：住居址の中央よりやや南よりに位置する。炉石を3基確認した。焼土が少量検出された。

規模と形態：長軸4m程度の楕円形を呈すると思われる。

出土遺物と所属時期：土器溜まりの遺物は他の住居址の遺物よりもやや古く、おおむね加曾利E2式併行の土器とみられる。接合を試みたが、完形に復元できるものはなく、少なくとも10個体以上の土器があるらしいことが分かった。このことから土器廃棄遺構としての性格を考えた。第12図-1～4の土器は加曾利E2式と唐草文系土器の折衷土器ともいえる個体である。口縁部～頸部付近の文様帯には加曾利E2式の影響がみられ、胴部以下の文様は唐草文系土器のものを採用しているようだ。胴上半部には大ぶりの渦巻文が施文される。胴下半部の様子は不明な点が多いが、第13図-6～9のような文様が施文されるらしい。第14図は唐草文系土器の典型例で、精緻な把手と交互刺突の加わる口縁部文様帯を有する。1～5は同一個体である。土器溜まりのなかで所謂唐草文系土器と加曾利E2式の影響を受けた土器が意識的に分けて廃棄されている様子が窺え、お互いにブロックを形成していた。興味深い事例である。

なお、石器の出土は少なかった。

(3) 60・61・62号住居址 (SB60・61・62) (第16図)

位置：E-9～10、F-9～10 Gridにある。SB61はSK66(平安)と重複する。

調査の経過：SB60の検出に端を発した。壁面を確認できず、床面まで掘り下げて住居址であることを認識した。床面の範囲を調査中に、隣接して2つの黒色土の落ち込みを検出、調査したところ、計3軒の住居址が重複していることが分かった。さらにSB61は平安時代の土坑とも重複していることが判明した。住居址3軒が重複しているが新旧関係はSB60が最も古く、次いでSB61、SB62の順になる。

SB60

覆土：黒色土(1)の堆積がみられた。

壁面：一部確認できなかった。

床面：締まっていた。III層中に床面を作っている。

柱穴とピット：ピット1基を確認した。

炉：精査したが不明。

規模と形態：直径4.5m程度の円形を呈する。

出土遺物と所属時期：四日市遺跡第1段階に比定したい。床面から土器の頸部の大破片や底部(第17図)が出土している。頸部に無文帯がみられるので、加曾利E2式期の所産とみられる。

SB61

覆土：黒色土(2)の堆積がみられた。

壁面：壁高は30cmを計る。

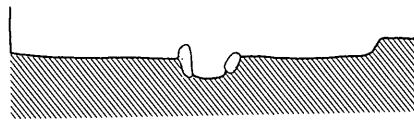
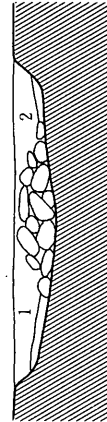
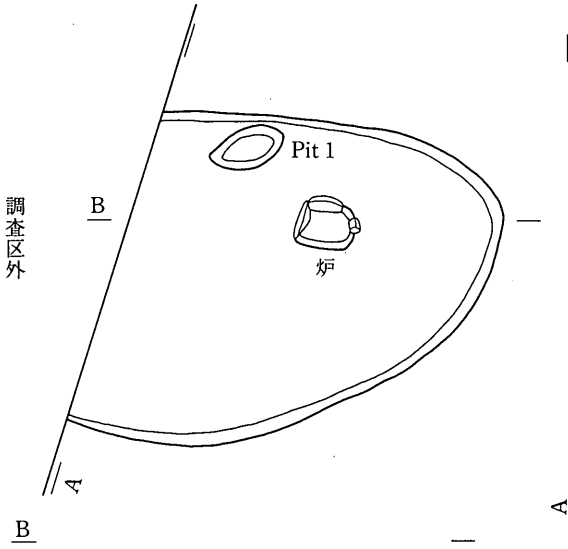
床面：締まってはいたものの、一部でははっきりせず、床を抜いて掘りすぎてしまった場所がある。III層中に床面を作っている。

柱穴とピット：確認できなかった。

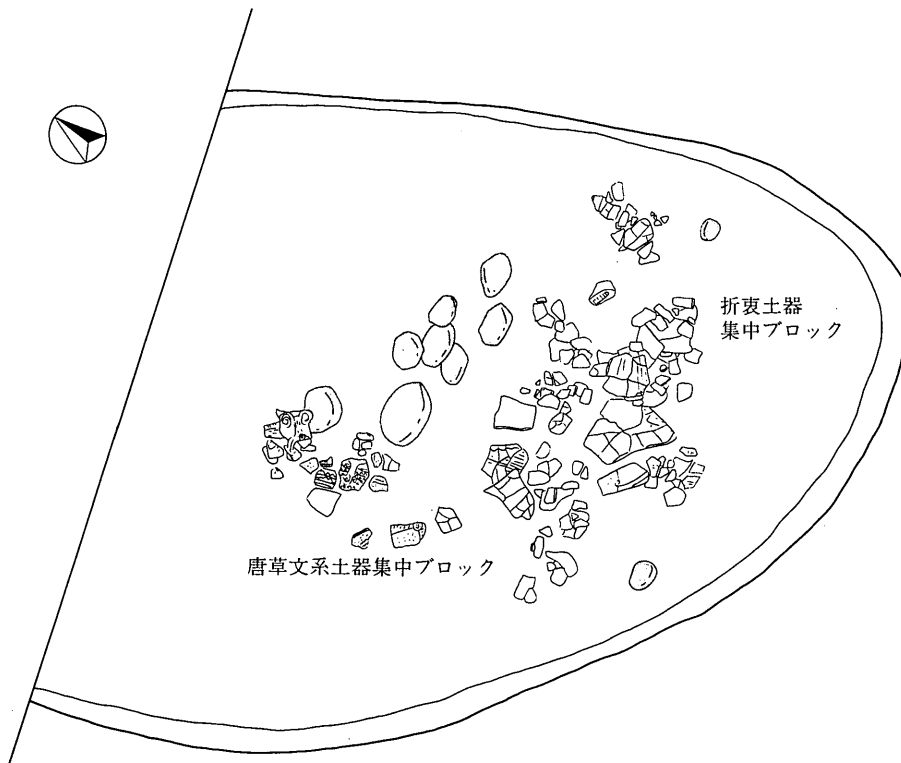
炉：確認できなかった。



調査区外

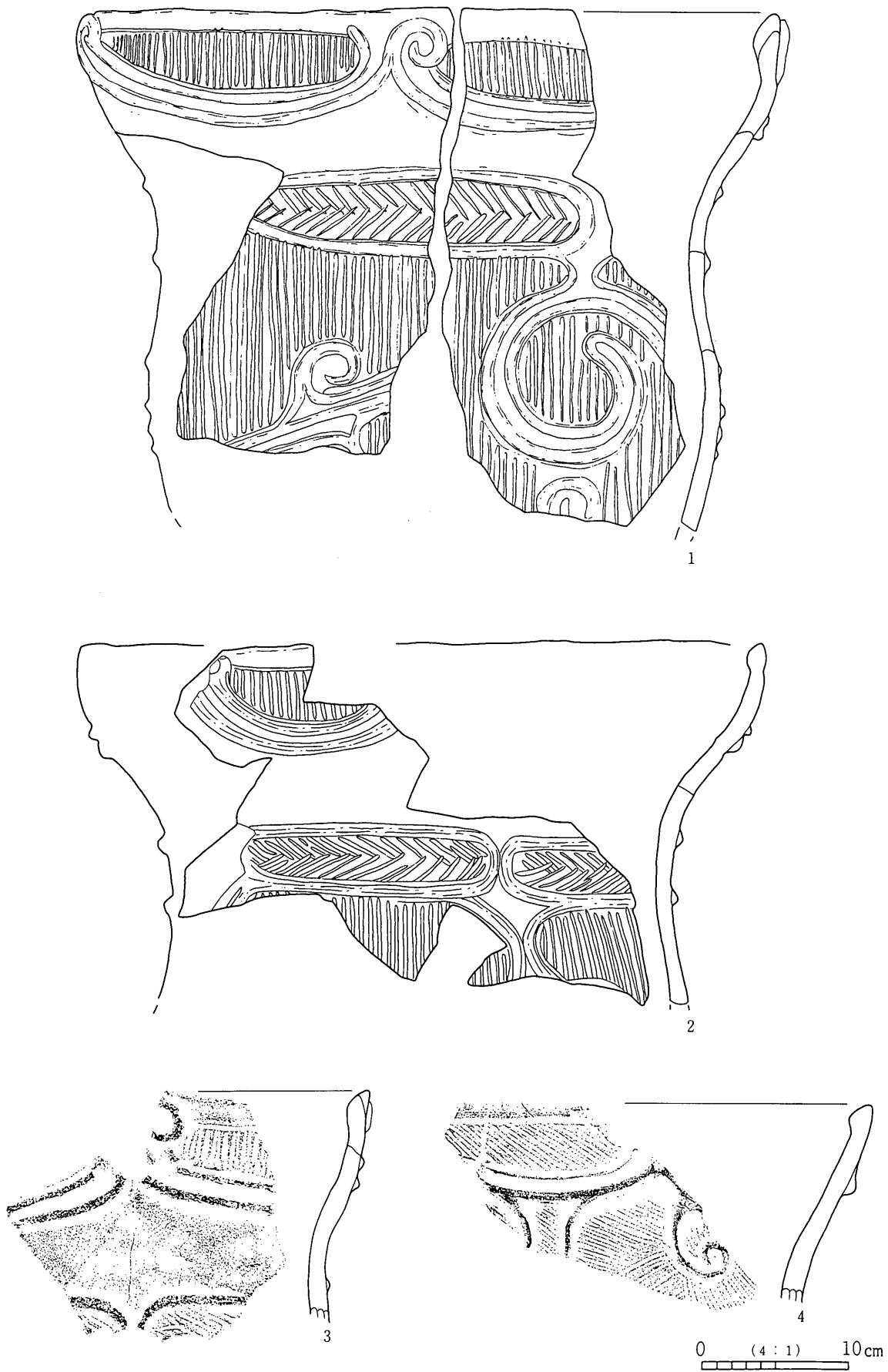


0 (80:1) 4 m

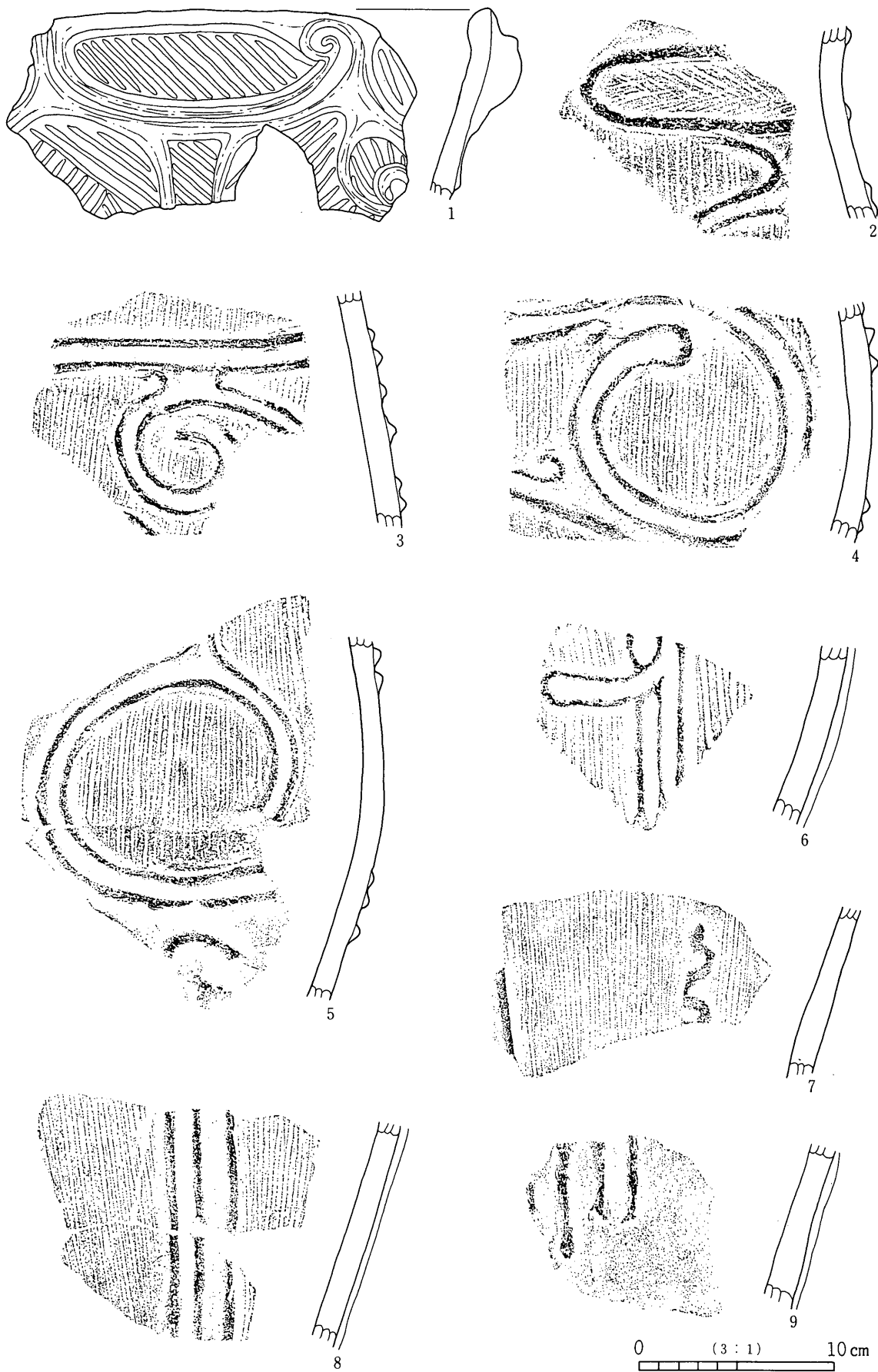


0 (40:1) 2 m

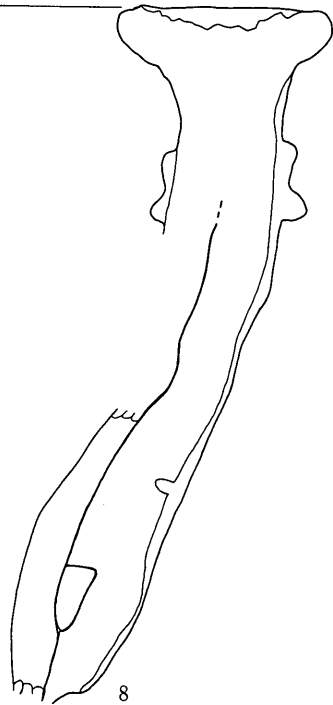
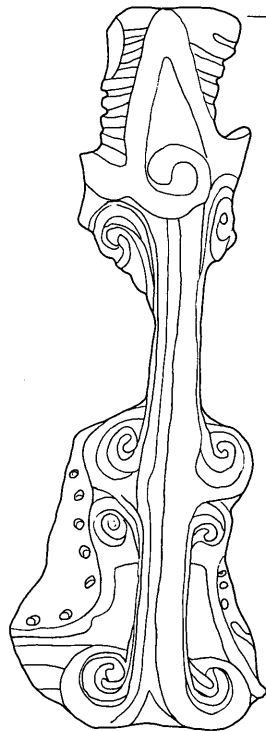
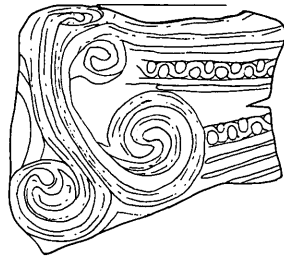
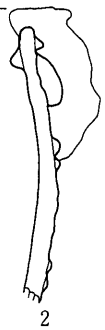
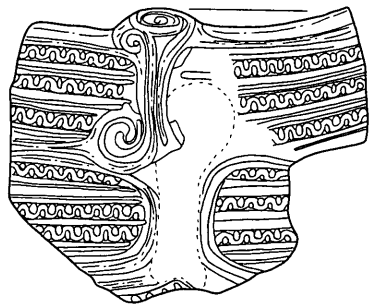
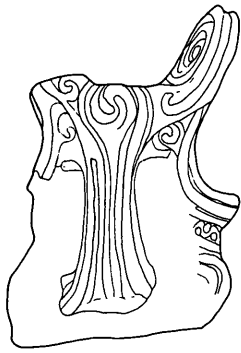
第11図 53号住居址実測図



第12图 53号住居址出土遗物实测图(1)

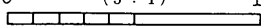


第13图 53号住居址出土遺物実測図(2)

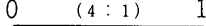


6、7のみ

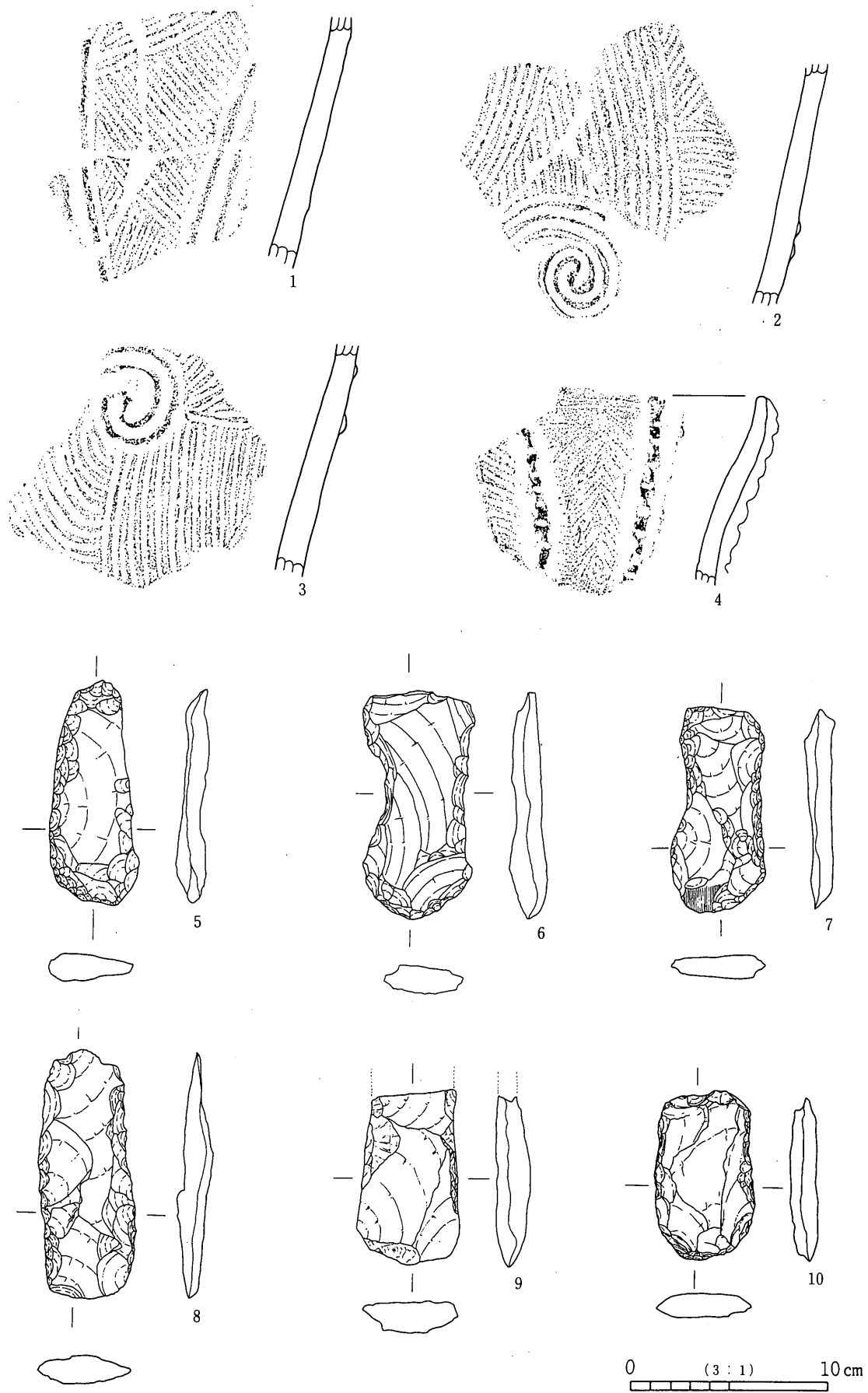
0 (3:1) 10 cm



0 (4:1) 10 cm



第14図 53号住居址出土遺物実測図(3)



第15图 53号住居址出土遗物实测图(4)

規模と形態：直径4.5m程度の円形を呈する。

出土遺物と所属時期：床直出土遺物から四日市遺跡第2段階に比定したい。第18図-2の加曾利E3式の口縁部～頸部の残る資料が出土した。この住居址からは他に1の完形土器が出土している。また、覆土からであるが円盤状の軽石製品（第19図-5）が出土している。

SB62

覆土：黒色土(3)と暗褐色土(4)が堆積している。

壁面：壁高は30cmを計る。

床面：IV層中に床を作っている。

柱穴とピット：確認できなかった。

炉：確認できなかった。

規模と形態：直径5m程度の円形を呈する。

出土遺物と所属時期：床面出土土器（第21図-1）から四日市遺跡第4段階の時期を与えたい。

(4) 74号住居址 (SB74) (第22図)

位置：C-8、D-8 Gridにある。

調査の経過：掘り下げの途中で鉄平石の敷石を確認したため、敷石住居址と判断した。平面プランが曖昧であったため、石の広がりを追うこととした。しかし、敷石の遺存状態は決して良好ではなく、住居址の東部分以外の敷石は失われていた。

覆土：不明。

壁面：不明。

床面：住居址東部分に敷石が遺存していた。その他は敷石が失われていた。

柱穴とピット：屋外に2基のピットを検出した。住居址に付属するものと考えた。

炉：精査したが確認できなかった。

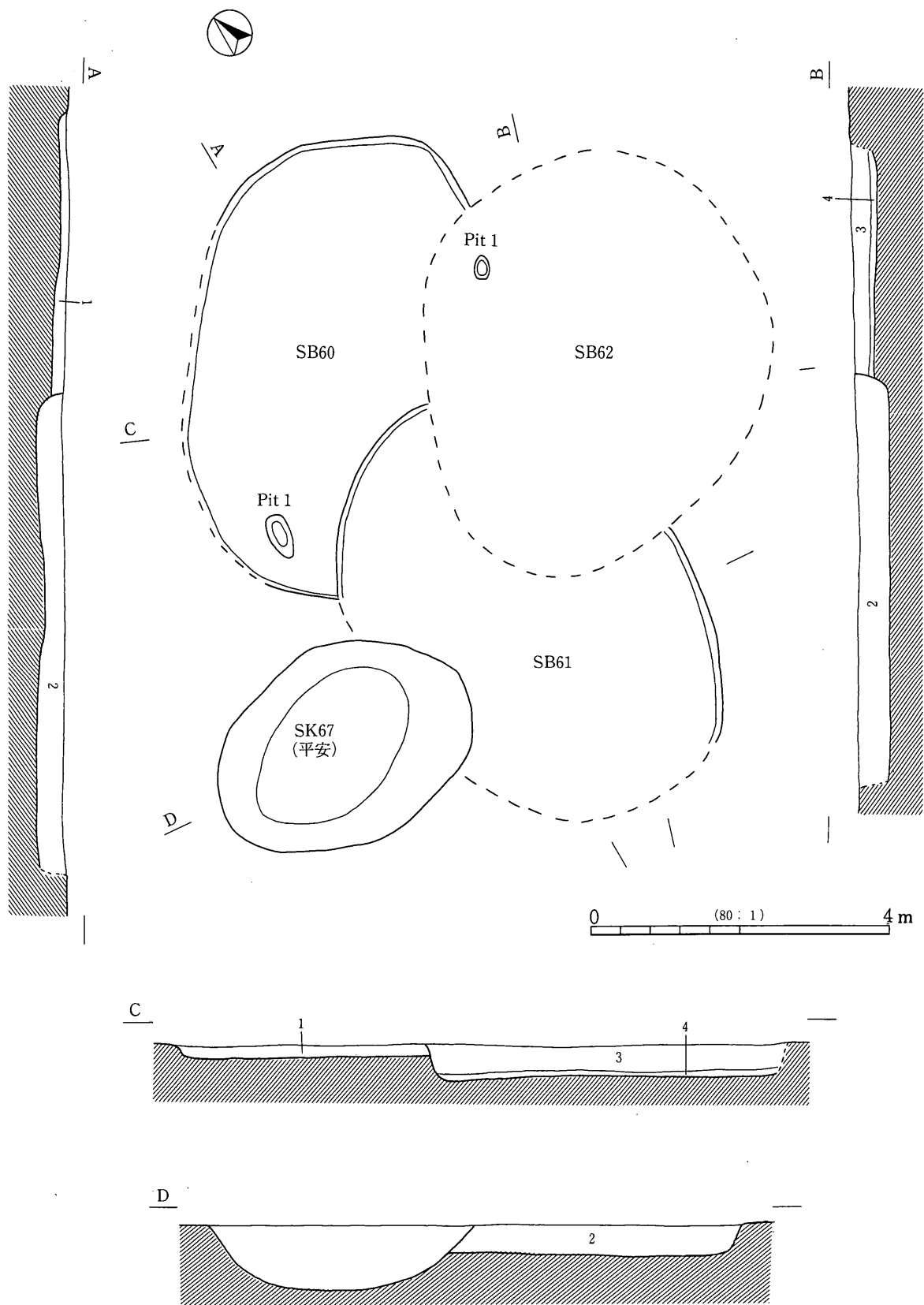
規模と形態：直径4m程度の円形の敷石住居址を想定できよう。判然とはしないが、南側に平礫の集中がみられ、柄鏡型住居址の可能性も考えられる。

出土遺物と所属時期：出土遺物は四日市遺跡第4段階のものが多い。石器は打製石斧が十数点出土した。第23図-11は覆土からの出土である。他の個体に比べて大型で、現代の鍬のような形態を呈する。時期の異なる遺物である可能性があるが、石材は他の打製石斧と同質の玄武岩であるため、何とも言えない。

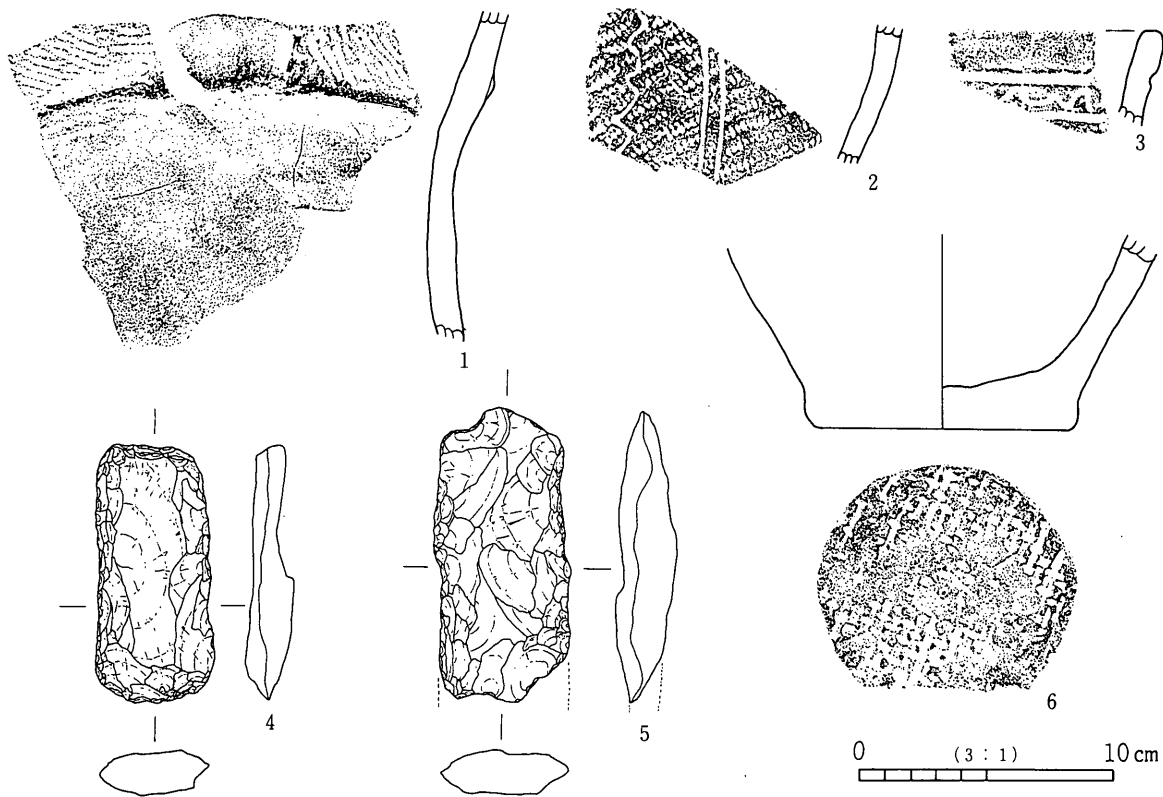
(5) 81・109号住居址 (SB81・109) (第25図)

位置：E-3、F-3～4 Gridに位置する。

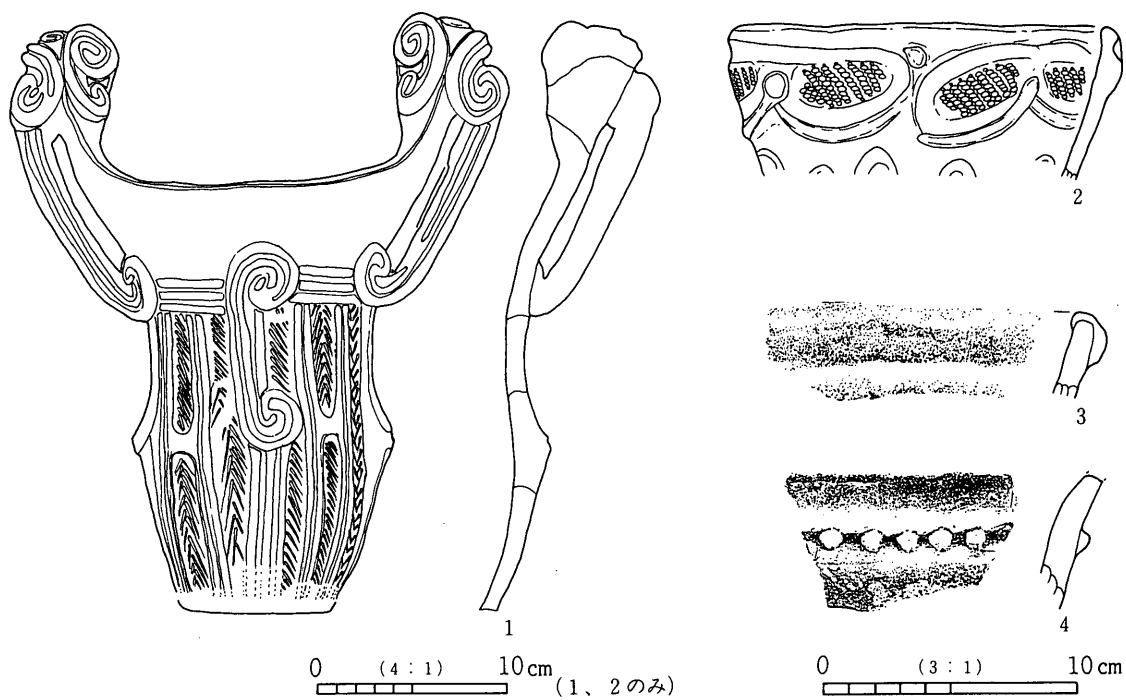
調査の経過：SB81はIII層の掘り下げの途中で黒色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを残して掘り下げにかかる。床面がはっきりせず、若干掘りすぎてしまった感がある。加曾利E3式の大型の埋甕が検出された。SB109はSB81掘り下げ中に確認された。ほとんどが調査区外に位置しているため、住居址のごく一部を調査できたにすぎないが、敷石と加曾利E4式の埋甕を検出した。



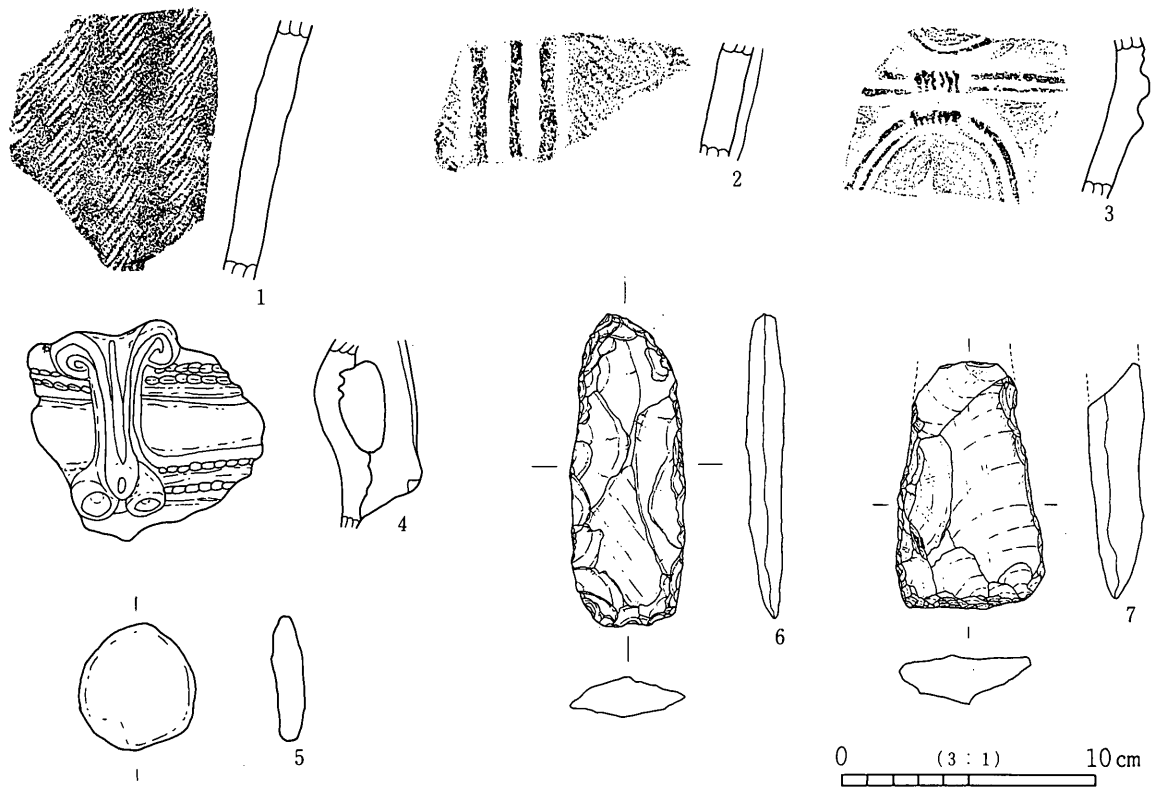
第16图 60·61·62号住居址实测图



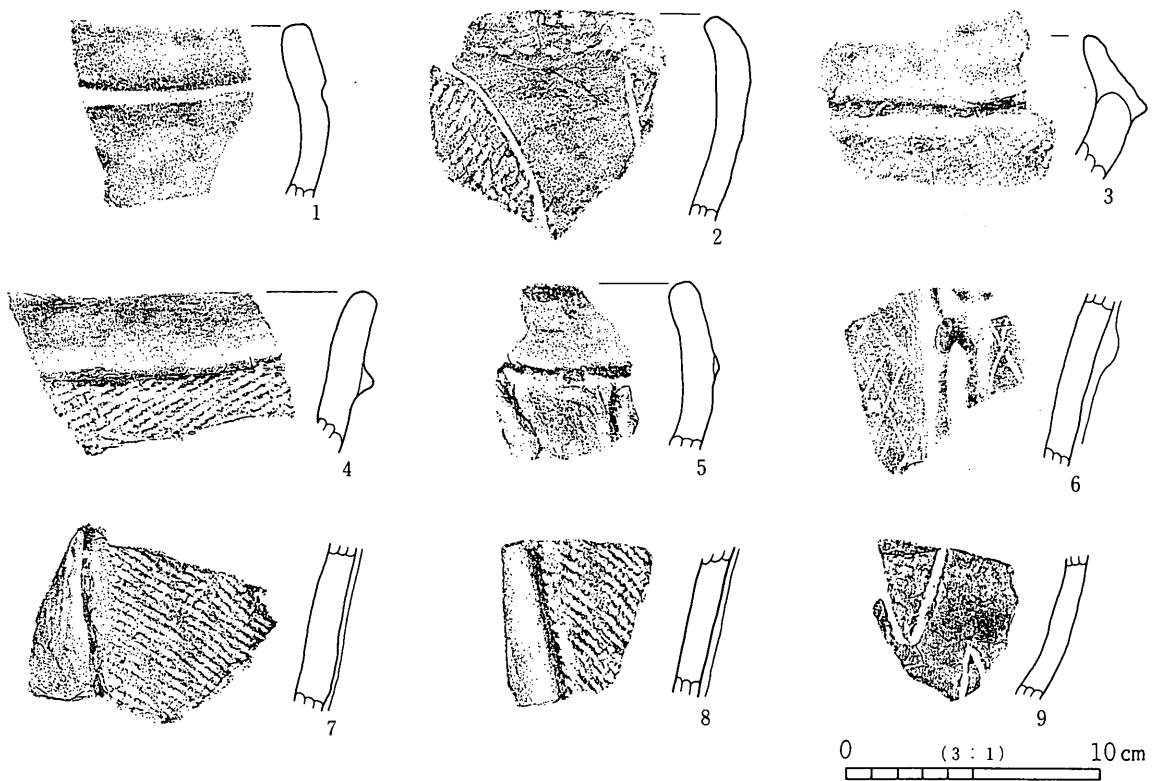
第17図 60号住居址出土遺物実測図



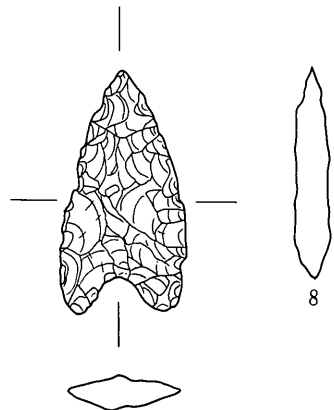
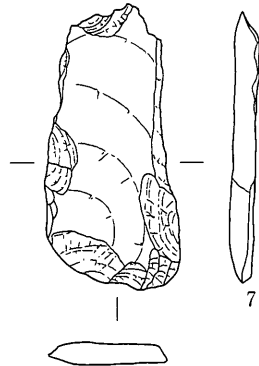
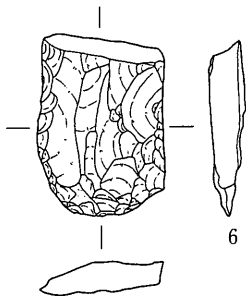
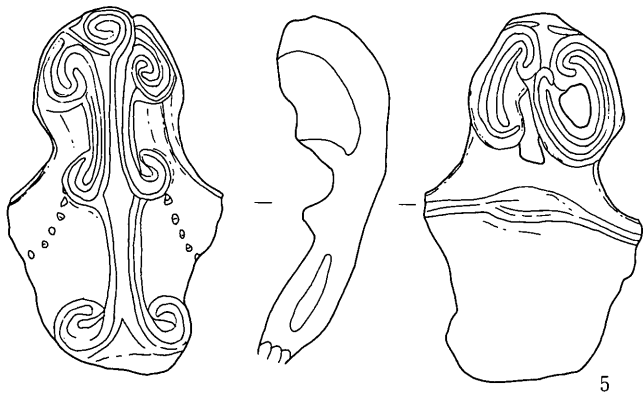
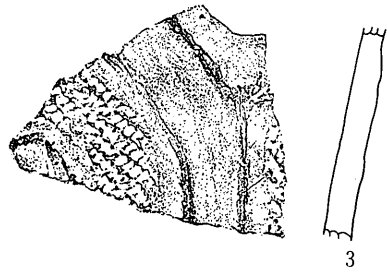
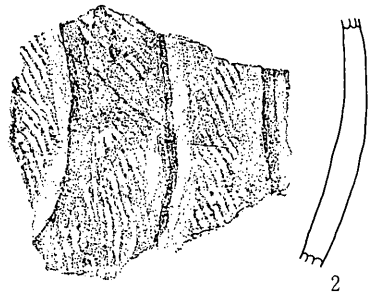
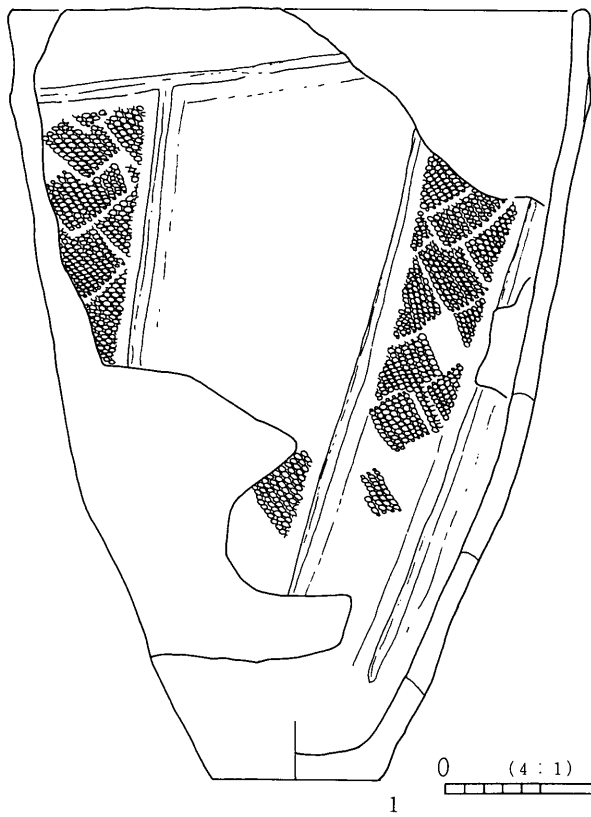
第18図 61号住居址出土遺物実測図(1)



第19图 61号住居址出土遗物实测图(2)



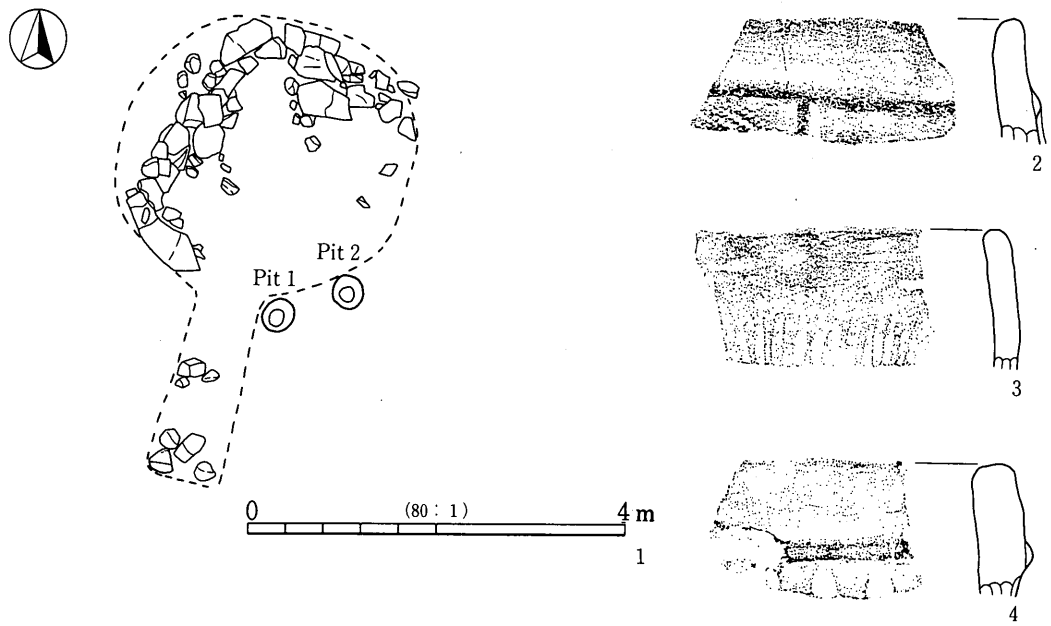
第20图 62号住居址出土遗物实测图(1)



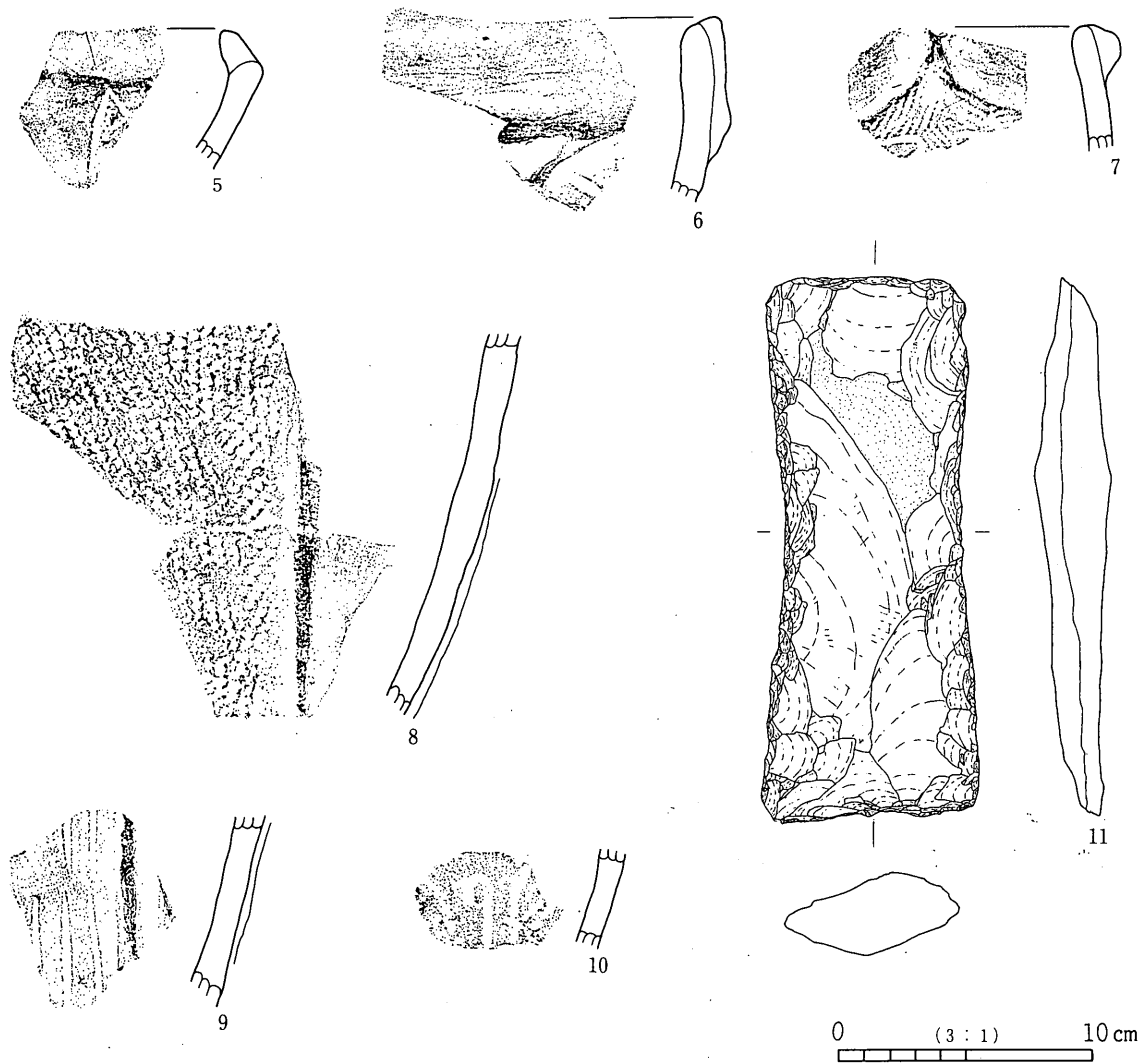
0 (3 : 1) 10 cm

8のみ
0 (1 : 1) 5 cm

第21図 62号住居址出土遺物実測図(2)



第22图 74号住居址实测图



第23图 74号住居址出土遗物实测图(1)

SB81

覆土：黒色土(1)と暗褐色土(2)が堆積している。

壁面：壁高は20cmを計る。

床面：曖昧であったため、埋甕の口縁部の高さで床を決めた。

柱穴とピット：埋甕のピットの他に1基を確認した。

炉：精査したが確認できなかった。

規模と形態：直径5m前後の円形を呈する。

出土遺物と所属時期：本住居址では埋甕1個体が検出された。この土器から四日市遺跡第2段階に比定したい。埋甕は加曾利E3（古）式のものと思われる。大形の深鉢である。

SB109

覆土：黒色土が堆積している。

壁面：不明。

床面：鉄平石の敷石がみられる。

柱穴とピット：埋甕のピットを確認した。

炉：不明。

規模と形態：不明。

出土遺物と所属時期：本住居址では埋甕1個体が検出された。この土器から四日市遺跡第4段階の所産であると考えられる。埋甕は加曾利E4（新）式であろう。

(6) 96号住居址 (SB96) (第31図)

位置：E-7 Gridに位置する。

調査の経過：III層の掘り下げの途中で鉄平石の敷石を確認したため、敷石住居址と判断した。平面プランが曖昧であったため、石の広がりを追うこととした。敷石は部分的に失われてはいるものの、住居址の遺存状態は良好であった。

覆土：住居址検出時に既に床面まで達していたため、不明である。

壁面：壁面を確認することは出来なかった。

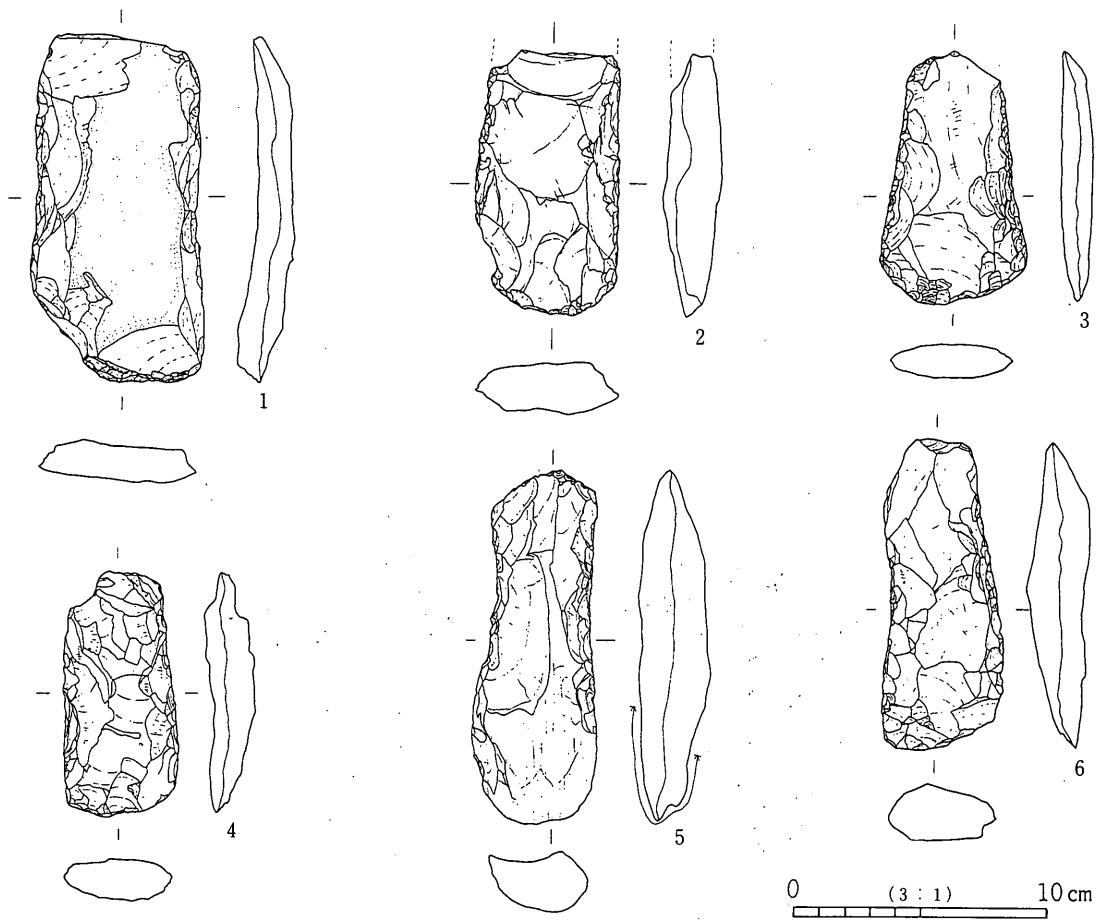
床面：鉄平石が敷かれ、部分的に欠失している。

柱穴とピット：埋甕のピット以外は確認できなかった。

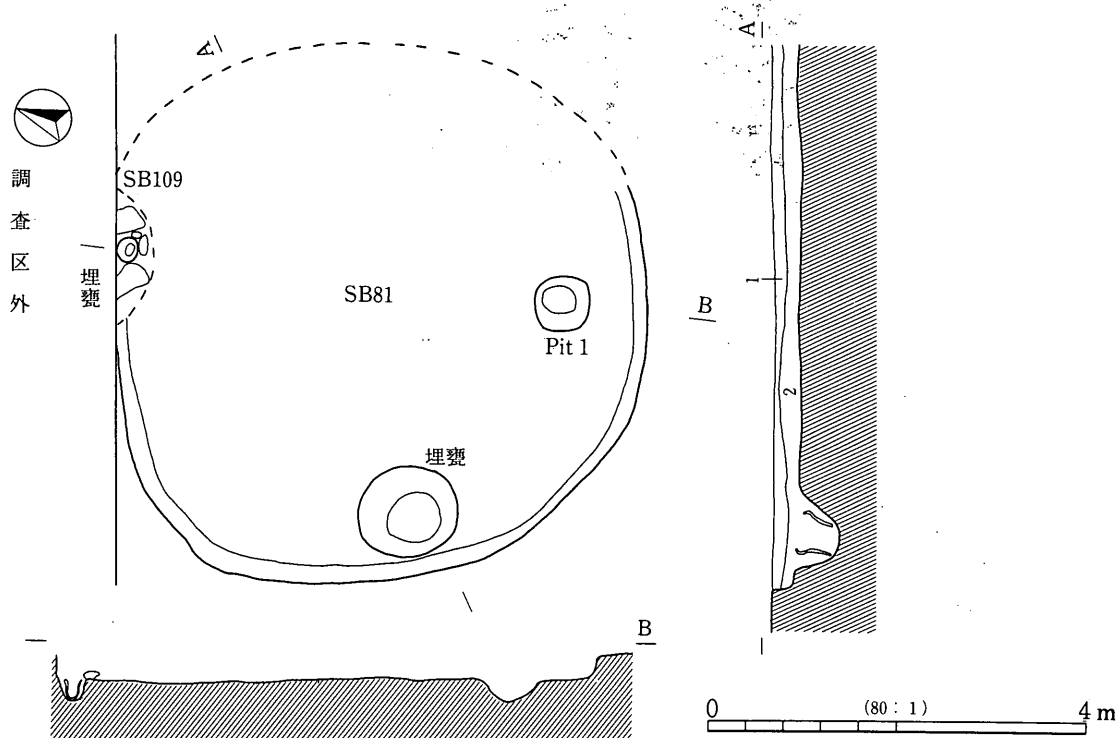
炉：住居の中央に位置し、炉石はひび割れているものの全て遺存している。焼土の堆積がみられ、土器が2個体出土した。

規模と形態：一辺2m程度の方形を呈するものと考えられる。

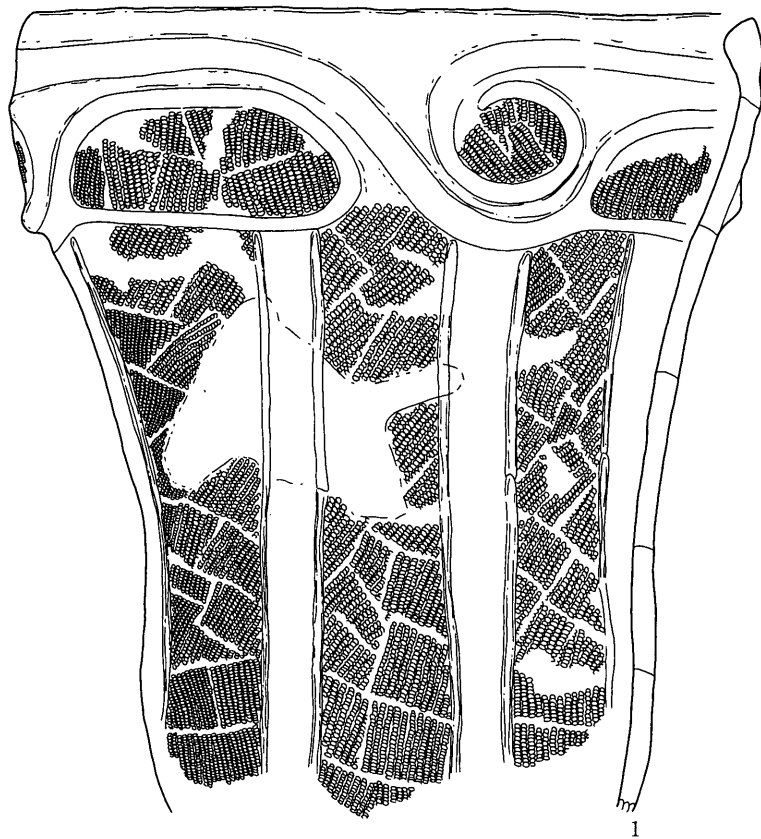
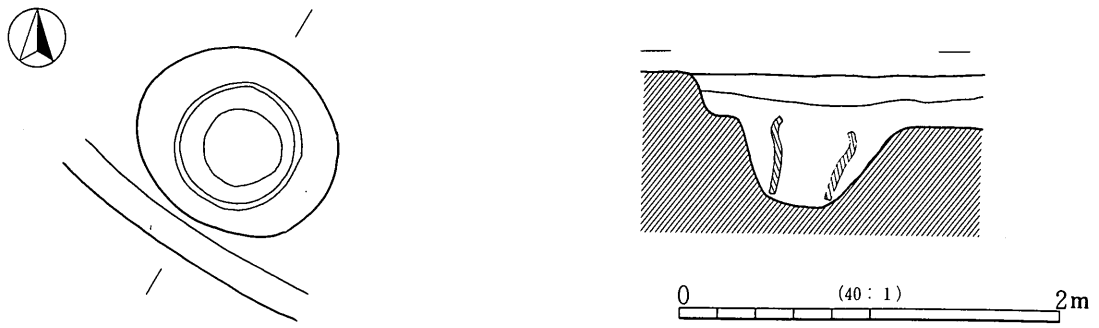
出土遺物と所属時期：本住居址では埋甕1個体と炉の中から2個体の良好な資料が検出された。いずれも四日市遺跡第4段階の所産であろう。ただし、若干の時間差を与えられるような気もする。埋甕にみられる磨消縄文による文様は前段階の曲線的な施文の名残が窺え、加曾利E4式のW字文の初現形態と考えられなまいだろうか。また、炉の中から出土した口縁部付近の大破片は後続する後期称名寺式に続くと考えられる磨消縄文による文様構成を有する。なお、縄文原体は附加条一種の縄文が施文されている。更なる検討が必要であるが、一応、四日市遺跡第4段階に位置づけておく。



第24図 74号住居址出土遺物実測図(2)

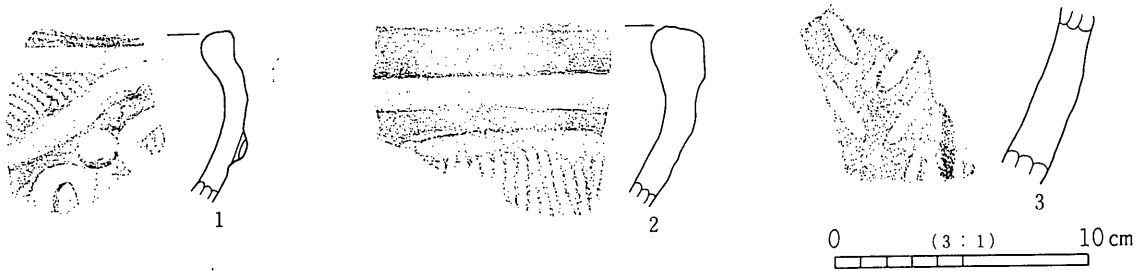


第25図 81・109号住居址実測図

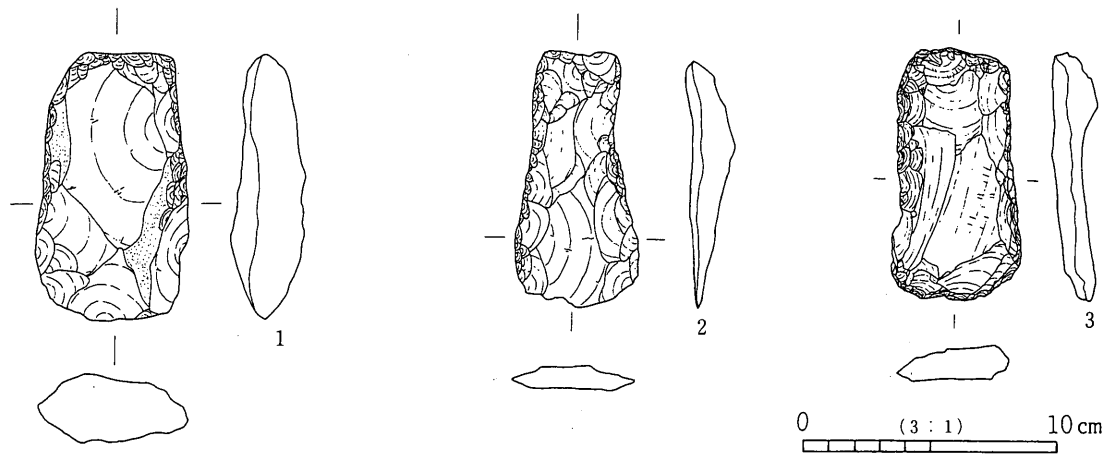


0 (4:1) 10cm

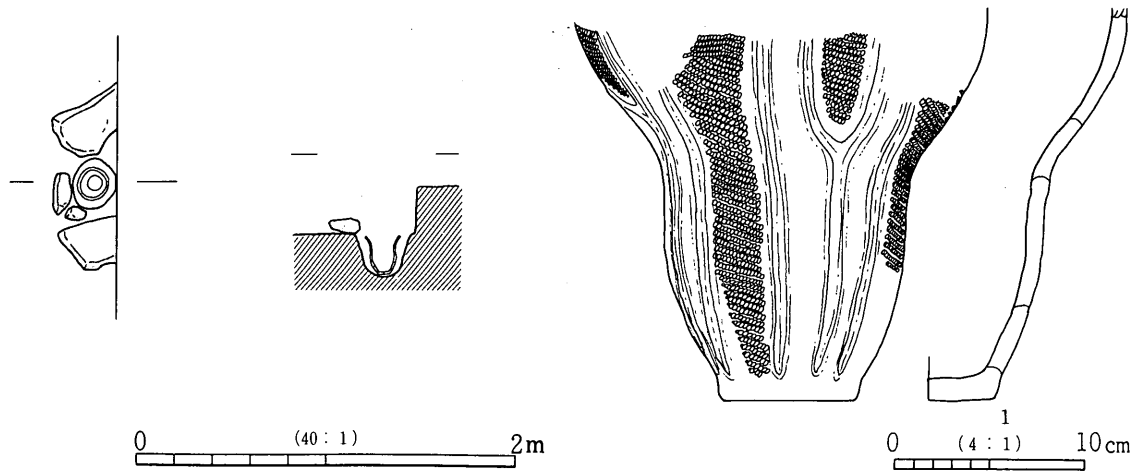
第26图 81号住居址埋葬实测图



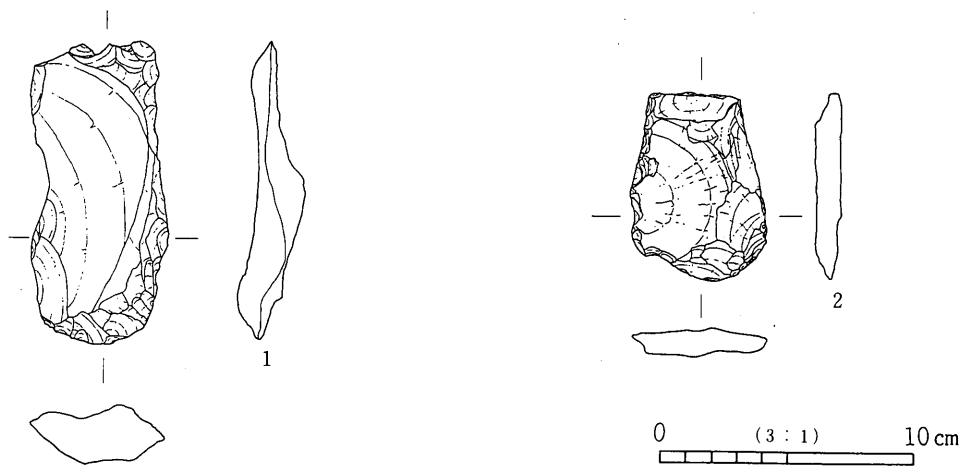
第27图 81号住居址出土遗物实测图(1)



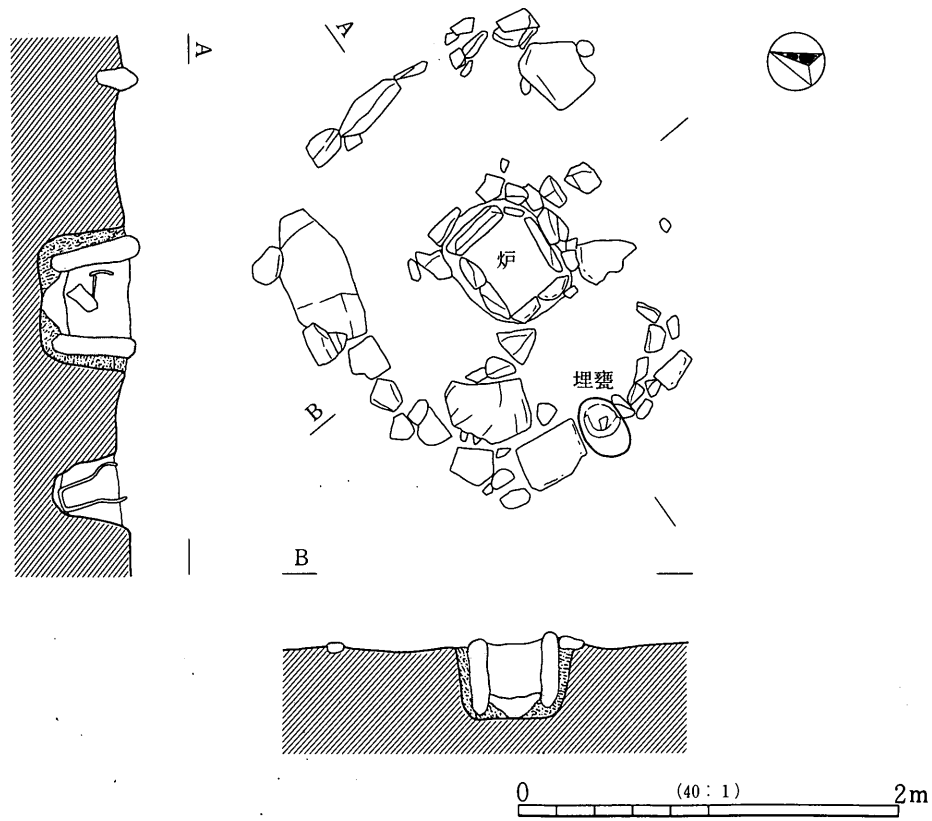
第28图 81号住居址出土遺物実測図(2)



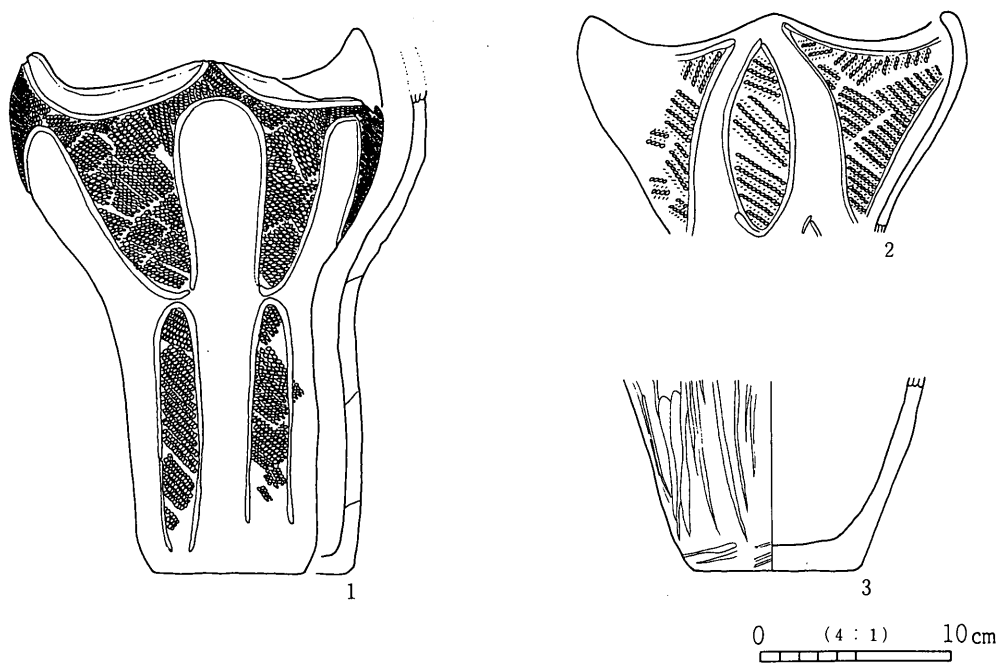
第29图 109号住居址埋葬実測図



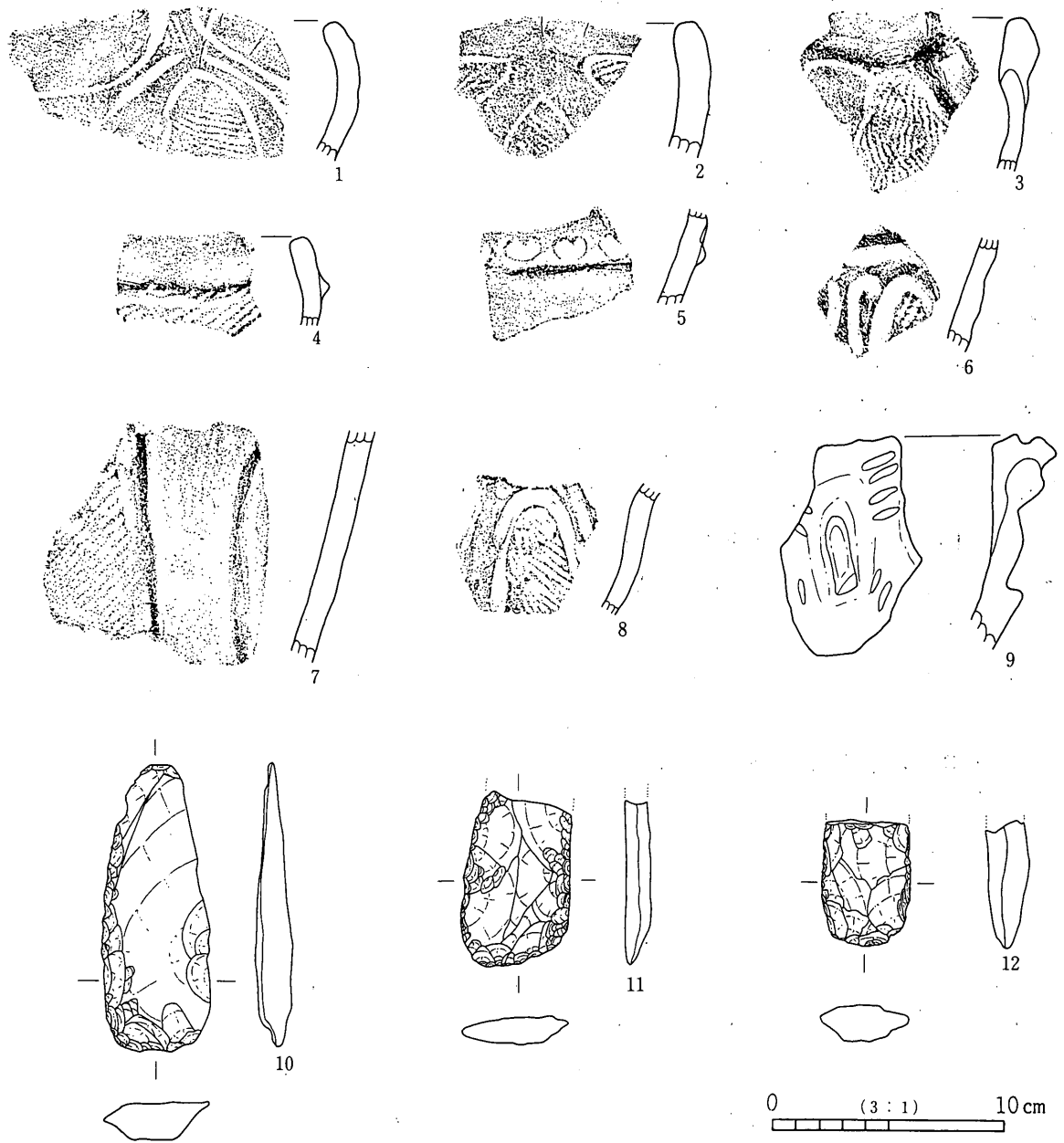
第30图 109号住居址出土遺物実測図



第31図 96号住居址実測図



第32図 96号住居址埋葬および出土遺物実測図(1)



第33图 96号住居址出土遗物实测图(2)

(7) 98号住居址 (SB98) (第34図)

位置：E-6、F-6 Gridに位置する。

調査の経過：本住居址は柄鏡型住居址である。III層上面にて柄部を形成する長方形に並んだ立石を確認し、長軸に沿って半裁したところ敷石が現れた。この時点で敷石直上から骨片が認められたため、石棺墓ではないかと誤認し、柄部を完掘して調査は一旦終了した。しかし、調査も最終段階になって、この遺構が柄鏡型住居址ではないかとの教示を受け、さらに周辺を調査したところ、主体部と柄部の埋甕が確認された。主体部はSB82との重複が認められるなど、敷石は部分的に残っているだけであった。しかし、壁面を確認することができ、全体像を把握する上で幸いであった。調査は時間の制約などから精査できたとは言えないものであった。

覆土：黒色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられた。

壁面：壁高は20～30cmを数える。

床面：柄部は敷石がほぼ完存している。主体部は部分的に敷石が残っていた。

柱穴とピット：埋甕のピットを確認したのみである。

炉：主体部中央に若干の落ち込みとわずかな焼土を認めた。炉石は不明。

規模と形態：柄部2.8m、主体部の直径2.2mの柄鏡型住居址である。

出土遺物と所属時期：四日市遺跡第4段階に比定される。埋甕が柄部から検出された。口縁部を欠失しているものの、胴部以下は完存している。加曾利E4(新)式の深鉢である。また、この住居址からは多量の骨片が出土している。すべて火を受けた焼骨で、イノシシ、ニホンジカ及びヒトの頭蓋骨の一部が検出されている。これらの骨片については後章で詳述するが、このような配石のみられる場所に動物遺体または骨を集積する習慣があったことがうかがえる。また、イノシシとニホンジカの扱いに差異があること、イノシシに幼獣が多いことなど、興味深い結果が出ている。また、加工痕のある骨片が1点出土している。

III その他の遺構と出土遺物 (第37～39図)

(1) 屋外埋甕1・2

位置：C-8、D-8 Gridに位置する。

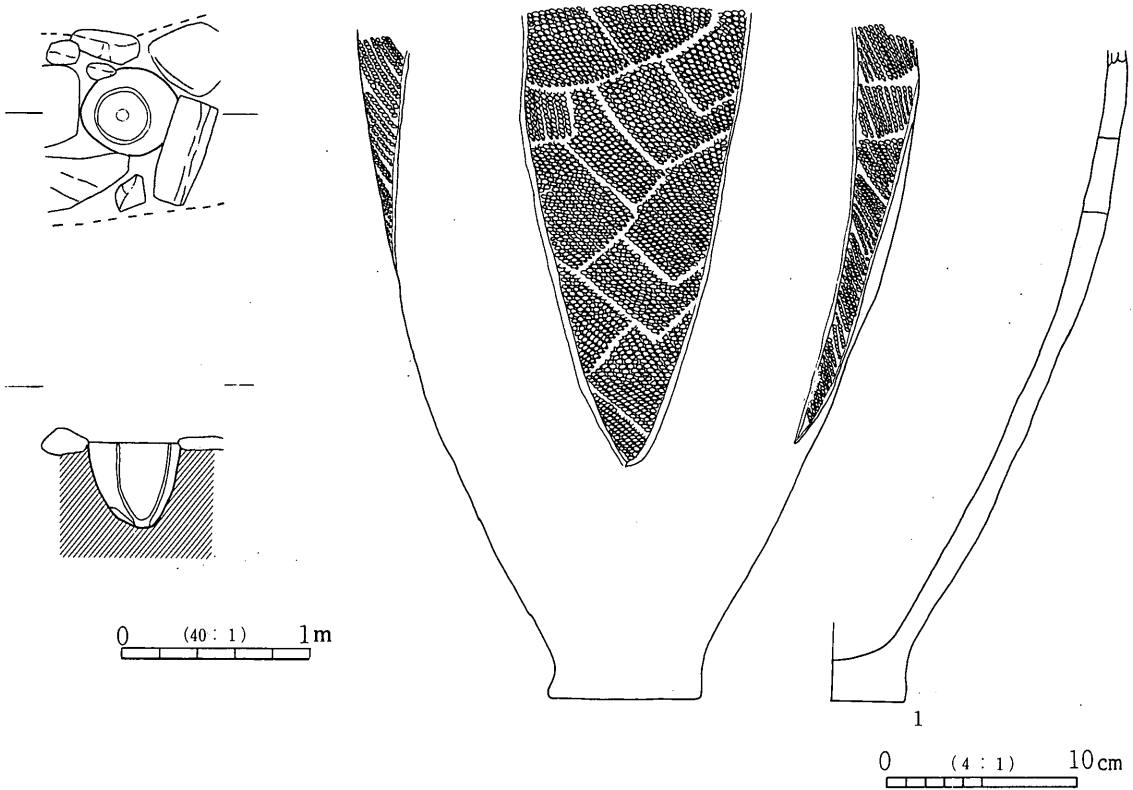
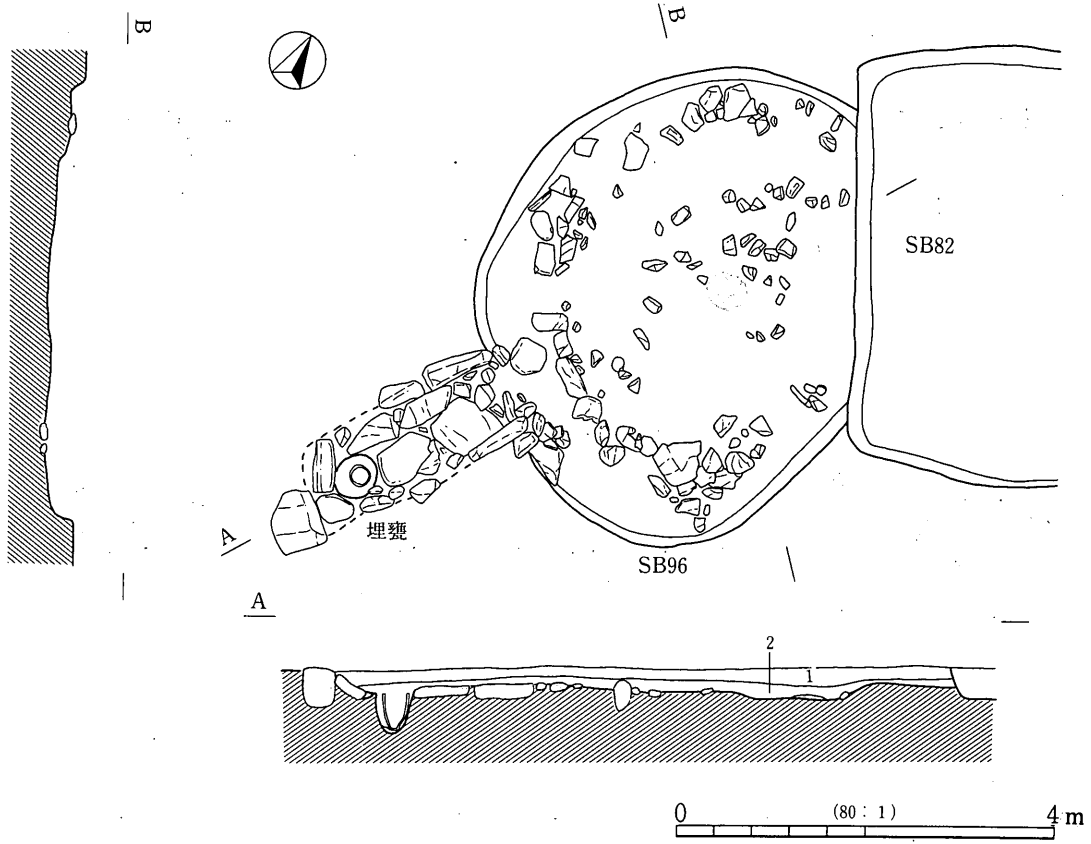
調査の経過：III層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、半裁したところ、埋甕と思われるほぼ完形の2個体の土器を検出した。両土坑とも平面プランが曖昧であったため、断面を観察したところ、唐草文系土器を出土した屋外埋甕2が加曾利E3式土器を出土した屋外埋甕1に切られており、唐草文系土器の一部が破壊されていることが判明した。このことから屋外埋甕2の方が古いと判断した。

覆土：両土坑とも黒色土と暗褐色土が堆積していた。覆土は酷似している。

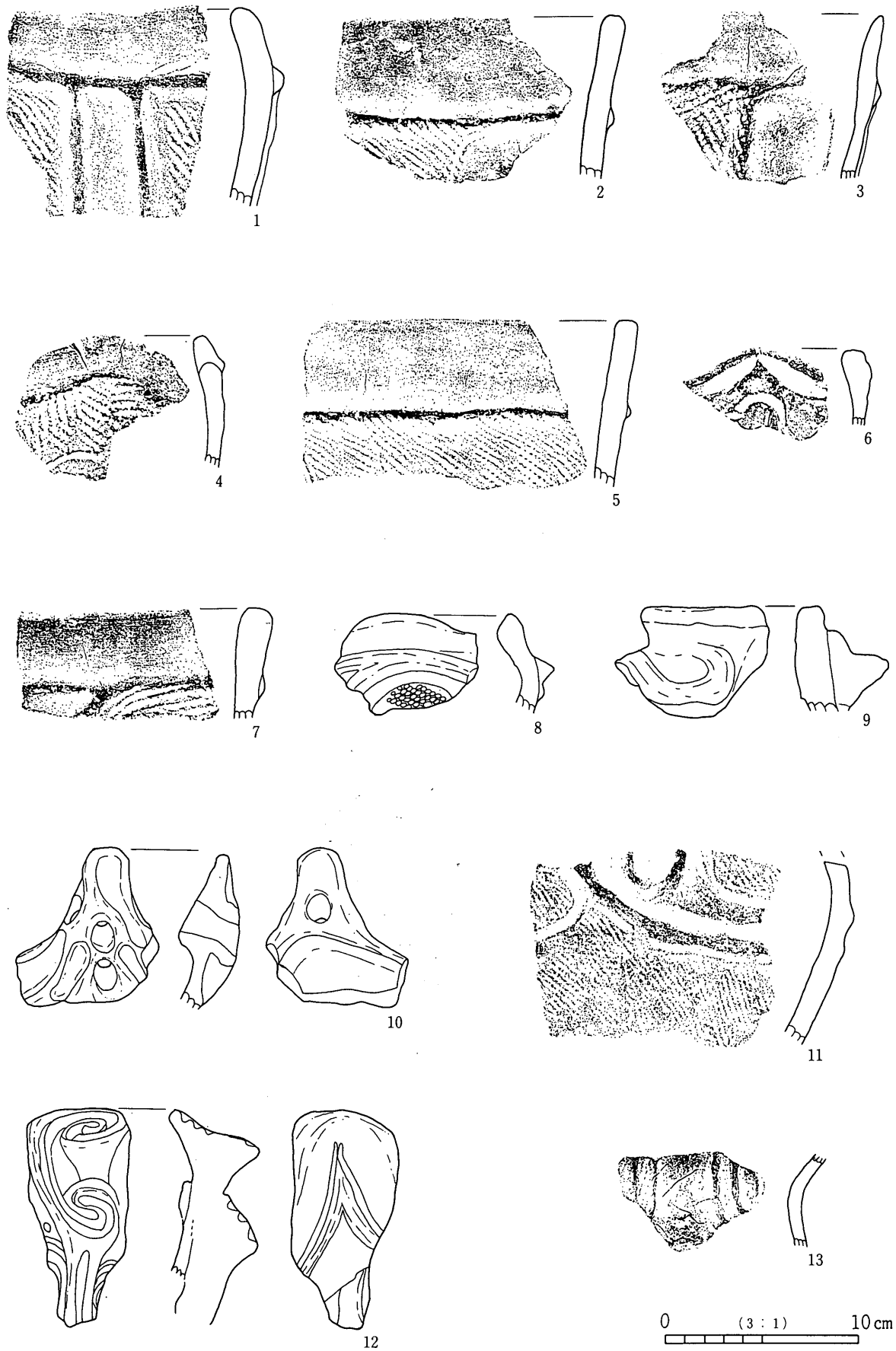
壁面：屋外埋甕1の深さは35cm程度である。屋外埋甕2の深さは30cm程度であった。

規模と形態：屋外埋甕1は直径50cm程の円形を呈する。屋外埋甕2は直径40cm程の円形を呈する。

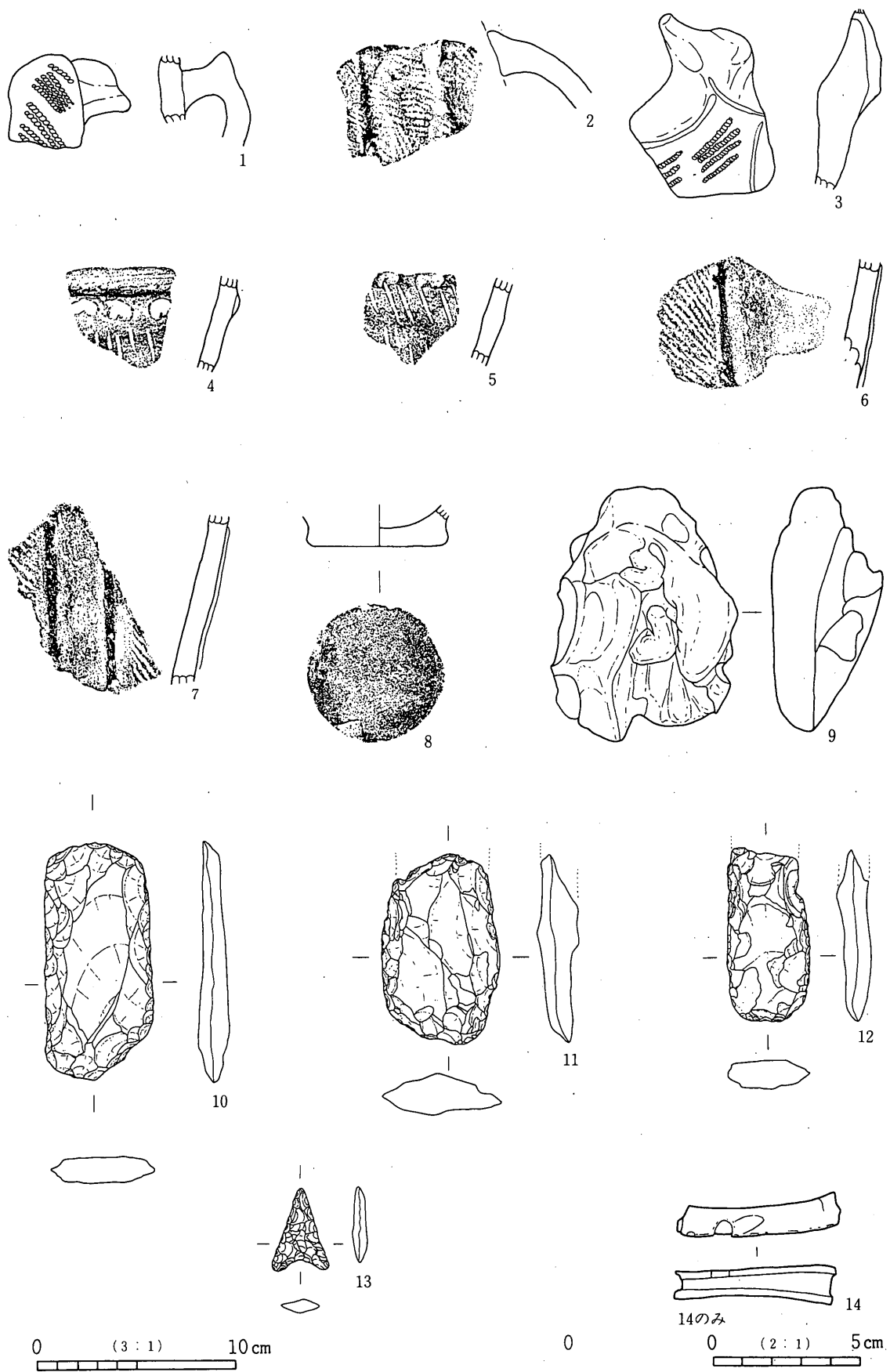
出土遺物と所属時期：屋外埋甕1・屋外埋甕2ともに四日市遺跡第2段階の所産であると考えた。屋外埋甕としたが、床を失った住居址に伴う施設であった可能性がある。両土器とも底部を欠失しており、他の住居址出土の埋甕にも底部を欠失したものがみられ、それらの特徴とも一致する。屋外埋甕2の唐草文系土器には沈線による渦巻文がみられる。



第34図 98号住居址実測図および埋葬実測図



第35图 98号住居址出土遗物实测图(1)



第36図 98号住居址出土遺物実測図(2)

(2) 80号住居址出土埋甕 (第38図-1)

床を一部残した住居址から出土した。底部が意図的に欠失され、逆位で埋設されていた。唐草文系土器で口縁部付近は上からみると正方形を呈する。文様構成に加曾利E式土器の影響が窺える。四日市遺跡第2段階に位置づけておく。

(3) 107号住居址出土土器 (第38図-2)

曾利V式土器の特徴を有する土器である。在地の土器に比べ胎土に白雲母と長石を多く含み、搬入品である可能性も否定できない。全体的にこのような曾利式(系)土器の出土は破片も含めて僅かであった。四日市遺跡第4段階に位置づけてもよいだろうか。

(4) 竪穴状遺構1出土土器 (第38図-3)

より後期的な感じを受ける土器である。一对の把手が付き、緩い波状口縁を呈する。文様は磨消縄文による。中期最終末に位置づけてもよさそうであるが、大方のご教示を請う次第である。

(5) 集石遺構2出土遺物 (第38図-4・第39図-4)

小型土器と石棒が出土した。石棒は円礫の集中の中からの出土である。

(6) 91号住居址出土遺物 (第39図-3)

炉の石の角に直立した状態で検出された。一部熱により崩壊しているが、遺存状態は良好である。

(7) 包含層出土遺物 (第38図-5・第39図-1~2、5)

第38図-5は蛇の頭部を模した把手である。第39図-1は土偶の体部破片である。形態から出尻土偶と思われるが、尻の出っ張りは小さい。脚部を付けたときの芯材の痕跡が残る。2は軽石製品である。前回の調査でも1点出土しており、2例目となる。5は石棒の破片である。

IV 後期の遺構と遺物

後期の遺構は確認されていない。遺物は全て遺構覆土及び包含層中から出土したものである。

第40図-1は注口土器の胴部破片。注口の付いていた痕跡が僅かに残り、沈線で区画された中にLRの粒の細かい縄文が充填される。2は把手の破片である。

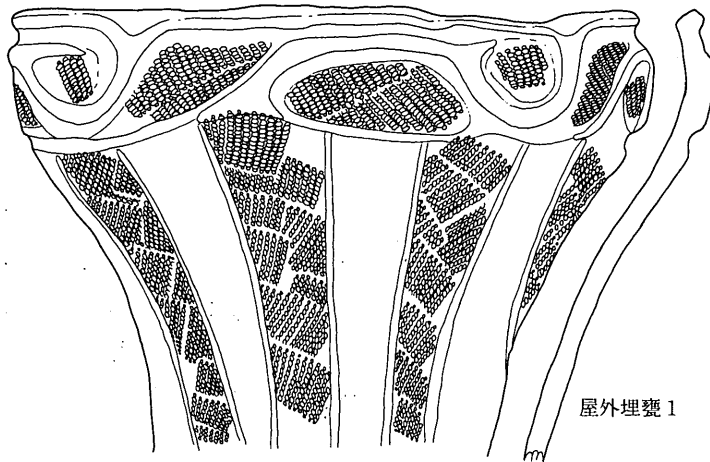
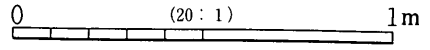
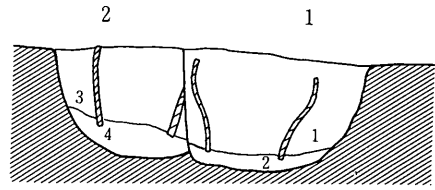
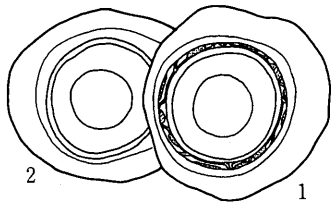
2 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は住居址が1軒検出されたのみである。しかし、良好な一括資料や該期のものとしては貴重な動物骨を検出することが出来た。

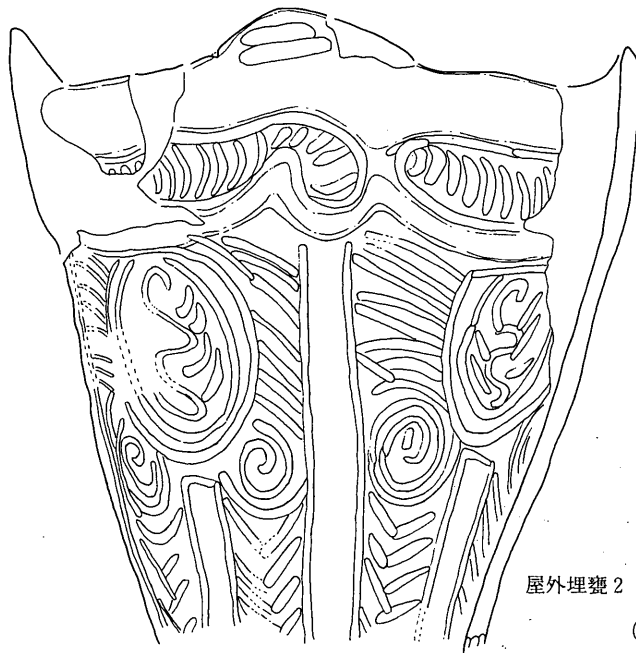
(1) 106号住居址 (SB106) (第41図)

位置：II区の南端に位置する。一部調査区外にある。

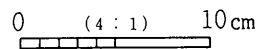
調査の経過：III層上面で竈の煙道の蓋と推定される石や坏が検出され、黒色土の落ち込みが曖昧なものが認められたため、掘り下げにかかる。大部分が調査区外にあることが予想されたため、セクションベルトは



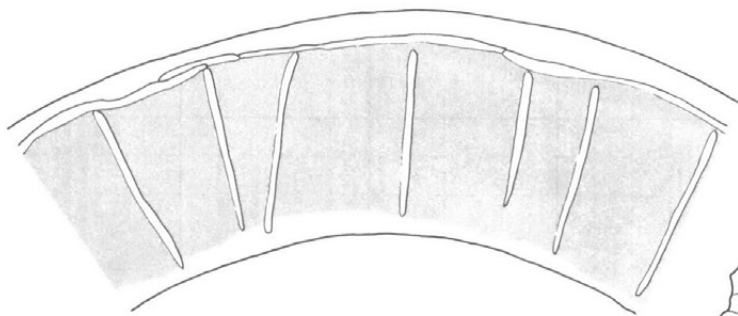
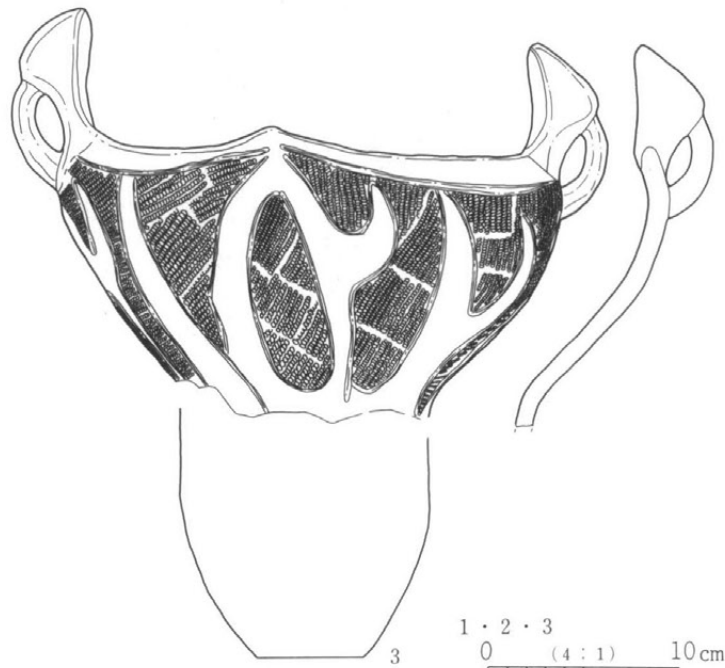
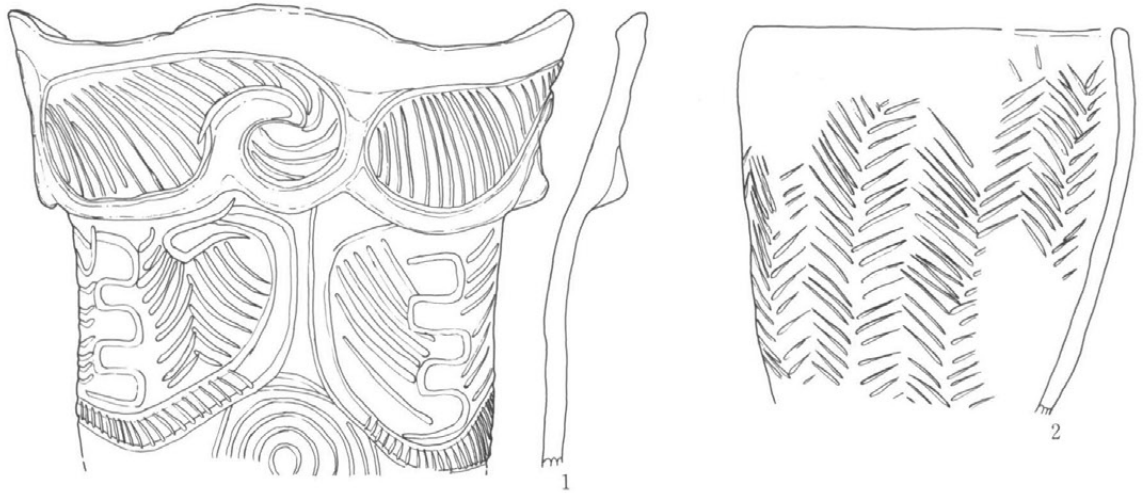
屋外埋葬 1



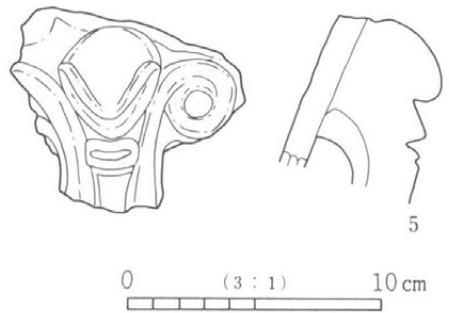
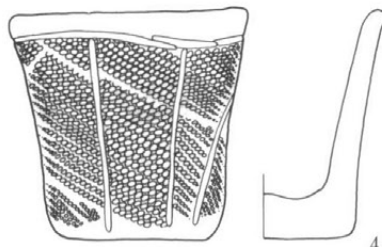
屋外埋葬 2



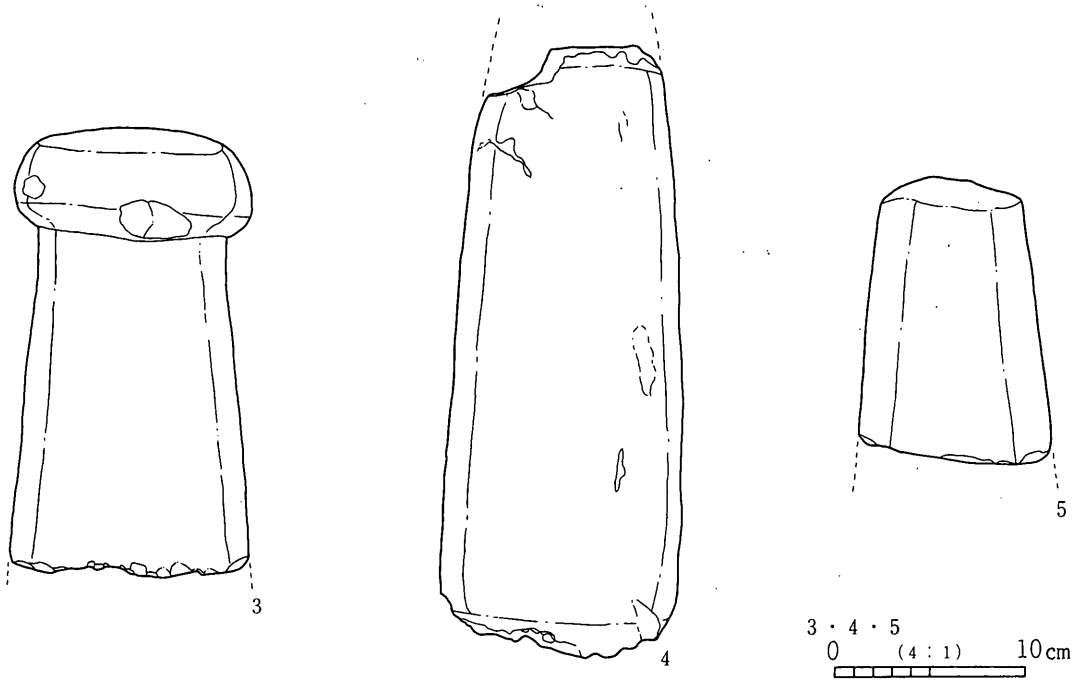
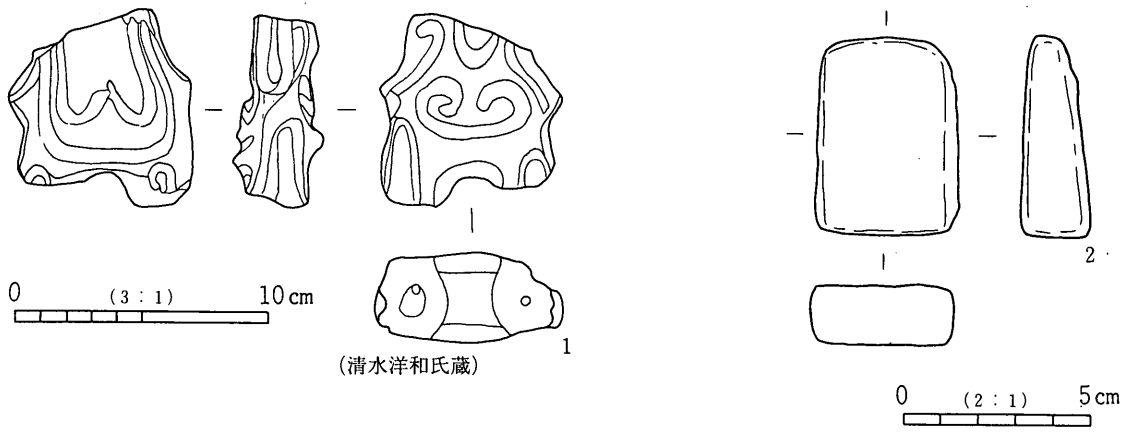
第37図 屋外埋葬 1・2 実測図



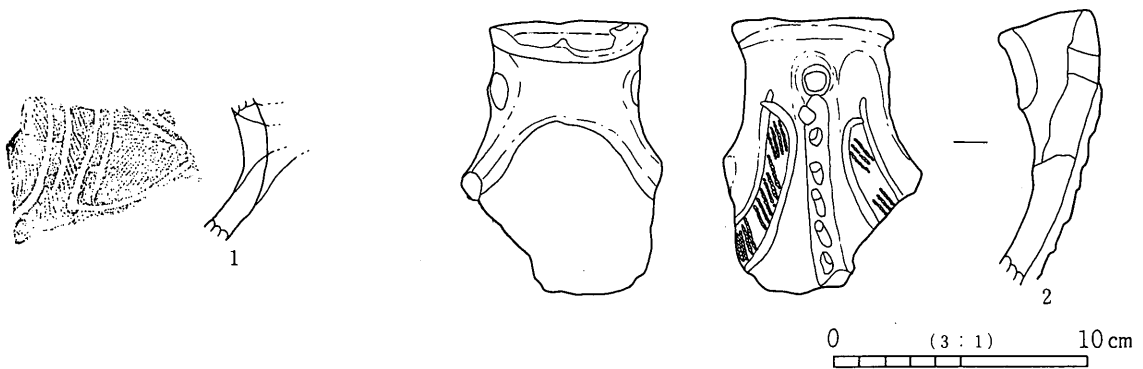
0 (2:1) 5cm



第38図 縄文時代中期末葉の遺物(1)



第39図 縄文時代中期末葉の遺物(2)



第40図 縄文時代後期の遺物

取上げて設定せず、床面まで下げた。床は堅緻面となっており、一部攪乱をうけているものの壁も確認できた。竈も良好に遺存していた。なお、竈内の焼土について自然化学分析を行なった。結果については後章で詳述する。

覆土：黒色土が堆積していた。

壁面：壁高は30cmを数える。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とピット：ピットを1基確認した。

竈：構築材である石と若干の粘土が認められた。焼土が20cmほど堆積しており、灰の層もみられた。この灰層の中から動物の焼骨が検出された。

規模と形態：一辺が3m前後の方形を呈すると考えられる。

出土遺物と所属時期：竈の前方から床直で高坏、小型甕、甕（第42図-3～5）が並んで、据えた状態で出土した。また、覆土から坏も出土しており、これらの土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と考えられる。また、竈から出土した動物骨はニホンジカとニワトリと判明した。詳細は後章に譲ることとする。

3 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は住居址11軒と土坑1基が検出された。ここでは主だった遺構についてのみ記述する。

(1) 37号住居址 (SB37) (第43図)

位置：E-10、11 Gridにある。

調査の経過：III層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを設定し掘り下げた。大きな礫が覆土内に混じっていた。

覆土：黒色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：壁高は20cmを計る。一部のみの遺存であるが、検出は容易であった。

床面：締まっている。部分的に堅緻面が認められる。

柱穴とピット：確認できなかった。

竈：焼土の層厚は5cm程度あった。竈内から多量の土師器甕の破片が出土している。

規模と形態：一部攪乱を受けて、全体形を知るのには難しいが、一辺3m程度の方形を呈すると推定される。

出土遺物と所属時期：完形品は無く、図上復元可能な個体も少なかった。これらの遺物から本址は平安時代（概ね10世紀代）のものと考えられる。また、床面直上で鉄製紡錘車（第44図-6）を1点、覆土から鉄鏃（第44図-5）を1点検出した。鉄鏃については後世のものである可能性もある。

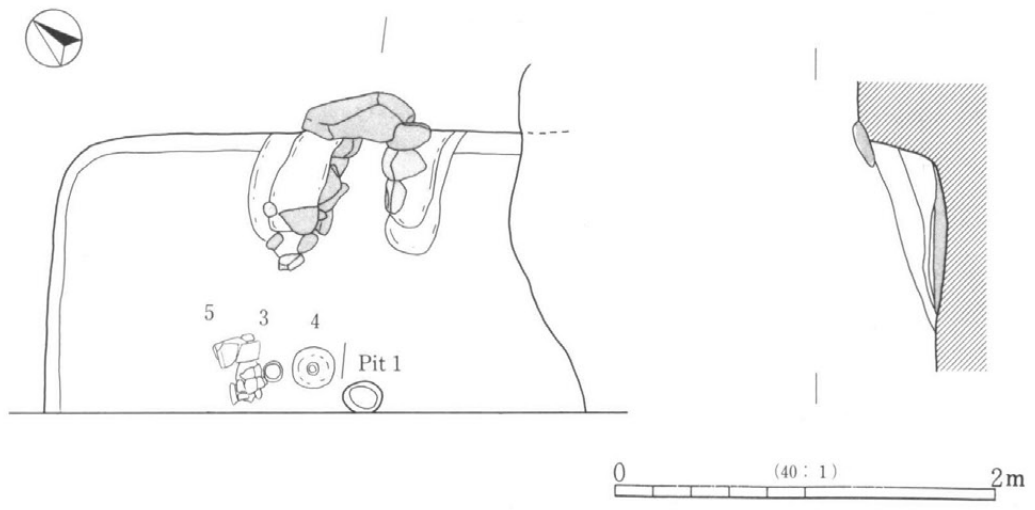
(2) 50号住居址 (SB50) (第45図)

位置：H-8 Gridにある。SB48・49（縄文）と重複する。

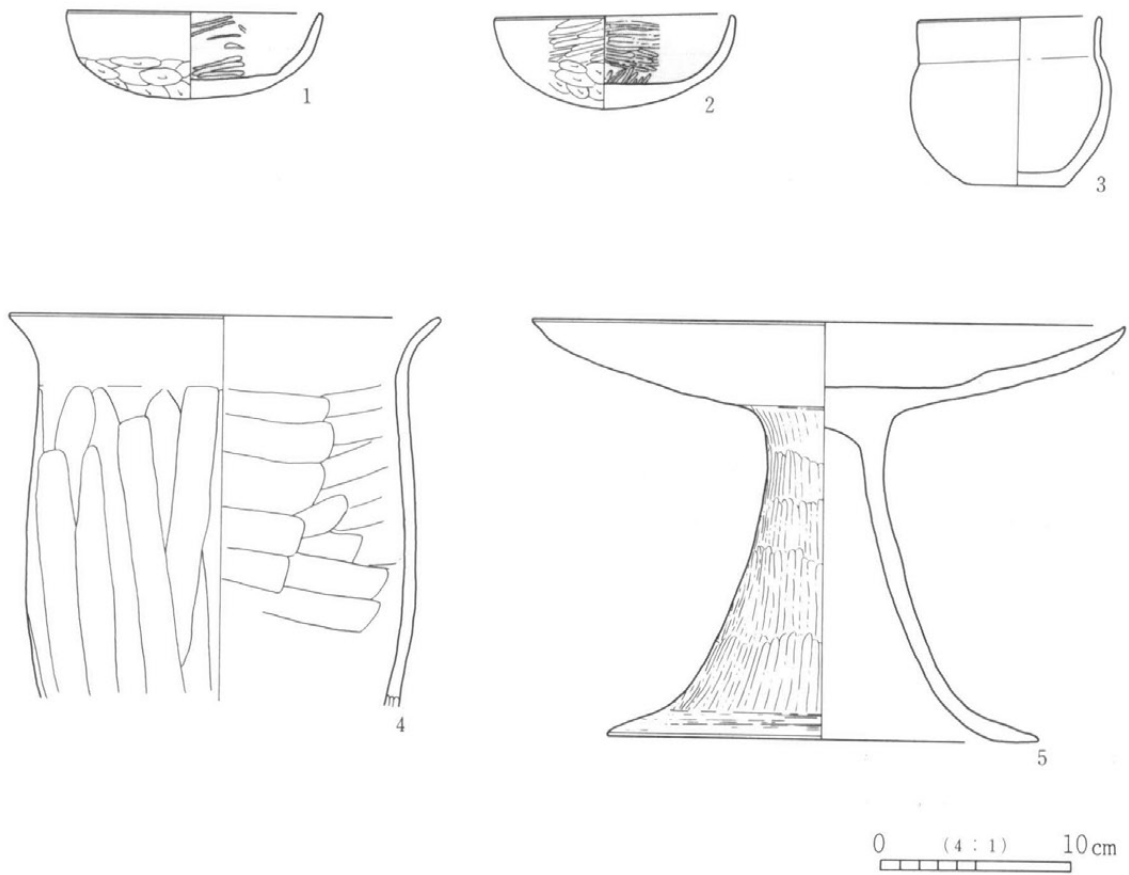
調査の経過：SB48の調査中に発見する。縄文の住居址との重複部分について壁がはっきりせず、確認できなかった。また、床面も黒色土内に存在し、覆土との明瞭な違いが判別できず、遺物の出土状況と竈の高さ、それに僅かな土質の違いから床面を決めた。

覆土：黒色土である。他の平安住居址の覆土に比べ、粘性に劣る。

壁面：壁高は5～10cmを計る。縄文住居址との重複部分は床を壊してしまったが、それ以外は確認できた。



第41图 106号住居址实测图



第42图 106号住居址出土遗物实测图

一部攪乱を受けている。

床面：土質の違いが明瞭ではなく、固さ、色等で判断できなかった。

柱穴とピット：確認できなかった。

竈：粘土構築材が残る。石は芯材にしたと思われる鉄平石がみられる。

規模と形態：一辺5 m程の方形を呈すると推定される。

出土遺物と所属時期：本住居址からは墨書土器が2点出土した(第46図-2、3)。器種は坏Aと皿で、両者とも外面に「三」の墨書を有する。他に軟質須恵器の坏や武蔵型甕、小型甕等が出土している。これらの遺物から本址は平安時代(概ね10世紀代)のものと考えられる。

(3) 63号住居址 (SB63) (第47図)

位置：E-8~9、F-8~9 Gridにある。

調査の経過：III層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを設定し掘り下げた。住居址全体、特に竈付近からの遺物の出土が多く、その分時間を費やした。遺物を図面に落とし、竈の調査を行なう。なお、竈内の焼土について自然化学分析を行なった。結果については後章で詳述する。

覆土：黒色土と暗褐色土の堆積がみられる。

壁面：壁高は20cmを数える。

床面：締まっている。

柱穴とピット：確認できなかった。

竈：構築材である石と粘土が検出された。焼土が厚く堆積していた。

規模と形態：一辺4.5m程度の方角を呈すると考えられる。

出土遺物と所属時期：本址からの遺物の出土は多く、復元できたものだけでも坏は12個体を数える(第48・49図)。他に土師器の耳皿が1点、覆土より灰釉陶器の大破片が出土した。また、「義」の墨書を有する坏が1点出土している。また、図示した以外にも多量の土器片が出土した。これらの遺物から本址は平安時代(概ね10世紀代)のものと考えられる。覆土から鉄製品が1点出土している。

(4) 71号住居址 (SB71) (第50図)

位置：G-4、F-4 Gridにある。

調査の経過：III層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを設定し掘り下げた。床面まで下げたところで、床面及び竈の精査を行なう。

覆土：黒色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：壁高は20cmを数える。

床面：締まっている。

柱穴とピット：1基確認できた。

竈：構築材である石が検出された。5 cm程度の層厚の焼土が認められた。

規模と形態：一辺4 m程度の方角を呈する。

出土遺物と所属時期：出土した遺物から本址は平安時代(概ね10世紀代)のものと考えられる。

(5) 82号住居址 (SB82) (第53図)

位置：E-5～6 Gridにある。SB98 (縄文) と重複する。

調査の経過：III層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを設定し掘り下げた。床面まで下げたところで、床面の精査を行なう。竈は石や粘土といった構築材は認められなかったが東壁中央より焼土の集中が検出された。

覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：壁高は30cmを数える。壁はあまりはっきりしなかった。

床面：暗褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とピット：確認できなかった。

竈：東壁中央に焼土の集中が認められた。しかし、掘り込みや構築材は検出できなかった。

規模と形態：一辺3.5m程の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：須恵器の短頸壺などが出土した (第52・53図)。また、鉄製の鎌の刃が床面直上から出土した。これらの遺物から本址は平安時代 (概ね10世紀代) のものと考えられる。

(6) 67号土坑 (SK67) (第54図)

位置：F-9～10 Gridにある。SB61 (縄文) と重複する。

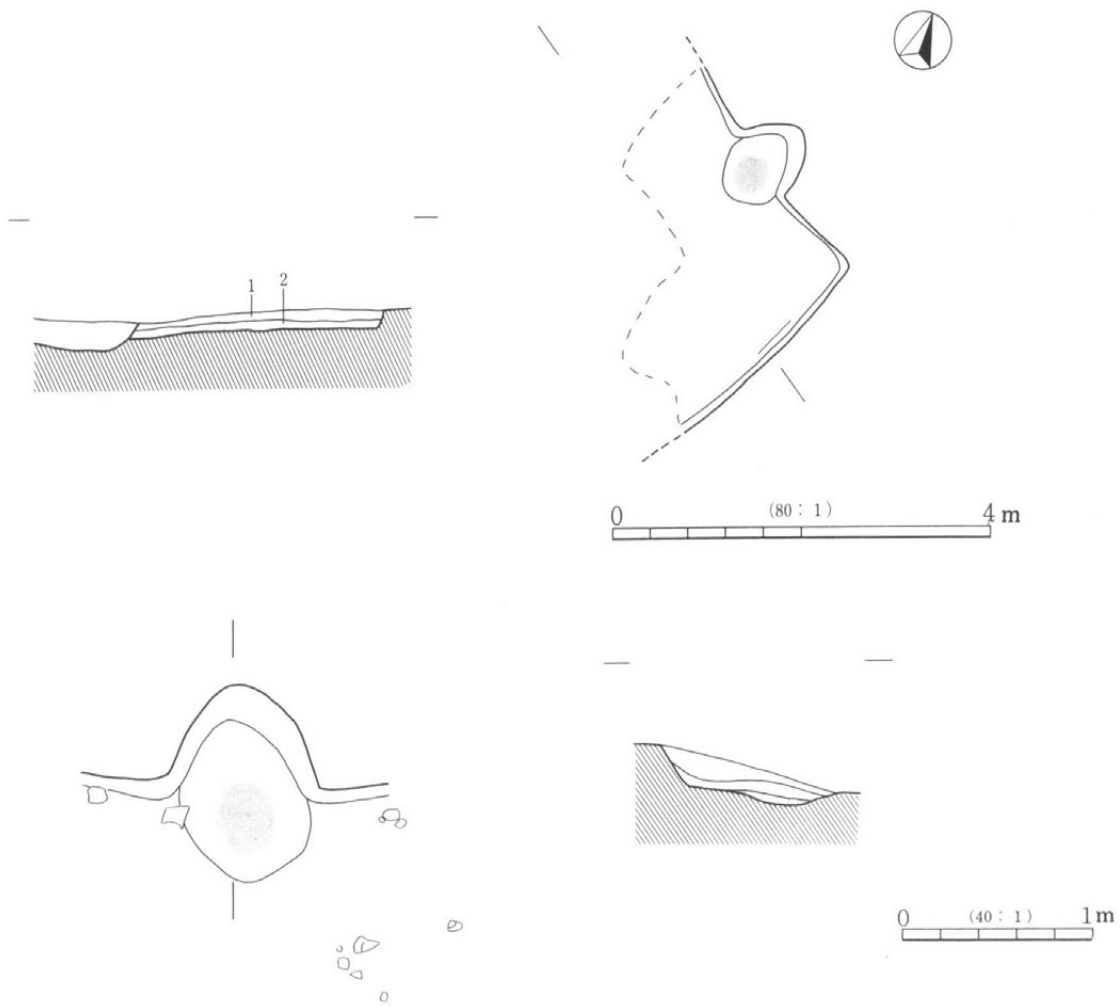
調査の経過：SB61の調査中に発見される。当初は住居址と考えたが、平面プランが円形であることから土坑址とした。遺物の出土がさほど多くはなく、ほとんどの遺物は底部付近からの出土である。

覆土：黒色土の堆積がみられる。

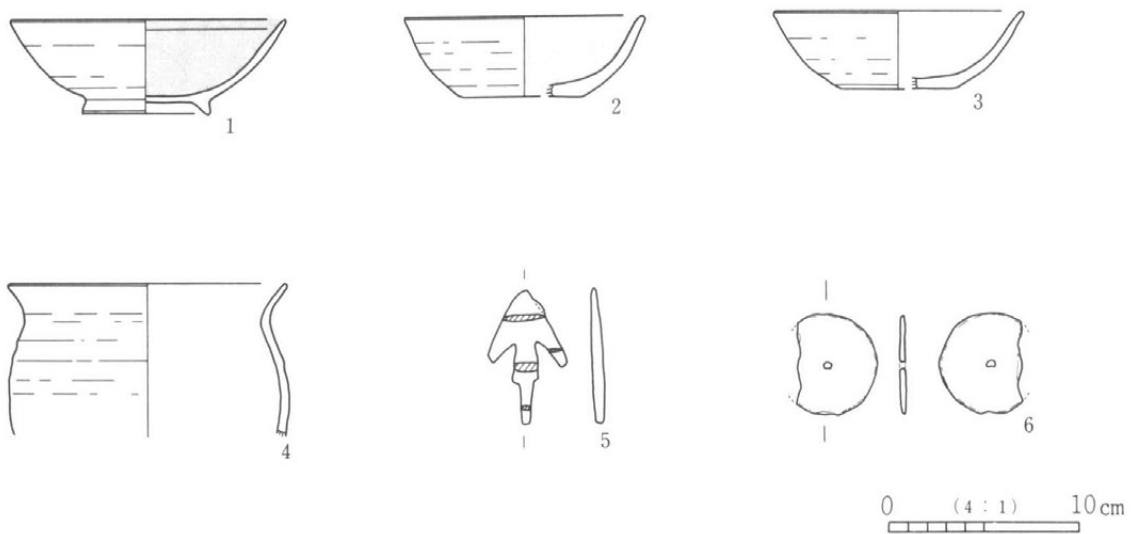
壁面：遺構の深さは40cm程度を計る。

規模と形態：直径3m程の円形を呈する。

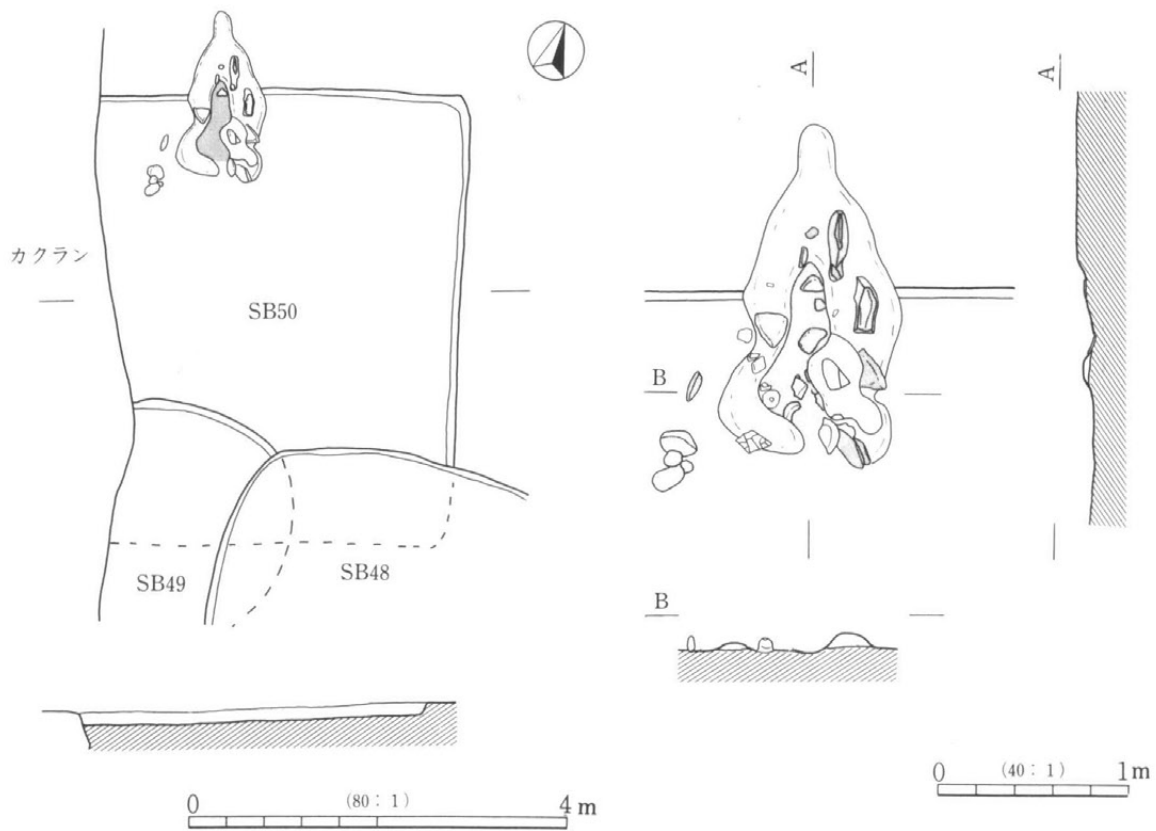
出土遺物と所属時期：本土坑からは土師器の甕、甑などが出土している (第54図)。これらの遺物から本址は平安時代 (概ね10世紀代) のものと考えられる。



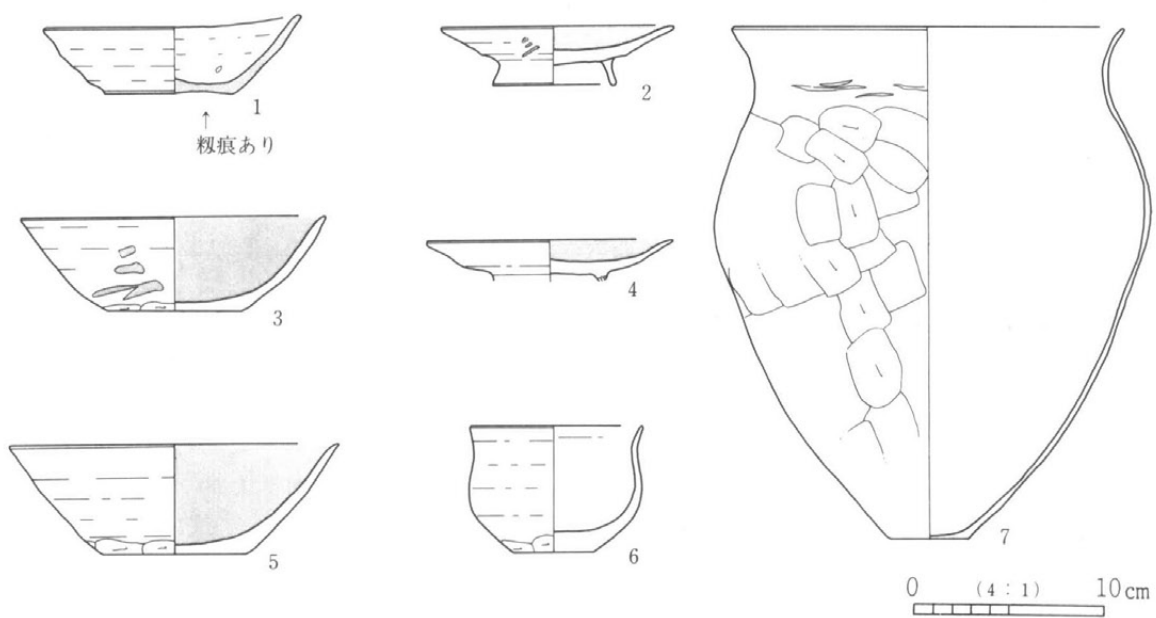
第43图 37号住居址实测图



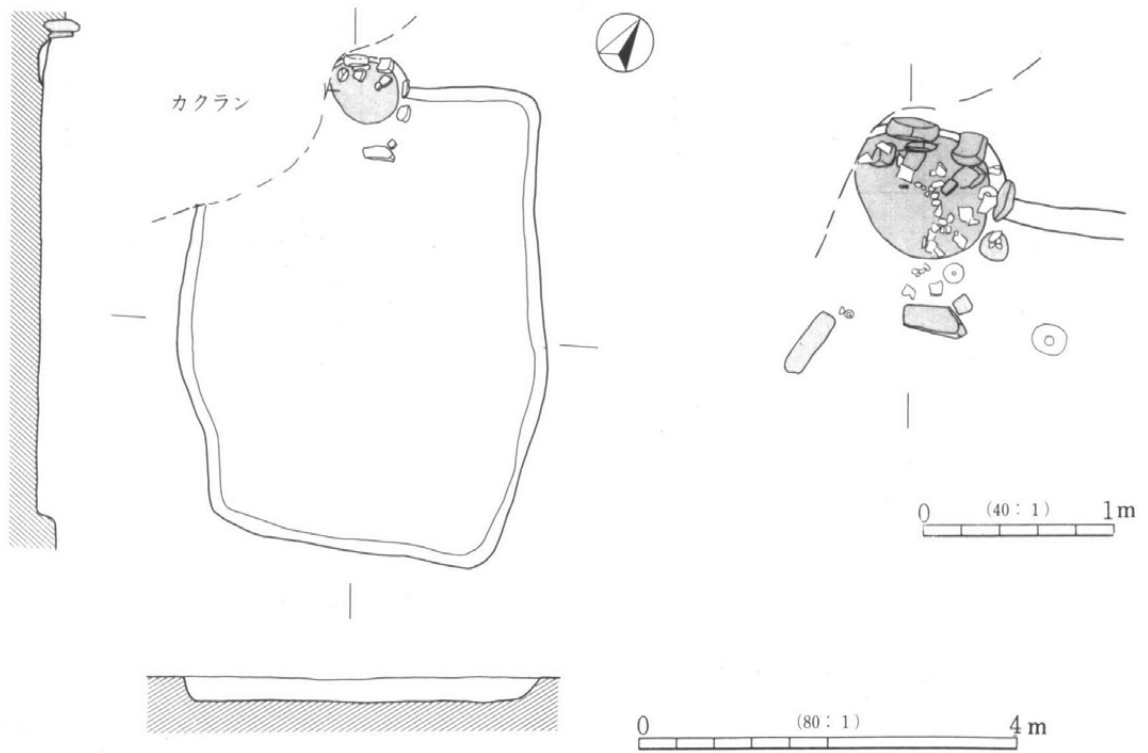
第44图 37号住居址出土遗物实测图



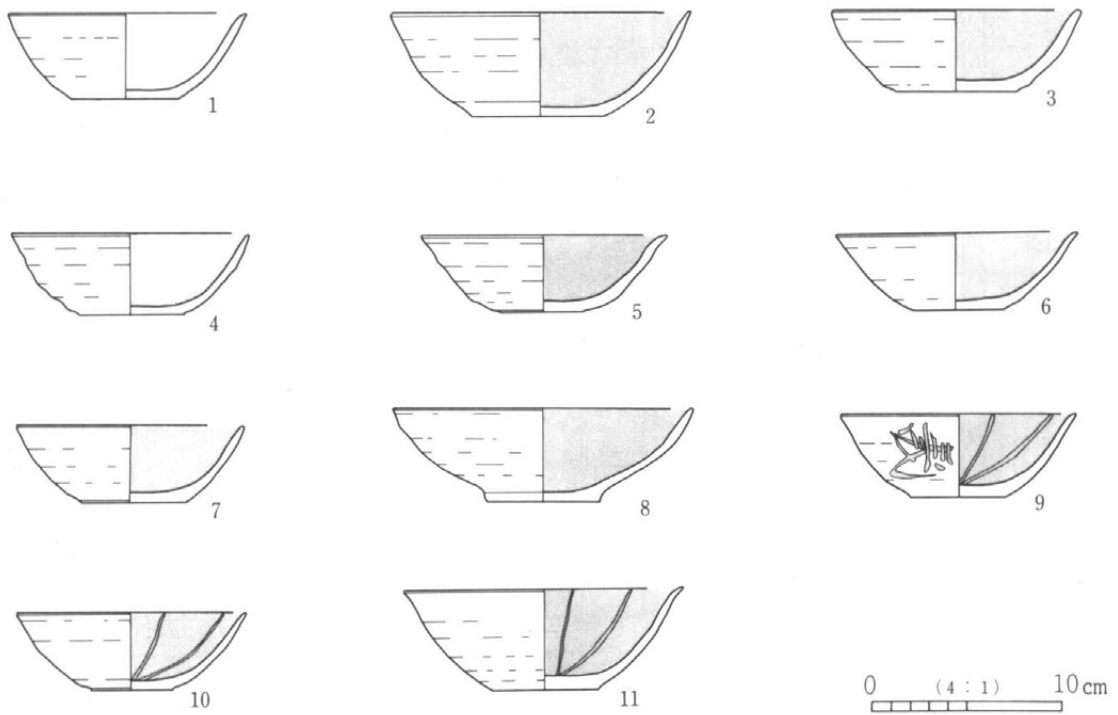
第45図 50号住居址実測図



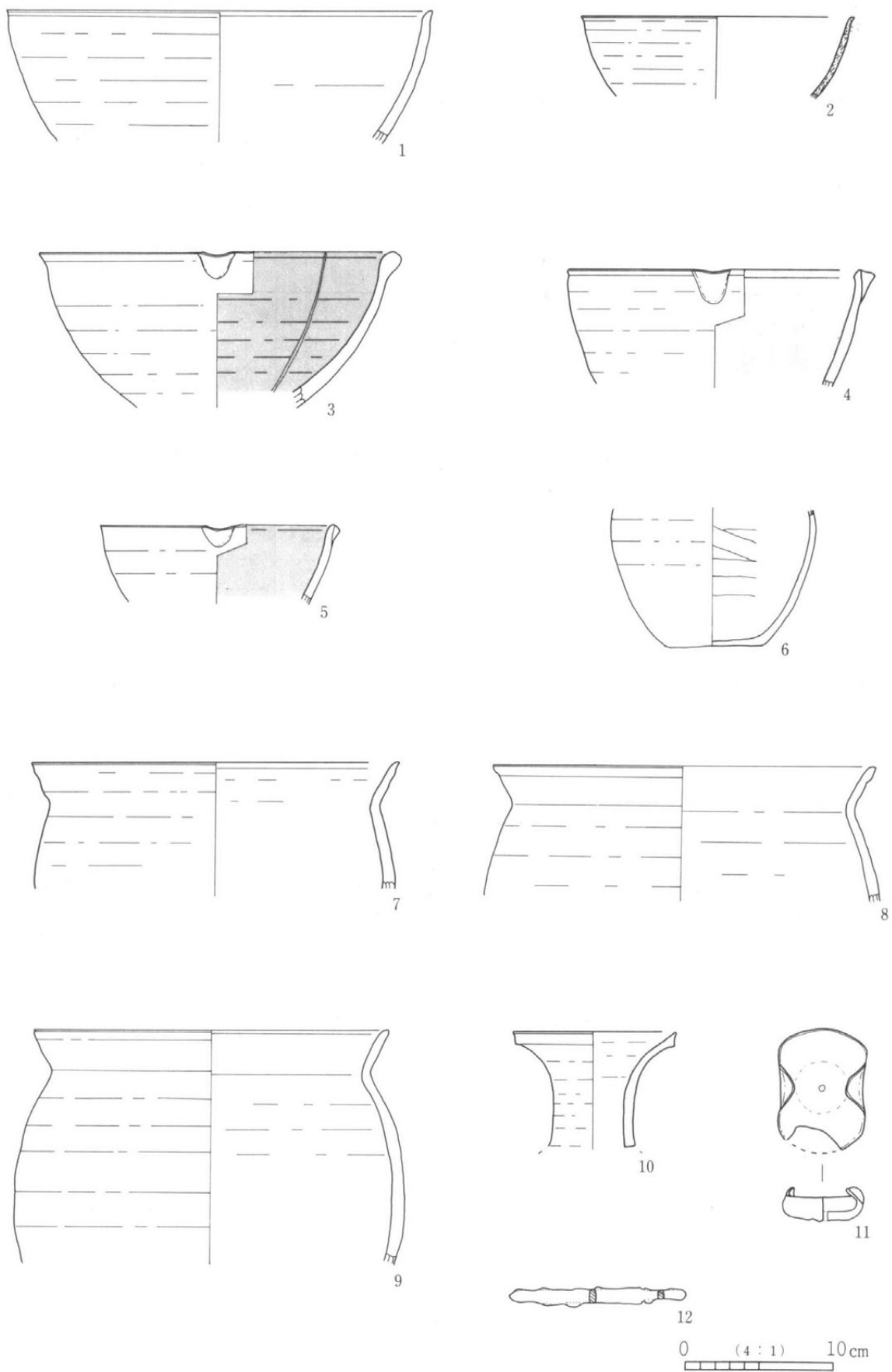
第46図 50号住居址出土遺物実測図



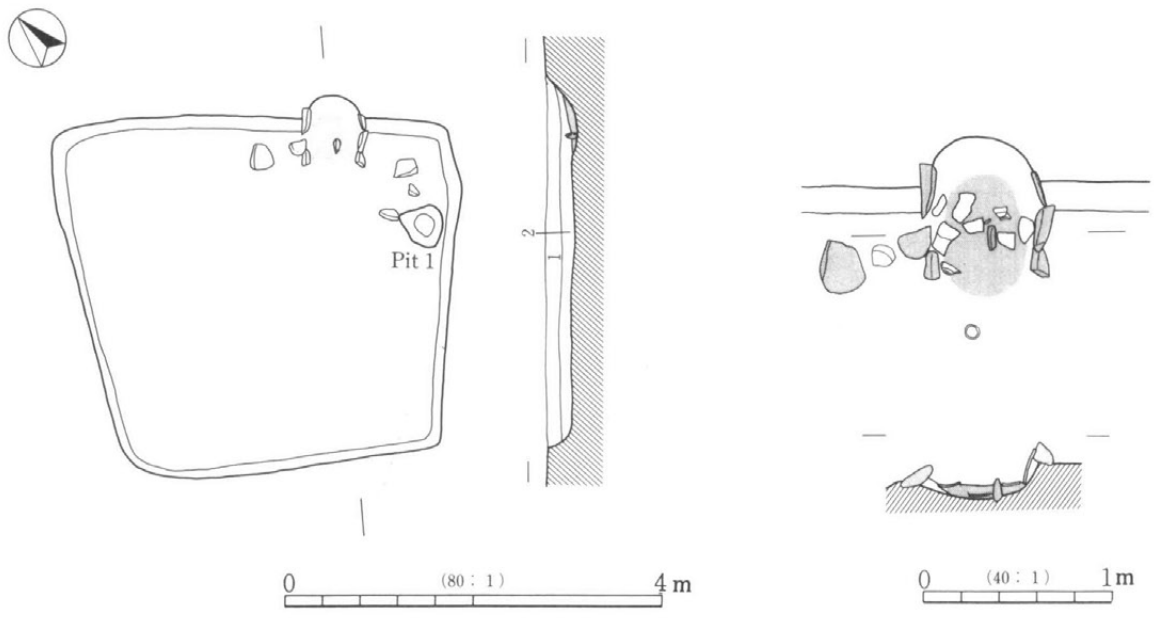
第47図 63号住居址実測図



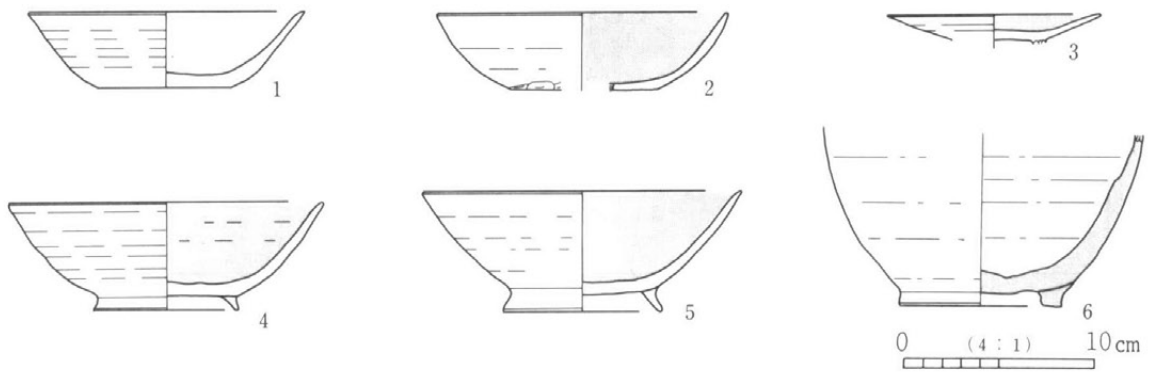
第48図 63号住居址出土遺物実測図(1)



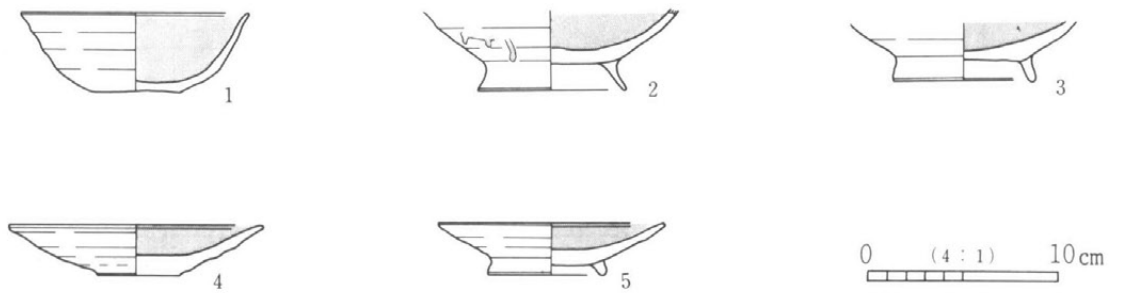
第49图 63号住居址出土遗物实测图(2)



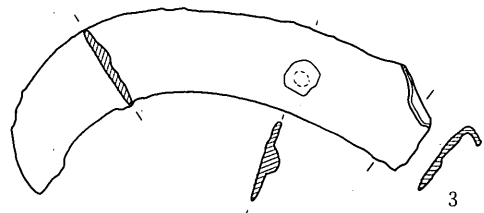
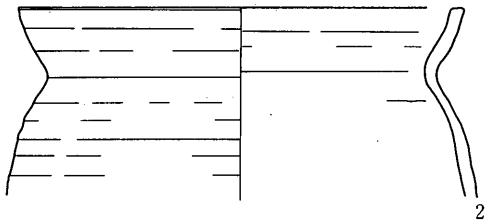
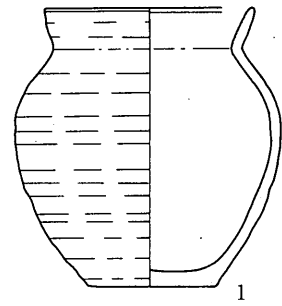
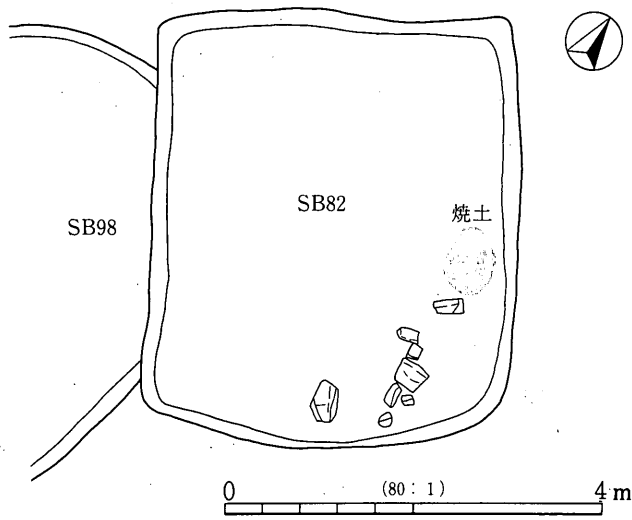
第50図 71号住居址実測図



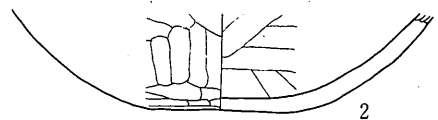
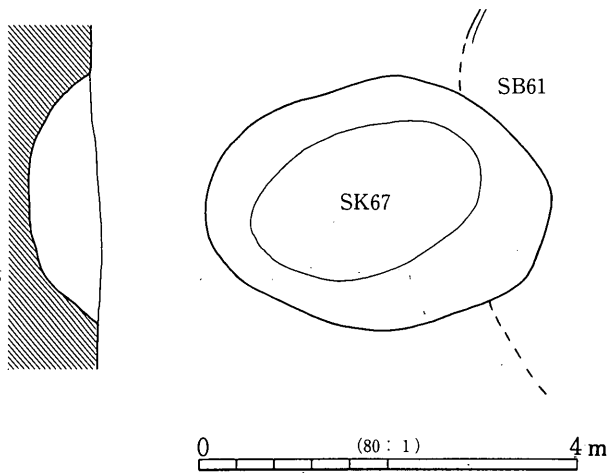
第51図 71号住居址出土遺物実測図



第52図 82号住居址出土遺物実測図(1)



第53図 82号住居址実測図および出土遺物実測図(2)



第54図 67号土坑実測図および出土遺物実測図

第4章 四日市遺跡B地区の調査結果

第1節 発掘調査の概要

1 遺跡及び調査対象地点の概観

本遺跡は四日市遺跡A地区の西側約400mに位置しており、平成4年度に行なった遺跡範囲確認のための試掘調査の際に新たに確認された遺物包蔵地点である。試掘調査の段階で周知の四日市遺跡（A地区）とは時代、内容を異にする地点であることが判明し、新たに四日市遺跡B地区という呼称を与えた。試掘調査の結果、遺跡のおおよその範囲が明らかになり、出土遺物からB地区についても幾多の時代にわたる複合遺跡であることが推定され、調査が慎重かつ困難なものになることが予想された。

今回の調査地点はB地区のうちほ場整備の対象地区となった部分で、遺跡全体で見ると西端部にあたり、面積は約2,000㎡を数える。A地区と同様、河岸段丘の段丘端に立地している。旧地形は南に向かって緩やかに傾斜しており、切土・盛土して畑となっていたり、自然の土砂流失も認められた。そのため、一部では耕作土直下がローム層となる場合があり、多くの遺構が失われているものと推定される。遺跡付近は今回のほ場整備により非農用地となり、今後の開発行為が予想される地域である。また、以前の水田造成の際にかなりの遺構が失われていることも推定される。いずれにせよ、遺跡をめぐる状況は決して良好であるとは言えない。

また、調査区中央を東西に走る自然流路が確認された。遺構との切り合い関係から縄文時代前期以降、古墳時代後期以前のものであることが判明している。

2 調査の方法

B地区においても、A地区の調査結果との整合性、調査が将来、周辺まで及ぶ可能性を考慮して、元年度調査で採用された国家座標に基づくグリッド法を用いることとした。調査地区が広大であったため、8m×8mのグリッドを組んで調査した。東西列を西からA・B・C……J、南北列を北から1・2・3……10とし、グリッドの北東交点を基にA-1、B-2のようにグリッドナンバーを付した。遺構の検出位置及び遺構外遺物の一部の取り扱い、このグリッド単位で行なっている。

遺構全体図はラジコンヘリを用いた航空写真測量法により作成した。個々の遺構の実測は簡易遣り方で行なった。

3 遺構・遺物の概観

遺跡は縄文時代前期、古墳時代後期、平安時代の集落址である。

縄文時代の遺構は前期の住居址が7軒及び土坑が12基検出された。集落の大きく展開した時期は前期初頭と推定される。特筆すべきは良好な黒浜式期の住居址が1軒確認されたことである。それに加え、弧状を呈する土坑列が検出されたことも注目される。また、住居址の床面直上から珧状耳飾りが1点出土した。

弥生時代の遺構・遺物は皆無であった。

古墳時代の遺構は住居址が3軒確認された。いずれの住居址からも良好な一括資料が得られたが、なかでも4号住居址とした大型の遺構からは多くの完形品を含むたくさんの資料を得ることが出来た。遺構の時期

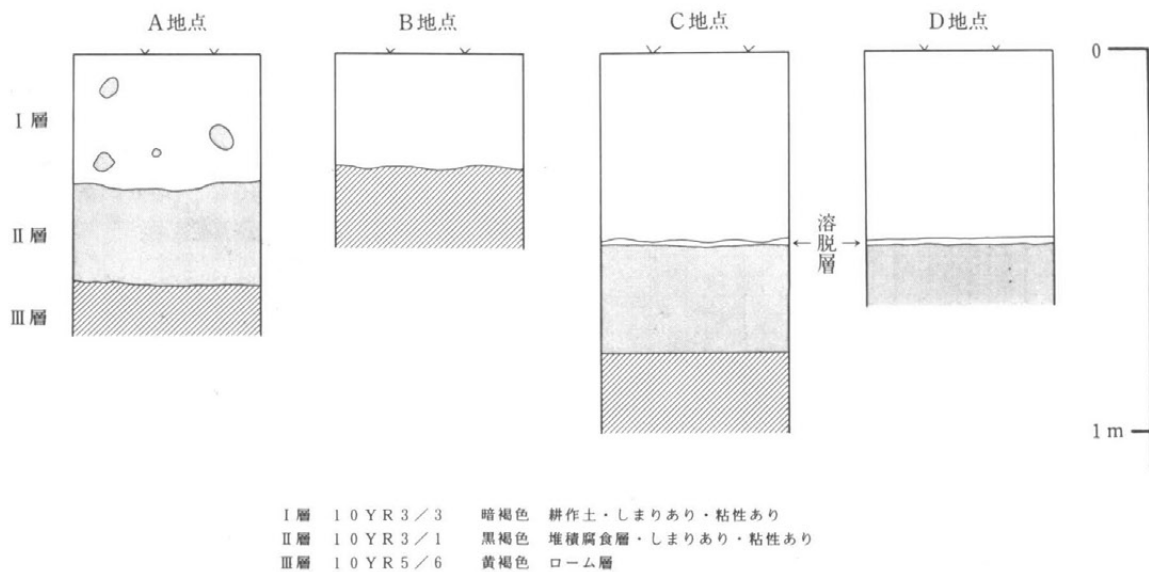
はいずれも古墳時代後期と思われる。

平安時代の遺構は住居址を9軒確認した。概ね10世紀代のもと考えている。調査区全体に散在しており、まとまった集落の存在が予想できる。遺構・遺物の遺存状況については、あまり良好ではなかった。後章で詳述する焼土遺構としたものはおそらく壁と床を失った住居址であると推定される。水田等の造成により、かなりの遺構が失われていることが予想される。

4 基本層序

もっとも多いところで4層に細分できた。I層は表土ないし耕作土、II層（黒色土）とIII層（黒褐色土）が堆積腐食土層、IV層がローム層である。I～III層は20～30cmの層厚を保つ。III層中には大小の円礫が多量に含まれる部分があった。古墳・平安時代の遺構はII層上面から、縄文時代の遺構はIII層上面から掘り込まれているようであるが、平安時代の遺構の覆土とII層の色が酷似しており、実際に平安時代の遺構の検出を行なったのはIII層上面となった。また、削平・流出によりI層直下にIV層が存在する部分がある。

それに加え、調査区中央を横断する自然流路を検出した。III層中の円礫はこれに関連するものと推定される。



第55図 B地区基本土層図

5 検出された遺構・遺物

四日市遺跡B地区から検出された遺構・遺物は下記のとおりである。

遺構	縄文時代前期	竪穴住居址	19軒	(縄文7・古墳3・平安9)
	古墳時代後期	土坑址	26基	(縄文12・不明14)
	平安時代	掘立柱建物址	1基	
遺物	縄文土器	前期～後期土器		

土師器	甕・坏・高坏・皿・甑・耳皿
須恵器	甕・坏
軟質須恵器	坏
灰釉陶器	壺
石器	石鏃・石匙・石錐・打製石斧・磨製石斧・石皿・すり石・独鈷石
石製品	軽石製品・球状耳飾り・垂飾り・砥石
鉄製品	刀子・鎌・かすがい

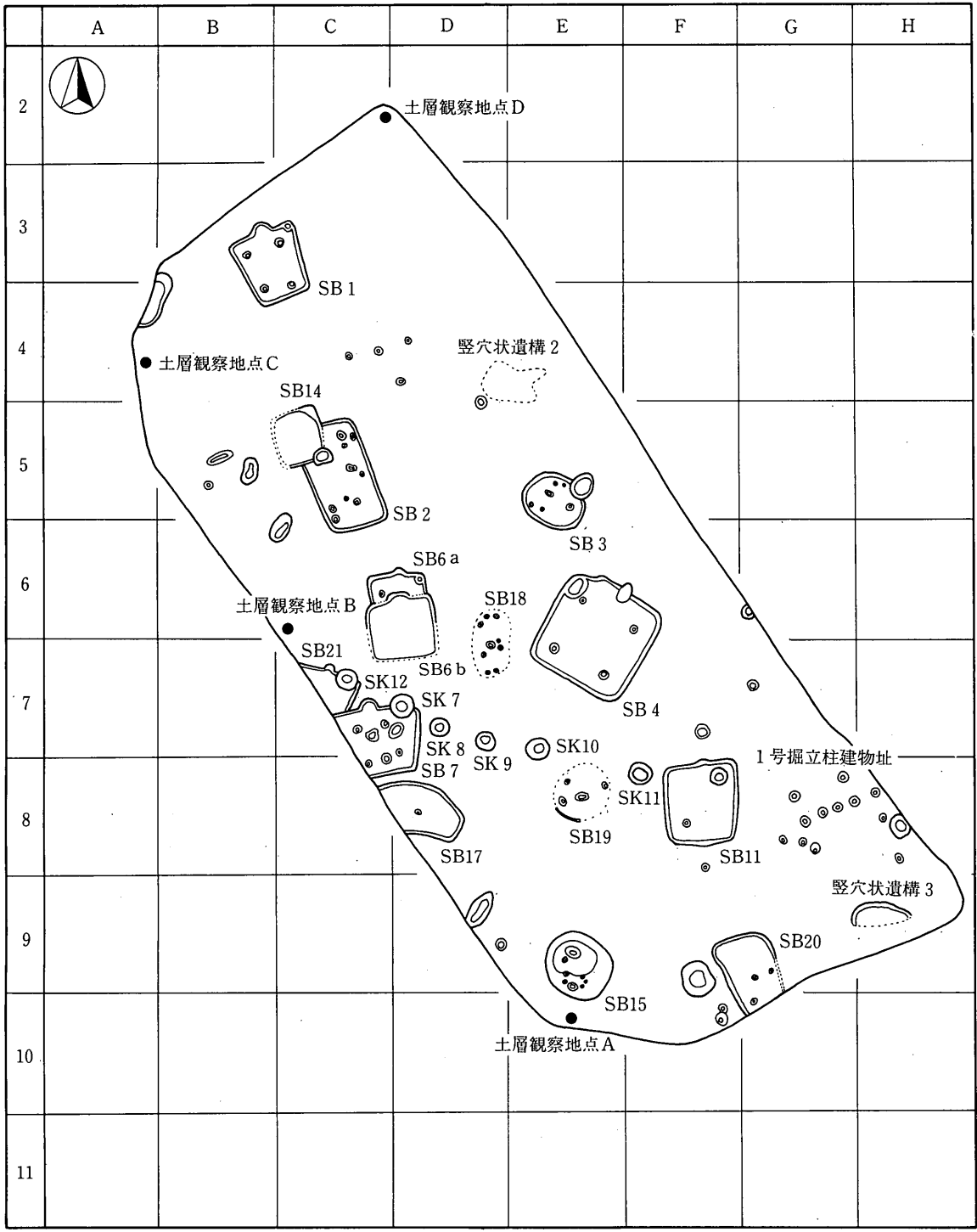
第2節 調査の結果

四日市遺跡B地区は縄文時代前期から平安時代にわたる複合遺跡である。発掘現場における混乱を避けるため、各遺構の番号は時代に係わりなく、発見順に1から付与した。なお、調査途中で遺構ではないことが



(注)トレンチは平成4年度調査時のものである。

第56図 B地区周辺の地形と発掘区



第57図 四日市遺跡B地区遺構配置図

判明したものもあるため、番号に欠番がある。そのため各遺構の最終番号が、そのまま各遺構の検出数とは必ずしも一致しないことを明記しておく。各住居址の記述の順序は、①位置 ②調査の経過 ③覆土 ④壁面 ⑤床面 ⑥柱穴とピット ⑦炉・カマド ⑧規模と形態 ⑨出土遺物と所属時期となっており、その他の遺構もこれに準じている。

1 縄文時代の遺構と遺物

1 前期の遺構と遺物

該期の遺構は住居址が7軒と土坑が12基確認された。

住居址

(1) 2号住居址 (SB2) (第58図)

位置：C-5～6 Gridにある。SB14 (平安) 及びSK3と重複する。

調査の経過：遺構検出作業中にIII層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、精査したところ、夥しい数の土器片と径20cm前後の礫の集中が認められた。住居内集石の可能性を考慮し、礫と一部の土器片について図面・写真に記録した後、礫を取り除き、床面及び付属施設の検出を行い、精査した。なお、微細な石鍬の出土が予想されたため、遺構覆土についてフルイがけを行なった。

覆土：黒褐色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：約10～15cmの壁高を数える。

床面：平坦で全体に締まっている。炉の付近は堅緻面となっている。

柱穴とピット：ピットは8基検出された。

炉：住居のほぼ中央にて検出された。石は検出できず、掘り込みは20cm程度であった。焼土と暗褐色土の混ざった土(3)が堆積していた。

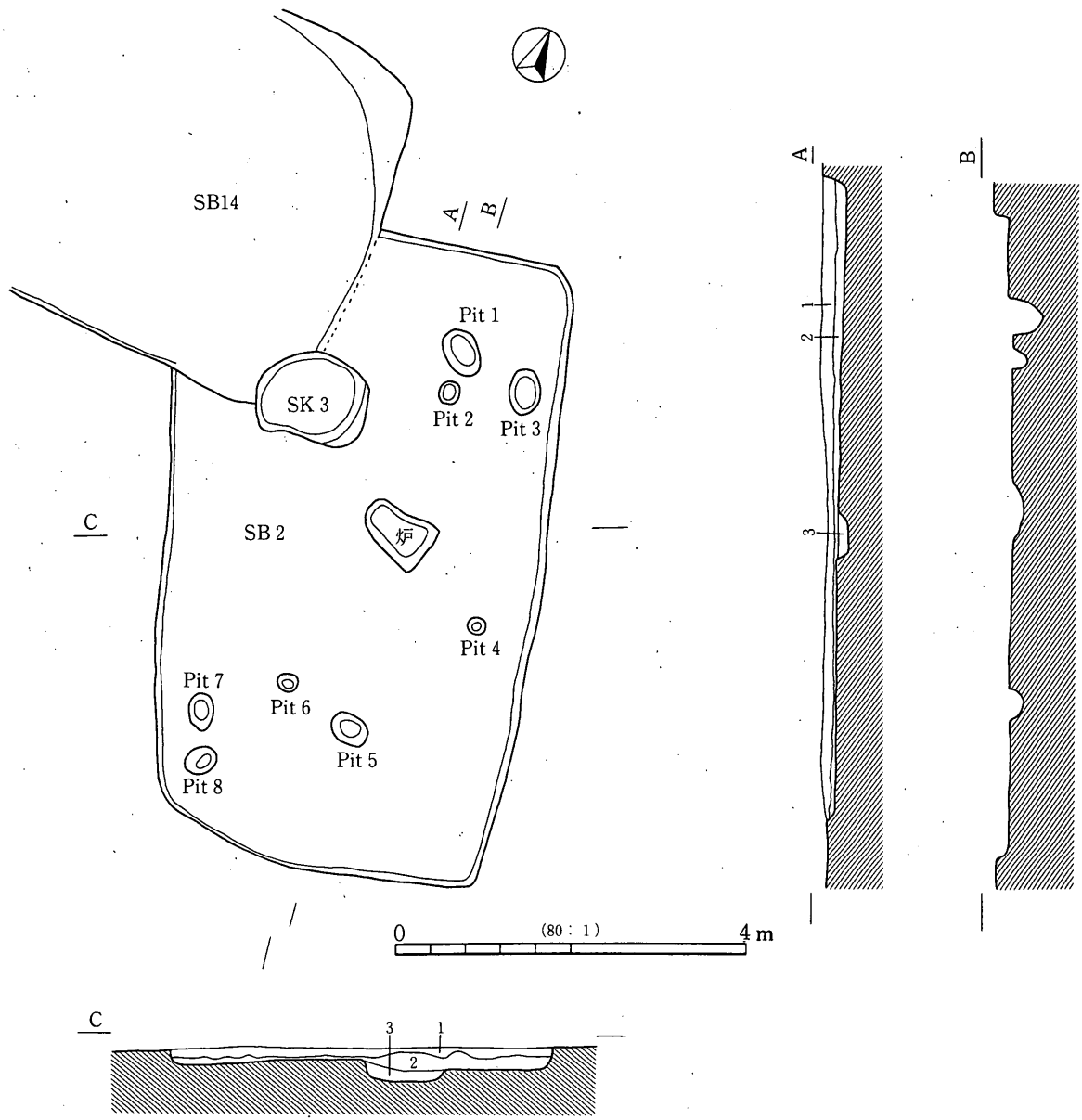
規模と形態：平面形は6.5×4.5mの隅丸長方形を呈する。

出土遺物と所属時期：縄文時代前期初頭の住居址と思われる。遺構覆土中及び床面から遺物が検出され、関山式併行期とみられる資料が出土した(第59～64図)。本住居址出土資料は該期の道具組成の一端を知ることのできる良好な資料である。土器は大きく分けて3種類がみられ、羽状縄文または斜縄文の施文されるもの、関山式土器、無文で器壁の薄いものがみられる。縄文のみ施文されるものは底部が平底のものと尖底のものがあるようだが、その比率は不明である。第59図-1のようなやや小形の土器もある。石器は石鍬・石匙・磨石のほか剥片石器・打製石斧・磨製石斧等が出土している。覆土中からは黒曜石のフレイクやチップが多く検出された。なお、微細な石鍬を摘出するために覆土のフルイがけを行なったところ、総点数1,107点、総重量540gの黒曜石(製品、フレイク・チップ等)を検出した。ほかに軽石製と思われる石製品が1点出土した(第64図-4)。ドーナツ状の形を呈する。

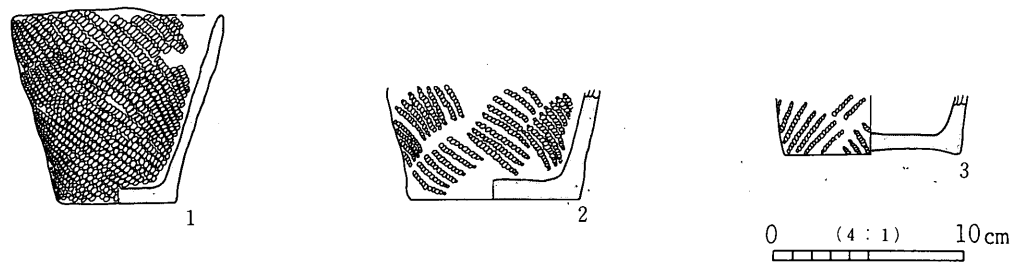
(2) 3号住居址 (SB3) (第65図)

位置：E-5～6 Gridにある。SK4 (縄文前期) と重複する。

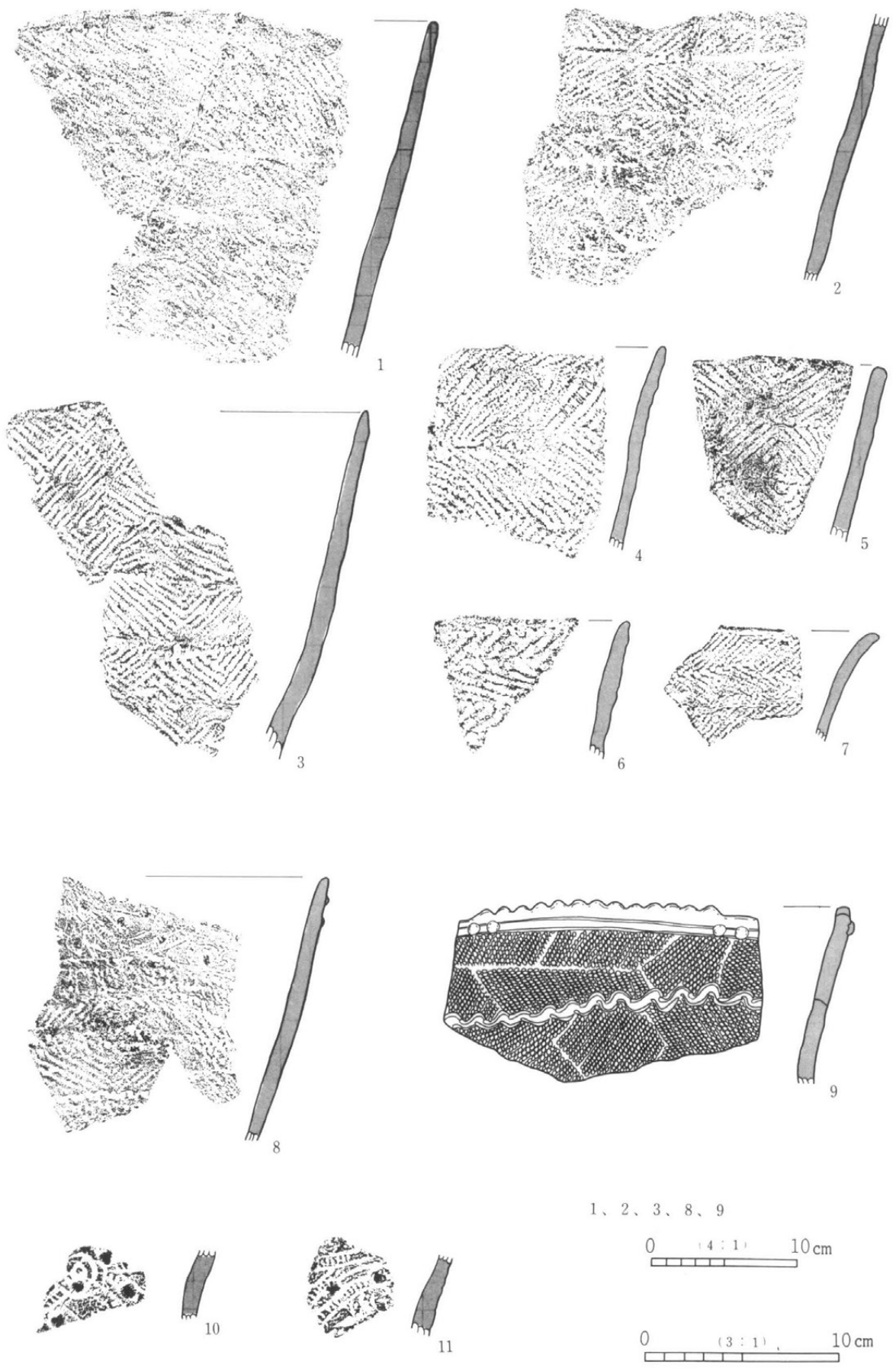
調査の経過：遺構検出作業中にIII層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、精査したところ、土器片と径20cm前後の礫の集中が認められた。住居内集石の可能性を考慮し、礫と一部の土器片について図面に記録した後、礫を取り除き、床面及び付属施設の検出を行い、精査した。床面検出中にSK4との重複が判明したため、一部SK4の覆土内遺物をSB3の遺物として取り上げてしまっている。なお、微細な石鍬の出土が予



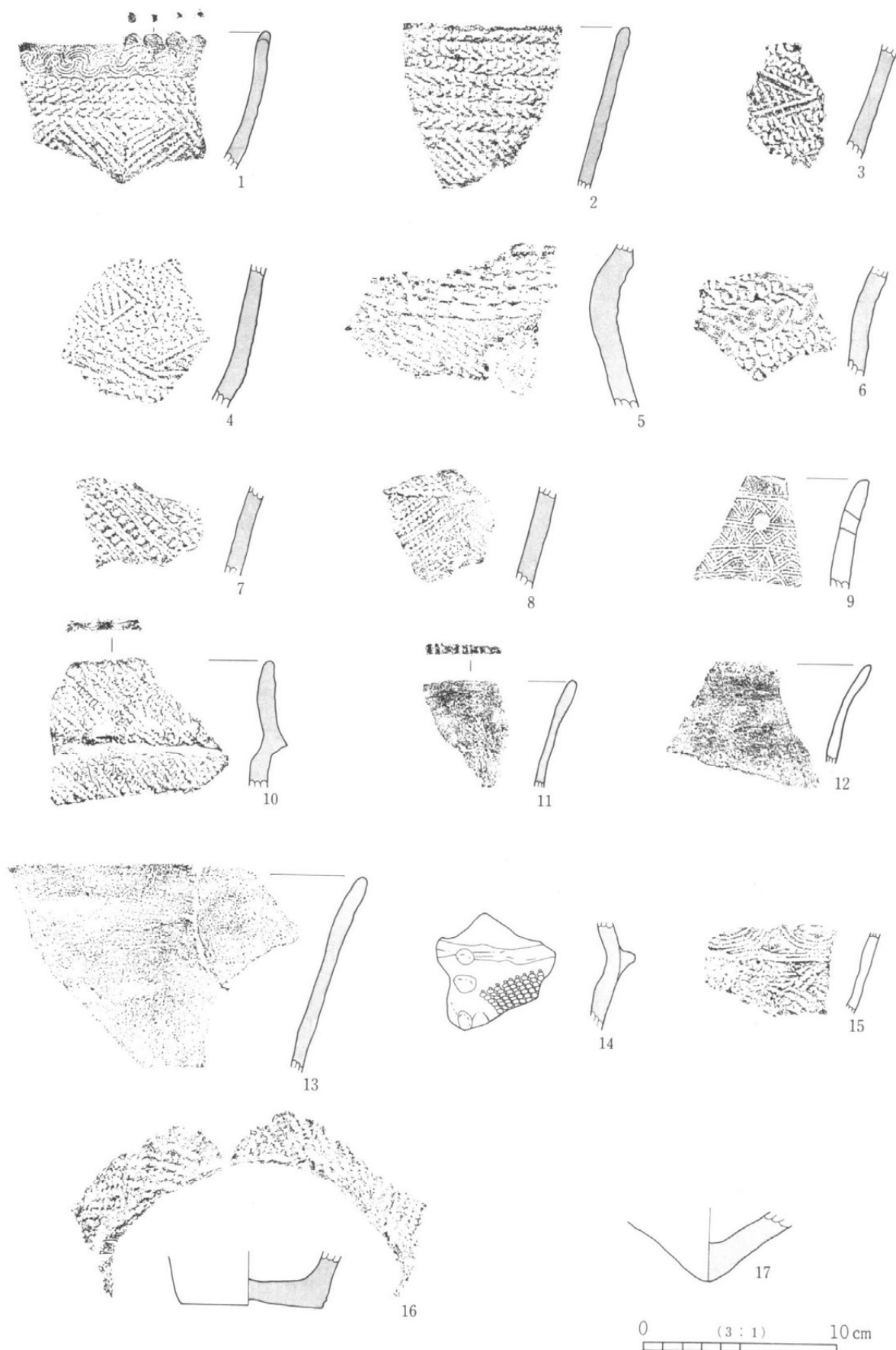
第58图 2号住居址实测图



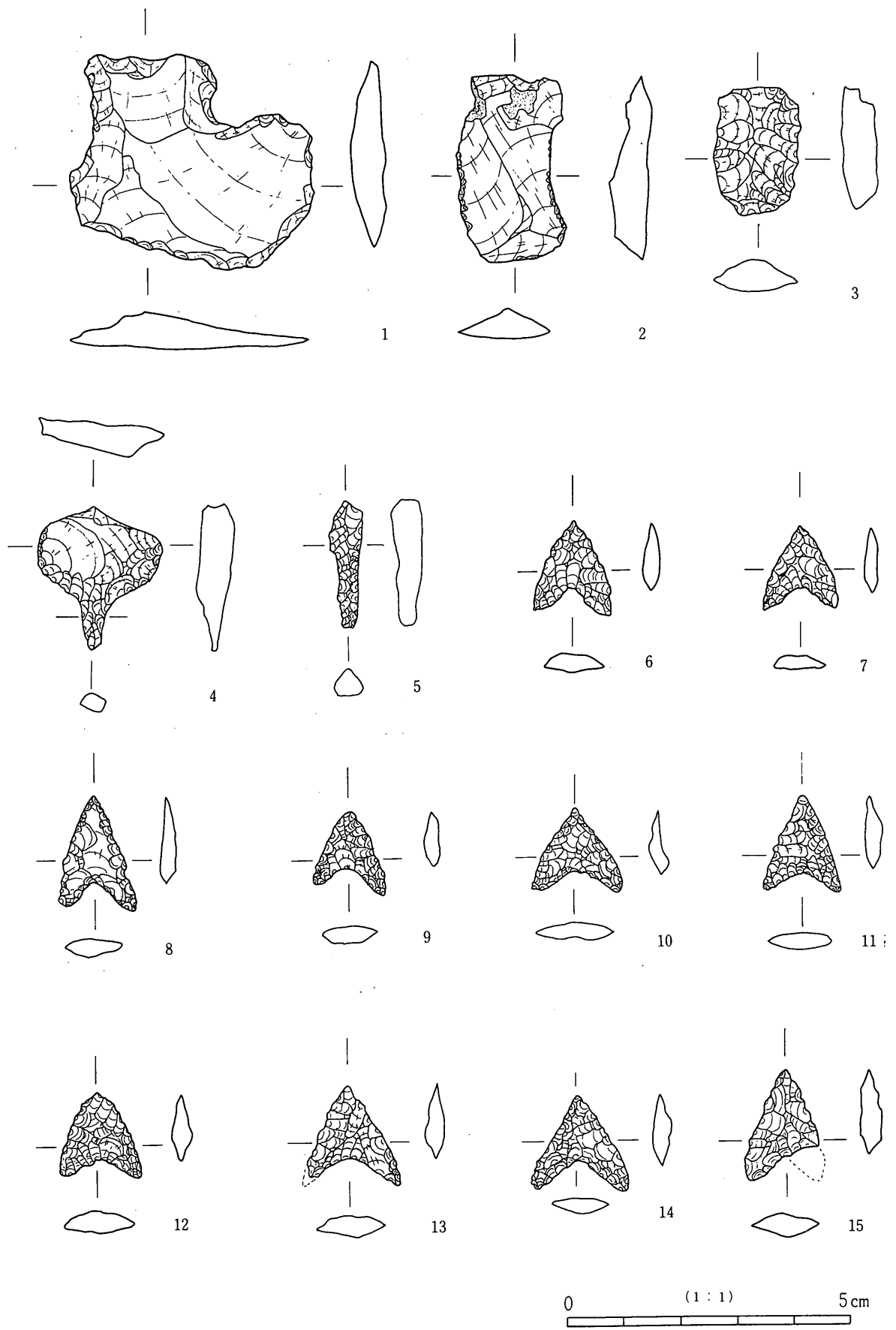
第59图 2号住居址出土遗物实测图(1)



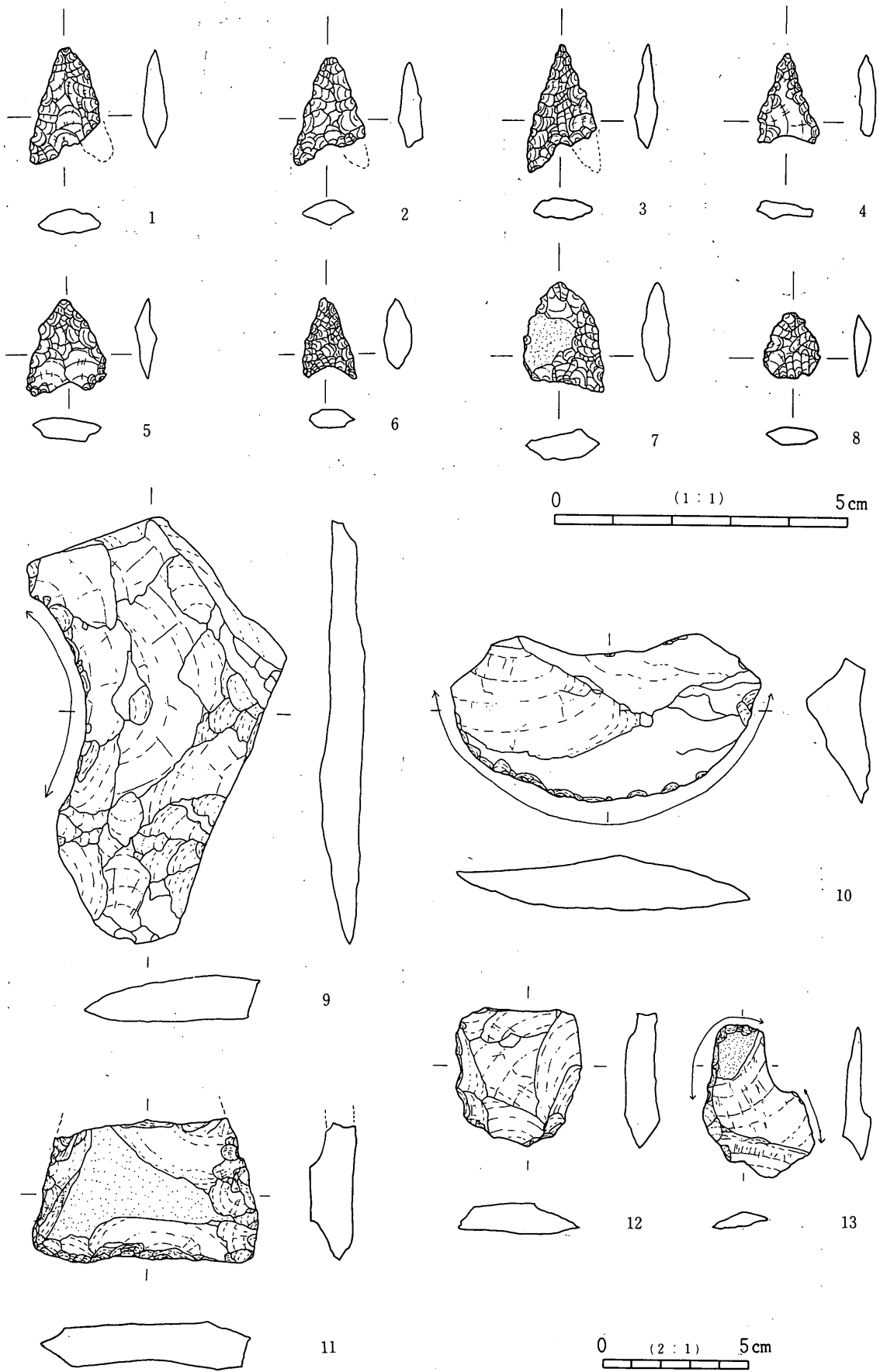
第60图 2号住居址出土遗物实测图(2)



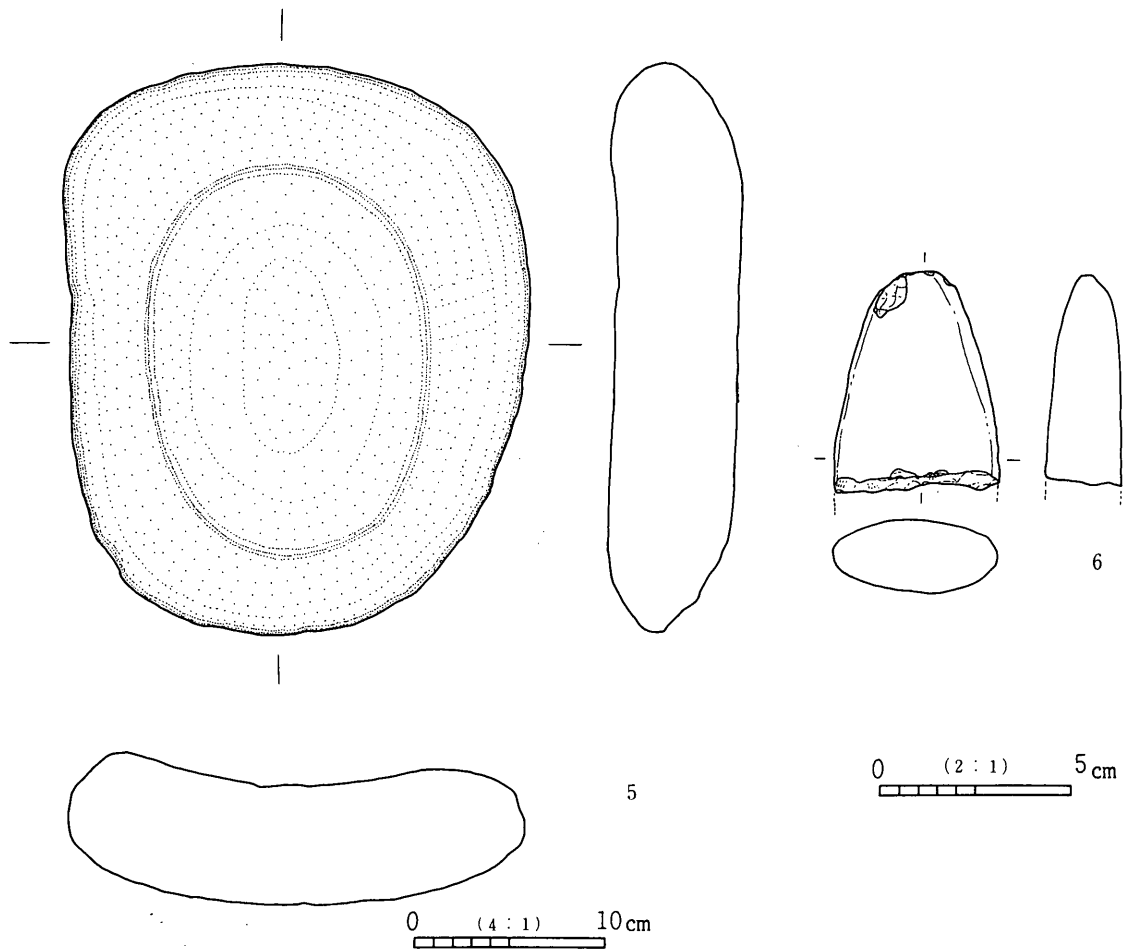
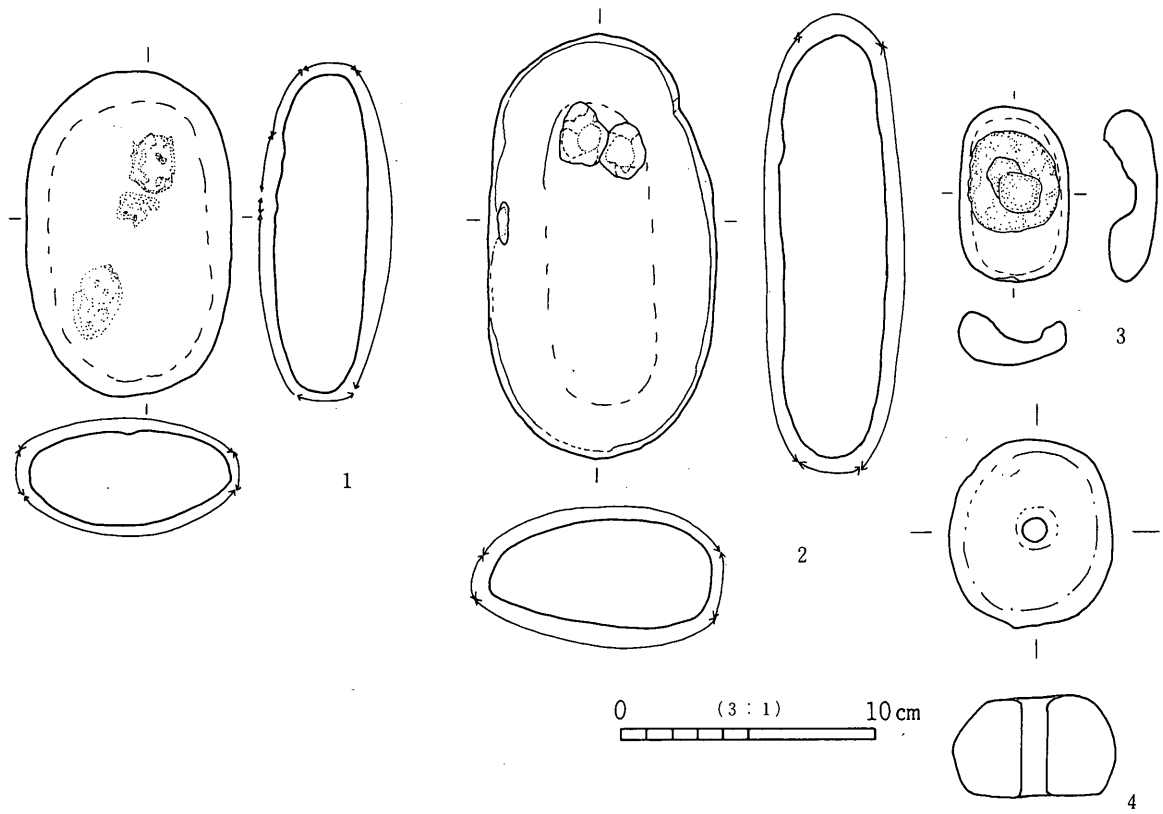
第61图 2号住居址出土遗物实测图(3)



第62图 2号住居址出土遗物实测图(4)



第63图 2号住居址出土遗物实测图(5)



第64图 2号住居址出土遗物实测图(6)

想されたため、遺構覆土についてSB2と同様にフルイがけを行なった。

覆土：黒色土(1)と黒褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：壁高15～20cmを計る。

床面：全体的に締まっている。

柱穴とピット：6基のピットを確認した。

炉：住居のやや北寄りに位置し、10cm程度の掘り込みがあった。焼土はほとんど検出されなかった。しかし、炉の覆土に若干の焼土がみられた。

規模と形態：平面形は長軸約4.5m・短軸約3.5mの楕円形である。

出土遺物と所属時期：縄文時代前期関山式期の住居址に比定される。遺構覆土中及び床面から遺物が検出され(第66～68図)、うち第66図-1～3の土器は床面直上で出土した。1と2は同一個体である。石器は石鏃・石匙・磨石のほか使用痕のある剥片等が出土している。覆土中からは黒曜石のフレイクやチップが多く検出された。なお、微細な石鏃を摘出するために覆土のフルイがけを行なったところ、総重量518g、863点の黒曜石片及びフレイク・チップ(製品を含む)を検出した。SK4との新旧関係はSB3のほうが古い。

(3) 15号住居址 (SB15) (第69図)

位置：E-9～10 Gridにある。

調査の経過：遺構検出作業中にIII層上面にて黒褐色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを残して掘り下げにかかる。黒褐色土の堆積が厚く、約60cm掘り込んだところで、ようやく床面を検出した。床面の精査の過程で完形に近い埋設土器を検出した。

覆土：黒褐色土が2層堆積している。上層(1)は大小の礫や砂を含み、固く締まっていた。下層(2)は炭化物や焼土が混入しており、同様に固く締まっていた。

壁面：南東部分の壁が若干崩壊しているような感じを受けた。その他の部分の壁高は50～60cmを計る。

床面：固く締まっている。

柱穴とピット：ピットを7基検出した。このうち出入口と推定される南部分からは大ピットとその周辺に5基のピットを確認した。

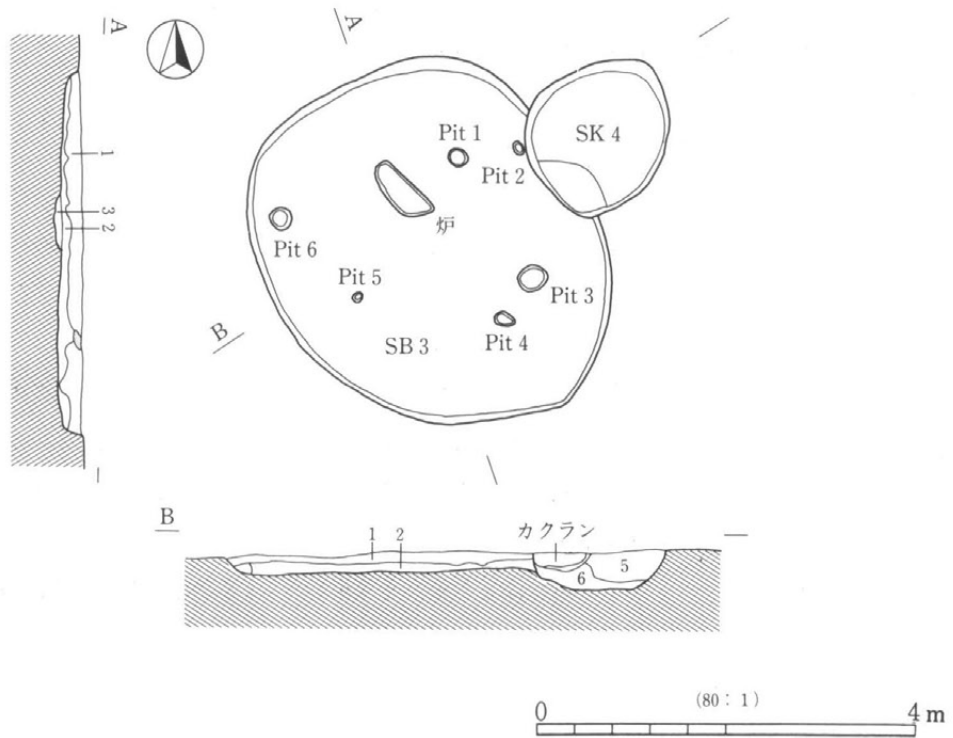
炉：住居址のやや北寄りに位置し、深さ25cm、長径50cmを計る。炉体土器として底部付近を故意に欠失した土器が埋設されていた。焼土はわずかに見られたに過ぎない。

規模と形態：平面形は長軸約5m・短軸約4mの楕円形を呈する。南部分には壁面に段がついており、出入口としての機能を推定できる。また、この部分からピットが検出されたが特記できる遺物は出土していない。

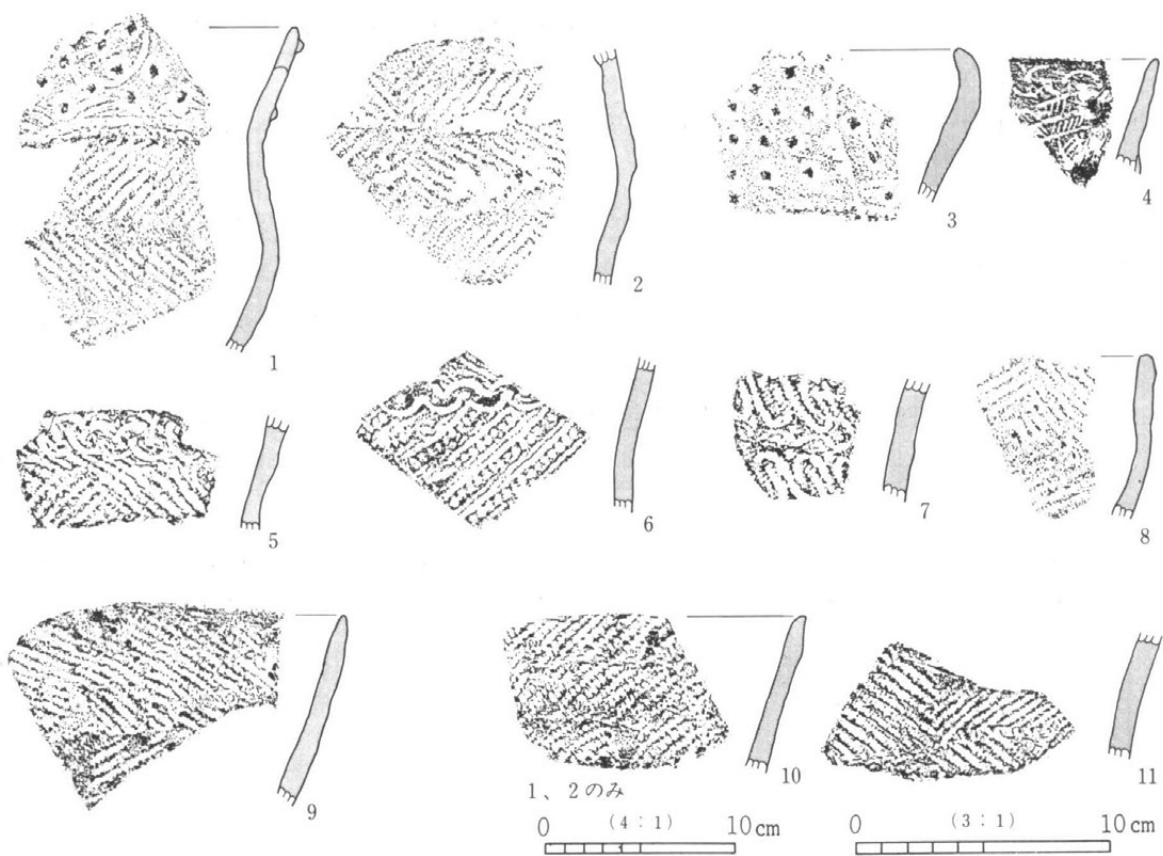
出土遺物と所属時期：縄文時代前期黒浜式期の住居址と推定される。炉体土器が検出されている。底部付近を意識的に欠失し、口縁部付近はやや失われている。床面からの遺物の出土は第70図-1と2があるくらいでほとんどは覆土からの出土である。土器の文様が他の住居址とはかなり違った様相を呈しており、胎土に含まれる繊維はごく微量である。石器は石鏃・石匙・磨石のほか剥片石器等が出土している。第70図-16は炉体土器の中からの出土である。

(4) 17号住居址 (SB17) (第71図)

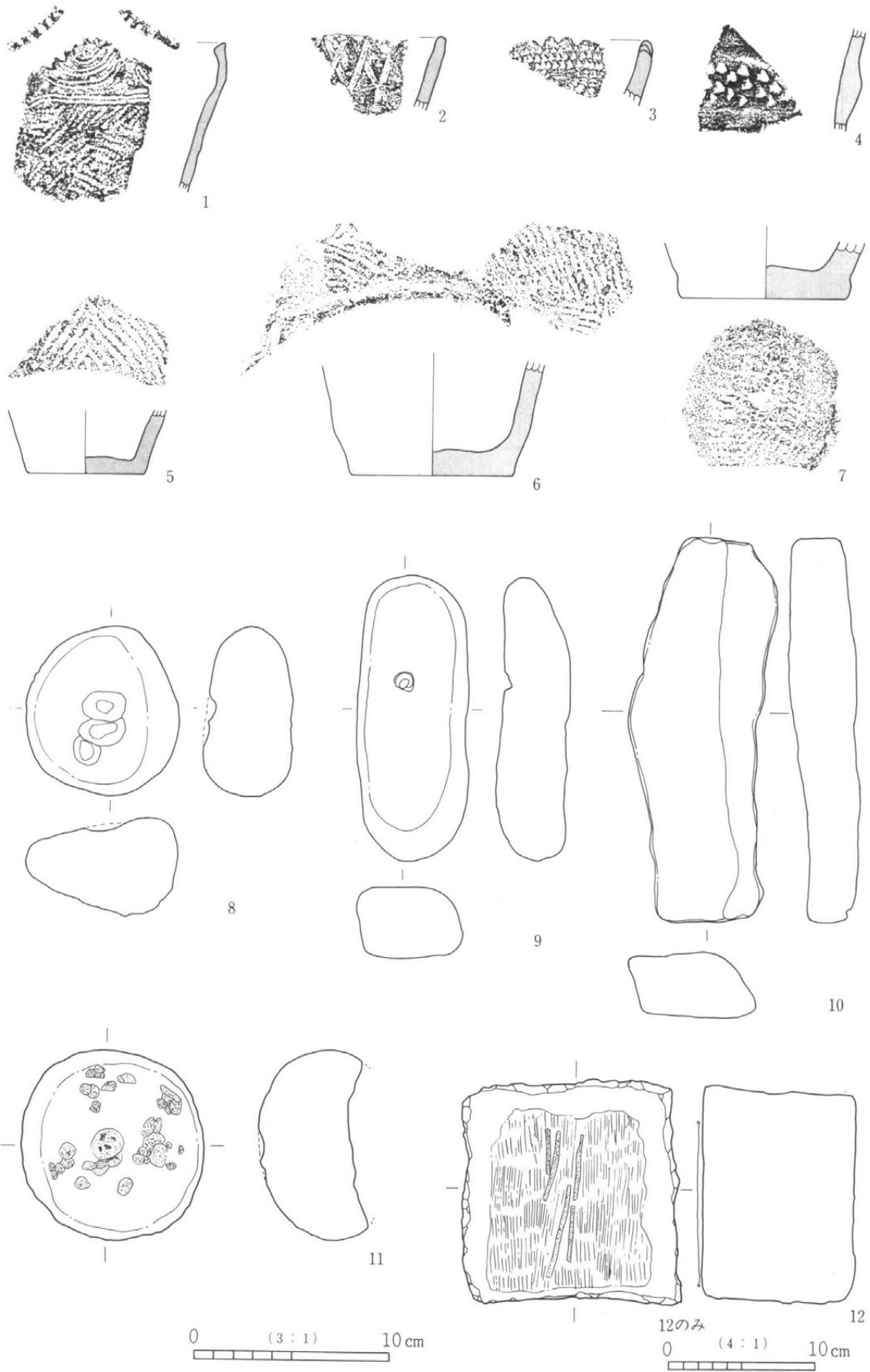
位置：C-8、D-8 Gridにある。一部調査区外に存在する。



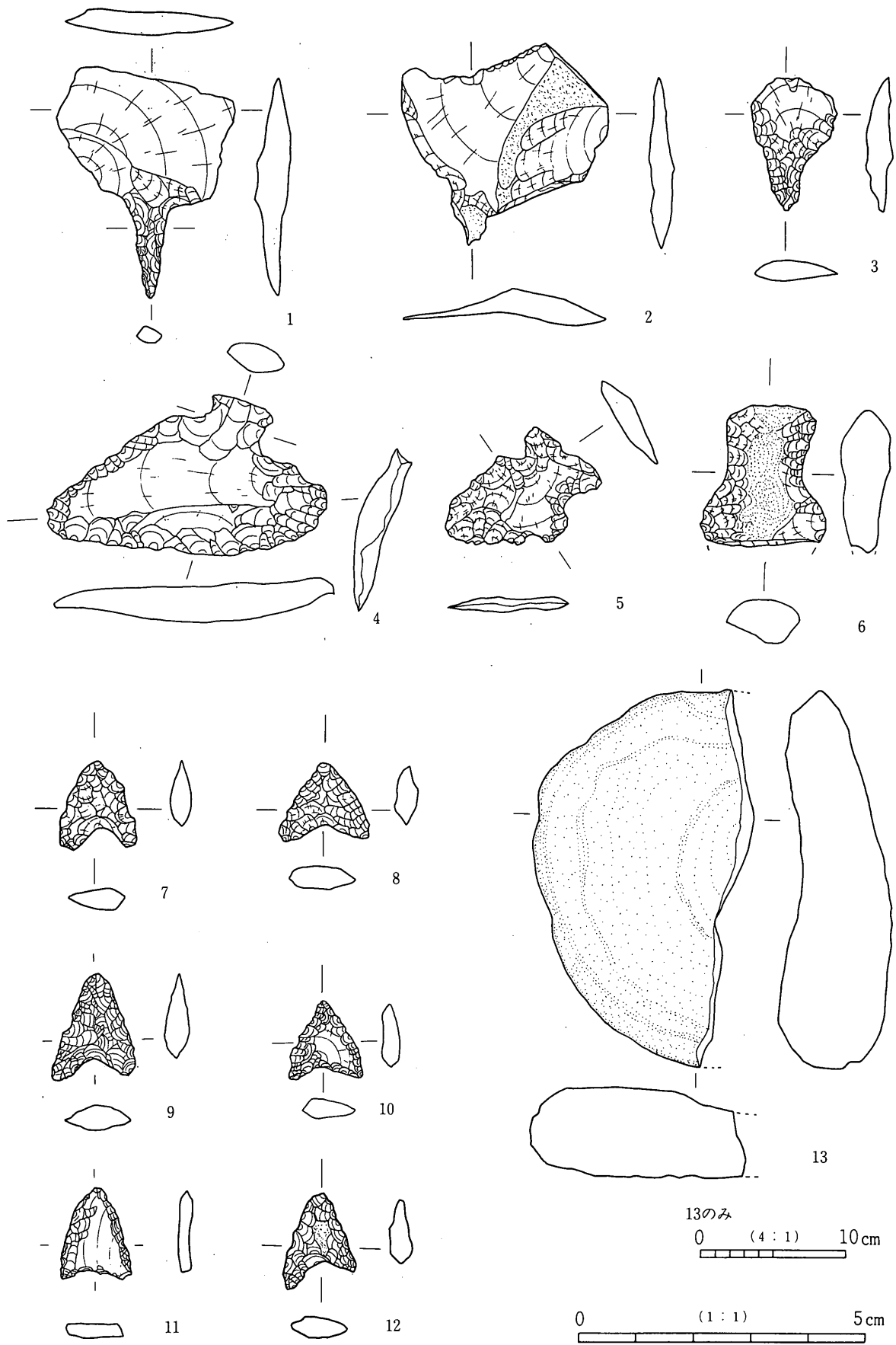
第65図 3号住居址実測図



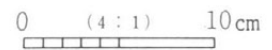
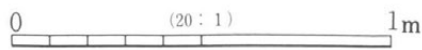
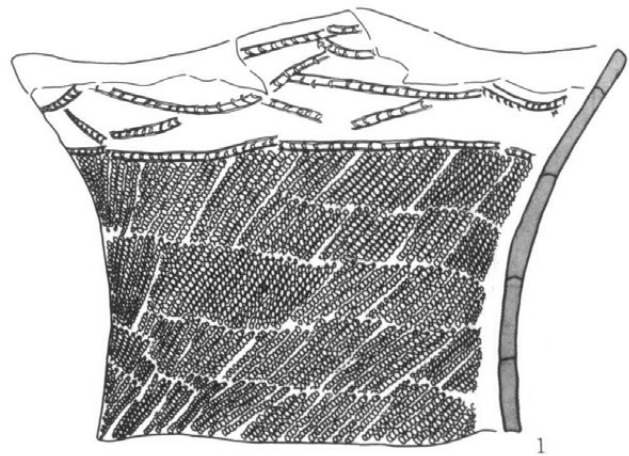
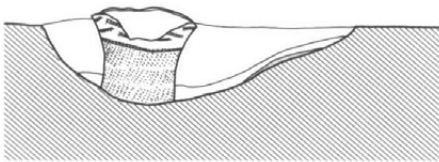
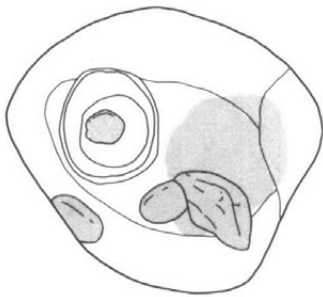
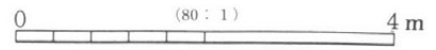
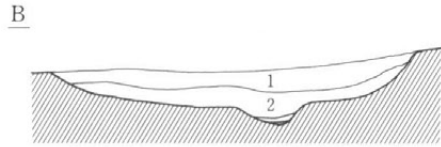
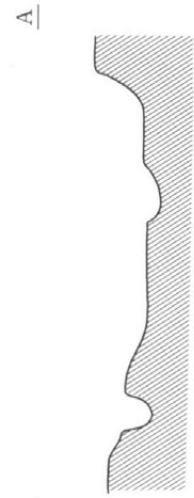
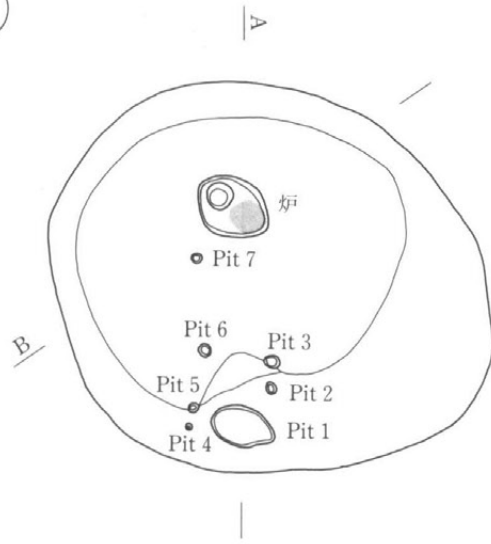
第66図 3号住居址出土遺物実測図(1)



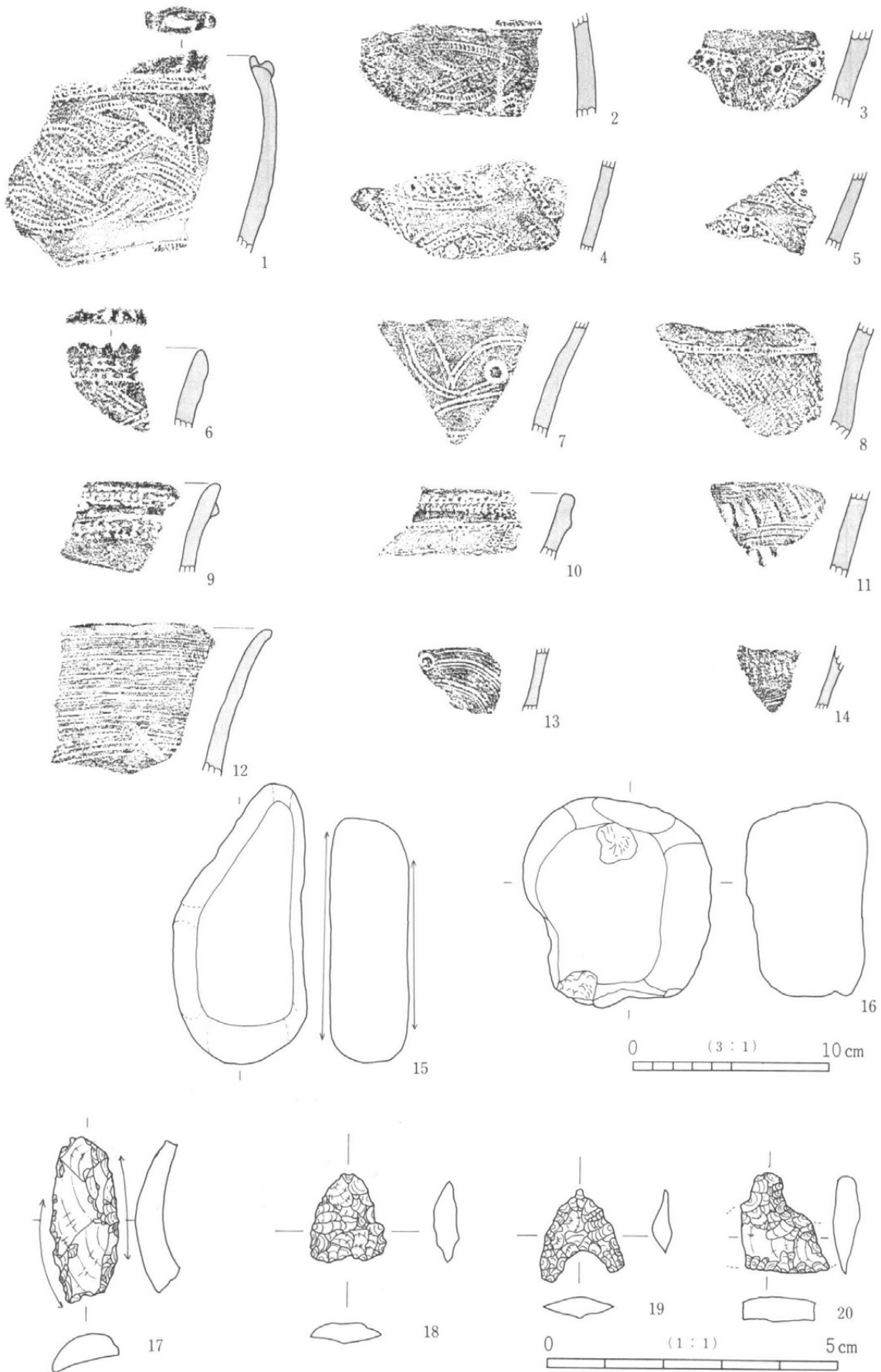
第67図 3号住居址出土遺物実測図(2)



第68図 3号住居址出土遺物実測図(3)



第69図 15号住居址実測図および炉体土器実測図



第70图 15号住居址出土遺物実測図

調査の経過：遺構検出作業中にIII層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、精査したところ、多量の土器片の出土が認められ、床面を検出する段階になって完形土器1個体と土器片の集中が認められた。住居の掘り込み内に数個の礫が混入していたが、住居内集石と認められるほどのものではなかった。しかし、念のため図面に記録した後、礫を取り除き、床面及び付属施設の検出を行なった。床面の確認が遅れ、調査の過程で床面の一部を破壊してしまった。

覆土：黒褐色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：壁高は20～30cmを計る。

床面：全体に締まりがなく、調査時に一部の床面を破壊してしまった。

柱穴とピット：精査したが確認できなかった。

炉：精査したが検出できなかった。

規模と形態：平面形は楕円形を呈するものと推定される。

出土遺物と所属時期：縄文時代前期関山式併行期の住居址と比定される。遺構覆土中及び床面から遺物が検出され、第72図-1、第73図-1、第74図-1の土器は床面直上で出土した。本住居址出土資料は該期の土器組成の一端を知ることのできる良好な資料である。SB2と同様に土器は大きく分けて3種類がみられ、羽状縄文または斜縄文の施文されるもの、関山式土器、無文で器壁の薄いものがみられる。第72図-1は附加条一種の縄文を施文し、口縁部は4単位の波状口縁を呈する。底部は尖底となるようだ。第73図-1は関山式土器のなかでも新しい部分の要素がみられる個体である。これに対して第74図-1は関山式の古い要素のみみられるものであり、このような個体がひとつの遺構のなかで同居していることは興味深い。石器は石鏃・石匙・磨石のほか使用痕のある剥片等が出土している。

(5) 18号住居址 (SB18) (第76図)

位置：D-6～7 Gridにある。

調査の経過：遺構検出作業中にまとまった土器片と磨石の出土をみたため、壁面の確認を試みたが判明せず、床面を追っていき壁面を検出する方法をとった。しかし、既に床面が一部露呈しており、床の欠失している部分があることに気づき、残存している床面の範囲の確認に重点を置くことにした。

覆土：不明。

壁面：確認できず、不明。

床面：締まっている。

柱穴とピット：8基のピットを確認した。

炉：住居のやや北寄りに位置し、掘り込みは10cm程度と浅い。焼土は層になっているのではなく、炉の覆土にわずかに混入している程度であった。

規模と形態：推定される平面形は長軸約5m・短軸約3mの楕円形である。

出土遺物と所属時期：縄文時代前期初頭の住居址に比定される。床面直上遺物を見ると羽状縄文や斜縄文のものが多くみられる。石器は石鏃・磨石のほか石皿等が出土している。

(6) 19号住居址 (SB19) (第79図)

位置：E-7～8 Gridにある。

調査の経過：遺構検出作業中に径20cm程の礫の集中部を検出、掘り込みが確認できなかったため当初は集

石遺構として認識してしまった。集石の検出過程において、縄文前期土器1個体を検出、床面及び壁の一部を確認し、住居址として認識した。

覆土：黒褐色土と暗褐色土の堆積がみられる。

壁面：一部を確認できたのみである。

床面：固く締まっている。

柱穴とピット：3基を確認した。

炉：住居の中央に位置し、掘り込みは約10cmほどであった。炉を囲う石が1基残存しており、炉の覆土中に焼土の混入がみられた。

規模と形態：推定される平面形は長軸約4.5m・短軸約3.5mの楕円形である。

出土遺物と所属時期：縄文時代前期初頭の住居址に比定される。床面直上で羽状縄文の深鉢が1個体出土した。底部は失われているが、口縁部がやや厚くなる。石器は石鏃・磨石のほか石皿等が出土している。

(7) 20号住居址 (SB20) (第82図)

位置：F-9~10、G-9 Gridにある。

調査の経過：遺構検出作業中にIII層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、精査したところ、土器片と径20cm前後の礫の集中が認められた。

覆土：黒褐色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：壁高は10~15cmを保つ。

床面：全体に締まっている。

柱穴とピット：ピットを2基確認した。

炉：住居址の中央に位置し、掘り込みは10cm程度である。炉を囲う石が1基残存しており、炉の覆土中に焼土が少量認められた。

規模と形態：平面形は隅丸長方形となると推定される。南側部分は攪乱により失われている。

出土遺物と所属時期：遺構内から多種多様な遺物が出土した(第83~84図)。第83図-1のようなものや、波状口縁を呈する土器(3~6、25)、花積下層式土器(16・17同一個体)、花積下層III式土器の器形に類似する口縁部破片も出土している(18~21)。石器は石鏃や磨石のほか剥片石器、有溝砥石、独鈷石等が出土している。また、床面直上から磨製石斧と瑛状耳飾りが1点出土した(第84図)。

土 坑

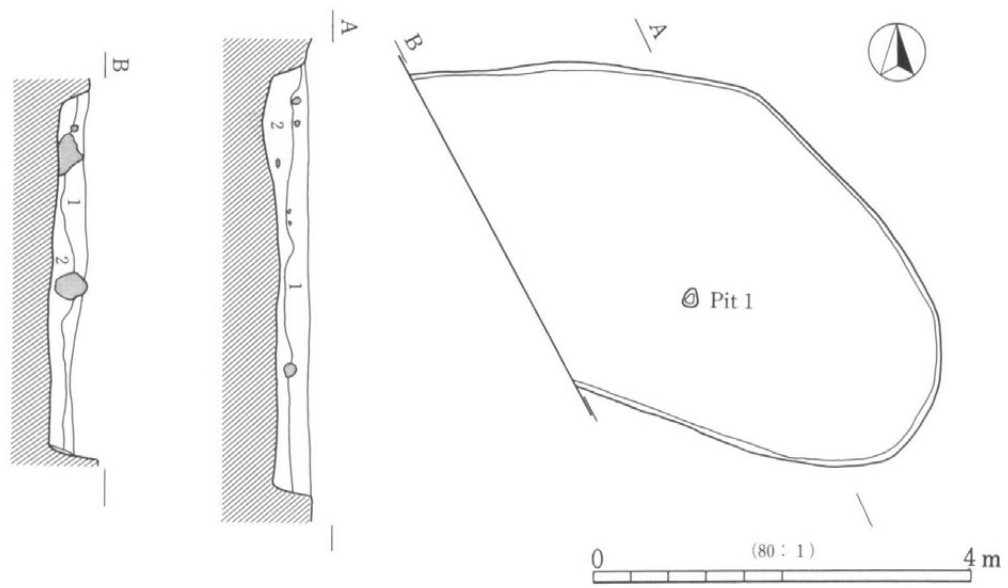
土坑は総数26基確認したが、中でもSK7~12は規模や形態、土層の堆積の状況が酷似し、また、弧を描いて並んでおり、一連の遺構として把握できる。これらの覆土中の遺物を見ると時期的にも縄文前期の遺物のみが含まれており、その考え方を補強する。よってこれらを土坑列という名で呼称したい。

なお、土坑のなかには時期決定ができなかったものもあり、それらについては記述を割愛させていただいた。

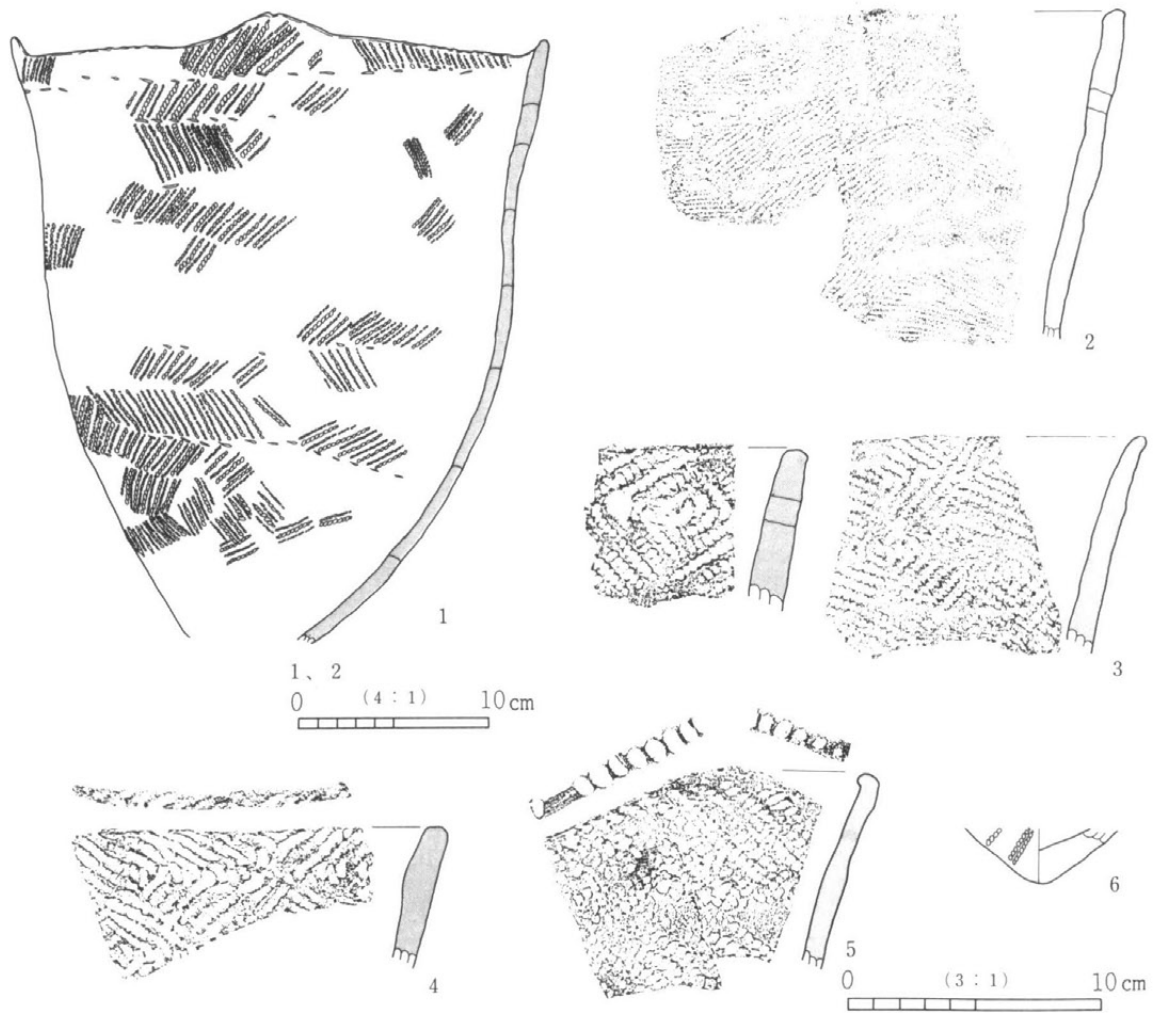
(1) 4号土坑 (SK4) (第65図)

位置：E-5 Gridにある。SB3(縄文前期)と重複する。

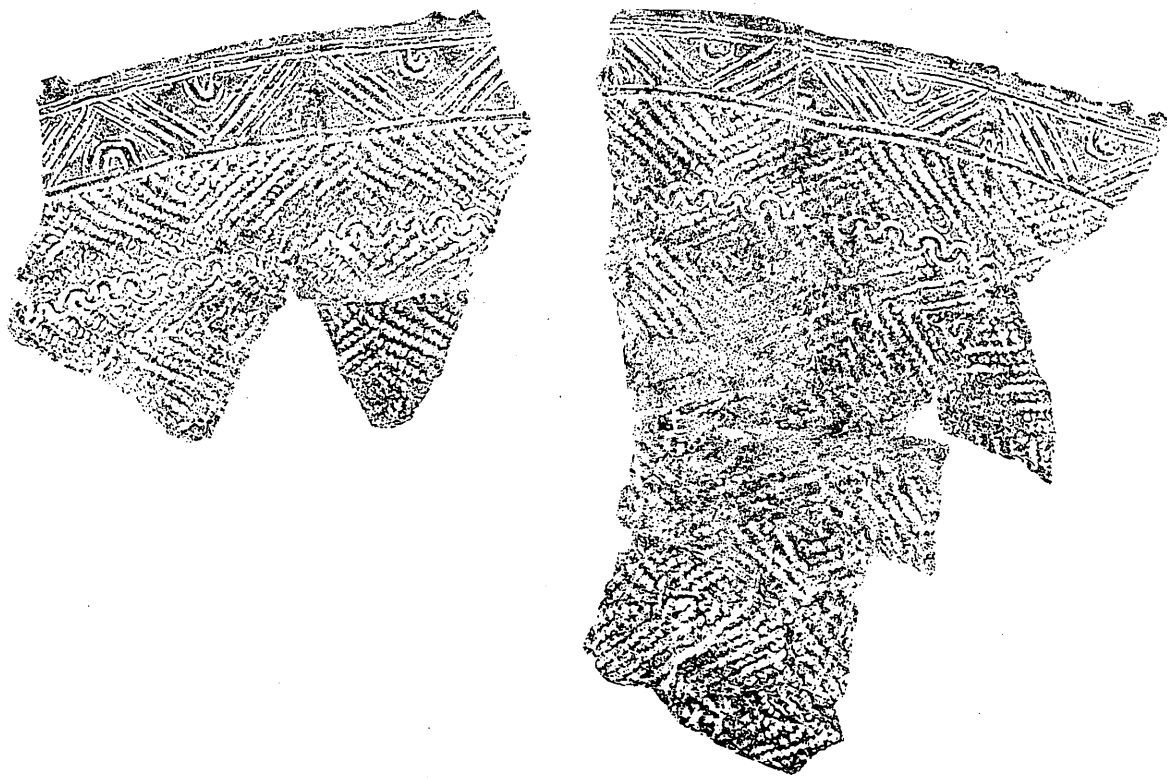
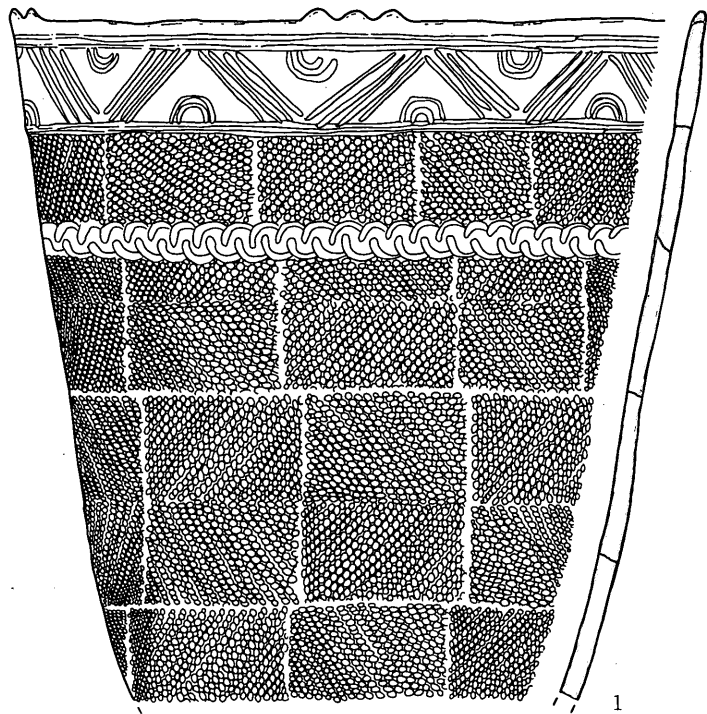
調査の経過：SB3の床面調査中に発見される。ちょうどセクションベルトが設定してあったので、そのま



第71図 17号住居址実測図

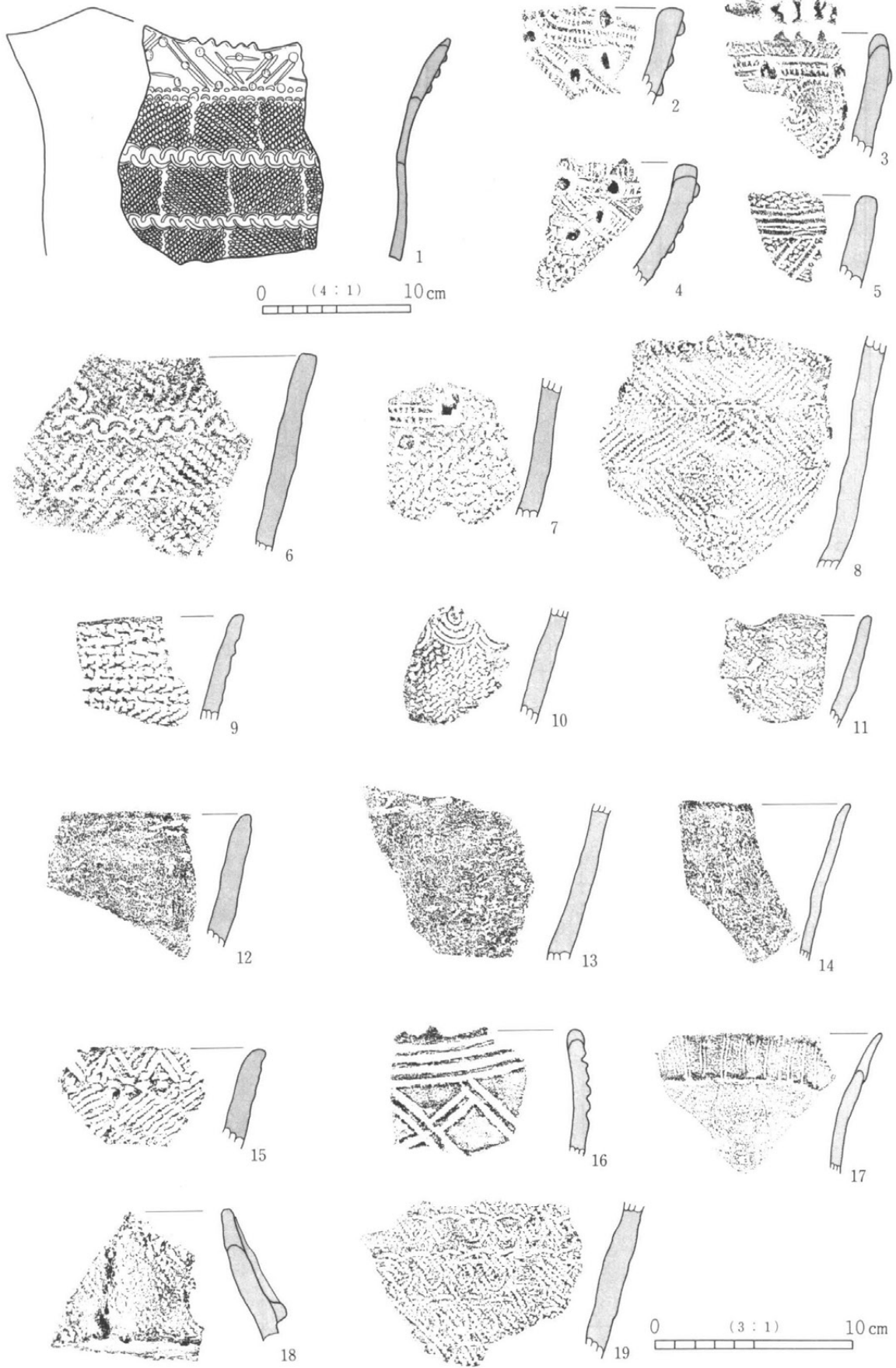


第72図 17号住居址実測図および出土遺物実測図(1)

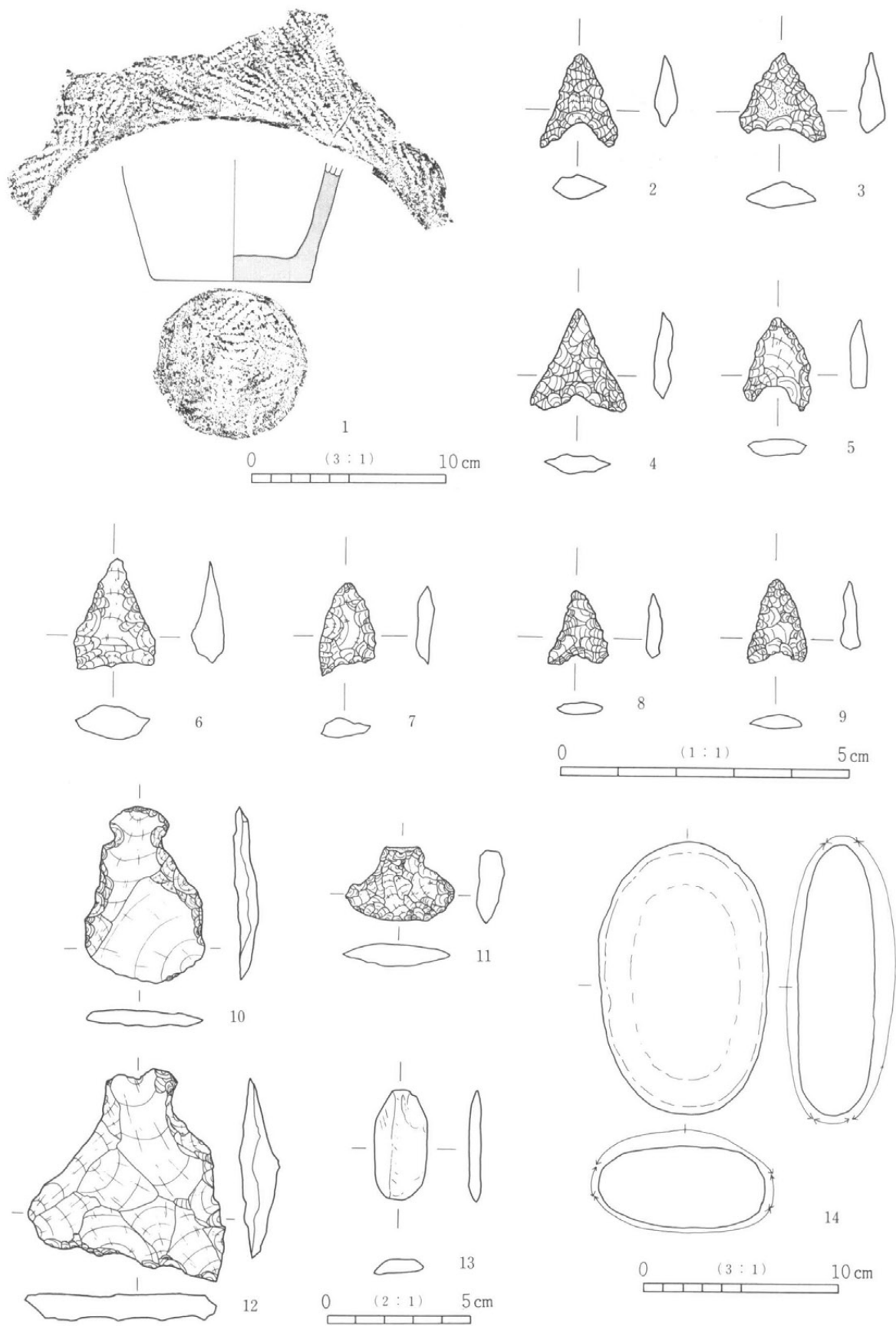


0 (3 : 1) 10 cm

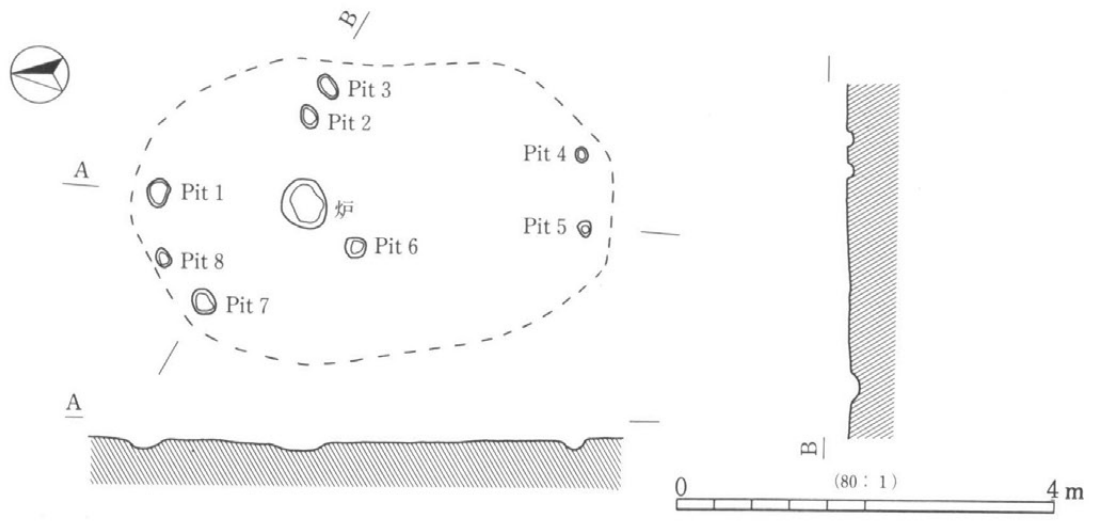
第73图 17号住居址出土遗物实测图(2)



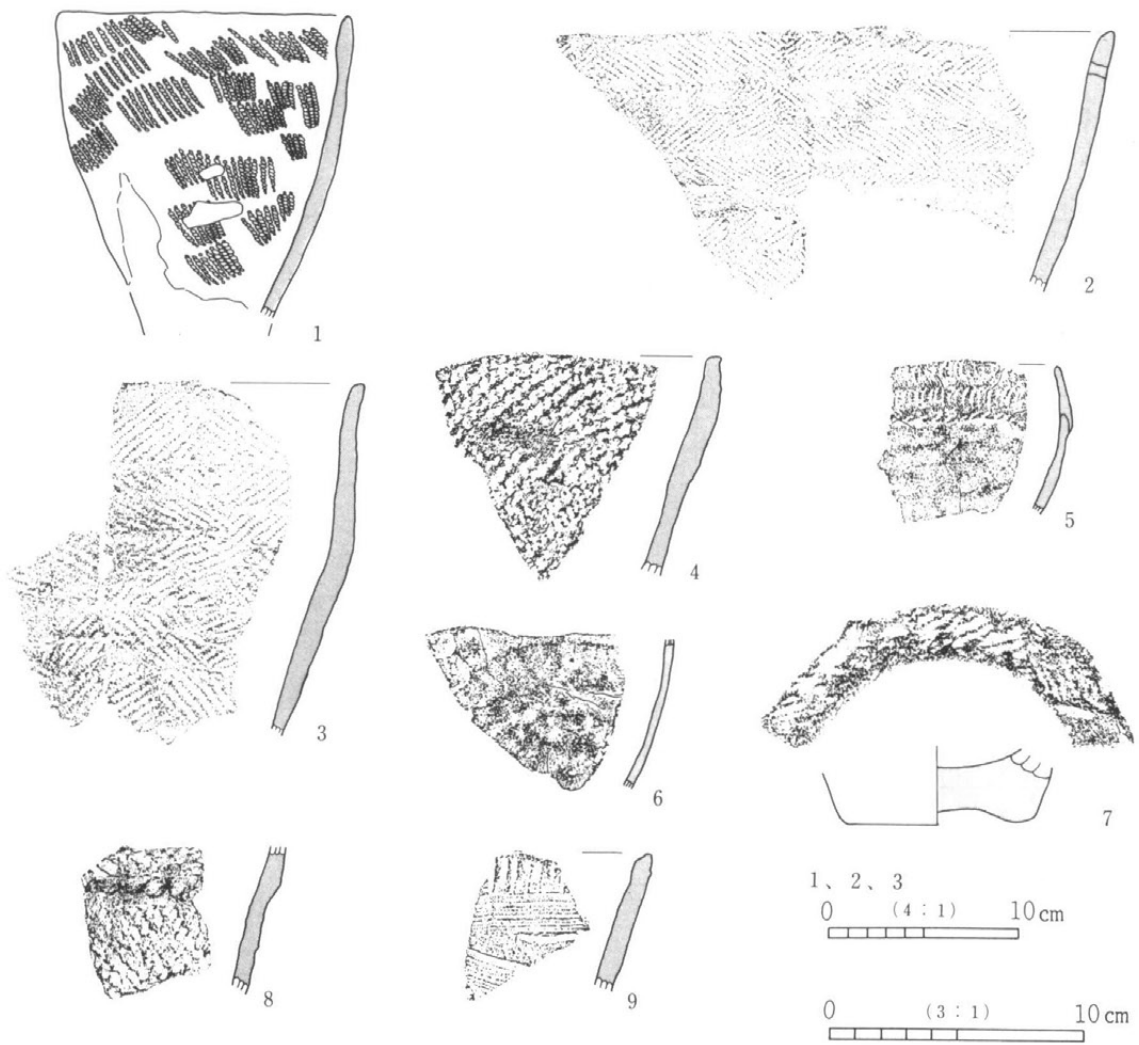
第74图 17号住居址出土遗物实测图(3)



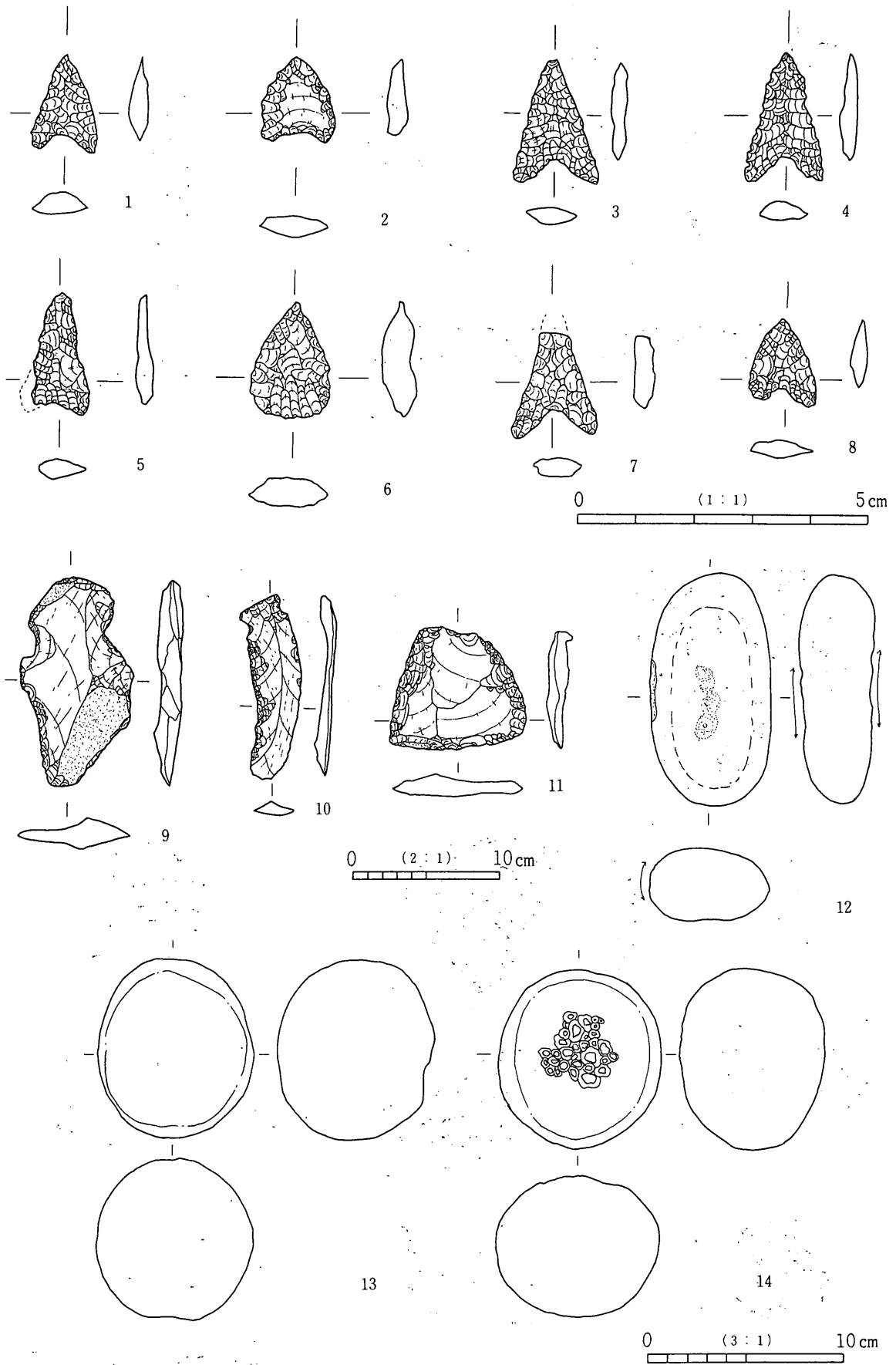
第75图 17号住居址出土遗物实测图(4)



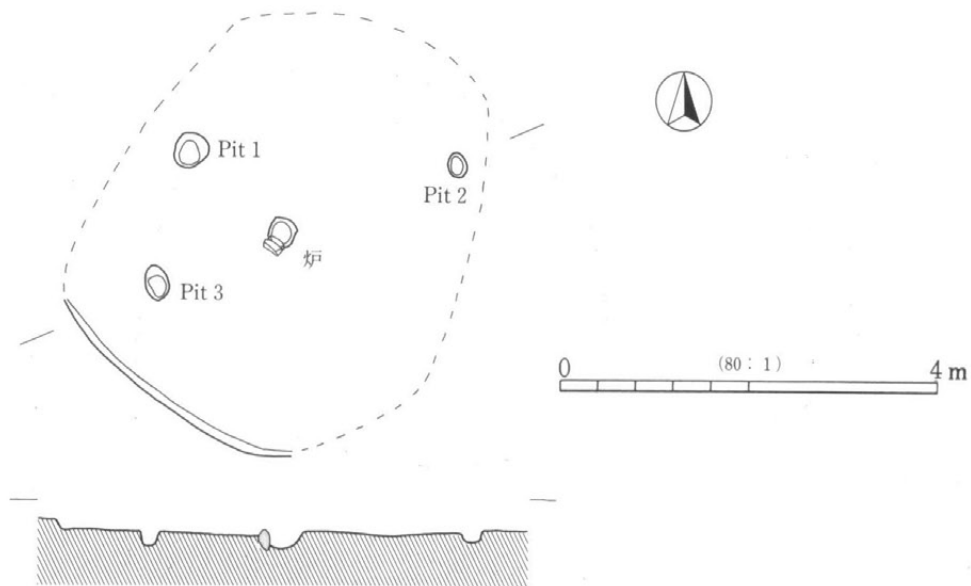
第76图 18号住居址实测图



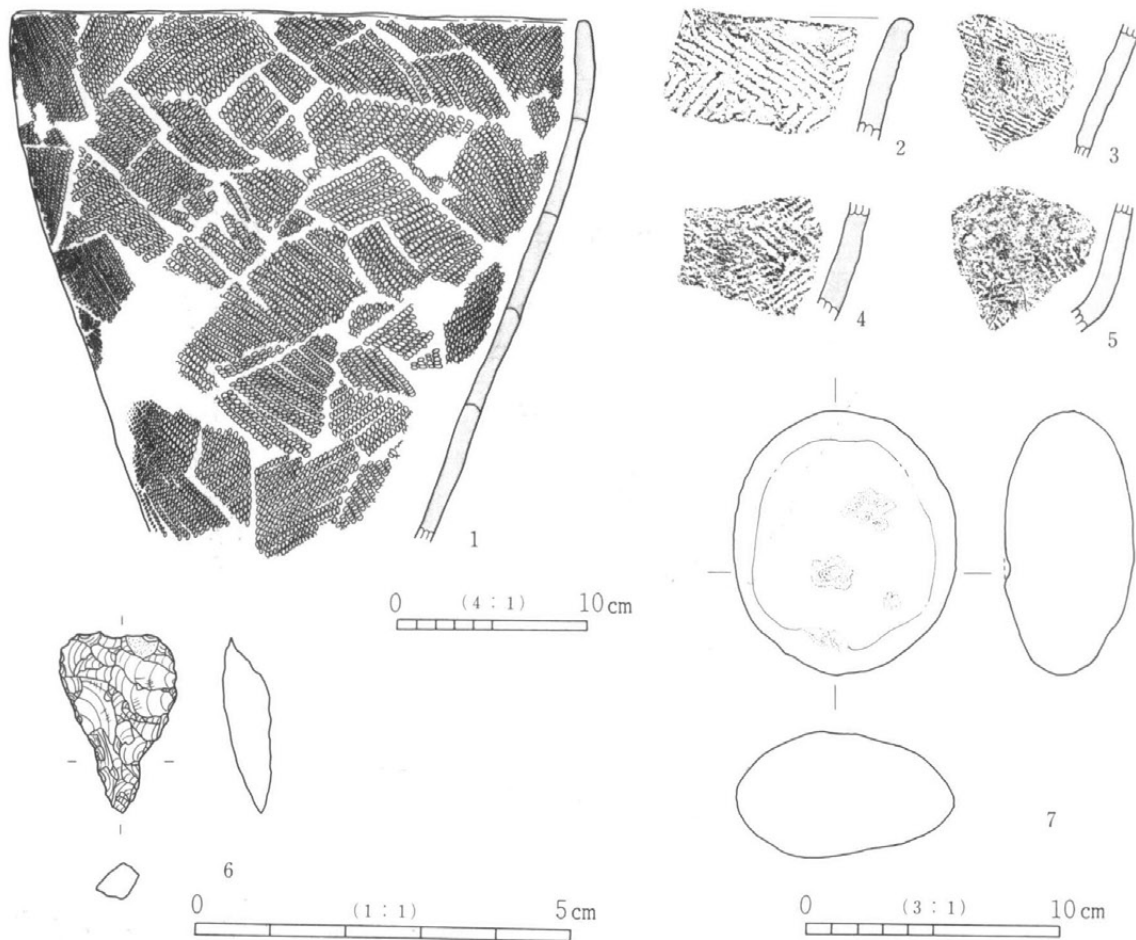
第77图 18号住居址出土遺物实测图(1)



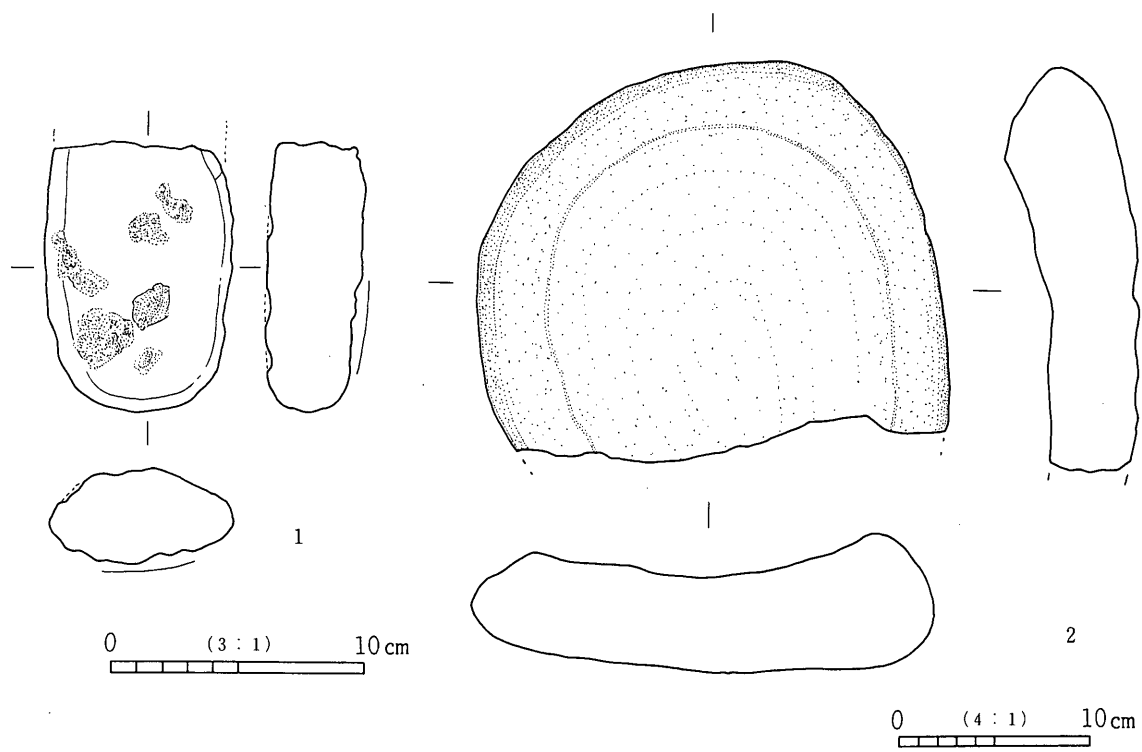
第78图 18号住居址出土遺物実測図(2).



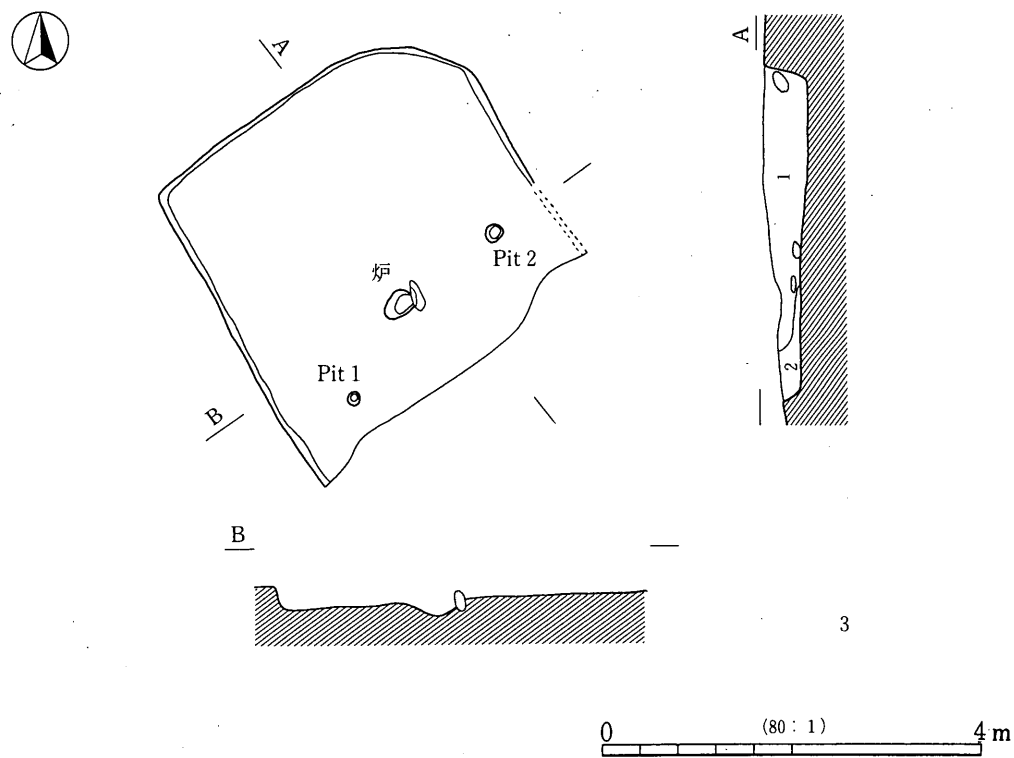
第79图 19号住居址实测图



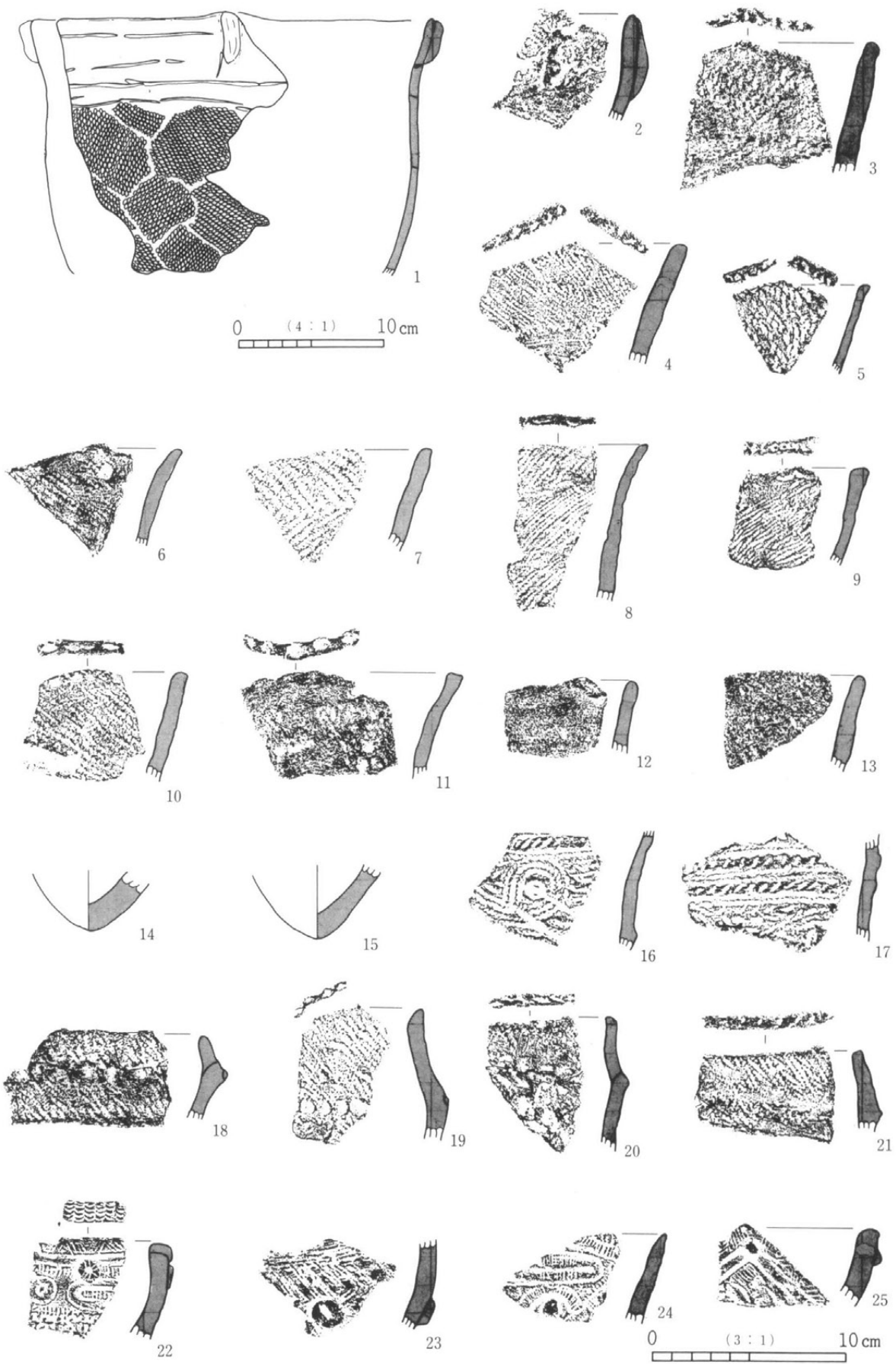
第80图 19号住居址出土遗物实测图(1)



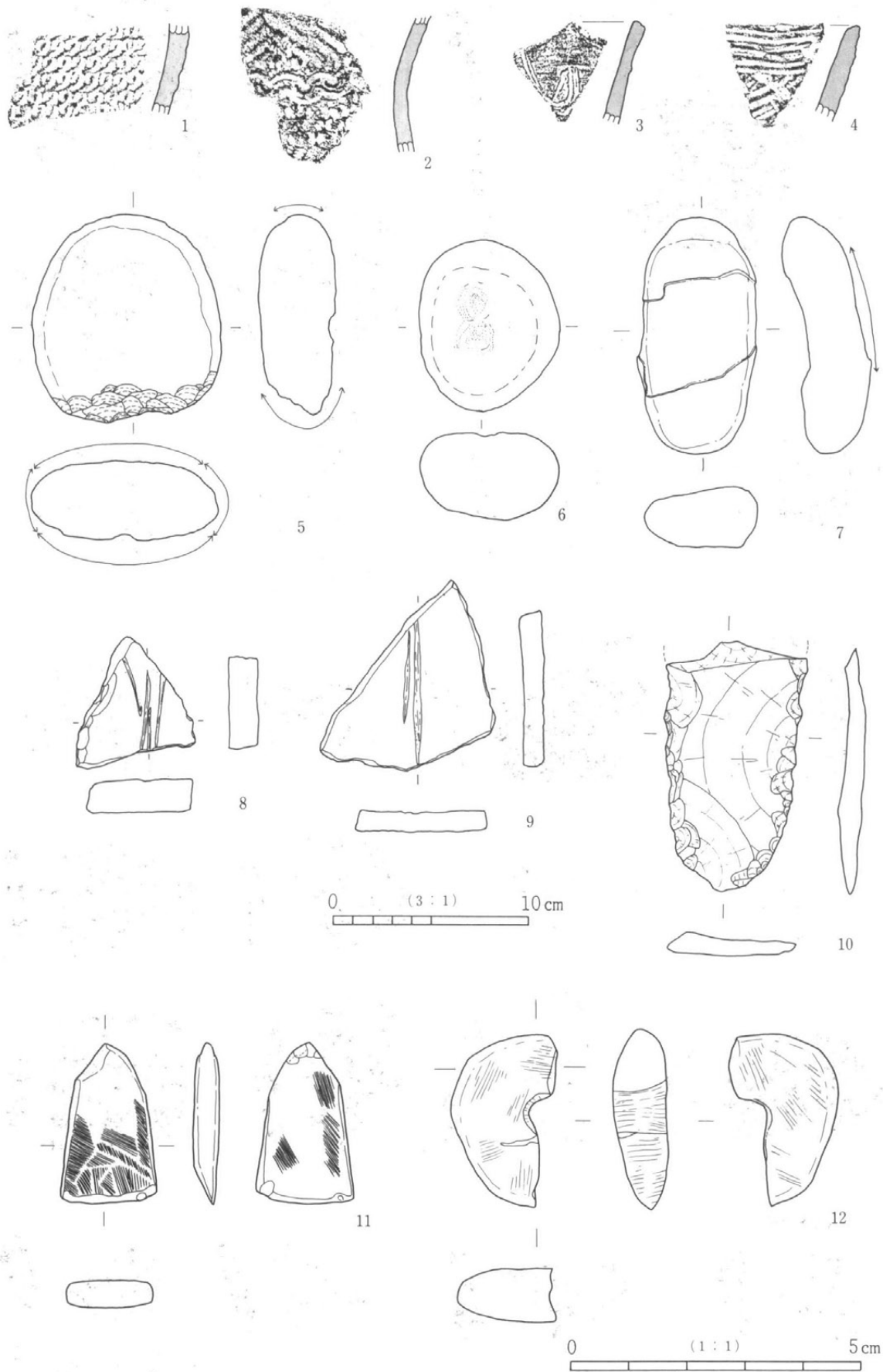
第81图 19号住居址出土遺物実測図(2)



第82图 20号住居址実測図



第83图 20号住居址出土遺物実測図(1)



第84图 20号住居址出土遺物实测图(2)

ま掘り進めることとした。

覆土：黒褐色土(3)と暗褐色土(4)の堆積がみられる。

規模と形態：直径1.5m程度の円形を呈する。

出土遺物と所属時期：底部付近から縄文前期の土器片の出土がみられた(第86図-1~4)。また、底部から平石が出土した。時期は縄文時代前期に比定したい。SB3との新旧関係はSK4のほうが新しい。

(2) 7号土坑 (SK7) (第85図)

位置：C-7、D-7 Gridにある。SB7(平安)と重複する。

調査の経過：SB7の床面検出中に発見される。

覆土：上から黒褐色土層(1)、暗褐色土層(2)、黒褐色土層(3)の順で堆積している。暗褐色土層上面にロームブロックを含む層(4~6)が認められた。

規模と形態：直径1.5m程度の円形を呈する。III層上面からの深さは約1mを計る。

出土遺物と所属時期：出土した遺物(第86図-5~7・9・14・15)から縄文時代前期に位置づけられる。

(3) 8号土坑 (SK8) (第85図)

位置：D-7 Gridにある。

調査の経過：III層上面で黒褐色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを残して半裁した。

覆土：上から黒褐色土層(1)、暗褐色土層(2)、黒褐色土層(3)の順で堆積している。土坑側面にロームブロックを含む層(4)が認められた。

規模と形態：直径1.2m程度の円形を呈する。III層上面からの深さは約50cmを計る。

出土遺物と所属時期：出土した遺物が少なく(第86図-8)、時期決定には慎重にならざるを得ないが、縄文時代前期に位置づけておく。

(4) 9号土坑 (SK9) (第85図)

位置：D-7 Gridにある。

調査の経過：III層上面で黒褐色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを残して半裁した。

覆土：上から黒褐色土層(1)、暗褐色土層(2)、黒褐色土層(3)の順で堆積している。土坑側面にロームブロックを含む層(4)が認められた。

規模と形態：直径1.2m程度の円形を呈する。III層上面からの深さは約60cmを計る。

出土遺物と所属時期：出土した遺物が少なく(第86図-10)、時期決定には慎重にならざるを得ないが、縄文時代前期に位置づけておく。

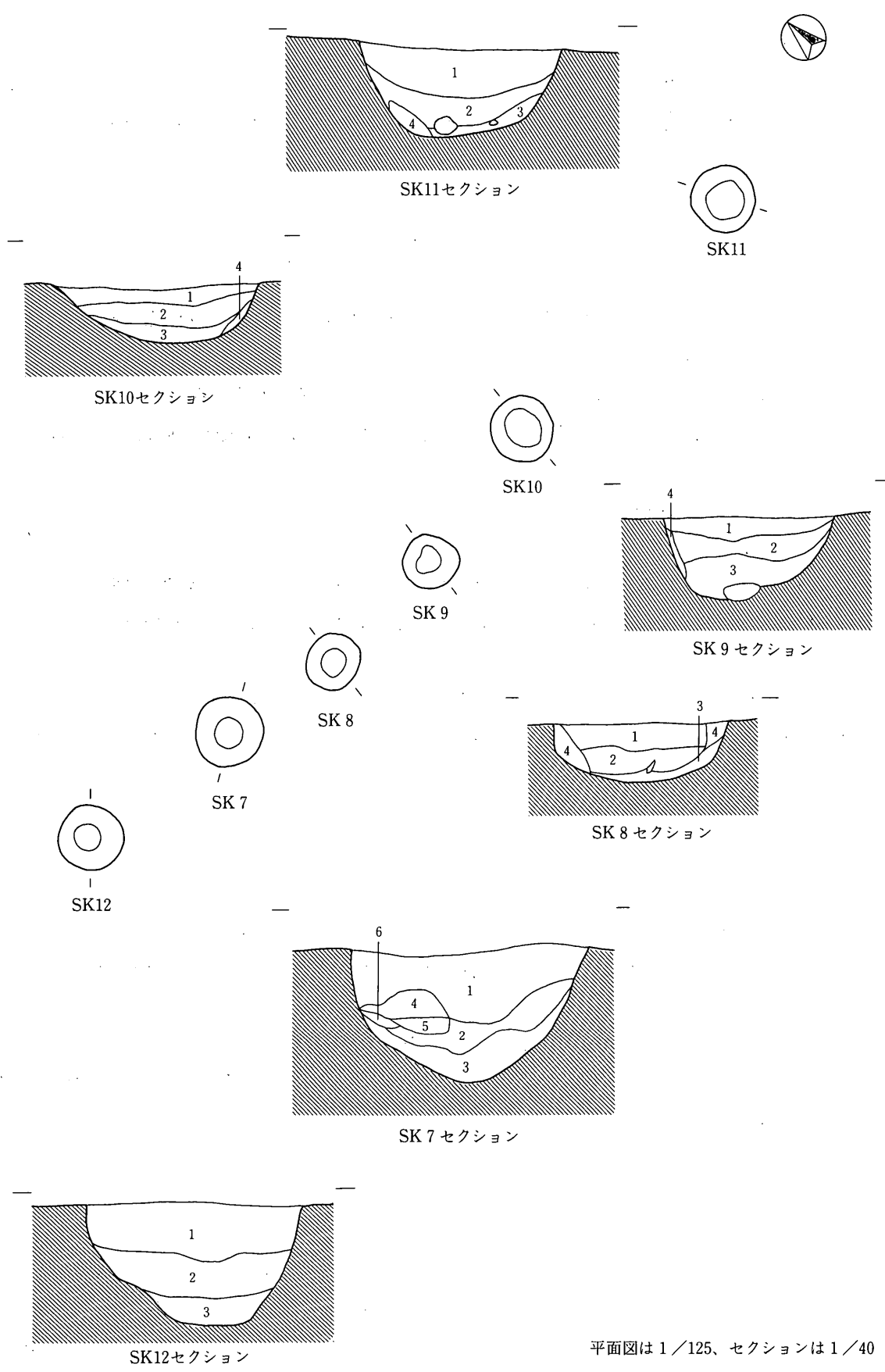
(5) 10号土坑 (SK10) (第85図)

位置：E-7~8 Gridにある。

調査の経過：III層上面で黒褐色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを残して半裁した。

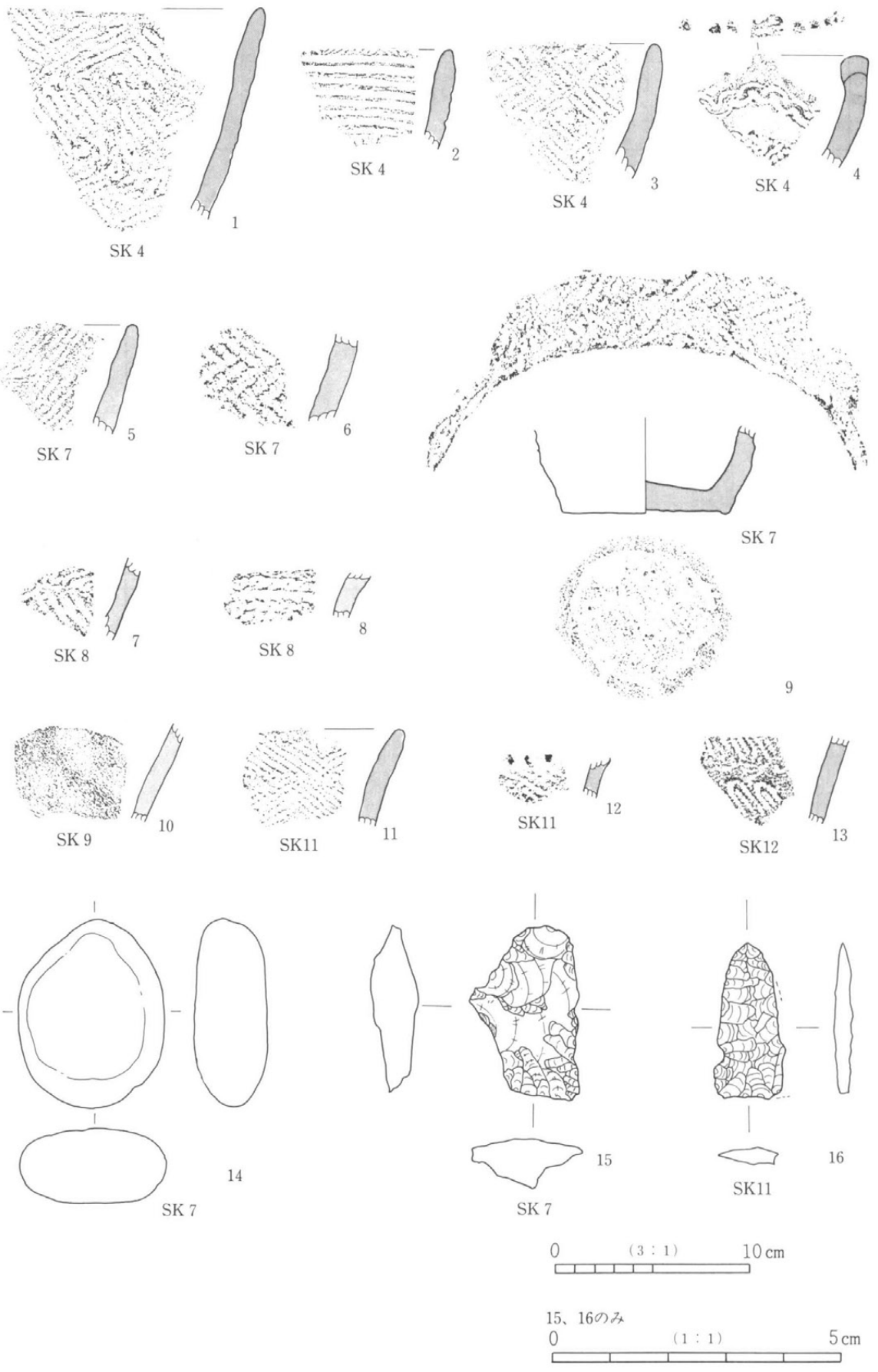
覆土：上から黒褐色土層(1)、暗褐色土層(2)、黒褐色土層(3)の順で堆積している。土坑側面にロームブロックを含む層(4)が認められた。

規模と形態：直径1.5m程度の円形を呈する。III層上面からの深さは約60cmを計る。



平面図は1/125、セクションは1/40

第85図 土坑列 (SK7~SK12) 実測図



第86図 縄文時代の土坑出土遺物実測図

出土遺物と所属時期：出土した遺物が少なく、時期決定には慎重にならざるを得ないが、縄文時代前期に位置づけておく。

(6) 11号土坑 (SK11) (第85図)

位置：F-8 Gridにある。

調査の経過：III層上面で黒褐色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを残して半裁した。

覆土：上から黒褐色土層(1)、暗褐色土層(2)、黒褐色土層(3)の順で堆積している。土坑側面にロームブロックを含む層(4)が認められた。

規模と形態：直径1.5m程度の円形を呈する。III層上面からの深さは約80cmを計る。

出土遺物と所属時期：出土した遺物が少なく(第86図-11・12・16)、時期決定には慎重にならざるを得ないが、縄文時代前期に位置づけられる。

(7) 12号土坑 (SK12) (第85図)

位置：C-7 Gridにある。

調査の経過：SB21の床面検出中に発見された。セクションベルトを残して半裁した。当初はSB21の貯蔵穴ではないかと考えたが、平安期の遺物がみられないこと、また、一連の土坑列と規模、土層の堆積の仕方が似ていることから、貯蔵穴ではないと判断した。

覆土：上から黒褐色土層(1)、暗褐色土層(2)、黒褐色土層(3)の順で堆積している。

規模と形態：直径1.3m程度の円形を呈する。III層上面からの深さは約1mを計る。

出土遺物と所属時期：出土した遺物が少なく(第86図-13)、時期決定には慎重にならざるを得ないが、縄文時代前期に位置づけられる。

2 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は住居址が3基確認されたのみである。

(1) 1号住居址 (SB1) (第87図)

位置：B-1~2、C-1~2 Gridにある。他の遺構との重複はない。

調査の経過：重機による表土剥ぎ作業中に第88図-8の短頸壺と竈らしい石組を確認していたため、遺構の検出は比較的容易に行なうことができた。住居址の本来の掘り込みはII層中であると考えられるが、遺構覆土とII層が酷似しているため、遺構の検出はIII層上面にて行なっている。セクションベルトを残して床面まで掘り下げた後、ベルトの除去及びピットの検出を行なった。

覆土：黒褐色土(1)と褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：20~30cmの壁高を保つ。

床面：全体に平坦で、ローム粒を含む暗褐色土を貼床し、堅緻面を作っている。

柱穴とピット：主柱穴4基を確認した。他に1基のピットを検出した。

竈：北壁中央に付設されている。構築材であろう立石と粘土を確認した。焼土は約10cmの層厚があった。

規模と形態：平面形は一辺4.5mの隅丸方形である。周溝は確認できなかった。

出土遺物と所属時期：竈の中及び周辺から坏等の出土をみた(第88・89図)。坏は胴部に陵をもち、内面は

丁寧なヘラミガキが施される。また、覆土内から須恵器の礎が出土している。また、同じく覆土中からであるが、メノウ製の垂飾状の石製品が出土した。一部にタール状の付着物が認められる。覆土中からの出土であり、縄文時代の遺物が混入した可能性もあるため、時期決定には慎重を要する。担当者浅学のため時期決定が出来なかった。そのため、SB1出土遺物としてこの項で紹介する。

(2) 4号住居址 (SB4) (第90図)

位置：E-6~7、F-6~7 Gridにある。他の遺構との重複はない。

調査の経過：遺構検出作業中に完形の甕の口縁部を確認したため、周辺を精査したところ竈の石組みを検出したため、より広範囲に面的調査を行なった。III層上面になって、遺構の平面プランがつかめたため、セクションベルトを残して、遺構の掘り下げへと移った。床面検出過程で多量の完形土器が出土し、また、大型の貯蔵穴と思われるピットがみつかり、完掘までには更なる時間と労力がかかることが予想されたため、盗難防止のため、遺物を図面に落として取り上げた。床面検出後、貯蔵穴と思われるピットの調査にかかったところ、ここからも数個体の完形土器が出土した。

覆土：黒褐色土(1)と褐色土(2)の堆積がみられる。完形土器が多かったため、焼失住居の可能性を考えたが、炭化材や焼土はみられなかった。

壁面：壁高は10~15cmを計る。

床面：ローム粒を含む暗褐色土を貼床し、堅緻面を作っている。南東部分は堅緻面がみられず、調査の過程で若干掘りすぎてしまい、自然流路の礫の堆積が現れてしまったところがある。

柱穴とピット：支柱穴4基を確認した。他に貯蔵穴と思われる長軸1.5m程のピットを確認した。

竈：東壁中央に付設されている。構築材である石が良好に残っていたが、粘土は少量残っていたのみであった。壁の外側にも石組みが伸びており、おそらく煙道も石を組んで作っていたものと推定される。煙道の長さに若干の差があるものの、このような竈の作り方は神川の対岸にある境田遺跡の古墳時代後期鬼高式期の住居址からも検出されており、当地域では該期に特徴的なものであるらしい。焼土は約10cmの層厚があった。

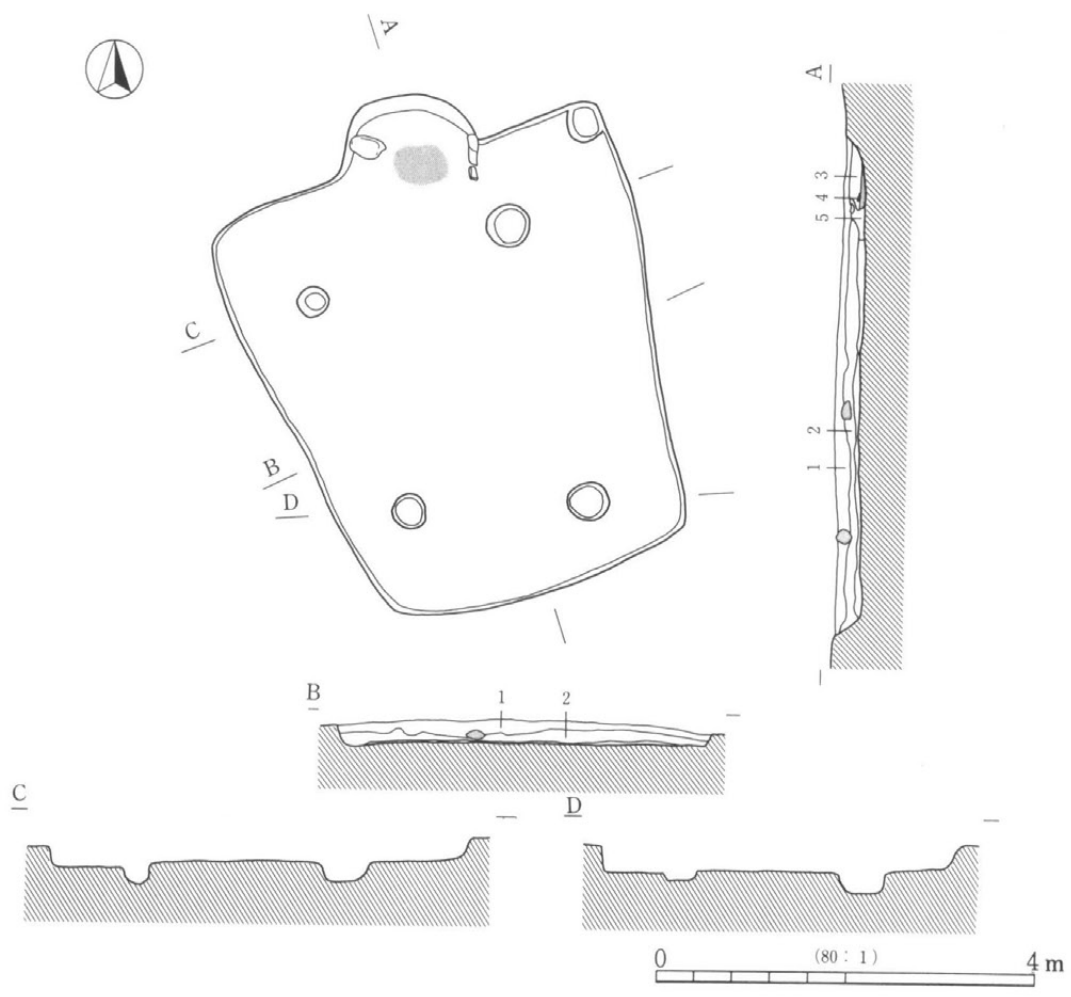
規模と形態：大型の住居址で一辺6.5mの隅丸方形を呈する。周溝は確認できなかった。

出土遺物と所属時期：この住居址からは完形品を含めて22個体もの図上復元可能な遺物が出土した。また、柄の部分に木質の残る鉄製刀子も出土している。土器群の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と思われる。実に10個体もの甕が出土し、出土地点とそれぞれに形が異なることから用途が類推出来る資料として注目される。また、甑にも2形式がみられ、一括資料としてとても興味深いものであろう。

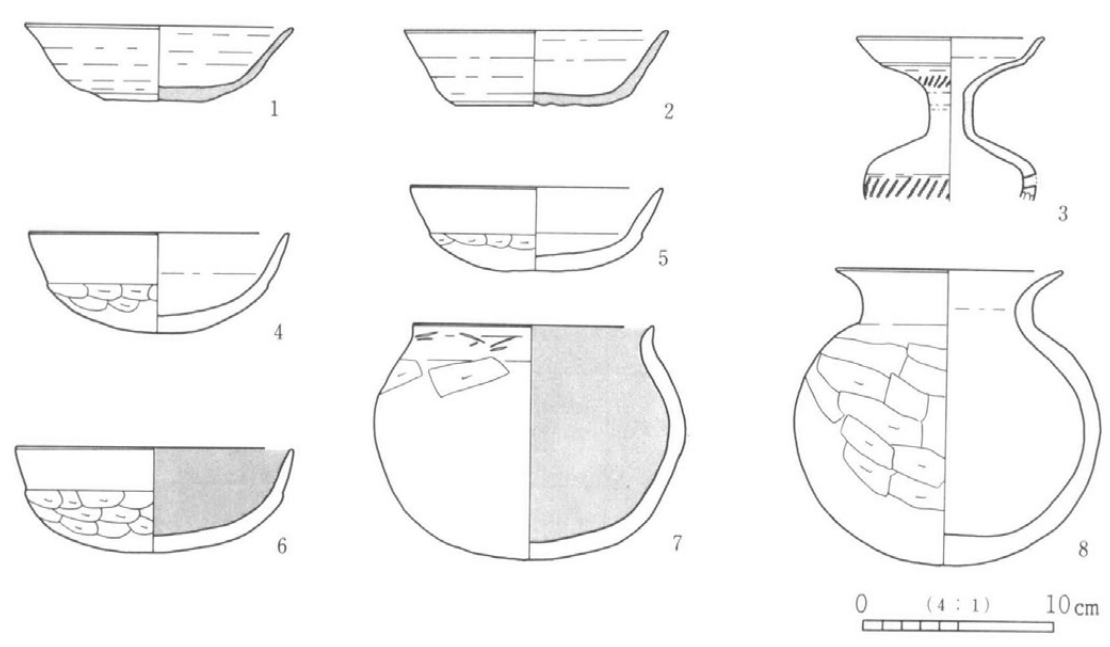
(3) 6a号住居址 (SB6a) (第95図)

位置：C-6、D-6 Gridにある。SB6b(平安)と重複する。

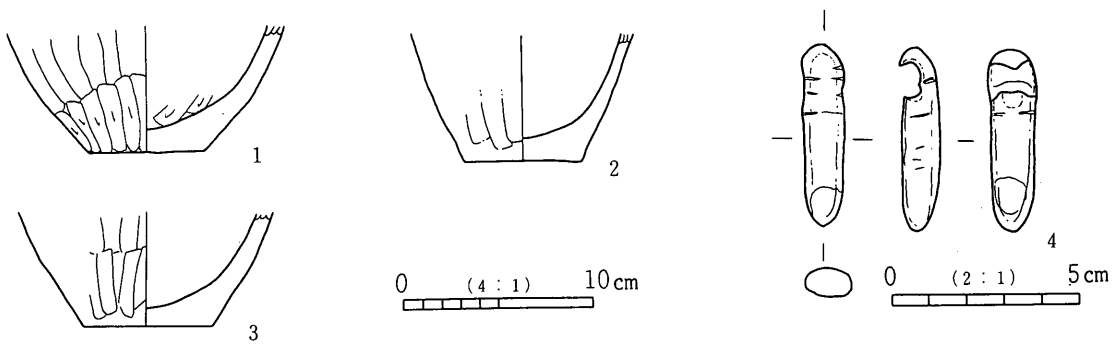
調査の経過：III層上面にて竈の上面及び黒褐色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを残して、掘り下げにかかる。掘り下げが進むにつれて、遺物が出土しはじめた。底部に回転糸切り痕を残す平安時代の遺物がまず顔を出した。続いて竈付近から(古墳時代後期の)甕などが出土するが、平面プランが曖昧なまま掘り下げていたため、この時点で1軒の平安時代住居址として認識しており、発掘調査終了後、遺物を洗浄するまで古墳時代の住居址の存在に気が付かなかったという失態を犯した。SB6bとした平安時代の住居址の竈に石などがなかったこと、床面がほとんど同一のレベルとなっていたことが失敗の原因と考える。



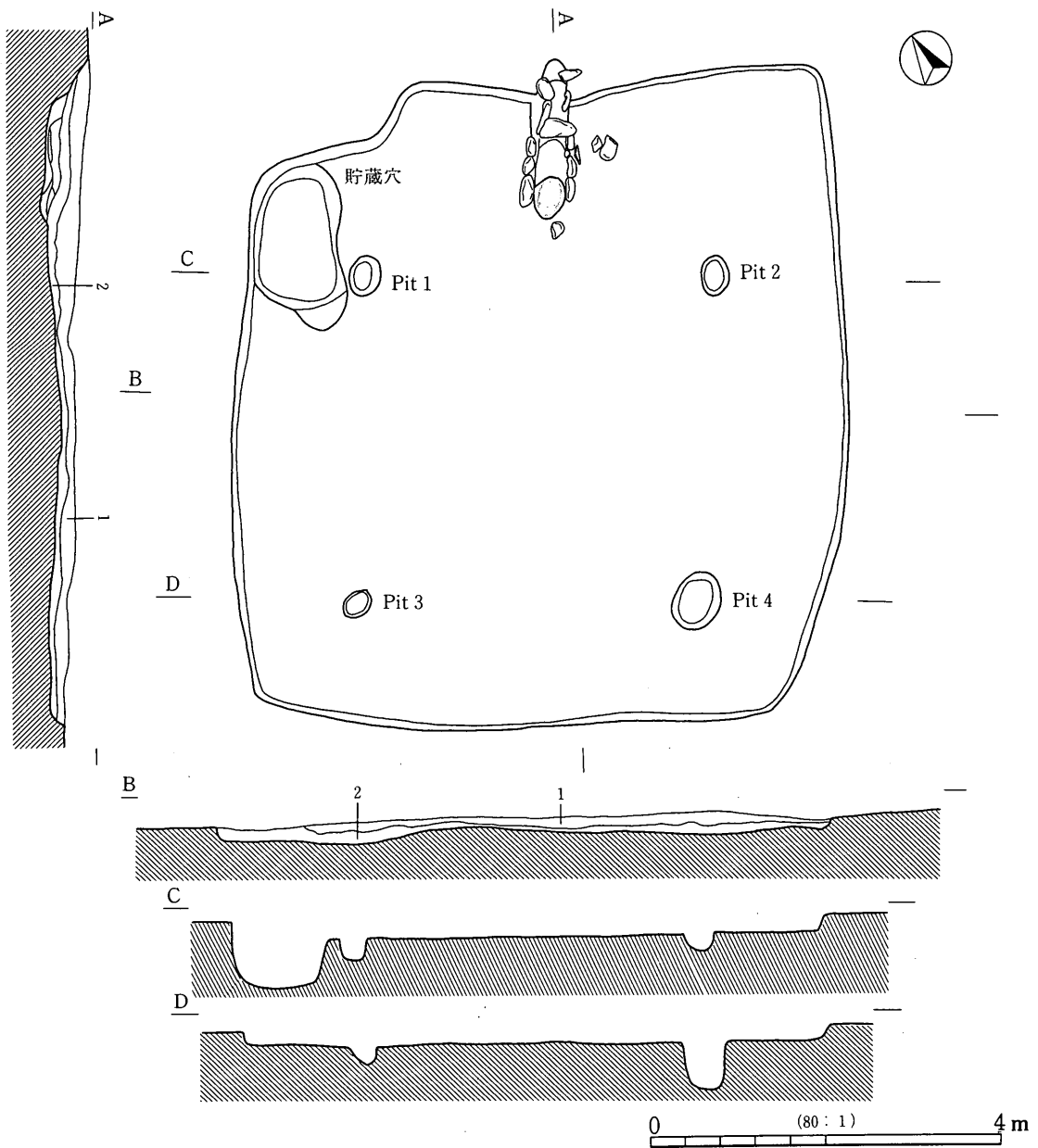
第87图 1号住居址实测图



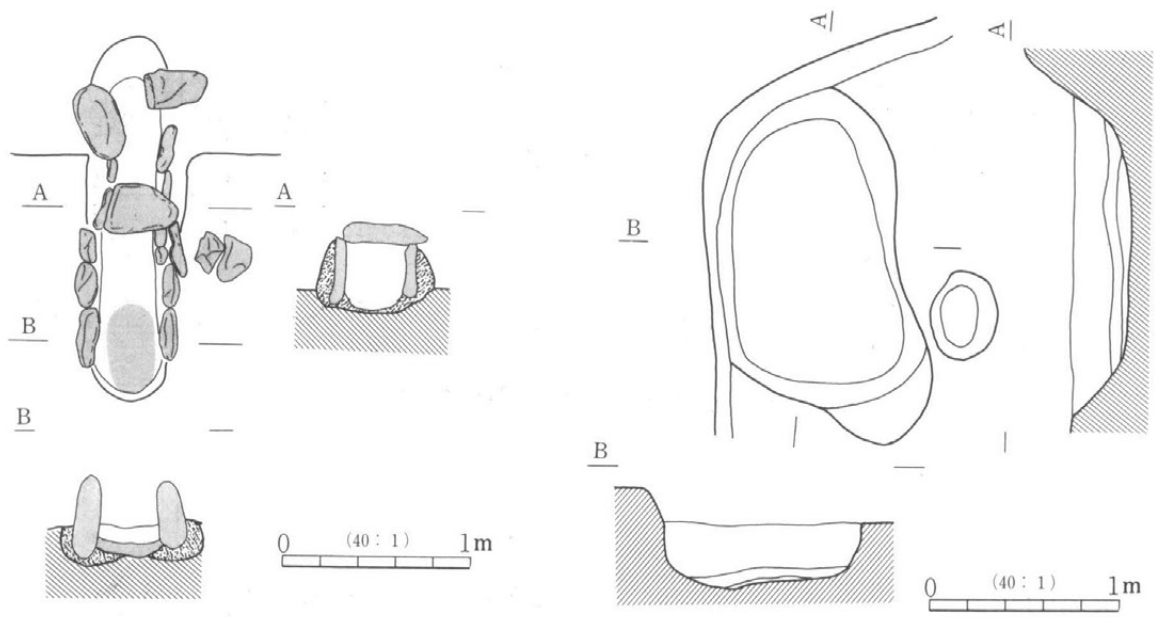
第88图 1号住居址出土遗物实测图(1)



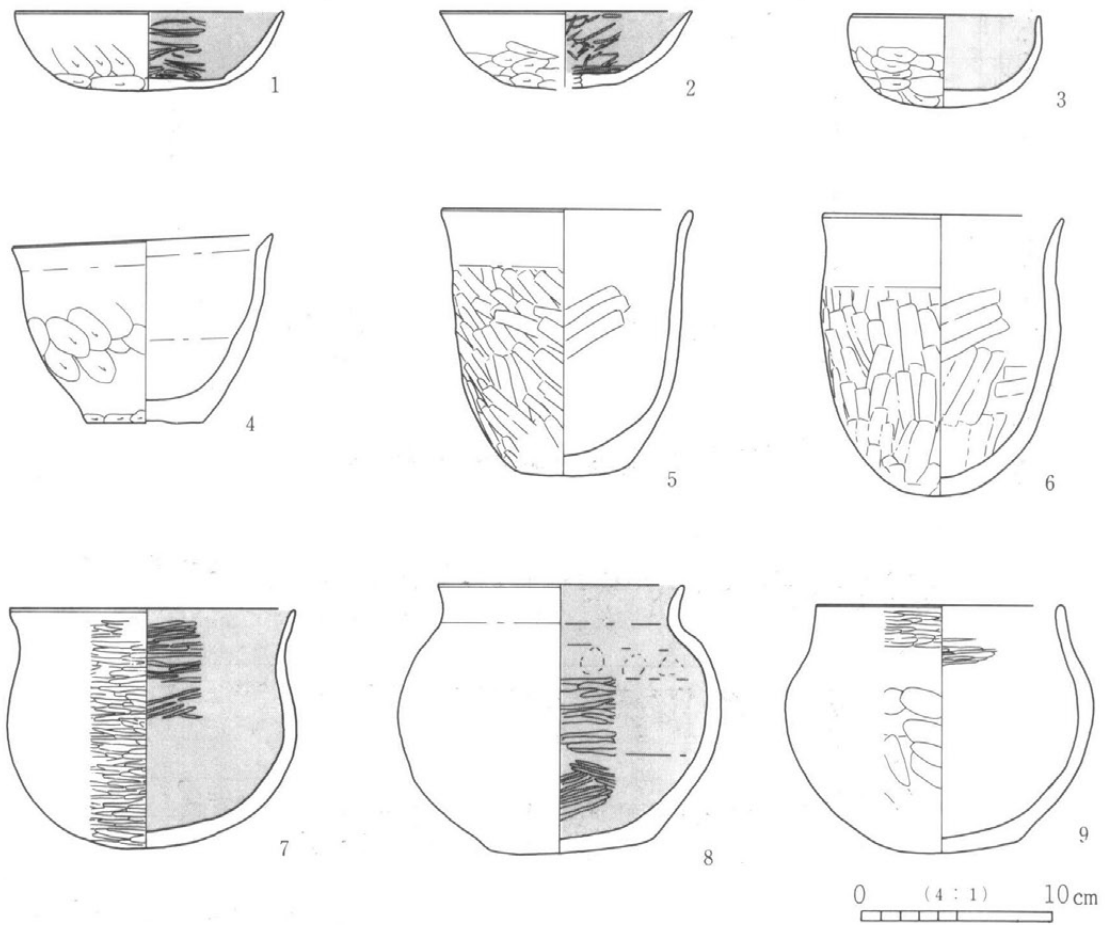
第89图 1号住居址出土遗物实测图(2)



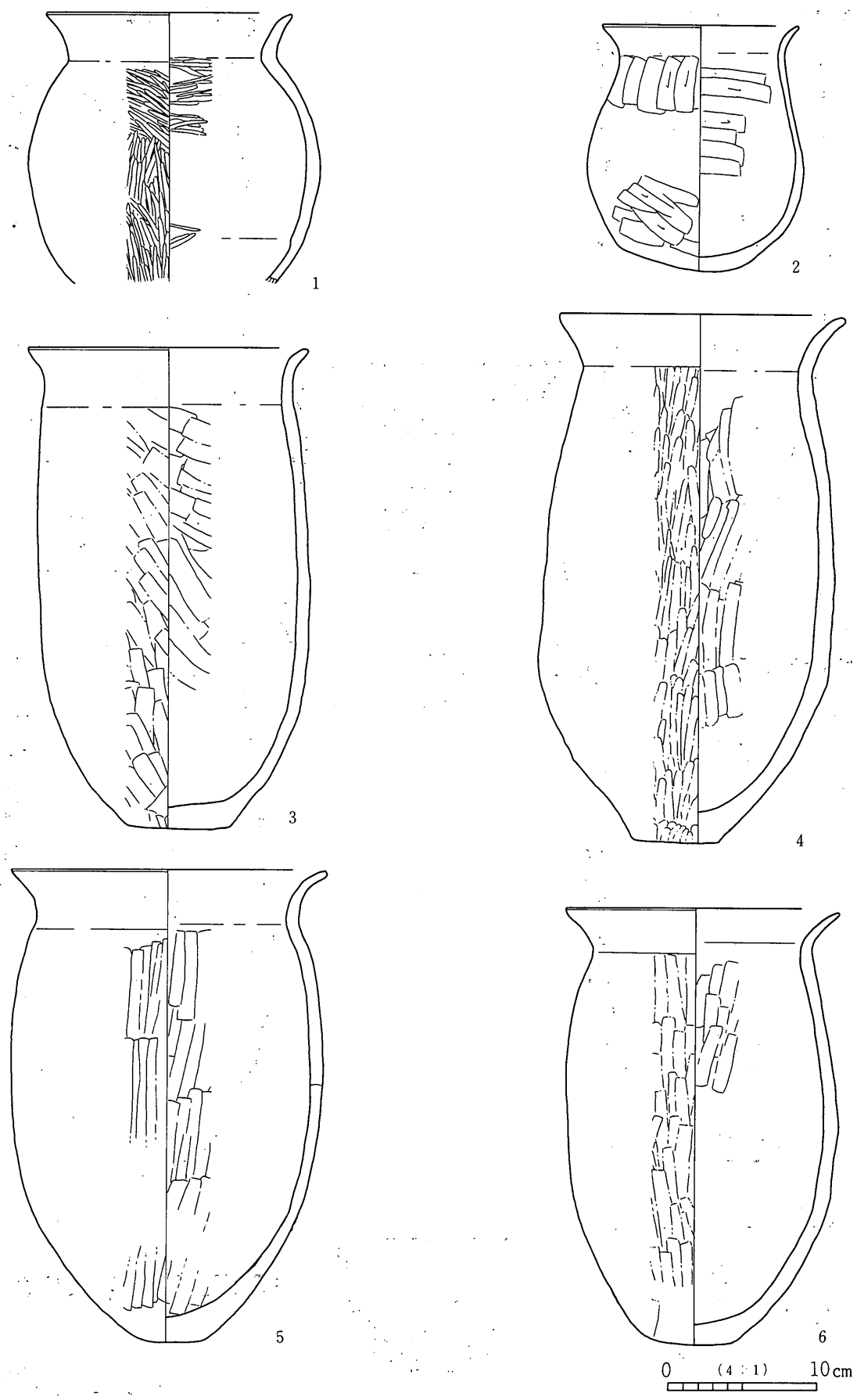
第90图 4号住居址实测图(1)



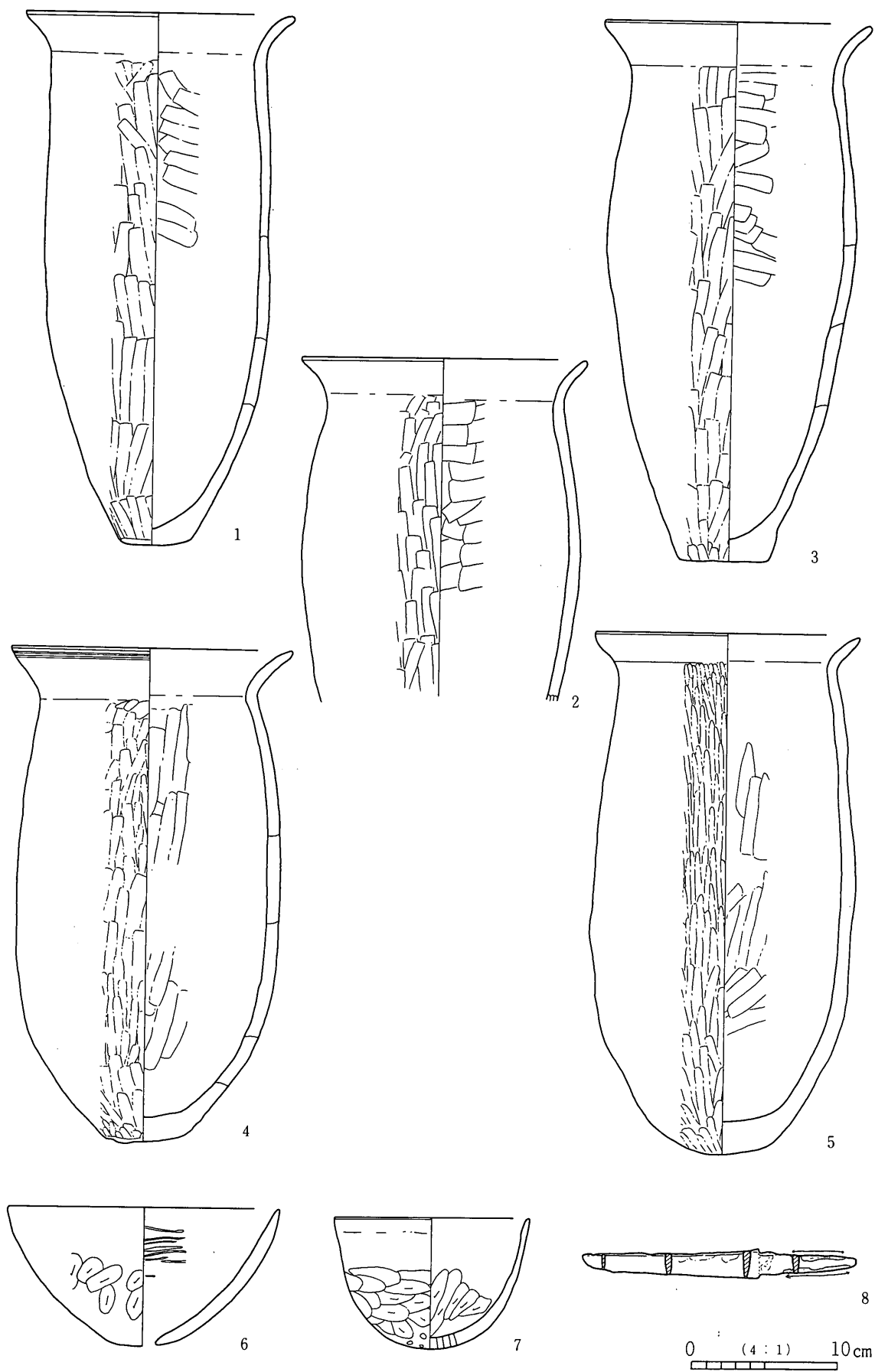
第91图 4号住居址实测图(2)



第92图 4号住居址出土遗物实测图(1)



第93图 4号住居址出土遗物实测图(2)



第94图 4号住居址出土遗物实测图(3)

それに最大の原因は担当者が先入観に囚われたまま調査を進めたことにある。今回の調査の大きな反省材料である。

覆土：黒褐色土(1)と褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：SB 6 bに切られた部分以外は確認できている。壁高は20～30cmを数える。

床面：ローム粒を含む暗褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とピット：主柱穴が1基とほかにピット1基がこの住居址の施設であると考えられる。

竈：北壁中央に付設されている。構築材である石と粘土が残っていた。焼土は10cm前後の層厚があった。

規模と形態：全体形は不明。しかし、一辺が3.5m前後の隅丸方形を呈するものと推定される。

出土遺物と所属時期：出土した土器群の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と思われる。

3 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は住居址が9軒、後世の攪乱によって破壊された住居址の残骸と思われるものが3基が確認された。耕作等の削平によって遺構が失われていることも予想される

(1) 6 b号住居址 (SB 6 b) (第96図)

位置：C-6～7、D-6～7 Gridにある。SB 6 aと重複する。

調査の経過：SB 6 aの項でも述べたように、平面プランの確認時に失敗を犯してしまったため、SB 6 aとの切り合いについて明確につかめていない。しかし、竈と思われる焼土の堆積が確認されているため、重複部分のおおよその範囲は推定できた。また、南側部分については精査したが壁の立ち上がりは確認できなかった。この住居址付近からIII層上面に強い傾斜がみられ、一部が削平されたと思われる。

覆土：黒褐色土の堆積がみられる。

壁面：SB 6 aと重複した部分及び南部分の壁は確認できなかった。壁高は20～25cmを数える。

床面：北部分の一部が堅緻面となっていたが、その他の部分は締まってはいるものの固くはなかった。

柱穴とピット：確認できなかった。

竈：竈と推定される焼土の堆積が確認されている。構築材は検出されなかった（見落としている可能性もある）。この付近からの遺物の出土は無かった。

規模と形態：遺存している部分から一辺が3.5～4 m程度の隅丸方形のプランが推定できる。

出土遺物と所属時期：出土した土器（第97・98図）から平安時代（概ね10世紀代）の住居址であると思われる。

(2) 7号住居址 (SB 7) (第99・100図)

位置：C-7～8、D-7～8 Gridにある。SB21・SK 7と重複する。一部調査区外に存在する。

調査の経過：III層上面にて竈の上面及び黒褐色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを残して、掘り下げにかかる。床面近くなって復元可能な個体が出土しはじめた。

覆土：黒褐色土(1)と微量のロームブロックを含む暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：30cm前後の壁高を数える。

床面：東部分の一部を除いてローム粒を含む暗褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とピット：7基のピットを確認した。Pit 1・3・6・7が主柱穴なのかもしれない。

竈：北壁中央に付設される。構築材である石と僅かに粘土が検出された。崩壊が著しく、石は原位置を保っていないものが多かった。焼土は5cm程度の層厚を計る。竈内から遺物の出土がみられた。

規模と形態：一辺4.5m程度の隅丸方形を予想できる。

出土遺物と所属時期：出土した土器（第101・102図）から平安時代（概ね10世紀代）の住居址であると思われる。なお、床面直上にて鉄製鎌が出土した（第102図-2）。

(3) 14号住居址 (SB14) (第103図)

位置：B-5、C-5 Gridにある。SB2（縄文）、SK3と重複する。

調査の経過：SB2の調査中に、SB2の北西端部に平安時代土器の出土が確認されたため、調査を開始する。破損した土器が折り重なるように出土したため、当初は土器廃棄ピットのようなものを想定したが、調査の過程で堅緻面が確認され、住居址として認定した。現代の水田の畦を作った際に壁や竈が失われてしまったらしく、床面の一部が遺存しているのみであった。従って遺物も削平を免れたSB2との重複部分付近からの出土が目立った。

覆土：黒褐色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：南側部分の壁が残っているのみであった。壁高は約10cmを数える。

床面：ローム粒を含む暗褐色土を貼床し、堅緻面となっている。削平によって一部失われているため、全容は不明。SB2の床面との比高差は約10cm。

柱穴とピット：精査したが、確認できなかった。

竈：もともと存在しなかったか、水田の畦を作った際に失われてしまったらしい。

規模と形態：推定一辺4m前後の隅丸方形を呈すると考えられる。

出土遺物と所属時期：平安時代（10世紀代）の遺物が出土している（第103図）。

(4) 竪穴状遺構3 (第105図)

位置：G-6~7 Gridにある。

調査の経過：III層上面で焼土の落ち込みを確認したため、周囲の精査の行なったところ、焼土の南側にて住居址の覆土と思われる黒色土を検出した。この時点で床を欠失した住居址であることが予想されたが、壁が検出されず、平面プランが把握できなかったため、住居址としての認定を避けた。

覆土：黒色土が5~10cmと薄く遺存していた。

壁面：不明。

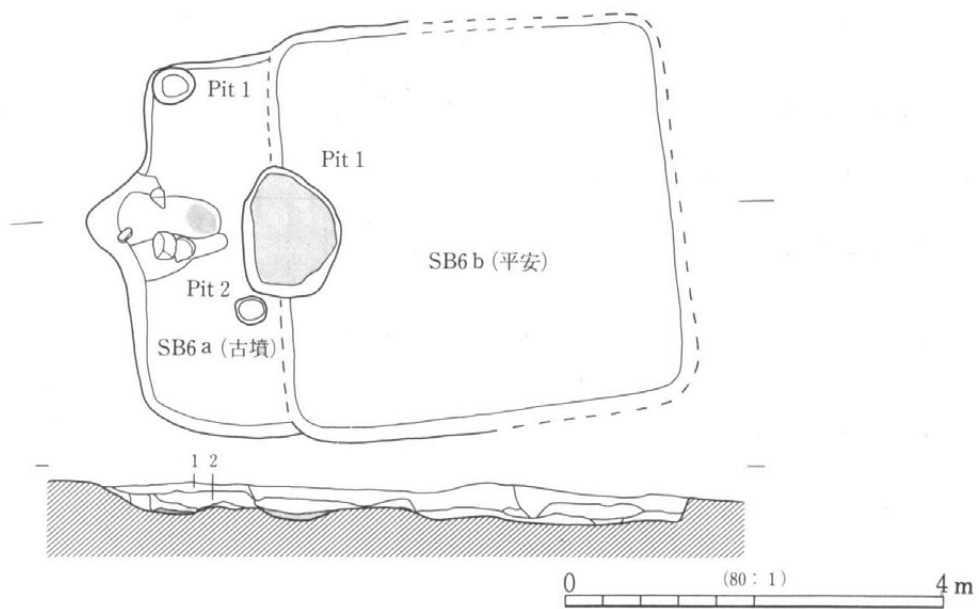
床面：確認できず。

柱穴とピット：不明

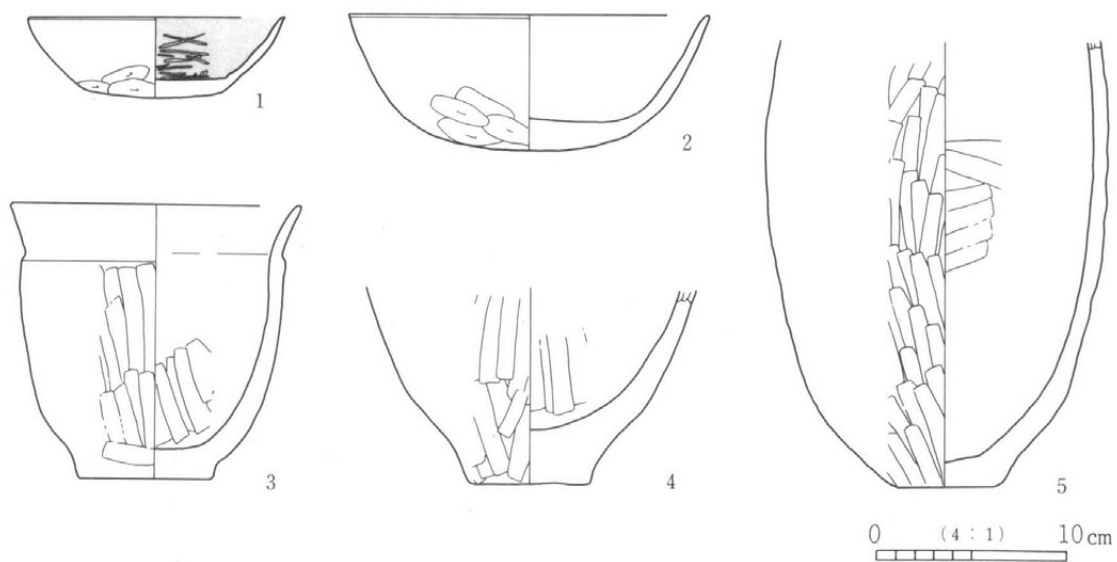
竈：焼土が10cm程度の層厚でみられた。構築材は検出できず。

規模と形態：住居としての全容は不明。

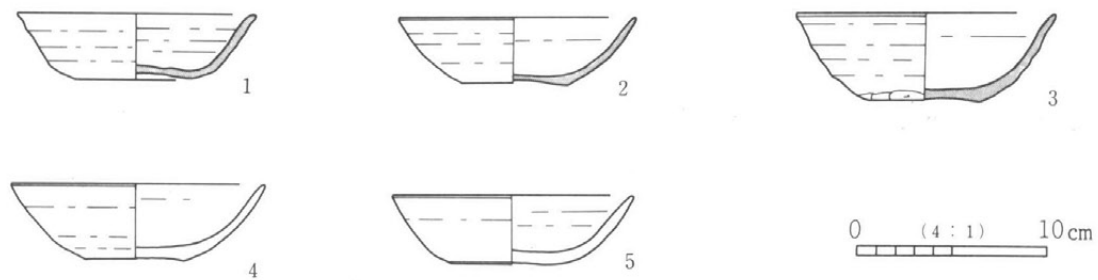
出土遺物と所属時期：焼土中及びその周辺から平安時代の遺物が出土している。この遺構からは土師器の皿が多く出土しているのが特徴である。また、時期比定に苦慮するが、覆土から鉄製の釘と思われるものも出土している。



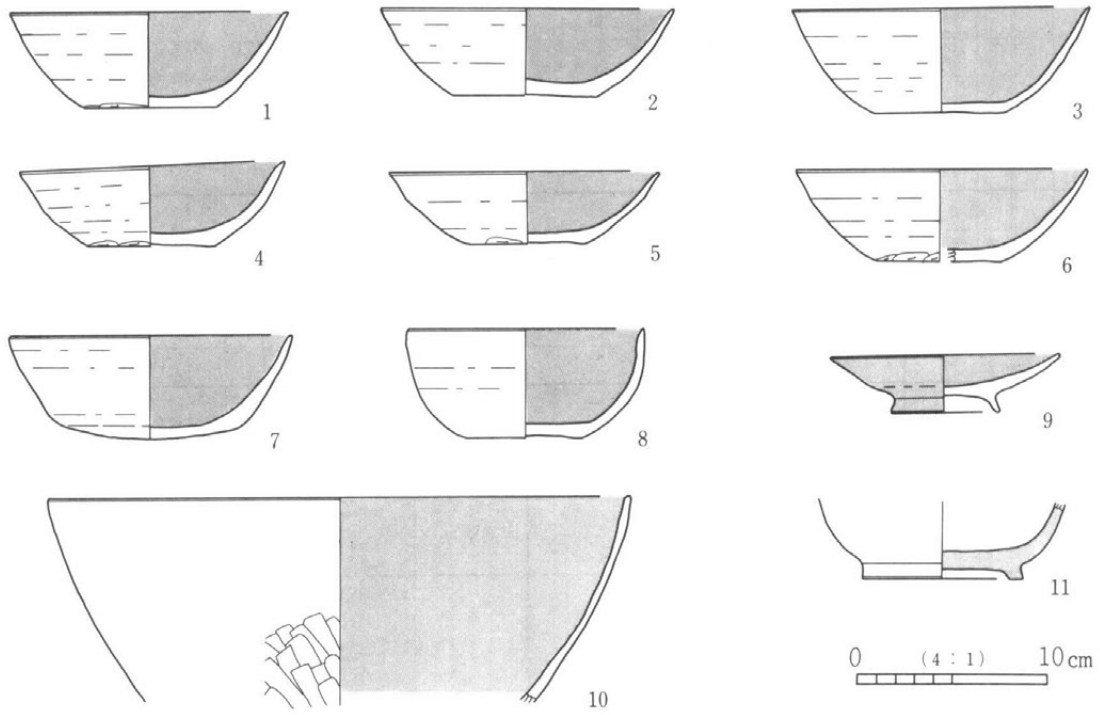
第95图 6 a · 6 b号住居址实测图



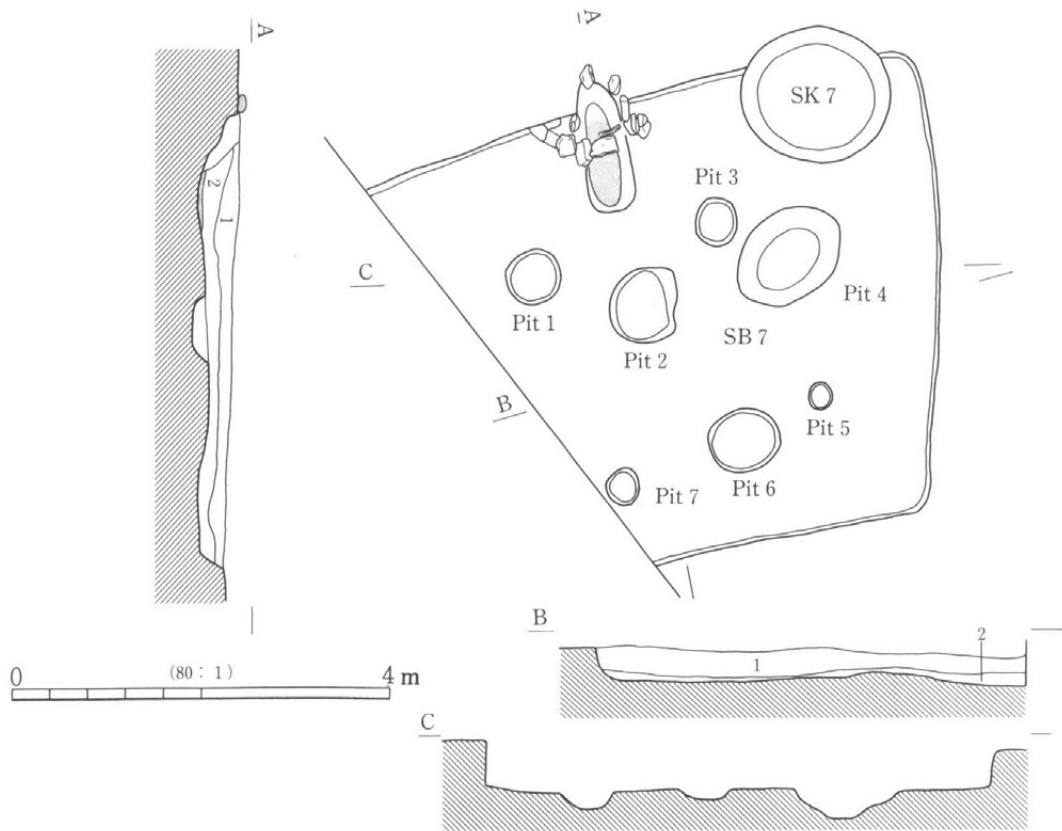
第96图 6 a号住居址出土遺物实测图



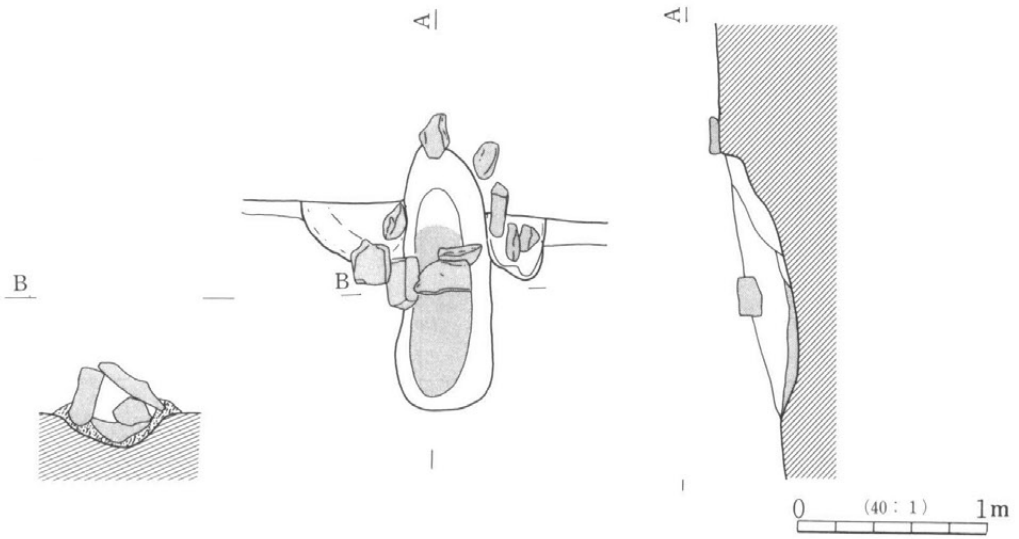
第97图 6 b号住居址出土遺物实测图(1)



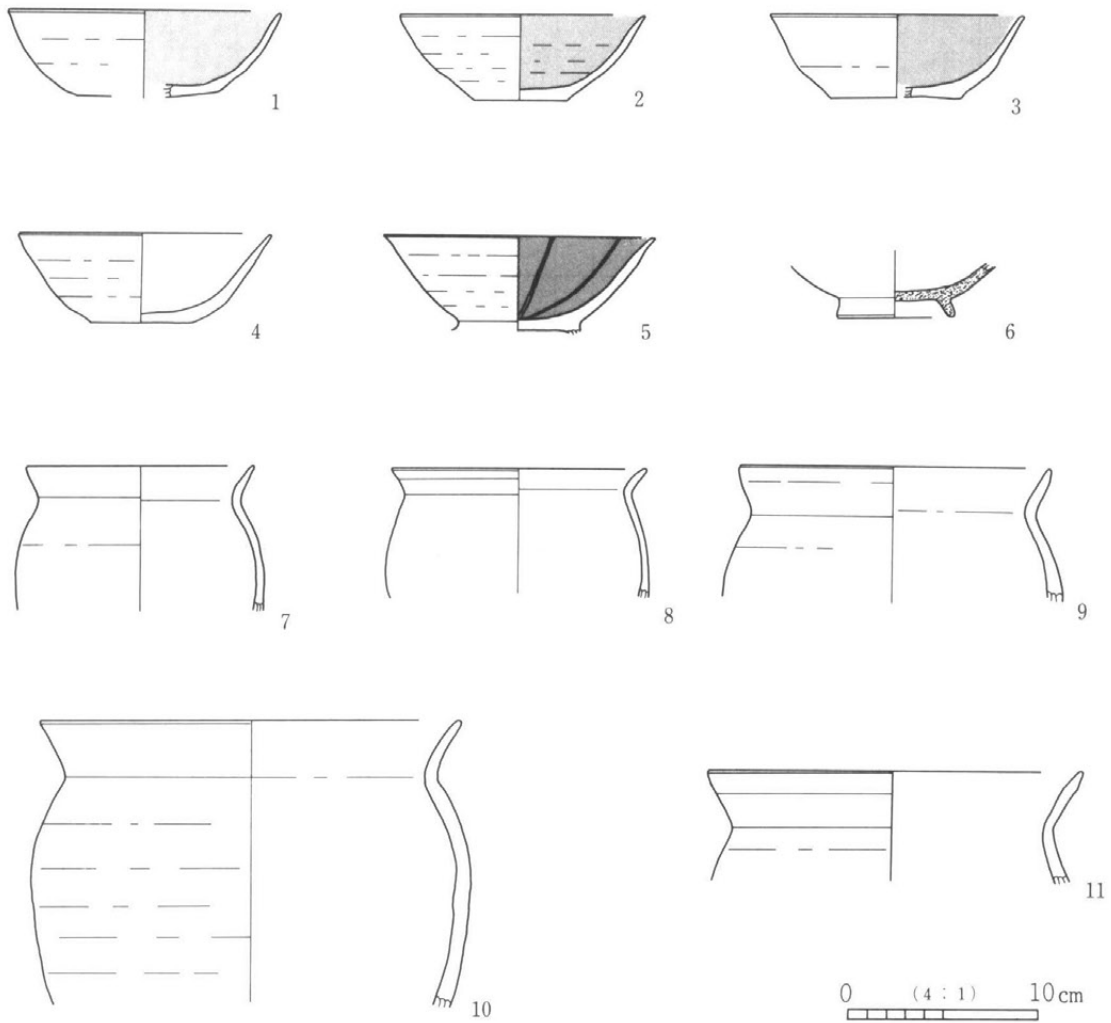
第98図 6b号住居址出土遺物実測図(2)



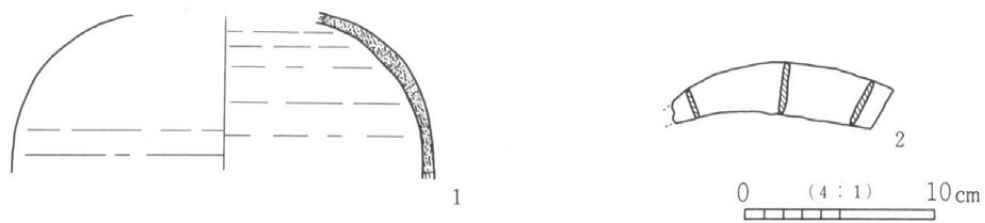
第99図 7号住居址実測図(1)



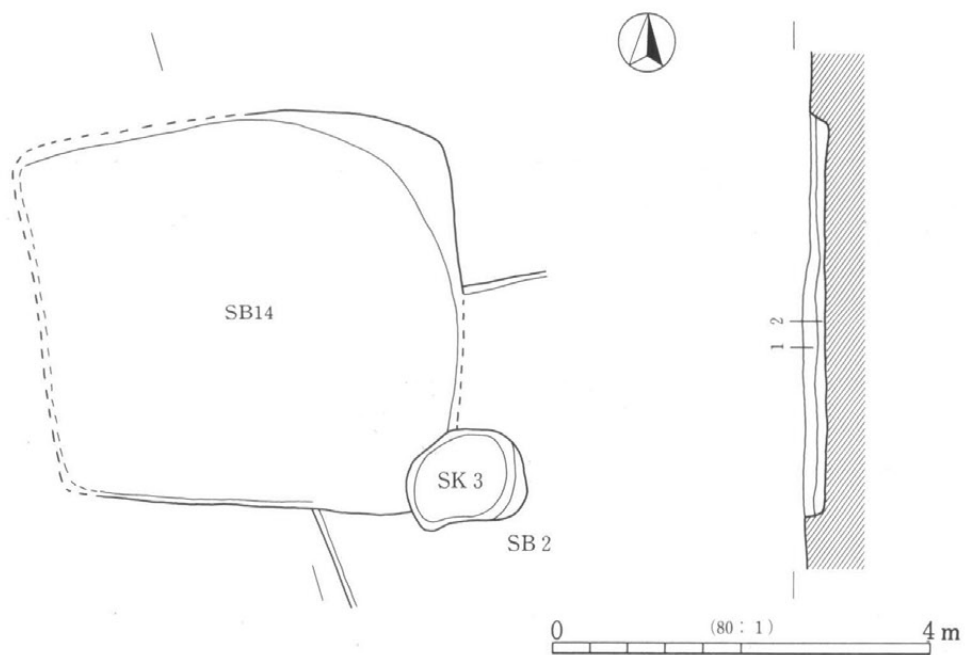
第100图 7号住居址实测图(2)



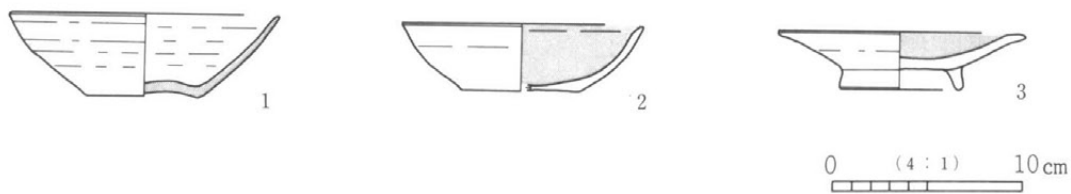
第101图 7号住居址出土遗物实测图(1)



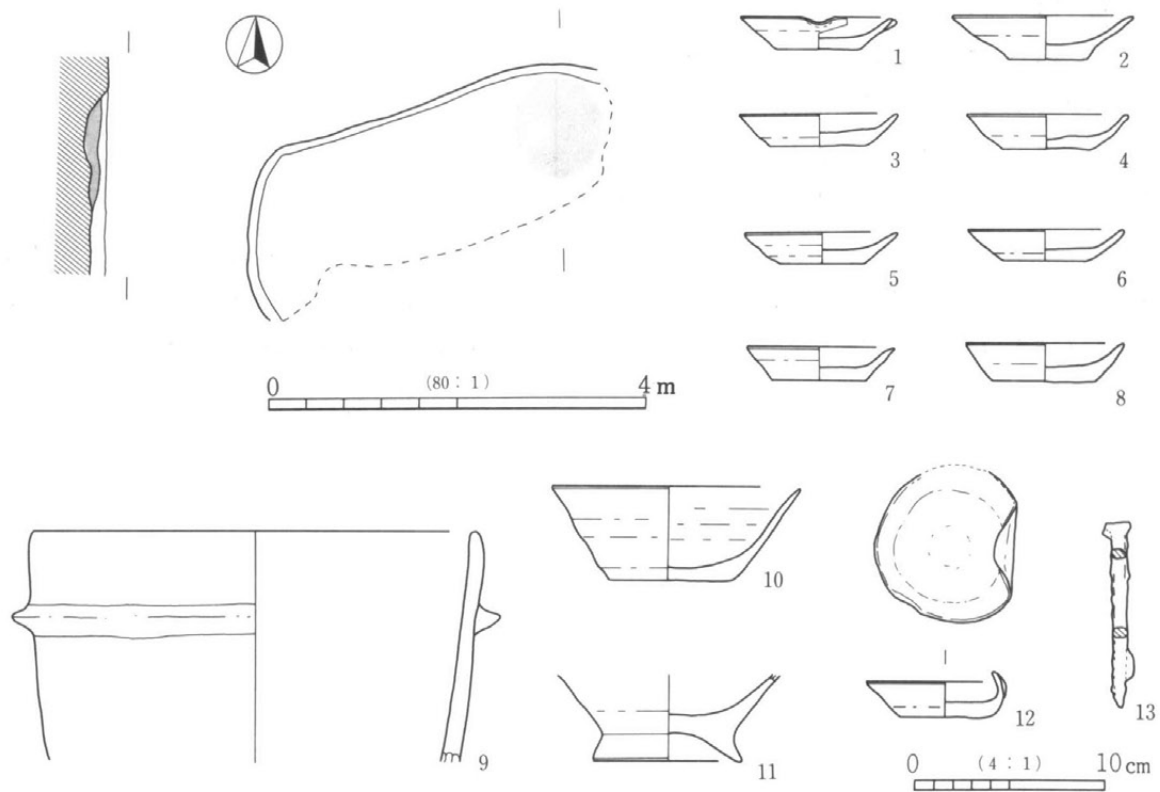
第102图 7号住居址出土遺物実測図(2)



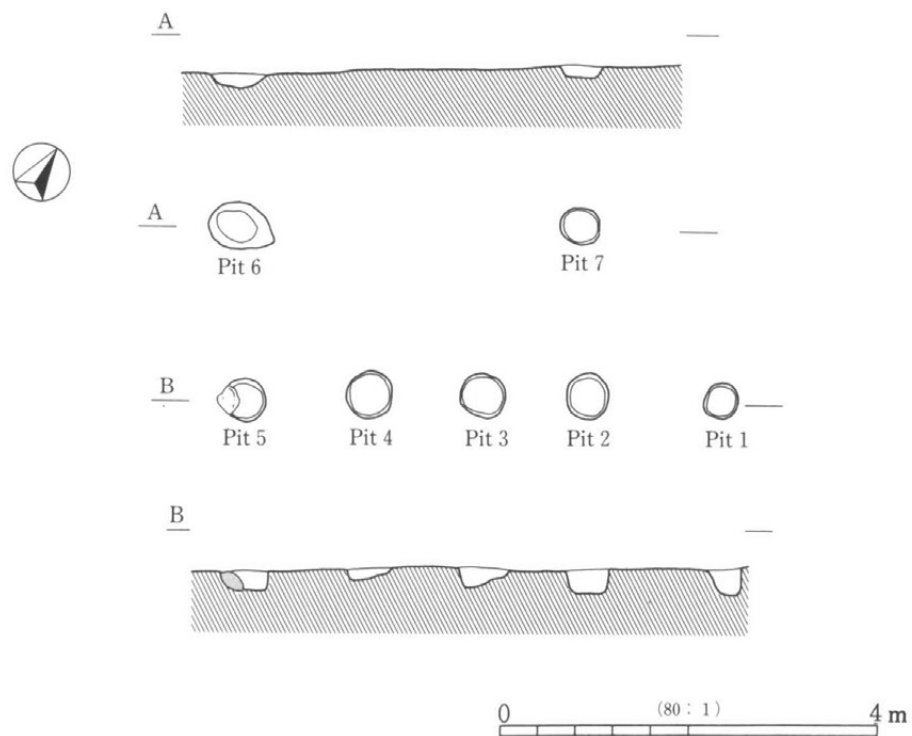
第103图 14号住居址実測図



第104图 14号住居址出土遺物実測図



第105図 竖穴状遺構3実測図および出土遺物実測図



第106図 1号掘立柱建物址実測図

4 時期不明の遺構

(1) 1号掘立柱建物址 (ST1) (第106図)

位置：B-3 Gridにある。

覆土：黒褐色土の堆積がみられる。

柱穴とピット：7基の柱穴と推定されるピットが検出された。

規模と形態：Pit 1～5の列は比較的良好な遺存状態を保っていたが、その他の部分は、削平等による攪乱で検出が出来なかった。よって、1軒の掘立柱建物址を構成する全ての柱穴は検出されていないと思われる。

出土遺物と所属時期：図示できる遺物は無いが、Pit 4から平安時代の土器片が検出されているので、平安時代以降のものであると考えられる。

第5章 遺物観察結果一覽

1 四日市遺跡A地区石器観察結果

石 鏃

図版番号	法 量		基 部 形 態		欠損部位	自然面	石 材	形態分類	出土地点	その他				
	長さcm	幅cm	長さcm	厚さcm							重さg	基の有無	形	
6-10	4.2	2.0	無	0.6	3.0	無	a	C	完	—	チャート	B 2	SB61	
21-8	3.2	1.7	無	0.4	1.9	無	e	C	完	—	黒耀石	B 2	SB62	
35-13	2.0	1.4	無	0.3	0.5	無	c	B	完	—	黒耀石	B 2	SB98	

打製石斧

図版番号	法 量		刃 部		頭部平面形	欠損部位	自然面	石 材	形態分類	出土地点	その他		
	長さcm	幅cm	長さcm	厚さcm								重さg	刃幅cm
9-6	11.7	5.6	5.4	2.0	130	3	3	完	—	玄武岩	F-1	SB48	
9-7	11.3	5.3	5.0	2.0	160	4	4	完	a	玄武岩	C-2	SB48	
9-8	13.9	5.9	5.8	1.7	205	4	4	完	a	玄武岩	C-1	SB48	
9-9	11.3	4.0	3.8	2.0	108	3	3	完	a, b	花崗岩	C-1	SB48	
10-11	12.1	5.2	5.2	2.2	179	4	4	完	—	玄武岩	C-2	SB49	
10-12	10.4	4.8	—	1.7	104	—	3	3	b	安山岩	G	SB49	
10-13	10.4	4.7	4.7	1.4	90	4	4	4	b, c	頁岩	C-2	SB49	
10-14	9.3	4.0	4.0	1.2	60	3	2	完	a, b	安山岩	D	SB49	
17-4	10.0	4.8	4.8	2.0	108	3	1	完	c	玄武岩	E-1	SB60	
17-5	11.4	5.1	—	2.4	161	—	—	8	b	頁岩	C-2	SB60	
19-6	12.2	4.6	3.9	1.3	105	3	4	完	c	玄武岩	C-1	SB61	
19-7	9.8	5.8	5.3	2.3	142	1	3	完	b, c	安山岩	E-1	SB61	
21-6	6.9	4.8	4.0	1.4	63	3	—	2	a, b, c	玄武岩	B-1	SB62	
21-7	11.2	5.1	5.1	1.0	80	4	—	4	—	頁岩	C-1	SB62	
23-11	21.2	8.5	8.4(長) 7.9(短)	3.4	600	1	1	完	b	玄武岩	A	SB74	
24-1	13.5	6.8	6.6	2.0	250	4	4	完	a, b, c	安山岩	C-1	SB74	
24-2	10.1	5.6	4.9	2.0	170	4	—	4	—	頁岩	C-1	SB74	
24-3	9.5	5.4	—	1.5	83	—	4	3	—	玄武岩	C-1	SB74	
24-4	9.5	4.5	4.2	2.0	103	4	3	完	—	玄武岩	C-2	SB74	
24-5	13.8	5.0	5.0	2.8	219	3	4	完	側	玄武岩	C-2	SB74	
24-6	12.2	4.7	4.3	2.2	149	4	4	完	b	玄武岩	C-1	SB74	
28-1	10.2	6.2	5.7	2.8	228	3	1	完	a, c	玄武岩	E-1	SB81	
28-2	9.5	5.1	4.6	2.2	132	3	1	完	b	玄武岩	E-2	SB81	
28-3	9.7	5.0	5.0	1.8	110	3	1	完	a	玄武岩	E-1	SB81	
30-1	11.7	4.9	4.2	2.3	134	3	—	4	a	安山岩	C-2	SB109	

表2 四日市遺跡A地区 石器観察表(1)

打製石斧

図版番号	法 量			長さcm	厚さcm	重さg	刃 部		頭部 平面形	欠損 部位	自然面	石 材	形態分類	出土地点	その他
	長さcm	幅cm	重さg				刃幅cm	平面形							
30-2	7.5	5.1	54	5.1	3			—	4	—	玄武岩	D	SB109		
33-10	12.1	4.6	107	3.8	3			2	完	側a	頁岩	D	SB96		
33-11	7.3	4.5	60	4.5	4			—	5	b	玄武岩	C-2	SB96		
33-12	5.3	3.7	44	3.3	3			—	5	c	玄武岩	B-2	SB96		
35-10	12.0	5.3	142	5.2	4			3	完	—	安山岩	C-1	SB98		
35-11	9.6	6.0	138	5.1	4			4	完	—	玄武岩	C-1	SB98		
35-12	8.6	4.1	73	3.6	3			—	4	—	安山岩	B-1	SB98		

石 鏃

図版番号	法 量			基部形態		側刃部 形態	欠損 部位	自然面	石 材	形態分類	出土地点	その他	
	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	基部形態								
					茎の有無								形
62-6	1.5	1.3	0.2	0.3	無	b	B	—	黒耀石	B2	SB2		
62-7	1.6	1.4	0.3	0.4	無	b	完	—	黒耀石	B2	SB2		
62-8	1.9	1.3	0.4	0.9	無	—	B	—	黒耀石	B1	SB2		
62-9	1.4	1.3	0.3	0.4	無	c	完	—	黒耀石	B2	SB2		
62-10	1.5	1.6	0.3	0.3	無	c	B	—	チャート	B2	SB2		
62-11	1.7	1.4	0.3	0.5	無	c	完	—	黒耀石	B2	SB2		
62-12	1.6	1.2	0.4	0.6	無	a	B	—	黒耀石	B1	SB2		
62-13	1.8	1.6	0.3	0.4	無	c	B	—	チャート	B2	SB2		
62-14	1.9	1.3	0.4	0.4	無	c	B	—	黒耀石	B2	SB2		
62-15	1.8	1.5	0.5	1.2	無	a	B	—	黒耀石	B1	SB2		
63-1	2.0	1.3	0.3	0.5	無	b	B	—	黒耀石	B2	SB2		
63-2	1.8	1.2	0.4	0.5	無	c	B	—	黒耀石	B1	SB2		
63-3	2.1	1.4	0.3	0.3	無	c	B	—	黒耀石	B2	SB2		
63-4	1.5	1.1	0.2	0.3	無	—	F	—	黒耀石	—	SB2		
63-5	1.7	1.4	0.4	0.6	無	a	B	—	黒耀石	B1	SB2		
63-6	1.4	0.8	0.3	0.3	無	c	B	—	黒耀石	B2	SB2		
63-7	2.1	0.9	0.3	0.6	無	c	B	—	黒耀石	B2	SB2		
63-8	1.1	1.0	0.2	0.3	無	—	完	—	黒耀石	A	SB2		
68-7	1.5	1.3	0.3	0.7	無	b	B	—	黒耀石	B2	SB3		
68-8	1.3	1.6	0.4	0.8	無	b	完	—	黒耀石	B2	SB3		
68-9	1.9	1.4	0.4	1.0	無	c	B	—	黒耀石	B2	SB3		

表3 四日市遺跡B地区 石器観察表(2)

石 鏃

図版番号	法 量			基 部 形 態		側 辺 部 形 態	欠 損 部 位	自 然 面	石 材	形 態 分 類	出 土 地 点	そ の 他
	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	茎の有無							
68-10	1.4	1.3	0.3	0.4	無	b	完	-	黒耀石	B 2	SB 3	
68-11	1.5	1.2	0.2	0.3	無	a	B	-	黒耀石	B 1	SB 3	
68-12	1.6	1.3	0.3	0.5	無	c	A	-	黒耀石	B 2	SB 3	
70-18	1.8	1.6	0.4	0.8	無	c	A	-	黒耀石	B 2	SB 15	
70-19	1.7	1.4	0.5	0.9	無	c	A	-	黒耀石	B 2	SB 15	
75-2	1.6	1.4	0.4	0.4	無	c	完	-	黒耀石	B 2	SB 17	
75-3	1.5	1.5	0.4	0.5	無	a	B	-	黒耀石	B 1	SB 17	
75-4	1.7	1.7	0.3	0.4	無	b	完	-	黒耀石	B 2	SB 17	
75-5	1.6	1.1	0.3	0.3	無	c	完	-	黒耀石	B 2	SB 17	
75-6	2.0	1.4	0.5	1.5	無	a	B	abc	黒耀石	B 1	SB 17	
75-7	1.7	1.0	0.3	0.5	無	c	B	-	黒耀石	B 2	SB 17	
75-8	1.3	1.1	0.2	0.3	無	c	B	-	黒耀石	B 2	SB 17	
75-9	1.4	1.0	0.3	0.3	無	a	完	-	黒耀石	B 1	SB 17	
78-1	1.7	1.1	0.4	0.5	無	c	完	-	黒耀石	B 2	SB 18	
78-2	1.4	1.3	0.3	0.4	無	a	完	-	黒耀石	B 1	SB 18	
78-3	2.1	1.5	0.3	0.5	無	b	完	-	黒耀石	B 2	SB 18	
78-4	2.2	1.3	0.3	0.4	無	b	完	-	黒耀石	B 2	SB 18	
78-5	4.0	2.4	0.7	0.8	無	a	B	-	黒耀石	B 1	SB 18	
78-6	2.0	1.0	0.3	0.3	無	-	B	-	黒耀石	-	SB 18	
78-7	1.7	1.5	0.3	0.5	無	b	A	-	黒耀石	B 2	SB 18	
78-8	1.5	1.2	0.3	0.4	無	c	B	-	黒耀石	B 2	SB 18	

石 鏃

図版番号	法 量			機 能 部			欠 損 部 位	自 然 面	全 体 形	石 材	形 態 分 類	出 土 地 点	そ の 他		
	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	調整	長さcm								幅cm	厚さcm
61-4	2.5	2.1	0.5	2.0	両面	0.8	0.5	0.4	b	I	完	黒耀石	C	SB 2	
61-5	2.2	0.6	0.5	0.5	両面	1.2	0.4	0.4	a	II	C	黒耀石	C	SB 2	
68-1	2.3	1.5	0.4	1.1	両面	1.5	0.6	0.3	b	II	完	チャート	C	SB 3	
68-2	3.2	2.8	0.4	1.5	片面	1.4	1.0	0.5	c	I	完	黒耀石	B 1	SB 3	
68-3	2.3	1.5	0.4	1.1	両面	0.8	0.5	0.4	b	II	完	黒耀石	B 2	SB 3	

表 4 四日市遺跡B地区 石器観察表(1)

石 匙

図版番号	法 量			部			基部の有無	欠損部位	自然面	全体形	石 材	形態分類	出土地点	その他
	長さcm		重さg	刃		平面形								
	幅cm	厚さcm		型	刃長cm									
62-1	8.5	7.5	1.0	1	片刃	0.3	b	完	-	-	玄武岩	a	SB2	
62-2	6.4	3.4	3.5	2	片刃	0.2	c	完	a	-	黒耀石	c	SB2	
62-3	4.4	3.1	2.5	3	片刃	0.6	a	完y	-	-	黒耀石	e	SB2	
					両刃	0.5								
						0.6								
68-4	9.8	5.5	1.3	1	片刃	1.0	a	完	C	-	チャート	a	SB3	
68-5	5.5	3.6	0.9	2	両刃	0.5	b	完	-	-	黒耀石	a	SB3	
						3.8								
68-6	4.4	4.8	1.7	-	-	-	-	有	a	-	黒耀石	-	SB3	
70-17	2.3	5.7	1.0	1	片刃	0.4	a	-	-	-	黒耀石	e	SB15	
70-20	3.1	3.4	0.9	1	片刃	0.5	a	有	e2	-	黒耀石	a	SB15	
75-11	4.2	6.0	0.8	1	片刃	0.4	a	有	完	-	安山岩	b1	SB17	
75-12	6.8	7.3	1.3	1	両刃	0.5	c	有	完	-	玄武岩	b2	SB17	
78-9	7.1	3.9	1.1	1	片刃	0.3	c	有	完	c	玄武岩	c	SB18	
78-10	6.5	2.1	0.6	2	片刃	0.2	c	有	完	-	チャート	c	SB18	
						0.4	a							
78-11	4.7	4.1	0.8	3	片刃	0.5	a	-	-	-	チャート	d	SB18	
						4.5								
						3.8								

磨 石

図版番号	法 量			磨 面			裏 面			敲 打 面			石 材 (粒子)	形態分類	その他					
	長さcm		重さg	表 面		裏 面	表 面		裏 面	表 面		裏 面								
	幅cm	厚さcm		長さ	幅cm		長さ	幅cm		長さ	幅cm					長さ	幅cm	長さ	幅cm	長さ
64-1	12.1	8.7	6.9	785	7.7	4.5	II	7.5	4.4	II	2.8	2.5	0.3	1 a	-	-	安山岩	1 B	SB2	
64-2	17.0	9.0	4.3	1000	13.5	8.7	II	14.5	8.2	II	-	-	-	-	-	-	安山岩	1 B	SB2	
64-3	6.8	4.2	2.1	73	5.5	3.7	II	1.7	3.1	II	-	-	-	-	3.9	3.7	1.1	1 b	1 B	SB2
67-3	8.7	7.6	5.3	370				6.5	5.6	II	2.7	1.3	0.1	1 b						
								6.3	4.3	II	1.3	1.3	0.2	4 a						
								6.5	6.5	II	3.9	1.8	0.4	4 b						
67-9	14.6	5.3	3.6	540	14.1	4.7	II	7.7	5.6	I					0.7	0.9	0.3	4 a	1 C	SB3

表5 四日市遺跡B地区 石器観察表(2)

磨石

図版番号	法 量			磨 面				敲 打 面				石 材 (粒子)	形態分類	その他			
	長さcm	幅cm	厚さcm	長さ	幅cm	形状	表 面		裏 面		長さ				幅cm	深さ	形状
							長さ	幅cm	長さ	幅cm							
67-10	19.5	6.8	3.5	19.0	5.4	II	-	-	-	-	-	-	-	-	安山岩	1 C	
				18.2	3.8	II	-	-	-	-	-	-	-	-			
				18.7	4.1	II	-	-	-	-	-	-	-	-			
				11.7	2.0	II	-	-	-	-	-	-	-	-			
70-15	11.9	7.8	4.0	12.8	5.7	II	11.4	5.4	II	-	-	-	-	-	安山岩	2 B	SB15
70-16	10.4	9.7	5.9	-	-	-	-	-	-	4.7	3.5	0.5	1 a	-	安山岩	2 B	SB15
75-14	13.9	8.7	4.0	12.6	8.2	II	12.5	8.3	II	-	-	-	-	安山岩	1 B	SB17	
78-12	11.6	6.0	3.9	9.8	4.8	II	9.7	3.4	III	6.6	1.7	0.2	3	安山岩	1 C	SB18	
78-13	9.1	8.0	7.8	7.5	6.5	II	6.5	5.0	II	-	-	-	-	安山岩	1 A	SB18	
78-14	9.2	8.4	7.5	6.7	5.5	II	5.0	4.9	II	2.0	2.0	0.2	1 C	安山岩	1 A	SB18	
80-7	10.1	8.5	5.3	6.8	4.4	I	9.9	5.5	I	1.2	1.7	0.1	4 a	安山岩	1 A	SB19	
81-1	10.6	7.3	3.9	7.7	3.0	III	9.5	3.2	III	3.9	1.6	0.2	2	安山岩	1 B	SB19	
84-5	10.3	9.5	4.1	9.0	6.6	II	7.8	7.6	II	1.6	1.4	0.3	4 a	安山岩	1 B	SB20	
84-6	8.4	7.2	4.8	7.3	5.7	II	5.8	3.4	IV	3.2	2.3	0.2	1 b	安山岩	1 A	SB20	

剥片石器

図版番号	法 量			刃 部			石 材			出土地点	その他
	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	数	型	型	幅cm	自然面		
63-9	13.0	9.0	1.6	160	1	片刃	片刃	7.7	1.3	頁岩	SB2
63-10	10.7	5.8	2.4	110	1	両刃	両刃	8.4	0.5	玄武岩	SB2
63-11	7.5	5.0	1.7	80	2	片刃	片刃	3.9	0.9	頁岩	SB2
63-12	4.7	4.4	1.1	20	1	片刃	片刃	3.5	0.3	玄武岩	SB2
63-13	5.2	3.5	0.9	10	2	片刃	片刃	2.8	0.3	頁岩	SB2
84-10	8.5	4.9	0.9	42	1	両刃	両刃	7.6	0.6	頁岩	SB20
84-11	10.6	7.1	1.2	80	1	片刃	片刃	-	-	玄武岩	検出面

磨製石斧

図版番号	法 量			刃 部		頭部		欠損部位	自然面	石 材	形態分類	出土地点	その他
	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	刃幅cm	平面形	平面形						
64-6	8.5	6.4	2.9	264	-	-	2	2	-	蛇紋岩	A 1	SB2	
75-13	3.7	1.7	0.4	4.0	1.5	3	3	完	-	チャート	E 2	SB17	
84-11	5.3	3.2	0.8	25.0	3.2	2	2	4	-	チャート	D 1	SB20	

表 6 四日市遺跡B地区 石器観察表(3)

3 古代土器の器種分類

食器

種類	器種名	器種説明
土師器	坏 A	ロクロ調整の底部回転糸切りの坏で、体部が直線的に開く。法量によりII、IIIに分けられる。黒色土器杯A、須恵器杯Aと同形態をなす。
	坏 C	明赤褐色の緻密な態度を有する坏で、底部回転糸切りの後へら削り、体部を外手持ちへら削り・へら磨き、内面に鋸歯状の暗文を施すものもある。いわゆる甲斐型坏。
	坏 D	非ロクロ調整の丸底の坏。体部外面から底部にかけて手持ちへら削り。口縁部にはヨコナデを施す。内面・あるいは内外面に横方向のへら磨きを施し、黒色処理するものもある。
	坏 E	非ロクロ調整の浅い盤状の坏で、手法は坏Dに共通するが、口径は坏Dに比べ大きい。
	坏 F	非ロクロ調整の坏で、体部下半に稜をもつ。体部内面をヨコへら磨き、外面は稜より下を手持ちへら削り、上をヨコへら磨きで調整するのが一般である。口縁部の形態は多様である。
	坏	A～F以外の坏で、暗文を施す畿内系の坏、非ロクロ調整の不定形な坏など。
	碗	ロクロ調整の有台の碗。体部が直線的に伸びるものと、腰が強く張るものがある。腰が強く張るものには小型の小碗がある。
	碗 C	非ロクロ成形の無高台の碗。平坦な底部から、直立に近く立ち上がる深めの器。
	皿 A	ロクロ調整の扁平な土器で法量によりI・IIがある。小型のIIは口縁部を折り曲げて直立する面を作る。
	耳皿	ロクロ調整の皿Aの口縁部をつまみあげたもの。有台と無台のものがある。
	盤 A	ロクロ調整で口径30～35cmの大型の器。高い脚台をもつ。
	盤 B	足高高台を有する身の浅い碗型の器。法量によりI、IIに分けられる。
	鉢 A	ロクロ調整で口径20cmを越える大型の鉢。坏Aと相似形である。
	高坏	非ロクロ調整で碗型の坏部に脚台を付したもの。
鉢	非ロクロ成形の小型の鉢の総称。形態はバラエティに富むがここでは一括する。	
黒色土器A	坏 A	切り離しは回転糸切りで多くは未調整であるが、糸切りの後底面・底部端面をへら削り調整するものもある。法量によりI・IIに分けられる。
	碗	内湾気味に立ち上がる体部に、高台を付したものである。土師器の碗同様、体部が直線的に伸びるものと、腰が強く張るものがある。小型の小碗もある。
	皿 B	直線的に伸びる扁平な体部に、高台を付した皿である。類例は少ないが、口縁部を波状に波打たせたものもある。
	鉢 A	坏Aの相似形で、口径20cm以上の大型のもの。片口を付するものもある。
	鉢 B	尖り底から体部を開き、口縁部で内湾する鉄鉢模倣の鉢。
蓋	天井部に扁平なつまみをつける蓋で、口縁部は折り曲げることなく丸く納めるのみである。	
黒色土器B	碗	黒色土器Aの碗と同形態の器。小型の小碗もある。
	皿 B	黒色土器Aの皿Bと同じ形態の皿。類例は少ない。
	耳皿	土師器耳皿と同じ形態。有台と無台のものがある。
赤彩土器	皿 B	黒色土器Bと同じ形態の皿。類例は少ない。
須恵器	坏 A	直線的に開く体部をもつ無高台の坏、底部は①へら切り未調整、②へら切り+へら削り、③静止糸切り、④回転糸切りなどの調整がある。坏蓋Aとセットをなすものもある。
	坏 B	箱形の体部に高台を付した形態で、坏蓋Bとセットをなす。法量によりI～VIIに分類できる。
	坏 C	坏Bの高台がはずれた形態で、底部切り離し後底部前面或は周縁をへら削りする。
	坏 D	丸底で、口縁部内面に立ち上がりを持つ。古墳時代からの伝統的器種である。
	坏蓋 A	坏Aに対応する蓋で、内面に返りが付き、天井部に扁平な宝珠形のつまみを付ける。
	坏蓋 B	坏Bに対応する蓋で、口縁端部を折り曲げる。天井部に扁平なつまみを付ける。

表7 古代土器の器種分類一覧(1)

(長野県埋蔵文化財センターほか1990より抜粋)

種類	器種名	器種説明
須 恵 器	碗 A	無高台で体部を内湾させるもの。底径が口径に比して小さい。
	碗 B	全形を示すものはないが、金属鉢を模倣したと考えられるもので、高台を付す。体部の腰が強く張り、まるみをもって立ち上がり口縁部で外反する。環状のつまみを付す碗蓋と対応する。
	皿 B	偏平で直線的に開く体部に高台を付したものの。灰釉陶器・黒色土器の皿Bに類似する皿。
	盤	浅い体部で、口縁部が短く折り返されたように立ち上がる。やや高めの高台が付される。
	高坏	浅めの坏部に高い脚台を付けた器。
	鉢 A	小さい底部から体部は直線的に開く。頸部で緩くしまって口縁部で外反する。大小の法量がある。ロクロナデ調整で薄手である。
	鉢 B	底または尖り底から体部を開き、口縁部で強く内湾する鉢。鉄鉢を模倣したと考えられる。
	鉢 C	逆砲弾型の体部に厚めの円盤状の台をつけたもの、いわゆる播鉢。
軟質須恵器	坏 A	須恵器坏Aの系譜のなかで考えられるが、体部内面の見込部のオサエがなく底部内面から体部にかけて滑らかに立ち上がる。焼成も軟質でほとんどに黒斑が残る。法量は須恵器坏A IIに対応するもののみである。
灰 釉 陶 器	碗 A	体部にわずかに丸みをもち直線的に開く形態で、梯形あるいは三日月様の高台を付するもの。底部が偏平で体部下半が強く張り出し、体部の立ち上がり強い形態を取るものがある。
	皿	いわゆる丸皿。
	段皿	いわゆる段皿。
	稜皿	いわゆる稜皿。
	耳皿	いわゆる耳皿。

煮炊具

種類	器種名	器種説明
土 師 器	甗 A	輪積み成形の後、内外面をナデ調整する長銅甗。明黄褐色で胎土に雲母片を含む。
	甗 B	器面を刷毛目で調整する長銅甗。
	甗 C	暗褐色の胎土で体部外面をへら削りして薄く仕上げる。いわゆる武蔵型甗。
	甗 D	色調・胎土は甗Aに共通するが、ロクロ（回転台）調整を行う長銅甗。
	甗 F	球形銅の背の低い甗。甗Aに共通する胎土を持ち、器面をへら磨きするものが多いが、ナデ調整で仕上げるものもある。
	甗 G	甗Fに共通する球形銅の甗であるが、器面をハケ調整している。
	小型甗A	胎土・調整が甗Aに共通する、器面ナデ調整の小型甗。
	小型甗B	胎土・調整が甗Bに共通する、器面ハケ調整の小型甗。
	小型甗C	胎土・調整が甗Cに共通する、体部外面を削り調整する小型甗。
	小型甗D	ロクロ調整の小型甗で体部にカキ目またはロクロ目を明瞭に残す。底部に糸きり痕を残す。
	小型甗E	器表を粗くナデ調整で仕上げる小型甗。形態は不安定である。
器	甑 A	甗Aと甗Fと共通な胎土、調整による甑である。大形と小形があり、大形のものには角状の把手が付くことが多い。
	甑 B	形態の全容を知ることのできる資料に恵まれないが、体部外面はハケ調整で底のないもの。
	甑 C	ハケ調整である点は甑Bに近いが、底部を円盤状に折返す。須恵器の甑の形状に類似する。
	甑 D	羽釜の底部を抜いたもの。
	羽釜 A	体部上寄りに鐙状の突帯を付したもので、厚手。内外面をナデ調整する。平底、丸底の両者がある。体部の調整に叩き技法を用いたものもある。
	羽釜 B	調整手法は羽釜Aに共通するが、鐙が1連に体部を巡ることなく、3・4箇所切れる。

表8 古代土器の器種分類一覧(2)

種類	器種名	器種説明
土師器	足釜 鍋 円筒形土器	形態の全容を知るものはないが、脚部の存在から足釜とする。 平らな底部で、箱型に立つ浅い体部を有する。把手をもつものもある。 体部の直径15cm前後の円筒形を呈するもので体部外面をハケ調整する。
須恵器	甌	厚手で、器面全体をロクロナデ調整することを除けば土師器の甌Cと同一の形態をなす。

貯蔵具

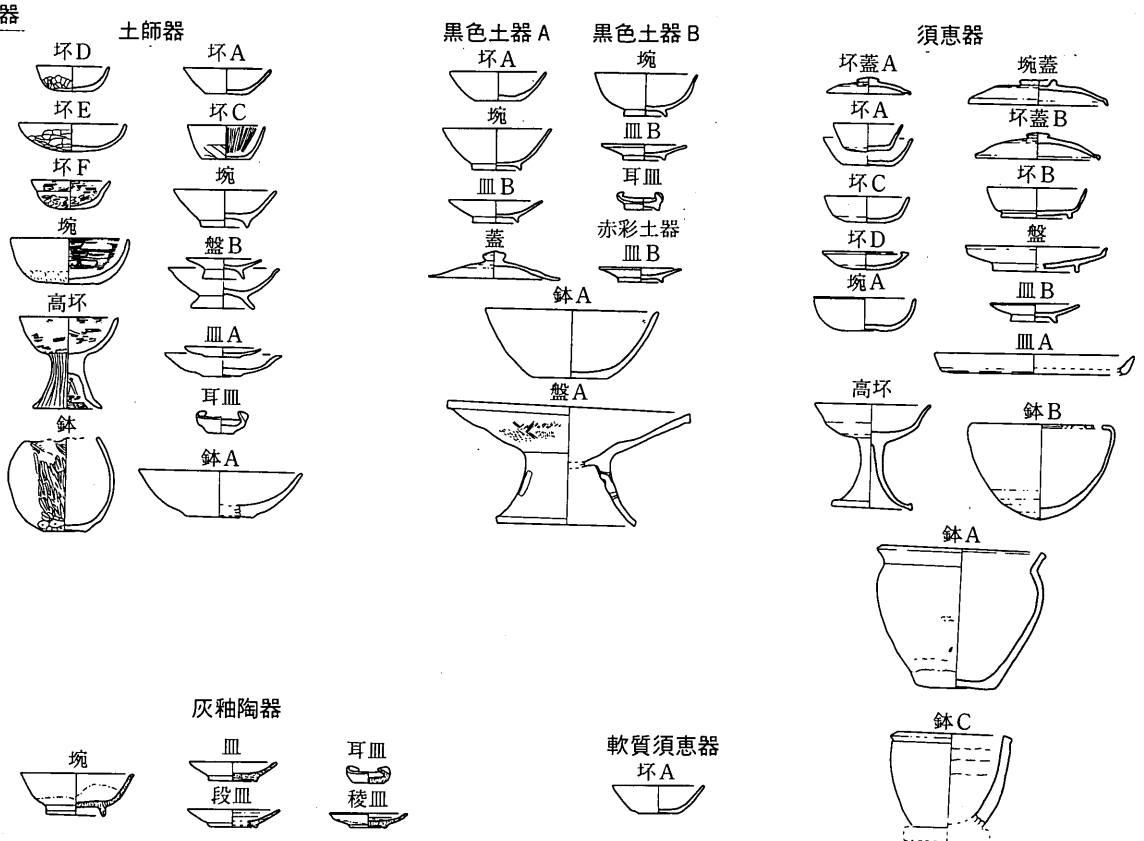
種類	器種名	器種説明
黒色土器B	長頸壺	須恵器・灰釉陶器の長頸壺・小形の広口瓶の形態に類似する。粘土紐積み上げ成形、ロクロ調整で器面をへう磨きで丁寧に磨き黒色処理する。
	短頸壺	須恵器・灰釉陶器の短頸壺の形態に類似する。長頸壺同様、粘土紐積み上げ成形、ロクロ調整で器面をへう磨きで丁寧に磨き黒色処理する。
須恵器	長頸壺A	体部から細い頸部が直立気味に伸びるもので、体部が眼球を呈するものをいう。口縁部で折り返し口縁帯を作る。肩に把手を付するものなどがある。
	長頸壺B	体部は肩の部分で屈曲し、口縁部がラッパ状に開くもの。頸部の接合部分にリング状の凸帯を貼付する。
	長頸壺C	細い胴に緩やかに外反しながら折り返し無く開く口を有する小形の壺。体部・口頸部ともにロクロ目が顕著である。底部に糸きり痕を残す。
	短頸壺A	肩が強く張る短頸壺で高台が付くもの。口縁部は短く直立して端部は丸くおさまられる。蓋と組み合わせとなる。
	短頸壺B	小形の短頸壺、高台は貼付されない。
	短頸壺C	体部がやや長い形態で頸部を直立に立てる。底部は回転糸切り無調整のものが多い。
	短頸壺D	体部の形態は短頸壺Cに類似するが、口縁部で強く外反し口縁帯を作る。
	甕 A	卵形の体部に外反する口頸部を付するもの。
	甕 B	卵形の体部に直立にする短い口頸部を付するもの。形に双耳あるいは四耳を付する。
	甕 C	卵形の体部に強く外反する短い口頸部を付するもの。
	甕 D	平底の甕で肩部に凸帯を回し耳状の突起を付するもの。笹沢浩によって「凸帯付四耳壺」と証されたもの。
	甕 E	肩の張った広口の甕で、肩部やや下に把手を付するものもある。
	甗	体部に注口を有する壺で、一般的呼称に従う。
平瓶	偏平な体部で、口縁部を天井の一方の端に付す。	
水瓶	卵形の体部に細長い口頸部をのせたもの。一般的呼称に従う。	
横瓶	横に長い俵形の体部の横腹に短い口頸部を付するもの。一般的呼称に従う。	
灰釉陶器	長頸壺	一般的呼称に従う。
	短頸壺	一般的呼称に従う。
	平瓶	一般的呼称に従う。
	小瓶	一般的呼称に従う。
	浄瓶	一般的呼称に従う。
	花瓶	一般的呼称に従う。
広口瓶	一般的呼称に従う。	

表9 古代土器の器種分類一覧(3)

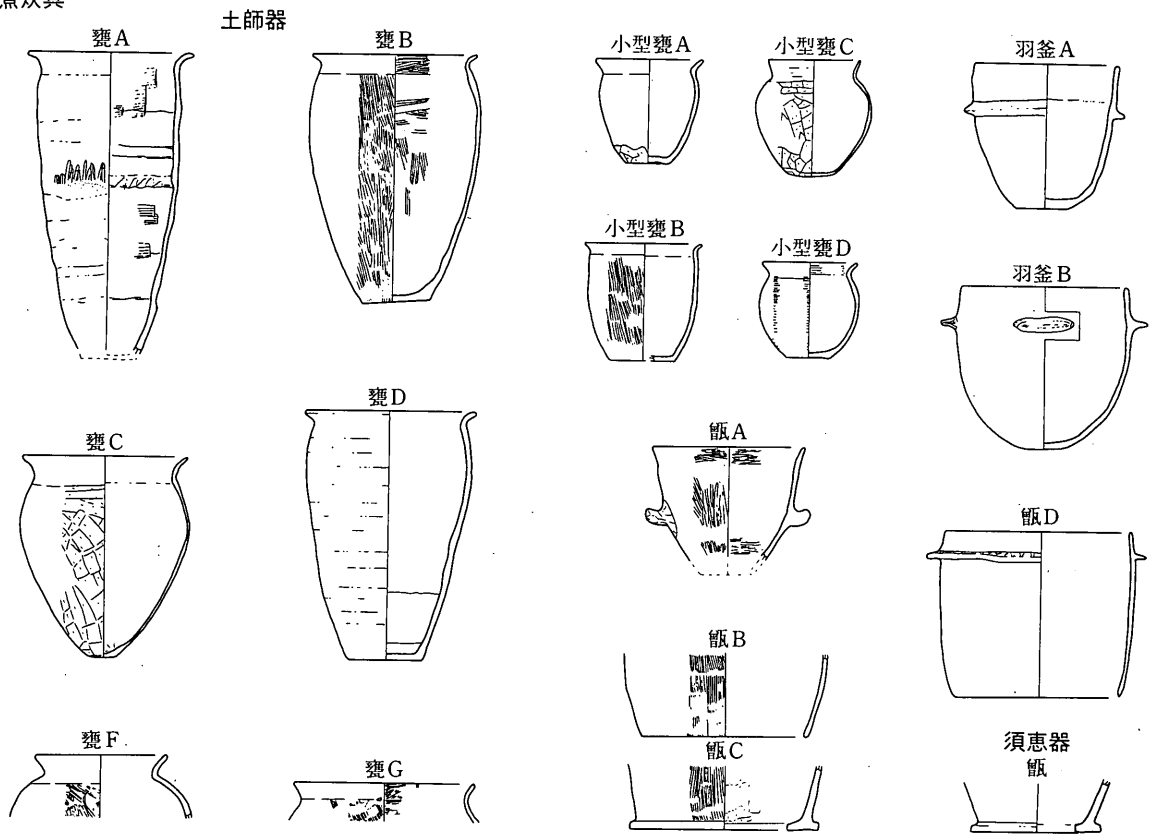
(注) 表7～9及び第107図・108図は以下の文献を引用させていただいた。

「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編」 長野県埋蔵文化財センターほか 1990

食器



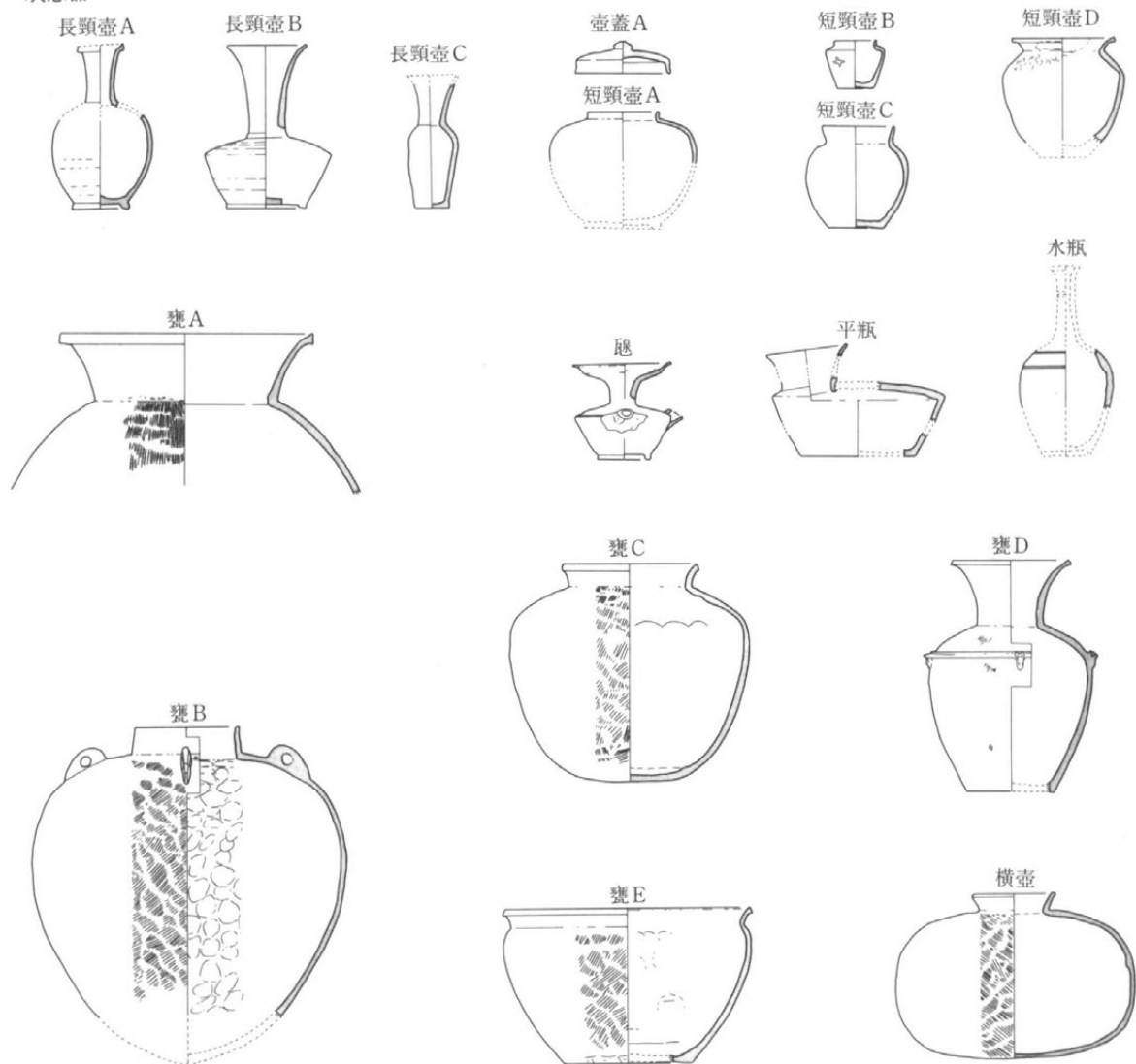
煮炊具



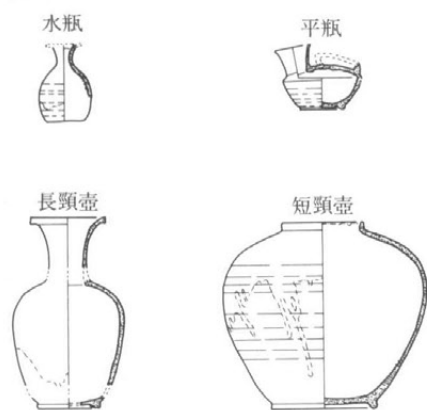
第107図 古代土器の器種分類(1)

貯蔵具

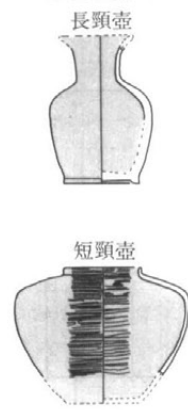
須恵器



灰釉陶器



黒色土器B



長野県埋蔵文化財センターほか1990を再トレース

第108図 古代土器の器種分類(2)

4 四日市遺跡A地区古代土器観察表

A地区

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	焼成	製作技法の特徴	残存率
44-1	SB37 床面	碗	黒色土器A	外) 暗赤褐色		良好	底部回転糸切り、内面ミガキ	1/3
44-2	SB37 覆土	坏A	黒色土器A	褐色		良好	底部回転糸切り、ロクロ痕残	1/4
44-3	SB37 カマド	坏A	土師器	明褐色	黒色粒子を含む	良好	底部回転糸切り、ロクロ痕残	1/5
44-4	SB37 床面	甕D	土師器	外) 暗赤褐色	長石を含む	良好	ロクロ調整	1/8
46-1	SB50 床面	坏A	軟質須恵器	灰色	白色粒子を含む	良好	底部回転糸切り、ロクロ調整、内面にモミ痕あり	完
46-2	SB50 床面	皿B	黒色土器A	外) 明赤褐色		良好	墨書土器「三」	完
46-3	SB50 床面	坏A	黒色土器A	外) 明褐色	長石を含む	良好	底部付近へラ削り、へラ切り、ロクロ調整、墨書土器「三」	2/3
46-4	SB50 床面	皿B	黒色土器A	褐色	長石を含む	良好	底部回転糸切り	完
46-5	SB50 覆土	坏A	黒色土器A	外) 明褐色	長石を含む	良好	底部付近へラ削り、へラ切り、ロクロ調整	2/3
46-6	SB50 床面	小型甕E	土師器	褐色	長石を含む	良好	底部と付近へラ削り、ロクロ調整	完
46-7	SB50 カマド	甕C	土師器	外) 暗褐色	赤褐色長石を含む	良好	内外面へラ削り、武蔵型甕	完
48-1	SB63 床面	坏A	軟質須恵器	灰色	白色粒子を含む	良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	2/3
48-2	SB63 床面	坏A	黒色土器A	外) 褐色	白色粒子を含む	良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	完
48-3	SB63 床面	坏A	黒色土器A	外) 明赤褐色		良好	ロクロ調整	1/2
48-4	SB63 床面	坏A	黒色土器A	外) 赤褐色	白色粒子を含む	良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	完
48-5	SB63 床面	坏A	軟質須恵器	灰色	白色粒子を含む	良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	完
48-6	SB63 床面	坏A	黒色土器A	外) 明褐色	白色粒子を含む	良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	完
48-7	SB63 覆土	坏A	黒色土器A	外) 明褐色		良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	4/5
48-8	SB63 床面	坏A	黒色土器A	外) 暗褐色		良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	1/3
48-9	SB63 床面	坏A	黒色土器A	外) 明赤褐色		良好	底部回転糸切り、ロクロ調整、墨書土器「義」、内面に5条の暗文	2/3

表10 四日市遺跡A地区 古代土器観察表(1)

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	焼成	製作技法の特徴	残存率
48-10	SB63 床面	坏A	黒色土器A	外) 褐色		良好	底部回転糸切り、ロクロ調整、内面に5条の暗文	2/3
48-11	SB63 床面	耳皿	土師器	明褐色	白色粒子を含む	良好	底部に穿孔、糸切り痕わずかに残す	4/5
49-1	SB63 床面	鉢	土師器	明赤褐色		良好	ロクロ調整	1/5
49-2	SB63 覆土	碗	灰釉陶器	灰白色		良好	ロクロ調整	1/5
49-3	SB63 床面	片口鉢	黒色土器A	暗褐色		良好	ロクロ調整、内面ミガキ	1/4
49-4	SB63 床面	鉢A	黒色土器A	外) 暗褐色	白色粒子を含む	良好	ロクロ調整、片口付	1/7
49-5	SB63 床面	片口鉢	黒色土器A	暗褐色	長石を含む	良好	ロクロ調整、内面ミガキ	1/5
49-6	SB63 床面	小型甕D	土師器	明褐色		良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	1/5
49-7	SB63 床面	甕D	土師器	明赤褐色	長石を含む	良好	ロクロ調整	1/3
49-8	SB63 床面	甕D	土師器	明赤褐色		良好	ロクロ調整	1/4
49-9	SB63 床面	甕D	土師器	明赤褐色	長石を含む	良好	ロクロ調整	1/3
49-10	SB63 床面	長頸壺A	須恵器	暗灰色	白色粒子と黒色粒子を含む	良好	ロクロ調整	1/5
49-11	SB63 床面	坏A	黒色土器A	外) 褐色		良好	底部回転糸切り、ロクロ調整、内面に5条の暗文、口縁部内横ナデ	1/2
51-1	SB63 覆土	坏A	軟質須恵器	灰色		良好	ロクロ調整、回転ヘラ切り	2/3
51-2	SB63 覆土	坏A	黒色土器A	外) 褐色		良好	ロクロ調整、底部ヘラ、付近ヘラ削り	1/2
51-3	SB63 床面	皿B	黒色土器A	外) 明赤褐色	雲母片を含む	良好	底部回転糸切り、ロクロ調整、口縁端内横ナデ	完
51-4	SB63 床面	碗	黒色土器A	外) 暗褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整	1/2
51-5	SB63 床面	碗	黒色土器A	外) 暗褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整	2/3
51-6	SB63 覆土	長頸壺A	須恵器	灰色	径1~2mmの砂粒を含む	良好	ロクロ調整	1/5
52-1	SB82 床面	坏A	黒色土器A	外) 赤褐色	茶色粒子を含む	良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	1/2

表11 四日市遺跡A地区 古代土器観察表(2)

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	焼成	製作技法の特徴	残存率
52-2	SB82 床面	碗	黒色土器A	外) 褐色		良好	底部回転系切り、ロクロ調整、墨書土器「?」	1/3
52-3	SB82 床面	皿B	黒色土器A	外) 明褐色		良好	底部回転系切り、ロクロ調整	1/3
52-4	SB82 床面	皿A	黒色土器A	外) 暗褐色	雲母片、長石を含む	良好	底部回転系切り、ロクロ調整、口縁端内横ナデ	完
52-5	SB82 床面	皿B	黒色土器A	外) 褐色	雲母片を含む	良好	底部回転系切り、ロクロ調整	2/3
53-1	SB82 床面	短頸壺	須恵器	灰色		良好	底部回転系切り、ロクロ調整、表面に自然釉の付着が認められる	2/3
53-2	SB82 床面	甕D	土師器	明褐色		良好	ロクロ調整	1/5
42-1	SB106 カマ ド	坏D	土師器	外) 褐色	黒色粒子を含む	良好	体部～底部外へラ削り、口縁部へラミガキ (横方向) 内面横方向のへラミガキ、 黒色処理	2/3
42-2	SB106 カマ ド	坏D	土師器	外) 赤褐色	長石を含む	良好	体部～底部外へラ削り、口縁部へラミガキ (横方向) 内面横方向のへラミガキ、 黒色処理	2/3
42-3	SB106 床面	小形甕E	土師器	暗褐色	白色粒子を含む	良好	底部木葉痕、表面は荒いナデ	2/3
42-4	SB106 床面	甕B	土師器	黒褐色		良好	外) ハケ調整縦方向、口縁部横ナデ、内) ハケ調整横方向、口縁部横ナデ	1/2
42-5	SB106 床面	高坏	土師器	明赤褐色	黒色、茶色粒子を含む	良好	一部黒色処理	2/3
54-1	SK67 床面	甕	土師器	明褐色		良好	外) 底部付近縦へラ削り	1/4
54-2	SK67 床面	甕D	土師器	明褐色		良好	外) 底部及び底部付近横へラ削り	1/3

表12 四日市遺跡A地区 古代土器観察表(3)

B地区

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	焼成	製作技法の特徴	残存率
88-1	SB1 床面	甕B	土師器	褐色	長石を含む	良好	内外面ハケ調整	1/6
88-2	SB1 覆土	坏A	須恵器	外) 黄褐色	長石を含む	良好	ロクロ調整	1/4
88-3	SB1 覆土	甕	須恵器	灰色		良好	ロクロ調整	1/2
88-4	SB1 床面	坏F	土師器	褐色	長石を含む	良好	陵以下手持ちへへラ、以上へラミガキ横方向、黒色処理なし	完
88-5	SB1 床面	坏F	土師器	外) 明褐色	雲母片を含む	良好	陵以下手持ちへへラ、陵以上へラミガキ横方向、内) 黒色処理	4/5
88-6	SB1 床面	坏F	土師器	外) 暗褐色	長石、雲母片を含む	良好	陵以下手持ちへへラ、以上へラミガキ横方向、黒色処理	1/2
88-7	SB1 床面	短頸壺	土師器	褐色	長石を含む	良好	頸部から口縁にかけて横ナデ調整、黒色処理	完
88-8	SB1 床面	短頸壺	土師器	赤褐色	長石を含む	良好	外面ハケ調整、頸～口縁横ナデ調整	完
89-1	SB1 床面	甕B	土師器	暗褐色	赤色粒子を含む	良好	外面ハケ調整	1/6
89-2	SB1 カマド	甕B	土師器	褐色	長石を含む	良好	外面ハケ調整	1/8
89-3	SB1 床面	甕B	土師器	暗褐色	赤色粒子を含む	良好	外面ハケ調整	1/6
92-1	SB4 床面	坏E	土師器	外) 暗赤褐色	長石を含む	良好	外) 胴部以下へラ削り、口縁横へラミガキ、内面横へラミガキ、黒色処理	完
92-2	SB4 床面	坏D	土師器	暗褐色		良好	胴部以下へラ削り、頸部～口縁部横へラミガキ、内) 横へラミガキ	完
92-3	SB4 床面	坏D	土師器	明黄褐色		良好	胴部以下へラ削り、底部へラ削り、口縁付近横ナデ、内) 面横へラミガキ、黒色処理	4/1
92-4	SB4 床面	坏D	土師器	外) 暗褐色		良好	胴部以下へラ削り、頸部～口縁部横ナデ、黒色処理	1/2
92-5	SB4 床面	鉢	土師器	暗赤褐色	長石を含む	良好	頸部～口縁 底部及び周辺へラ削り	4/5
92-6	SB4 床面	鉢	土師器	暗褐色		良好	胴部以下ハケ調整、頸部～口縁横へラミガキ、内) ハケ調整、頸部～口縁横へラミガキ	4/5
92-7	SB4 床面	鉢	土師器	暗褐色	長石を含む	良好	胴部以下ハケ調整、頸部～口縁横へラミガキ、内) ハケ調整、頸部～口縁横へラミガキ	完
94-7	SB4 床面	甕	土師器	暗赤褐色	雲母片を含む	良好	外) 胴部以下へラ削り、口縁横ナデ、内) 胴部以下ハケ調整、頸部に輪積み長残す	完

表13 四日市遺跡B地区 古代土器観察表(1)

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	焼成	製作技法の特徴	残存率
92-8	SB4 床面	鉢	土師器	明赤褐色	雲母片、赤色粒子を含む	良好	内外面横へラミガキ、黒色処理	1/2
92-9	SB4 床面	小型甕E	土師器	外) 暗赤褐色	長石を含む	良好	内面黒色処理、横へラミガキ、口縁付近横ナデ、外面荒いナデ	完
92-10	SB4 床面	鉢	土師器	明赤褐色	雲母片、赤色粒子を含む	良好	胴部以下へラ削り、頸部～口縁部横へラミガキ、内) 横へラミガキ	完
93-1	SB4 床面	甕F	土師器	明黄褐色	雲母片、赤色粒子を含む	良好	内外面へラミガキ、頸部、口縁横ナデ	2/3
93-2	SB4 床面	小型甕B	土師器	暗赤褐色	雲母片、長石を含む	良好	ハケ調整	4/5
93-3	SB4 床面	甕B	土師器	明赤褐色	長石、赤色粒子を含む	良好	内外面ハケ調整、(外縦、内横)、口縁周辺横ナデ	1/3
93-4	SB4 床面	甕B	土師器	褐色	雲母片を含む	良好	内外面ハケ調整、口縁周辺横ナデ	完
93-5	SB4 床面	甕B	土師器	黄褐色	赤色粒子を含む	良好	内外面ハケ調整、口縁周辺横ナデ	完
93-6	SB4 床面	甕B	土師器	黄褐色	雲母片を含む	良好	内外面ハケ調整、口縁周辺横ナデ	完
94-1	SB4 床面	甕B	土師器	暗褐色	長石を含む	良好	内外面ハケ調整、口縁周辺横ナデ	4/5
94-2	SB4 床面	甕B	土師器	黄褐色	長石、赤色粒子を含む	良好	内外面ハケ調整、(外縦、内横) 口縁周辺横ナデ	1/4
94-3	SB4 床面	甕B	土師器	暗褐色		良好	内外面ハケ調整 (外縦、内横)、口縁周辺横ナデ	完
94-4	SB4 床面	甕B	土師器	赤褐色	雲母片、赤色粒子を含む	良好	内外面ハケ調整、口縁周辺横ナデ	2/3
94-5	SB4 床面	甕B	土師器	暗褐色		良好	内外面ハケ調整、口縁周辺横ナデ	完
94-6	SB4 床面	甕	土師器	赤褐色	雲母片、赤色粒子を含む	良好	胴部以下へラ削り、頸部～口縁部横ナデ、内) 横へラミガキ	4/5
96-1	SB6a 床面	坏D	土師器	黄褐色	長石を含む	良好	外) 胴部以下へラ削り、口縁部横ナデ、内) へラミガキ、黒色処理	完
96-2	SB6a 床面	坏D	土師器	赤褐色	雲母片を含む	良好	外) 胴部以下へラ削り、内) 横ナデ	3/4
96-3	SB6a 床面	小型甕B	土師器	黒褐色	長石を含む	良好	内外面縦ハケ調整、口縁部付近横ナデ	完
96-4	SB6a 床面	甕B	土師器	暗褐色	雲母片を含む	良好	内外面縦ハケ調整、木葉痕	1/4
96-5	SB6a 床面	甕B	土師器	黒褐色	長石を含む	良好	外) 縦ハケ調整、内) 横ハケ調整	2/3
97-1	SB6b 床面	坏A	須恵器	灰色		良好	底部回転糸切り、ロクロ調整	2/3

表14 四日市遺跡B地区 古代土器観察表(2)

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	焼成	製作技法の特徴	残存率
97-2	SB6b 床面	坏A	須恵器	灰色	長石を含む	良好	底部回転系切り、ロクロ調整	1/2
97-3	SB6b 床面	坏A	軟質須恵器	灰色	長石を含む	良好	ロクロ調整、底部回転系切り、底部及び付近へラ削り	完
97-4	SB6b 覆土	坏A	黒色土器A	外) 暗褐色	雲母片を含む	良好	底部回転系切り、ロクロ調整	1/2
97-5	SB6b 床面	坏	土師器	赤褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整、底部回転系切り	1/2
98-1	SB6b 覆土	坏A	黒色土器A	外) 赤褐色	雲母片を含む	良好	底部回転系切り、付近へラ削り、ロクロ調整	完
98-2	SB6b 床面	坏A	黒色土器A	外) 赤褐色	雲母片を含む	良好	底部回転系切り、ロクロ調整	1/2
98-3	SB6b 覆土	坏A	黒色土器A	外) 黄褐色	雲母片	良好	底部回転系切り、ロクロ調整	1/2
98-4	SB6b 床面	坏A	黒色土器A	外) 黄褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整、底部端へラ削り、口縁付近横ナデ、内) 胴上部横へラミガキ、胴下部縦へラミガキ	完
98-5	SB6b 床面	坏A	黒色土器A	外) 黄褐色	雲母片を含む	良好	底部回転系切り、付近へラ削り、ロクロ調整	1/2
98-6	SB6b 床面	坏A	黒色土器A	褐色		良好	ロクロ調整、口縁部横ナデ、底部回転系切り	1/4
98-7	SB6b 床面	坏	黒色土器A	外) 赤褐色	雲母片を含む	良好	外) 荒いナデ調整、口縁部横ナデ、底部へラ削り、内) 胴部縦へラミガキ	2/3
98-8	SB6b 床面	坏	黒色土器A	外) 赤褐色	長石を含む	良好	ロクロ調整、底部回転系切り	2/3
98-9	SB6b 床面	皿B	黒色土器B	黒	雲母片を含む	良好	内外面へラミガキ、黒色処理	2/3
98-10	SB6b 床面	鉢A	黒色土器A	黄褐色	雲母片を含む	良好	非ロクロ調整、胴部以下へラ削り、胴より上荒いナデ、内) 横へラミガキ	1/6
98-11	SB6b 床面	長頸壺	須恵器	青灰色		良好	ロクロ調整、底部回転系切り	1/6
101-1	SB7 床面	坏A	黒色土器A	褐色	赤色粒子を含む	良好	ロクロ調整、口縁部横ナデ、底部回転系切り	1/4
101-2	SB7 カマド	坏A	黒色土器A	外) 赤褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整、口縁部横ナデ、底部回転系切り	2/3
101-3	SB7 カマド	坏A	黒色土器A	外) 黄褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整、口縁部横ナデ、底部回転系切り	1/4
101-4	SB7 床面	坏A	土師器	暗赤褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整、口縁部横ナデ、底部回転系切り	1/4
101-5	SB7 カマド	碗	土師器	暗褐色	赤色粒子	良好	ロクロ調整、口縁部横ナデ、底部回転系切り	1/2

表15 四日市遺跡B地区 古代土器観察表(3)

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	焼成	製作技法の特徴	残存率
101-6	SB7 床面	碗	灰釉	灰白色		良好	ロクロ調整	1/5
101-7	SB7 床面	小型甕D	土師器	黄褐色	黒色粒子を含む	良好	ロクロ調整	1/8
101-8	SB7 覆土	小型甕D	土師器	暗褐色		良好	ロクロ調整	1/8
101-9	SB7 覆土	甕D	土師器	黄褐色	長石を含む	良好	ロクロ調整	1/8
101-10	SB7 床面	甕D	土師器	赤褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整	1/5
101-11	SB7 床面	甕D	土師器	赤褐色		良好	ロクロ調整	1/8
102-1	SB7 床面	長頸壺	灰釉陶器	灰白色		良好	ロクロ調整	1/5
104-1	SB14 床面	坏A	軟質須恵器	灰色	雲母片、長石を含む	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り、口縁横ナテ	2/3
104-2	SB14 床面	坏A	黒色土器A	褐色	長石を含む	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	1/3
104-3	SB14 床面	皿B	黒色土器A	褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り、口縁横ナテ	2/3
105-1	竪穴状遺構 床面	皿A ii	土師器	赤褐色		良好	ロクロ調整、底部回転糸切り、片口付	2/3
105-2	竪穴状遺構 床面	皿A ii	土師器	褐色		良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	完
105-3	竪穴状遺構 床面	皿A ii	土師器	明赤褐色	赤色粒子を含む	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	完
105-4	竪穴状遺構 床面	皿A ii	土師器	赤褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	1/2
105-5	竪穴状遺構 床面	皿A ii	土師器	暗褐色		良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	完
105-6	竪穴状遺構 覆土	皿A ii	土師器	赤褐色		良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	2/3
105-7	竪穴状遺構 覆土	皿A ii	土師器	赤褐色	雲母片を含む	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	2/3
105-8	竪穴状遺構 床面	皿A ii	土師器	褐色	長石を含む	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	完
105-9	竪穴状遺構 雑土	羽釜A	土師器	暗褐色	雲母片を含む(極多)	良好	内外面ナテ	1/6
105-10	竪穴状遺構 覆土	坏A	土師器	黄褐色		良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	2/3
105-11	竪穴状遺構 雑土	盤A	土師器	黄褐色		良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	1/4
105-12	竪穴状遺構 床面	耳皿	土師器	黄褐色		良好	ロクロ調整、底部回転糸切り	完

表16 四日市遺跡B地区 古代土器観察表(4)

第6章 自然化学分析

第1節 四日市遺跡A地区における自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長野県小県郡真田町に所在する四日市遺跡は、縄文時代・古墳時代・平安時代に属す遺構が多数検出され、伴出遺物も豊富である。

四日市遺跡A地区では、縄文時代中期の住居址が調査区内に密度高く検出されており、中期末葉の敷石住居址・柄鏡形住居址・土器溜りを示す廃絶住居址などがみられる。伴う土器は加曾利E式及び唐草文系土器が大半を占めるが、僅かに曾利系土器もみられる。遺構検出面には、縄文時代前期の羽状縄文系土器が出土する。これら住居址には埋甕が設置されるものや、動物の焼骨が集中するものなどがある。古墳時代後期の住居址では、鬼高式最終末期の高坏や甕が伴出し、動物の焼骨も検出されている。平安時代の住居址では土師器や須恵器が出土している。

本分析調査では、発掘担当者から示された調査課題について、各課題毎に報告する。なお、動物遺体鑑定については、試料毎の大まかな分類と試料の整備を当社が行い、鑑定と解析は早稲田大学の金子浩昌先生にお願いした。

1 埋甕等の内容物推定

(1) 目的

縄文時代中期の住居址からは、埋甕が設置されている住居址が分析対象として選択された。埋甕に関する報告事例は、木下(1981)で詳細にまとめられているが、その機能・用途については呪術としての胎盤収納または胎児・幼児の埋葬施設の可能性が指摘されている。また、古墳時代後期(鬼高式最終末期)の住居址から出土した埴の内容物について興味を持たれている。

そこで、今回はこれらの土器を対象として、内容物の検討を目的とするリン・カルシウム分析を行い、埋甕および埴の用途に関する情報を得る。

(2) 試料

分析試料は、発掘担当者により採取された10点(試料番号1~10:当社が便宜上付した)である(表1)。このうち、縄文時代の埋甕は第80号・第81号・第98号の各住居址、屋外埋甕1及び2、古墳時代の埴は第106号住居址、対象試料は基本土層II層・III層から採取された。なお、第98号住居址は祭祀に関係すると考えられている柄鏡型住居址である。

試料の土質は、埋甕より採取された試料が黒~黒褐色を呈する埴壤土、埴より採取された試料が黒褐色の埴壤土、基本土層試料が黒色あるいは黒褐色の埴壤土である(表17)。

(3) 分析方法

測定方法は、土壤標準分析・測定法委員会(1986)、土壤養分測定委員会(1981)、京都大学農学部農芸科学教室(1957)などを参考にした。以下に操作行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法

試料番号	調査地点	採取位置
1	基本土層	II層
2	基本土層	III層
3	屋外埋甕1 (縄文中期)	埋甕内
4	屋外埋甕2 (縄文中期)	埋甕内
5	第80号住居址 (縄文中期) 埋甕	埋甕内
6	第81号住居址 (縄文中期) 埋甕	埋甕内
7	第98号住居址 (縄文中期)	覆土 (II層)
8	第98号住居址 (縄文中期)	覆土 (III層)
9	第98号住居址 (縄文中期) 埋甕	埋甕内
10	第106号住居址 (古墳後期) 埴	埴内

表17 四日市遺跡A地区のリン・カルシウム分析試料一覧

(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO₃)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑圧剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

なお、土壤中に普通含まれるリン酸量、いわゆる天然賦量については、いくつかの報告事例がある(Bowen, 1983; Boit・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)。これら事例から天然賦存量上限値は約3.0P₂O₅mg/gを上限とし、6.0P₂O₅mg/g前後の値を越える場合は外部からリン酸が富化されたものと判断される。

一方、カルシウム含量の天然存賦量は、藤貫(1979)では1~50CaOmg/gと報告されているが、その範囲はリン酸よりも大きく富化の判断が難しい。したがって、絶対量からの指摘は難しく、ここでも基本土層をベースに比較した。

(4) 結 果

結果を、表18に示す。

・リン酸：基本土層II層・III層の含量(試料番号1・2)は、7.00P₂O₅mg/g前後であり、天然存賦量よりも高い。この基本土層と各試料の含量値を比較すると、古墳時代の第106号住居址の埴の土(試料番号10)を除いて、同等あるいは高い含量値を示す。特に、第98号住居址の埋甕内(試料番号9)では高い含量が認められる。

・カルシウム：基本土層の含量(試料番号1・2)は、9.0CaOmg/g前後であり、他の試料も同等あるいは高い含量値を示す。リン酸含量値の高い第98号住居址の埋甕内(試料番号9)ではカルシウム含量値も高い。

(5) 考 察

リン酸含量は、古墳時代の第106号住居址より出土した埴の内部の土壤が天然存賦量の上限值に近い他は、天然存賦量より高い値を示す。これより、各試料ともリン酸の富化が想定される。

また、基本土層のII層やIII層よりも高いリン酸・カルシウム含量値を示す試料は、第98号住居址の埋甕であった。これより、第98号住居址の埋甕にはリン酸とカルシウムの両成分を多く含む物質の痕跡が指摘され

試料 番号	調査地点・試料採取位置		リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性
1	基本土層	II層	7.37	9.08	10YR2/1黒・CL
2		III層	6.86	8.02	10YR2/2黒褐・CL
3	屋外埋甕1 (縄文時代中期)		6.96	10.46	10YR2/2黒褐・CL
4	屋外埋甕2 (縄文時代中期)		6.84	7.83	10YR2/2黒褐・CL
5	第80号住居址 (縄文時代中期)	埋甕 埋甕内	6.34	10.46	10YR2/2黒褐・CL
6	第81号住居址 (縄文時代中期)	埋甕 埋甕内	7.54	10.10	10YR2/2黒褐・CL
7	第98号住居址	覆土 (II層)	9.17	10.95	10YR2/1黒・CL
8	(縄文時代中期)	覆土 (III層)	8.88	9.92	10YR2/2黒褐・CL
9		埋甕・埋甕内	11.00	12.11	10YR2/2黒褐・CL
10	第106号住居址 (古墳時代後期)	埴・埴内	3.60	9.02	10YR2/2黒褐・CL

土 色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

土 性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。

CL…埴壤土（砂よりも土を多く感じる）

表18 四日市遺跡A地区のリン・カルシウム分析結果

る。これは、埋甕が埋葬施設として機能していた可能性を指示する結果と言える。

なお、今後は分析事例の蓄積を行うとともに、より細密な立体的（3次元的）試料採取によって局所的な成分濃集部分を抽出することが必要である。また対象試料となる基本土層の土壌も、リン酸の自然存賦量幅を把握する意味において多地点での試料採取が望まれる。

2 古墳時代および平安時代のカマドの燃料材推定

(1) 目 的

検出された各時代の住居址のうち、第63号（平安時代）と第106号（古墳時代後期）の住居址が選定され、カマド内の焼土から燃料に用いた材料を調べる。

カマドや炉などで植物が燃料材として用いられた場合には、焼土や灰に比較的熱に強い植物珪酸体が組織片の形で残留している例が多い（例えば、佐瀬、1982；大越、1985）。また、植物珪酸体はイネ科植物の種類（Taxa）ごとに特有な形質を持つことから、燃料材として利用されたイネ科植物が推定できる。

そこで、各時期の燃料材（特に、イネ科植物）利用に関する推定を試みる。また、栽培植物の産状に留意し、各時期の栽培植物に関する情報も得る。

(2) 試 料

分析試料を表19に示す。第63号住居址カマドの焼土は、カマドの底部より採取された暗赤褐色の粘土混じり砂質シルトで、炭化物を含む。一方、第106号住居址石組カマドの焼土は、開口部付近の焼土と灰が認められる部分から採取された灰褐色の砂混じりシルトで、炭化物を含む。なお、対照試料として基本土層II層およびIII層を選択した。

(3) 分析方法と結果の表示方法

湿重3g前後の試料について、過酸化水素水（H₂O₂）・塩酸（HCl）処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリウラックスで封入しプレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡下で前面を走査し、その間に出現す

試料番号	調査地点	採取位置
1	基本土層	II層
2	基本土層	III層
3	第63号住居址（平安）カマド	焼土
4	第106号住居址（古墳）石組カマド	焼土

表19 四日市遺跡A地区の植物珪酸体分析試料一覧

るイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

今回は、前記した目的に対応するため、とくにイネ科葉部短細胞列や葉身機動細胞列などの組織片に注目して分析を行った。

検出された植物珪酸体の出現傾向から生育していたイネ科植物について検討するために、植物珪酸体組成図を作成した。各種類 (Taxa) の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。なお、計測数が短細胞珪酸体では200個未満、機動細胞珪酸体では100個未満の試料については組成を歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず出現した種類を+で示すにとどめた。

なお、近藤・佐瀬（1986）の方法は、植物体に形成される植物珪酸体全てを同定の対象とし、種類毎の出現率から過去の植生や栽培植物の有無を推定するものである。

(4) 結 果

結果および植物珪酸体組成を表20・第109図に示す。組織片は、基本土層（試料番号1・2）および平安時代および古墳時代のカマド焼土（試料番号3・4）でイネ属短細胞列が認められる。特に、平安時代の第63号住居址カマド（試料番号3）では検出数が多く、イネ属機動細胞列もわずかに認められる。

また、各試料からは単体の植物珪酸体が検出され、保存状態は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体とともに良好である。基本土層では、II層（試料番号1）・III層（試料番号2）ともにイネ属機動細胞珪酸体やイチゴツナギ亜科短細胞珪酸体が多産し、キビ族、タケ亜科、ヨシ族、ウシクサ族などが伴出する。これに対して、第63号住居址カマドの焼土（試料番号4）ではイネ属やヨシ属などの短細胞珪酸体が認められるが、機動細胞珪酸体は全く検出されない。

(5) 考 察

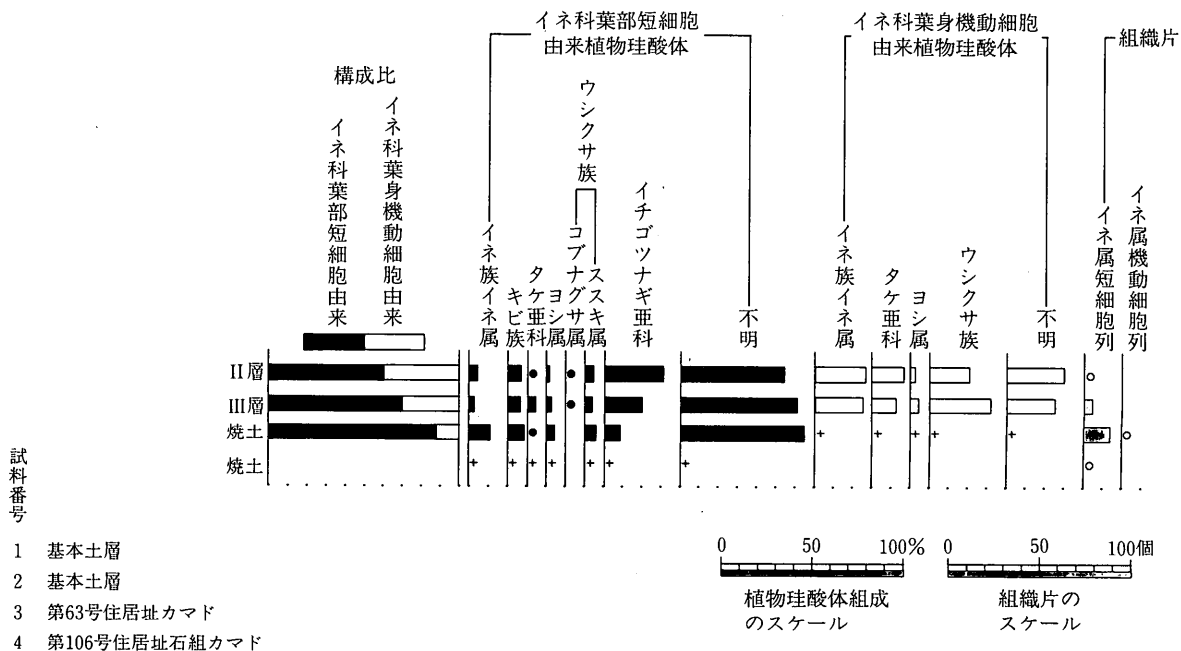
平安時代とされる第63号住居址カマドの焼土は、基本土層と比較して、イネ属短細胞列が多かった。この組織片の産状から、カマドではイネ属が燃料材として利用された可能性が考えられる。また、検出数が少ないことから、燃料材の灰がそのままカマド内に残留していたとは考えにくい。試料採取位置の問題もあろうが、燃焼後の灰や焼土は、カマド外に廃棄したのかもしれない。また、イネ属の植物体（イナワラ）を燃やしたとしても十分な火力が得られるとは考えにくく、イネ属以外の草本類や樹木の使用も考慮しておく必要がある。

なお、焼土から検出された単体の植物珪酸体の種類は基本土層で検出された種類と同様であることから、周辺の土壌と共にカマド内に混入したものと思われる。

一方、古墳時代の第106号住居址石組カマドの焼土では、基本土層と同様な組織片の産状であった。これより、検出されたイネ属が燃料材として利用されたものか否かの判別はつかない。

種類 (Taxa)	試料番号			
	1 II層	2 III層	3 63号住	4 106号住
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	9	5	26	2
キビ族	13	13	20	4
タケ亜科	1	8	2	2
ヨシ属	3	4	6	10
ウシクサ族コブナグサ属	1	1	—	—
ウシクサ族ススキ属	8	8	10	5
イチゴツナギ亜科	72	51	12	7
不明キビ型	64	54	60	22
不明ヒゲシバ型	29	40	26	22
不明ダンチク型	38	45	50	17
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	42	28	9	—
タケ亜科	24	14	2	—
ヨシ属	3	3	1	—
ウシクサ族	32	35	9	—
不明	44	26	11	—
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	238	229	212	91
イネ科葉身機動細胞珪酸体	145	106	32	0
検出個数	383	335	244	91
組織片				
イネ属短細胞列	1	2	12	1
イネ属機動細胞列	—	—	1	—

表20 四日市遺跡A地区の植物珪酸体分析結果



第109図 四日市遺跡A地区の基本土層とカマド焼土での植物珪酸体組成および組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、各珪酸体の●○は1%未満、+はイネ科葉部短細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料で出現した種類を示す。また、組織片の●は1個体を示す。

ところで、植物珪酸体から燃料材を推定した例として、多摩ニュータウン遺跡の焼土の調査(佐瀬、1982)や千葉県印旛村平賀遺跡群から検出された炉址焼土を対象とした調査(大越、1985)がある。多摩ニュータウン遺跡の焼土調査によれば、古墳時代には炉用にススキなどのキビ亜科植物が選択的に利用されたことが推定された。また、平賀遺跡群の調査によれば、炉址内の焼土からイネ科植物葉部の組織片が多く検出され、縄文時代早期から奈良時代までは燃えつきやすく火力の強い竹亜科が、古墳時代から奈良時代までにはススキ属やイネ属が多く使用されたと推定されている。いずれの遺跡でも、周辺の生育していた植物や栽培植物を燃料材に利用している。今回の場合も、平安時代住居のカマドでは栽培植物が利用されていることが示唆された。今後は、本地域での燃料材の種類や利用の実態を明らかにするために、調査例を蓄積する必要がある。

なお、基本土層Ⅱ層・Ⅲ層では、イネ属機動細胞珪酸体が多産し、30%近い出現率を示す。現在のイナワラ堆肥連用(8年間、500kg/10a/年)の水田土壌表層では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%を示す(近藤、1988)とする調査例がある。これと比較しても、今回の出現率は高いと言える。ただし、水田や畑などの遺構との関連について、現段階では不明である。なお、これらの層が堆積する間に、イチゴツナギ亜科、キビ属、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ属などのイネ科植物が生育していたと思われる。

3 土器胎土分析

(1) 目 的

一般に土器の研究は、文様や形態などの外見的特徴を基準とした型式学的な研究が進められており、現在では縄文土器などは非常に精細な解析が行われている。しかし、最近の考古学では、より実証的な研究が重視されていることから、土器研究においても型式学とは別な側面からの検証が必要とされている。土器を材質の面から捉えようとする胎土分析は、そのような土器研究の中で有効な方法の一つとされている。胎土は型式と同様に土器の性質を表すから、ある程度まとまった個体数の中で胎土の状況(例えば類似した胎土が多いとか異質な胎土が少数あるとかというような状況)を把握し、胎土と出土遺跡、時代、型式、器種とを比較することで、土器の製作や流通を考える手がかりを得ることができる。また、胎土を構成する粘土や砂などは、採取された地域の地質学的な背景が反映されているため、その特徴を捉え、既存の地質学的な情報と比較することにより、土器の地域性について客観的な情報を得ることができる。本分析はこのような解析を目指していく。

(2) 試 料

試料は、四日市遺跡から出土した土器40点である。このうち縄文時代前期の土器が3点、加曽利E式を中心とする縄文時代中期終末の土器が30点、古墳時代鬼高最終末の土師器が2点、平安時代の土師器が4点、同時代の須恵器が1点、の合計40点である。各試料の試料番号や出土位置、型式などは、分析結果を呈示した図2に併記する。

(3) 分析方法

本分析の試料である縄文時と土師器は、その外見とこれまでの分析例から胎土内に含まれる重鉍物組成を胎土の特徴として代表させることが適当である。また、縄文土器では、当社にも重鉍物分析を用いた胎土分析結果が蓄積されている。以下に分析処理手順を示す。

試料は、適量をアルミナ性乳鉢を用いて粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm-1/8mmの粒子をポリタンクス

テン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物のプレパラートを作成した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定流数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

(4) 分析結果

1) 重鉱物組成の分類

40点の試料のうち、試料番号24のみが100粒以上の重鉱物を得ることができなかった。この試料については考察から除外し、結果を表5に呈示するにとどめた。さらに他の39点の試料の分析結果も表5に示し、さらに重鉱物組成を図示した(図2)。この状況から、本分析試料の胎土の重鉱物組成は、以下のように整理される。

・ a 型

斜方輝石と角閃石を主体とする組成。斜方輝石の方が多い試料がほとんどであるが、両者が同量程度になるものもある。微～少量の単斜輝石と不透明鉱物を伴うものが多い。a型のうち角閃石に酸化角閃石を比較的多く含む組成をa'とし、角閃石が少量で微量の緑レン石を伴う組成をa''とした。

・ b 型

斜方輝石と単斜輝石の両輝石を主体とする組成。微～少量の角閃石を含む。単斜輝石は、斜方輝石に比べると少量であるが、a型の量比に比べるとかなり多い。少量の角閃石が酸化角閃石になっている組成をb'とし、「その他」が非常に多い組成をb''とした。

・ c 型

角閃石を主体とする組成。少量の斜方輝石と不透明鉱物を伴う。酸化角閃石を含むものをc'とし、さらに「その他」が非常に多いものをc''とした。

・ d 型

「その他」が多く、少量の量輝石、角閃石、ジルコン、不透明鉱物を含む。

2) 時代別にみた胎土の状況

・ 縄文土器

もっとも試料数の多い加曾利E式19点のうち半数以上の11点がa型を示す。残り8点は、bおよびb'型が4点、c型が2点、d型が各1点である。加曾利E式の中で、埋甕とそれ以外の土器との間に胎土との相関関係は認められない。また、同様に敷石住居址出土とそれ以外の住居址出土の土器との間にも、胎土との相関関係は認められない。

唐草文系土器の試料番号5はa型とc型の間隔的な組成を示し、曾利系土器の試料番号27はc型を示す。また、唐草文系土器の試料番号11は、加曾利E式に多いa型の組成を示す。

一方、在地のものと考えられている土器溜まり出土土器の8点は、全てc型(c'型、c''型含む)の組成を示し、a型の多い加曾利E式とは対照的である。

前期の羽状縄文系の土器3点は、2点がa型、1点がa''型である。

・ 古墳時代土師器

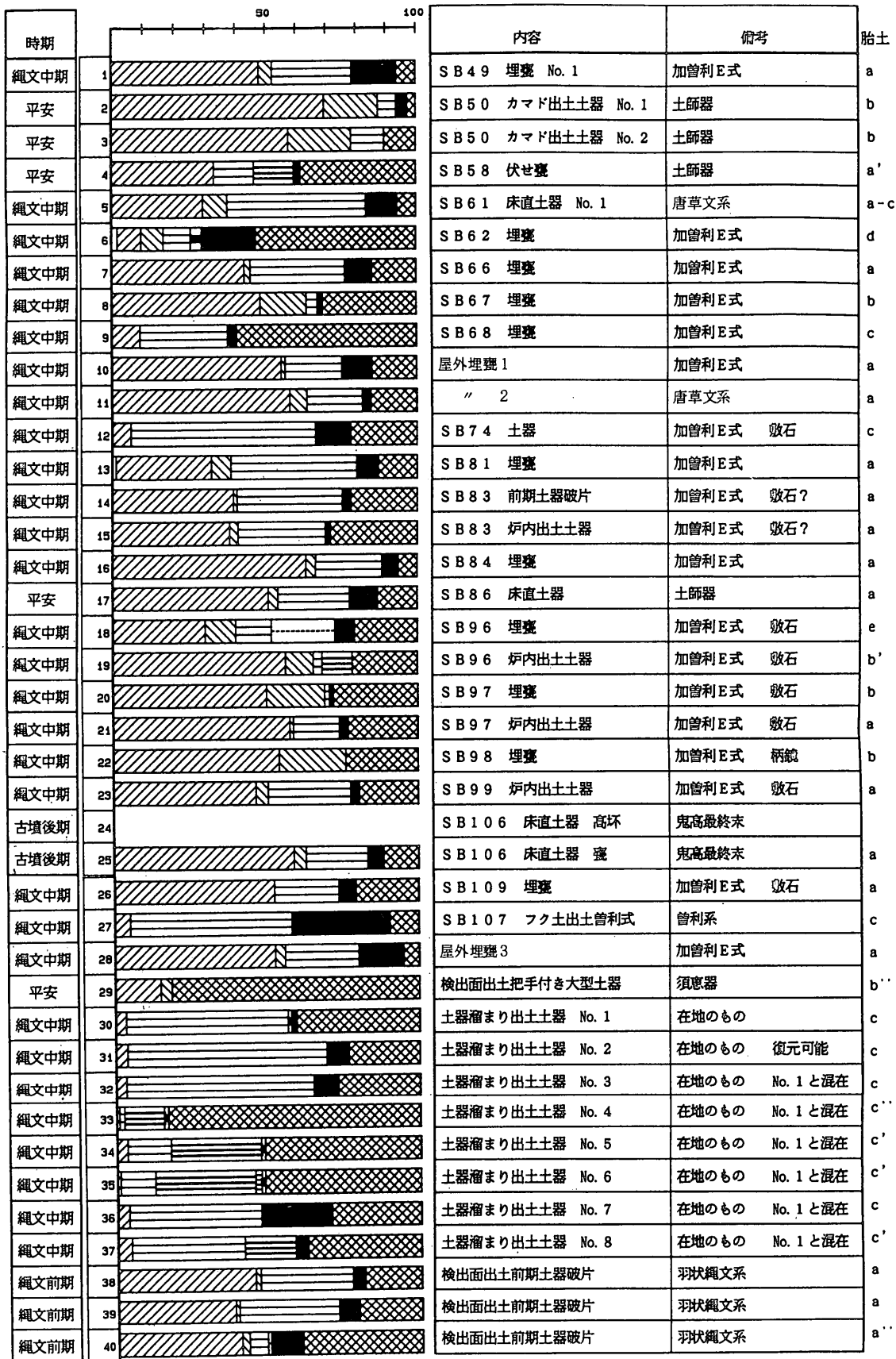
組成が得られたのは試料番号25の1点のみである。これは、a型の組成を示す。

・ 平安時代土師器

4点の試料のうちカマド出土の2点はb型を示し、伏せ甕はa'型、床直土器はa型を示す。

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	不透明鉱物	その他	同定鉱物粒数
1	0	120	11	66	0	0	0	0	0	37	16	250
2	0	174	45	15	0	0	0	0	0	9	7	250
3	0	100	36	19	0	0	0	0	0	1	17	173
4	0	83	2	33	33	0	0	0	0	5	94	250
5	0	74	20	115	0	0	1	0	0	25	15	250
6	5	19	18	21	1	0	9	0	0	44	133	250
7	0	108	5	78	0	0	0	0	0	22	37	250
8	0	121	38	9	0	0	0	0	0	4	78	250
9	0	23	1	70	1	0	2	0	0	7	146	250
10	0	138	3	47	0	0	1	0	0	25	36	250
11	0	145	14	44	2	0	1	0	0	7	37	250
12	2	15	0	151	0	0	0	0	0	29	53	250
13	3	77	16	104	0	0	1	0	0	18	31	250
14	0	98	3	86	1	0	1	0	0	7	54	250
15	0	95	7	72	0	0	0	0	0	4	72	250
16	0	158	8	55	0	0	0	0	0	13	16	250
17	0	127	8	58	1	0	2	0	0	23	31	250
18	0	33	11	13	0	0	0	0	23	7	23	110
19	0	141	23	7	25	0	0	0	0	0	54	250
20	0	125	48	4	0	0	0	0	2	3	68	250
21	0	144	3	38	0	0	0	0	0	7	58	250
22	0	135	55	1	0	0	0	0	0	0	59	250
23	0	116	10	67	1	0	1	0	0	7	48	250
24	0	22	2	12	0	0	0	0	0	1	27	64
25	0	147	10	51	0	0	0	0	0	13	29	250
26	0	131	2	53	0	0	0	0	0	14	50	250
27	0	13	0	131	1	0	0	0	0	81	24	250
28	0	131	8	61	0	0	0	0	0	37	13	250
29	0	37	9	1	0	0	2	0	0	1	200	250
30	0	9	1	132	0	0	3	0	0	4	101	250
31	0	10	1	162	1	0	1	0	0	18	57	250
32	0	9	0	153	0	0	1	0	0	20	67	250
33	0	3	0	4	32	0	3	0	0	0	208	250
34	0	9	0	35	74	1	3	1	0	0	127	250
35	0	3	1	28	82	5	3	0	0	0	128	250
36	0	10	0	108	0	0	2	0	0	58	72	250
37	0	12	1	92	42	0	0	0	1	10	92	250
38	0	113	4	76	0	0	0	0	0	10	47	250
39	0	96	3	81	1	0	0	0	0	17	52	250
40	0	101	6	13	2	0	1	0	3	26	98	250

表21 四日市遺跡A地区 土器胎土重鉱物分析結果



1 2 3 4 5 6 7 8 9 凡例
 1. カンラン石 2. 斜方輝石 3. 単斜輝石 4. 角閃石 5. 酸化角閃石
 6. ジルコン 7. 緑泥石 8. 不透明鉱物 9. その他の鉱物

第110図 四日市遺跡A地区 出土土器胎土重鉱物組成

・平安時代須恵器

試料番号29の1点のみである。組成はb型を示す。

(5) 考 察

1) 胎土中の重鉱物と周辺地質

四日市遺跡が位置する洗馬川と神川の沖積低地を取り囲む山地の地質は、山岸(1964)(1988)に詳しい。それらによれば、沖積低地を三方から取り囲む山地のうち北側と西側は横尾層と呼ばれる凝灰岩層からなり、東側は烏帽子岳火山の裾野に相当する。また、横道より上流の洗馬川左岸には石英閃緑岩からなる貫入岩体が広く分布する。横尾層の凝灰岩は、変質を受けており、斑晶はほとんど石英と斜長石からなる。ここでいう重鉱物は斑晶には含まれず、緑レン石や緑泥石などの変質鉱物が認められている。烏帽子岳は、両輝石安山岩質および両輝石角閃石安山岩質の噴出物からなる。さらに洗馬川上流の石英閃緑岩には、角閃石が主な斑晶として含まれる。これらの岩石学的記載を考慮すると、a型が多くかつc型が在在とされている四日市遺跡出土の土器胎土の状況は、周辺地質をよく反映しているとみることができる。すなわち、a型からe型までの胎土の多様性は、真田町を遠く離れた地域まで考えなくても説明ができてしまう。ただし、実際には、遺跡周辺域の砂や粘土等の自然堆積物および周辺遺跡の出土の土器の分析結果を得た上で、土器の地域性を判断しなければならない。

2) 胎土の状況から示唆されること

本分析試料の中で最も点数の多い縄文時代中期の土器に注目すると、結果で述べたように加曾利E式と土器溜まり出土の在在とされる土器との胎土が、互いに異なる組成であり、しかもそれぞれのグループは極めて似かよった組成でまとまる。すなわち、文様の地域性と胎土との相関がうかがえる。仮に、両方の土器が同時に存在していたものであるならば、そこにはなんらかの要件が存在したと考えられる。また仮に、前述のように全ての胎土が真田町周辺域に由来するものであるとすれば、次に述べるような状況が想定される。加曾利E式に多いa型およびb型の胎土は烏帽子岳噴出物に由来するから、その材料の採取地神川の左岸側から洗馬川の神川との合流点より下流の左岸域に求めることができる。これに対して、c型の胎土は洗馬川上流地域に材料の採取地がある可能性が高い。したがって、どちらの土器も四日市遺跡で製作されたという場合には、外見上や強度あるいは耐久性、採取場所と集団のテリトリーの関係などという事情により、2種の土器の材料の使い分けが行われていたのかもしれない。また、単純に加曾利E式は四日市遺跡では作られず全て搬入品であったということも考えられる。さらに、加曾利E式と在在とされた土器の間には、時間的な差があったことも考えられる。この場合は、使い分けではなく、上記のような事情で土器の材料を全面的に変更したことになる。本事例はこの時間差によるものであると考えられる。

ところで、信州が分布の中心域とされている曾利系の土器に在在と同じcが認められること、縄文時代とおそらく生産体制が異なっていたと考えられる古墳時代や平安時代の土器が加曾利E式と同じa型またはb型であることなども、ここで取り上げた縄文時代中期の土器胎土の変異を考える際のヒントとなっているのかもしれない。現段階では、どの推定も根拠のない想像の域を出ないが、今後の真田町および周辺域の遺跡発掘調査の進展により多くの情報が蓄積されれば、上述の想像も具体性を帯びてくるのではないだろうか。

4 動物遺体鑑定

早稲田大学 金子浩昌

(1) 試 料

試料は、四日市遺跡の4件の住居址から選択された。48号・69号・98号が縄文時代中期、106号が古墳時代

後期とされている。

各住居址毎の試料や数量はまちまちで、保存状態も差がある。また、98号住居址は柄鏡型住居址で、骨の出土位置も記録されている。

(2) 鑑定結果

1) 縄文時代の動物遺体

この時代の動物遺体はすべて強く火を受けて灰白色を呈し石灰化するものであった。骨に焼きしまりが生じており、また変形も生じていた。そのために接合修復ができなくなっている骨もあり、原形の詳細を知ることが難しくしている。以下、各住居址毎に結果を示す。

・第48号住居址

イノシシ *Sus scrofa*

頭蓋骨前頭骨：左右、眼か部および頭頂骨片 年齢8ヵ月

下顎骨：右 下顎枝2、骨体部破片 年齢8ヵ月

上腕骨頭：左

これらは同一個体のもと思われる。

・第69号住居址

ニホンジカ *Cervus nippon*

下顎骨 顎骨：左、破片

・第98号住居址

イノシシ *Sus scrofa*

環椎：成獣

頭蓋骨：側頭骨（一部）と側頭骨頬骨突起左、頬骨側頭突起左

橈骨：右、ほぼ完存、ただし遠骨端は外れているらしい。

ニホンジカ *Cervus nippon*

角：破片1

柄部付け根出土

イノシシ *Sus scrofa*

環椎：破片

頬骨突起：右

涙骨：右（前頭骨含む）

上顎骨：歯根の一部を残す小破片

ニホンジカ *Cervus nippon*

後頭顆：右

基節骨：完

第98号住居址（柄部付け根）の標本はいずれも大型の成獣個体及びヒトのものである。しかし標本として確認できたのは上記のもののみであり、部位も揃わないことから、骨は元位置から移動しているものであろう。

北端部出土

最も多くの焼骨が検出されている。

イノシシ *Sus scrofa*

頸椎片 1、腰椎片 1
前頭骨と頭頂骨：左
頭頂骨：左右 2
頭頂骨：右
涙骨と前頭骨頬骨突起：左右各 1 別個体
上顎骨：破片
下顎骨：右、4 個の破片、年齢 8 ヶ月
下顎骨：右、関節突起部、年齢 8 ヶ月
下顎骨：右 2、下顎枝部片
下顎骨：左、下顎枝部片
肩甲骨：右、首部破片、幼獣
上腕骨：右、遠位骨端部
寛骨：左、臼部片
膝蓋骨：破片
脛骨：左、遠位骨端部 脛骨破片

ニホンジカ *Cervus nippon*

角片：左右、分岐部
基節骨：遠位骨端部
仙骨：破片
寛骨：右、頸部
腰椎

ヒト *Homo sapiens*

頭蓋部：頭頂骨から後頭骨部分を残す破片である。頭蓋骨はこの部分以外の骨は確認されていない。少なくともこの場所に完全な頭蓋が当初からあったとは考え難い。つまり焼かれた骨の一部がここに運ばれている可能性があるものといえよう。さらに人骨は頭蓋以外の骨は確認されていない。

2) 縄文時代の焼骨について

本遺跡の住居址から出土した焼骨はイノシシとニホンジカ *Cervus nippon* のものと人骨であったが、それぞれに興味ある在り方を示しており、本遺跡の動物遺体の特徴ともいえよう。

イノシシ *Sus scrofa*

本遺跡においてもっとも多く検出され、第48号住居址においては頭蓋と下顎骨の1個体分が、第98号住居址では5個体になる頭蓋と下顎骨があり、四肢骨が少数であった。そのすべてが生後8ヵ月前後の生育状態のものであった。このことから、本遺跡ではこうした個体の骨を何らかの意図を持って焼くということが行われ、特に頭骨に対して顕著で、四肢骨あるいは胴骨についてはその一部に対して行われたと思われる。

第98号住居址ではこれより大型の個体の側頭骨部分があったが、それは一点のみであったし、別に頬骨部分の破片、上顎骨の破片が各一点あった。四肢骨で大型の成獣個体を推定させる骨はほとんどなかったのである。

ニホンジカ *Cervus nippon*

本種で確認されたのは少なく、第98号住居址の角片と断片的な四肢骨5～6点である。頭蓋骨はこれも断片が1点あったのみである。少なくともイノシシと同じような扱い方は稀であった。明らかにイノシシとシカとは区別された扱い方があったに相違ないのである。

筆者はこれまでに縄文時代遺跡から出土する焼骨について多くの例をみてきたが、上述の標本を見て直ちに連想するのは、同じ長野県の戸倉町円光房遺跡と、山梨県の金生遺跡例である。参考のため、両遺跡について若干触れておく。

<長野県埴科郡戸倉町円光房遺跡>

1987年に調査。縄文時代前期諸磯b期の焼土を伴う遺構中にイノシシの頭蓋22個があり、そのいずれもが生後半年前後のものであった。標本は本遺跡の様相と酷似するもので、前頭骨から頭頂骨、側頭骨頬骨突起部を残していた。この遺構が何らかのイノシシにかかわる祭祀の場所になっていたことは明らかである。

<山梨県北巨摩郡大泉村金生遺跡>

縄文時代前期から晩期に及ぶ遺構が知られ、特に晩期の巨大な配石遺構を伴う遺跡である。1980年調査。このうちの第29号住居址の床面に検出されたP i t中から138個体分のイノシシの下顎骨が検出され、このうち115個体分が生後半年前後のものであった。このP i t内には焼土がつまり、このなかで骨が焼かれたことを示していた。

このほかにもイノシシの若い個体の遺骸が焼けている例はあり、共通した扱いがあることを指摘していた。そして、それらがイノシシの狩猟にかかわる信仰の現れであろうと考えている。本例がそうしたものの一つであり、興味ある一例を加えることができたものと考えている。なおこの焼骨の意義については、既に詳細を述べたことがあるのでそれに譲りたい。

3) 古墳時代の動物遺体

・第106号住居址

ニワトリ *Gallus gallus domesticus*

寛骨：右、臼部周辺を残す。標本は大型のもので、当時のニワトリの形態を知る良い資料である。

ニホンジカ *Cervus nippon* :

角：角幹部破片 4

橈骨：右、骨幹部破片

シカorニホンジカ椎体：3

古墳時代のカマド内出土の焼骨については、これまでに調査された例はごく少ない。本例は検出された動物遺体の種類も少なく、情報量としては限られた内容であるが、調査例として注目される。とくにニワトリの検出はこの時代の資料が少なく、貴重である。

獣骨にシカの角があったが、特別な意図があったのであろうか。橈骨や椎骨があるので、カマド近くで獣の解体などが行われたのであろう。

第2節 四日市遺跡B地区における自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

四日市遺跡では、これまで縄文時代中期に属する埋甕の内容物や古墳・平安時代のカマドで利用された燃料材の推定、土器胎土分析、動物遺体の鑑定を目的とした自然科学分析調査が行われ、当時の生活を推定する上での情報が得られている。

今回、さらに当該期の燃料材や土器内容物に関する資料を蓄積するために、自然科学分析調査(植物珪酸体・動物遺存体鑑定)を実施することとした。

なお、今回の植物珪酸体分析では組織片の産状にとくに注目した。これは、組織片や燃料材や内容物自体に由来するのに対して、組織片とともに産出する単位の植物珪酸体の由来が植物体にあるのか、周囲の土壤にあるのかの判別がつきにくいためである。以上より、本報文では、繁雑をさけるため組織片の産状のみを表化した。

調査項目	袋No.	地点・遺構名	時代	試料名	備考
対照試料	1	基本土層		A地点II層 B地点II層 C地点II層	縄文覆土
内容物の推定	2	1号住居址	古墳後期	No.2 内部	広口壺(直立)
	3	4号住居址	古墳時代後期 鬼高式	No.1(頸部) No.1(底部)	長胴甕(直立)
				No.3	広口壺(倒置)
				No.6	長胴甕(倒置)
				No.7	長胴甕(倒置)
				No.8(口縁部) No.8(胴部) No.8(底部)	広口壺(逆位)
				No.9(口縁部) No.9(底部)	小型甕(倒置)
				No.10内部	鉢(倒置)
				No.11	一孔甕(倒置)
	4	4号住居址	古墳時代後期 鬼高式	No.13(口縁部) No.13(胴部) No.13(底部)	長胴甕(倒置)
				No.14(口縁部) No.14(胴部) No.14(底部)	長胴甕(倒置)
				No.15(口縁部) No.15(胴部) No.15(底部)	長胴甕(倒置)
				No.16(口縁部) No.16(胴部) No.16(底部)	長胴甕(倒置)
No.17(口縁部) No.17(胴部) No.17(底部)				広口壺(倒置)	
No.20				長胴甕(倒置)	
5	4号住居址	古墳時代後期 鬼高式	貯蔵穴覆土 貯蔵穴1層 貯蔵穴2層 貯蔵穴3層	焼土層	
7	6a号住居址	古墳時代後期	No.3(胴上部) No.3(胴下部) No.3(底部)	長胴甕(直立)	
			No.4(口縁部) No.4(底部)	小型甕(直立)	
			No.15	坏(直立)	
9	19号住居址	縄文前期	No.1	深鉢(倒置)	
10	12号土坑	不明	1層 2層		
合 計				45点	

試料の表記および添付試料をもとに作成した

表22 四日市遺跡B地区の分析試料一覧(1)

1 調査課題

B地区から検出された遺構・遺物を対象として、次の調査課題を設定した。

(1) 土器および貯蔵穴の内容物推定

B地区からは、縄文時代、古墳時代、平安時代の各時期に属する住居址が検出され、土器を伴うものも認められた。これらの土器の内部には土が充填しており、内容物の残留が期待された。また古墳時代の4号住居址では土器を包蔵する貯蔵穴が検出されている。

そこで、これらの土器や貯蔵穴の内容物、特にイネ科作物の有無などに関する情報を得ることとした。そのため、前述したように組織片の産状に注目した。

(2) 炉・カマドの燃料材推定

調査区の住居址には炉あるいはカマドが検出されており、燃料材の痕跡が残留していることが期待された。そこで、燃料材、特にイネ科草本類の種類を明らかにするために、植物珪酸体分析を行う。イネ科草本類の灰には特徴的な植物珪酸体を含む組織片が数多く認められるためである。

2 試料

分析試料を表22・23に示す。

土器および貯蔵穴の内容物推定で用いる分析試料は、縄文時代の19号住居址、古墳時代の1号・4号住居址、古墳時代の6a号住居址から出土した土器、および貯蔵穴の内部の土壌、時期不明の19号土抗の覆土とある。このうち、縄文時代の19号住居址では横転して潰れた状態の深鉢が検出されている。古墳時代の1号住居址

ではカマド付近に完形の
広口壺が検出されている。
4号住居址では、床面で
広口壺や長胴甕、甌、鉢、
坏など、貯蔵穴内には長
胴甕や広口壺が出土して
いる。6a号住居址では
カマド付近に坏や甕が直
立していた。12号土抗で
は、覆土1層および2層
から試料が採取された。

また、カマド・炉の燃
料材推定で用いる試料は

縄文時代前期（黒浜式）の15号住居址の炉、古墳時代の1号・
4号住居址のカマド、6a号住居址のカマドから採取された。

なお、対照資料として調査区内の3ヵ所（A・B・C地点）
に認められた基本土層II層より土壌が採取された。

調査項目	袋No.	地点・遺構名	時代	摘要	備考
燃料材の 推定	2	1号住居址	古墳時代 後期	カマド覆土 カマド4層 カマド5層 カマド6層	
	5	4号住居址	古墳後期 鬼高式	カマド3層 カマド7層	焼土あり
	6	6a号住居址	古墳時代 後期	カマド2層(覆土) カマド6層 カマド7層	
	8	15号住居址	縄文時代 前期 黒浜式	炉覆土 炉焼土 炉体土器(口縁部) 炉体土器(胴中位) 炉体土器(最下層部)	深鉢底無(倒置)
合 計				14点	

試料の表記および添付試料をもとに作成した

表23 四日市遺跡B地区の分析試料一覧(2)

種類 試料番号	A地点 II層	B地点 II層	C地点 II層
組 織 片			
イネ属短細胞列	3	2	1
不明組織片	9	34	11

表24 基本土層II層の組織片

3 分析方法

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超

音波処理、沈定法、重液分離法の順に物理・科学処理を行い、植物珪酸体を分離濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プレウラックスで封入しプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査して、試料中の組織片の有無を調べる。組織片が認められれば、組織片中のイネ科葉部短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体の分類（近藤・佐瀬、1986）を参考にして同定する。結果は、組織片の種類とその検出個数の一覧表で示す。

4 土器の内容物推定

(1) 組織片の産状

結果を表24に示す。

対照試料としたA・B・C地点の基本土層II層では、いずれもイネ属短細胞列と植物珪酸体を含まない不明組織片が認められる（表24）。

一方土器内部重填試料および貯蔵穴覆土試料、土坑覆土試料では各試料で基本土層と同様にイネ属短細胞列や不明組織片が認められる（表25）。

古墳時代後期（鬼高式）の4号住居址より出土したNo.1（頸部）やNo.11・20、6a号住居址より出土したNo.3（同上・下部）からは稲稈に形成されるイネ属類珪酸体やイネ属機動細胞列も認められるが、その検出個数は少ない。また、土器の底部からは6a号住居址のNo.3を除いて、イネ属などの栽培植物の組織片はほとんど検出されない。

また、4号住居址の貯蔵穴覆土では不明組織片が認められるに過ぎない。縄文時代前期とされる12号土坑ではイネ属短細胞列と不明組織片がわずかに認められる。

(2) 考察

縄文時代前期とされる19号住居址から出土した土器内には、イネ属の組織片が認められた。この土器は横転して潰れた状態で出土していた。土器の年代観や、出土状況から、内部に充填された土

種類	1号住		4号住									
	No.2		No.1		No.3	No.6	No.7	No.8		No.9		
試料番号	頸部	底部	頸部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	底部
組織片												
イネ属類珪酸体	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ属短細胞列	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ属機動細胞列	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明組織片	2	2	—	2	—	—	—	4	—	—	12	4

種類	No.10		No.11			No.13			4号住			No.15		
	内		口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部
組織片														
イネ属類珪酸体	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ属短細胞列	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ属機動細胞列	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明組織片	4	11	1	—	—	—	20	9	19	23	20	28		

種類	No.16			No.17			No.20	貯蔵穴				
	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	覆土	1層	2層	3層		
組織片												
イネ属類珪酸体	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
イネ属短細胞列	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ属機動細胞列	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明組織片	8	4	14	7	—	6	8	7	4	11	6	

種類	6号住						19住土器内部	19号土坑	
	No.3		No.4		No.15	1層		2層	
試料番号	胴上	胴下	底部	口縁	底部				
組織片									
イネ属類珪酸体	7	6	—	—	—	—	1	—	
イネ属短細胞列	4	2	1	—	—	—	2	1	
イネ属機動細胞列	2	2	—	—	—	—	—	—	
不明組織片	87	21	6	4	1	26	14	2	

表25 四日市遺跡B地区の土器・貯蔵穴・土坑より検出された組織片

種 類	1号住 カマド				4号住 カマド		6号住 カマド			炉		15号住 炉体土器			
	試料番号	覆土	4層	5層	6層	3層	7層	2層	6層	7層	覆土	焼土	口縁	胴中	最下
組 織 片															
イネ属珪酸体	-	-	3	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	2	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明組織片	5	-	1	2	30	5	8	1	1	13	15	7	15	4	

表26 四日市遺跡B地区の炉・カマドより検出された組織片

壤は上位の表土層などからの流入の可能性もある。

古墳時代後期（鬼高式）の4号住居址より出土したNo.1（頸部）やNo.11・20、6号住居址より出土したNo.3（胴上・下部）からは稲稈に形成されるイネ属珪酸体やイネ属機動細胞列も認められた。4号住居址のNo.1は直立、No.11・20は倒置、6号住居址のNo.3は直立の状態出土しているため、上位の土壌が混入した点は否めない。しかし、基本土層には認められない組織片であり、土器内に稲稈などがもともと存在したことを示しているのかもしれない。

今回の調査では、出土状況が明確にされている点、同じ土器内充填土でも採取位置を変えている点により、栽培植物の有無に関する情報が明確に捉えられた。今後、同様な試料採取方法を行うことで、さらに有効な試料の蓄積がされると思われる。

5 燃料材の推定

(1) 組織片の産状

結果を表26に示す。炉・カマド試料からは、不明組織片が普遍的に認められる。また、古墳時代後期（鬼高式）のカマド試料からは、イネ属珪酸体やイネ属短細胞列がわずかに認められるものもある。

(2) 考 察

縄文時代前期（黒浜式）の炉の焼土や覆土、炉体土器内からは不明組織片が認められ、何らかの植物が燃料材として利用された可能性が考えられる。

また、古墳時代後期（鬼高式）のカマド覆土からはイネ属に由来する組織片が認められたことから、イナワラなどが燃料材に利用されたと思われる。

なお、検出個数が少なかったのは燃焼後の灰を掻き出し、外部へ廃棄したためかもしれない。

古墳時代のカマドで利用された燃料材の種類は前回の調査と同様であり、イナワラの利用が普通に行われていたことを示すのかもしれない。また、真田町の同時期の集落遺跡である境田遺跡ではイネ属やスキ属の利用が考えられる。なお、これらの種類以外の利用も考えられるので、今後もカマド覆土を対象とした調査や炭化材の調査を進めて資料を蓄積し、検討する必要があると思われる。

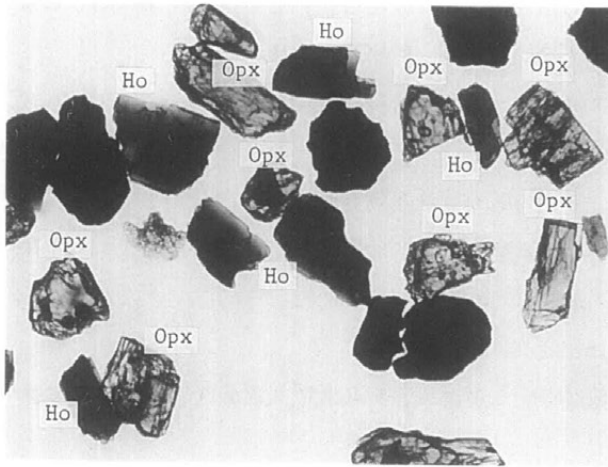
<引用文献>

天野洋司・大田 健・草場 敬・中井 信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, P.28-36

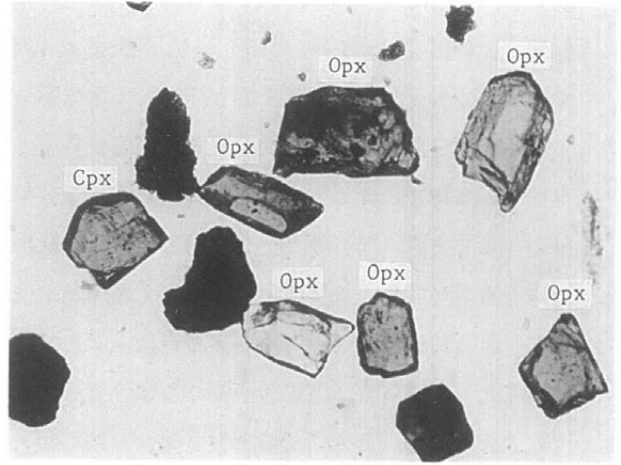
Bowen,H.J.M. (1983) 環境無機化学 一元素の循環と生化学一。浅見輝男・茅野充男訳, 297 P., 博友社,

[Bowen,H.J.M. (1979) 1 Environmental Chemistry of Elements 0].

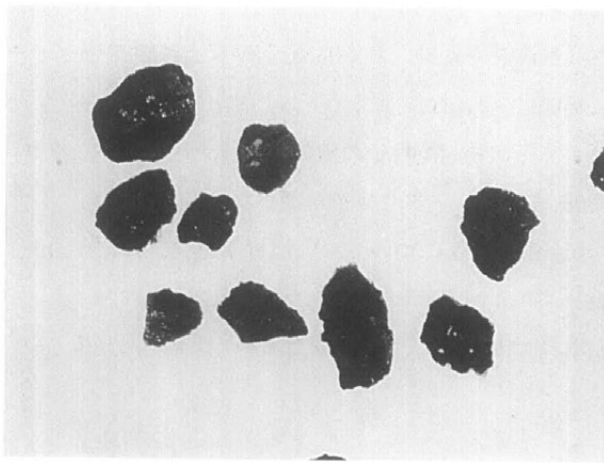
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M. (1980) 土壌の化学. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 309 P., 学会出版センター, [Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M. (1976) 1 SOIL CHEMISTRY 0.]
- 土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法. 354 P., 博友社.
- 土壌養分測定法委員会編 (1981) 土壌養分分析法. 440 P., 養賢堂.
- 藤貫 正 (1979) カルシウム. 地質調査所化学分析法, 50, P. 57-61, 地質調査所.
- 川崎 弘・吉田 滯・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149 P. : P. 23-27.
- 木下 忠 (1981) 埋甕—古代の出産習俗. 考古学選書18, 262 P., 雄山閣.
- 近藤錬三 (1988) 十二遺跡の植物珪酸体分析. 鋳師屋遺跡群十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書, P. 377-383, 御代田町教育委員会.
- 近藤錬三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, P. 31-64.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻. 411 P., 産業図書.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- 大越昌子 (1985) プラント・オパール分析. 平賀遺跡群発掘調査報告書, P. 803-815, 平賀遺跡調査会.
- ペドロジスト懇談会編 (1984) 土壌調査ハンドブック. 156 P., 博友社.
- 佐瀬 隆 (1982) 古墳時代住居址の炉に関する焼土について, —植物起源粒子の植物珪酸体から見て—. 東京都埋蔵文化財センター調査報告書 (第2集), P. 303-308, 多摩ニュータウン遺跡調査会.
- 山岸猪久馬 (1964) 長野県上田市北方の地質—とくに緑色凝灰岩類について—. 地質学雑誌, 70, P. 315-338.
- 山岸猪久馬 (1988) 5.4那須火山帯南端部の火山. 日本の地質「中部地方I」編集委員会編「日本の地質4 中部地方I」, P. 203-204.



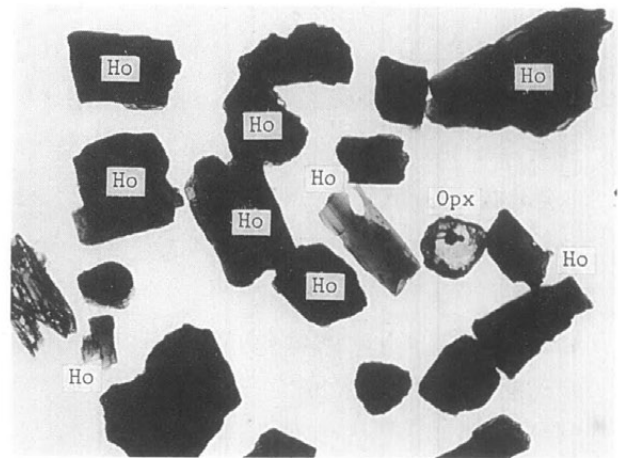
1. 試料番号38 (a型)



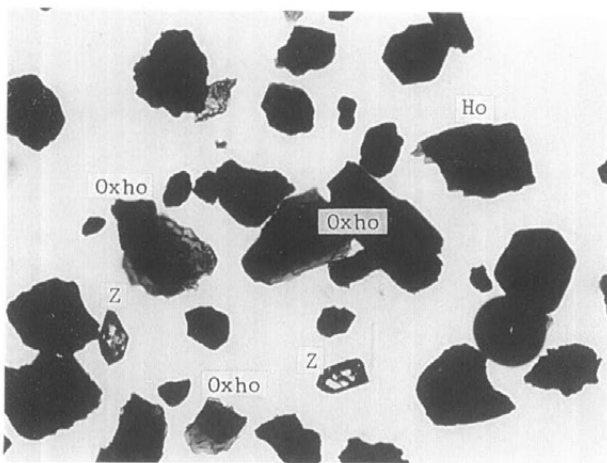
2. 試料番号22 (b型)



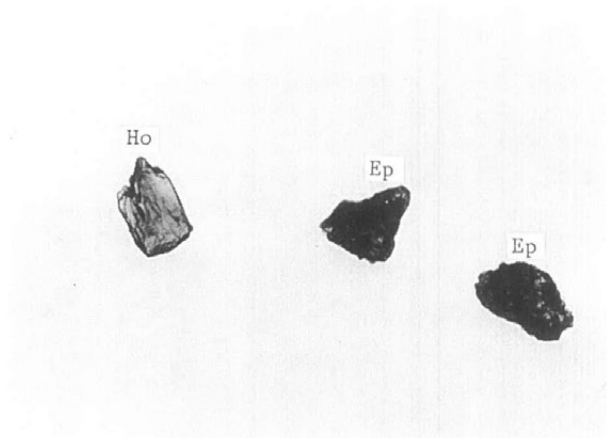
3. 試料番号29 (b'型)



4. 試料番号31 (c型)



5. 試料番号34 (c'型)



6. 試料番号18 (e型)

0.5mm

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Oxho: 酸化角閃石, Z: ジルコン, Ep: 緑レン石,

写真図版 土器胎土中の重鉱物

第7章 調査の成果と課題

第1節 四日市遺跡A地区

1 縄文時代

(1) 縄文時代中期末葉土器群について

四日市遺跡A地区は1989年に第1次調査が行なわれ、縄文時代中期後葉の集落址が検出された。この調査の報告書（真田町教委1990）中で、百瀬忠幸氏はその際に出土した中期後葉の土器群について1～4段階の段階設定を行なっている。

本遺跡から出土する土器には、加曾利E式土器、唐草文系土器、圧痕隆帯文系土器、曾利系土器などがみられる。百瀬氏はこれらの中心的位置を占める加曾利E式土器、唐草文系土器の2者を四日市遺跡の土器群総体の変遷の基軸に据えて段階設定を行なった。その際、唐草文系土器の細分について、長野県山形村殿村遺跡の報文中で自らが行なった段階設定を援用している。この殿村遺跡、四日市遺跡での百瀬氏の分析作業は、それまで他の土器型式との併行的細分が主流であった唐草文系土器について、唐草文系土器内部からの段階設定、さらに地域差を含む実相把握を目指すものであった。

今回はその段階表に新たに検出された資料を加えて土器群の検討を行ないたいと思う。

四日市遺跡第1段階

本段階は前回の調査では資料数に乏しく、全体像については不明な部分があったが、今回の調査で若干の資料を得ることができた。53号住居址（土器溜まり）出土資料を第1段階に加えたいと思う。第111図-31・32は唐草文系土器の典型で、断片的な資料ではあるものの、交互刺突のみられる口縁部区画文や、隆帯による複合渦巻文、また、精緻なつくりの把手をもつといった特徴から、おおよそ殿村遺跡第7段階に位置づけられるのではなかろうか。殿村遺跡第7段階は四日市遺跡第1段階と対応している。また、27・28のように頸部が無文となる唐草文系土器と加曾利E2式の折衷的な資料とみられるものもあり、興味深い。

それからSB60出土土器（第17図）をこの段階にあてよう。頸部無文帯をもつ加曾利E式土器が床面直上でみられる。頸部無文帯は加曾利E2式の指標とされているので、それに対応する本段階に所属させたい。なお、伴出した底部破片には網代痕がみられる。

前回不明であった加曾利E式土器の存在が明らかになり、在地の形式として唐草文系土器と加曾利E式土器が融合を図る様子をうかがうことができよう。

四日市遺跡第2段階

この段階にはSB49（E3古）、SB61（E3新）、SB80、SB81（E3古）、屋外埋甕1、屋外埋甕2（E3古）の出土資料があたる。

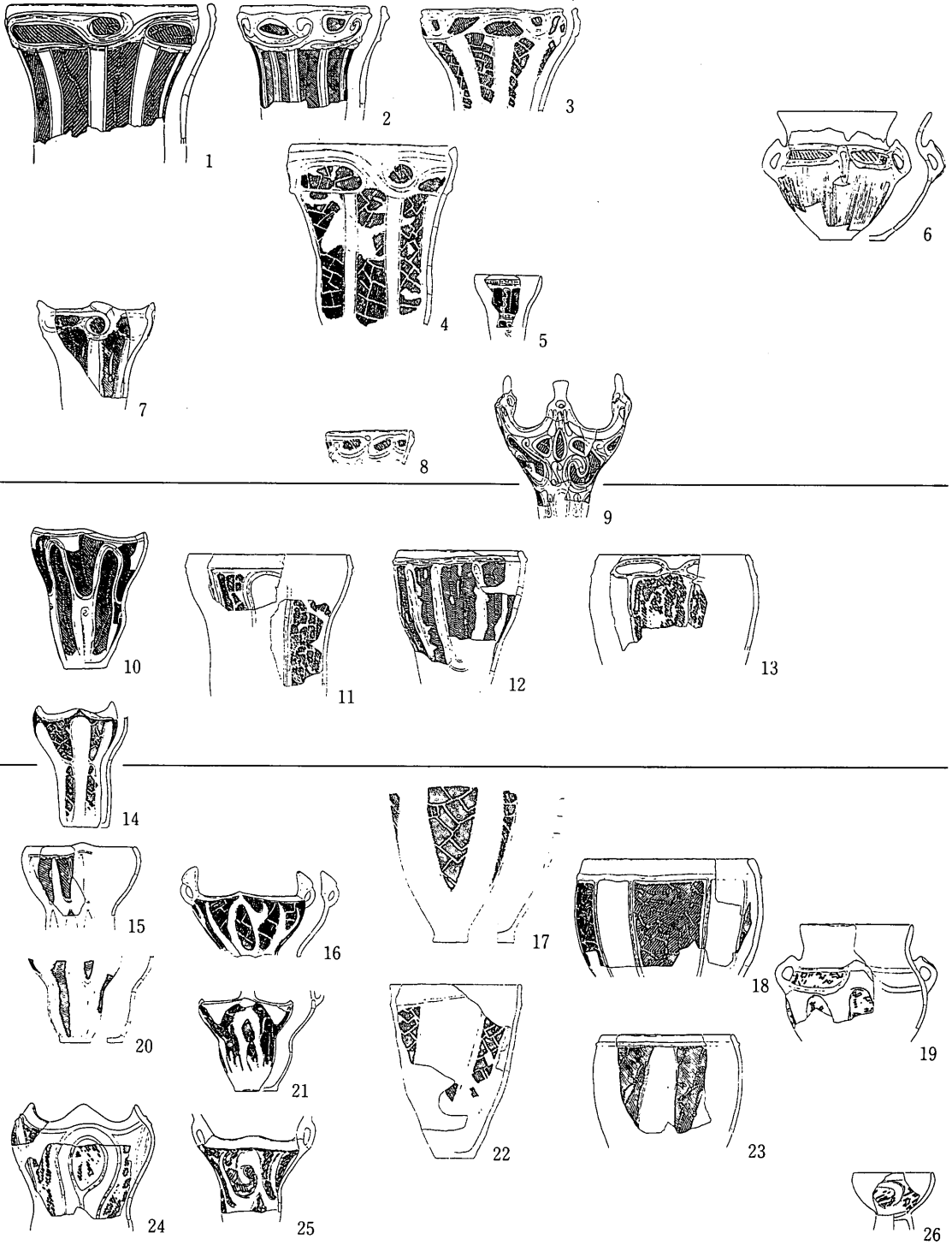
第1段階と比べると加曾利E式土器の出土が顕著になる。この傾向は前回の調査と同様である。この段階は加曾利E3式に併行する段階であるが、例示した加曾利E式の殆どはE3式中段階くらいに位置するものであろうか。口縁部文様帯に渦巻文や楕円文、胴部に縦位の縄文帯と無文帯が交互に施文するものがみられる。SB61出土の加曾利E3式土器（第111図-8）は胴部以下を欠失しているが、縄文帯と無文帯を構成する

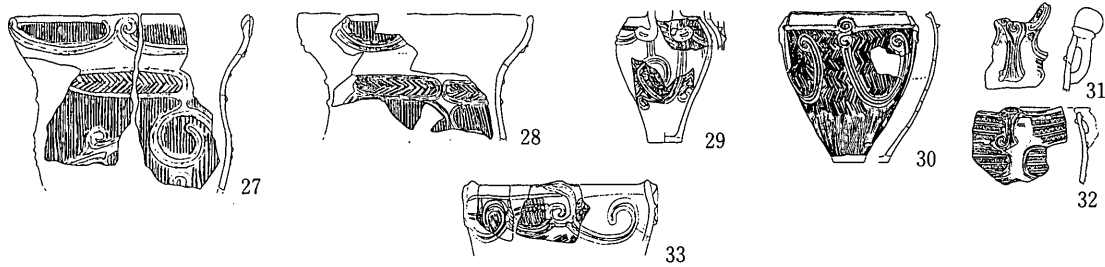
第1段階

第2段階

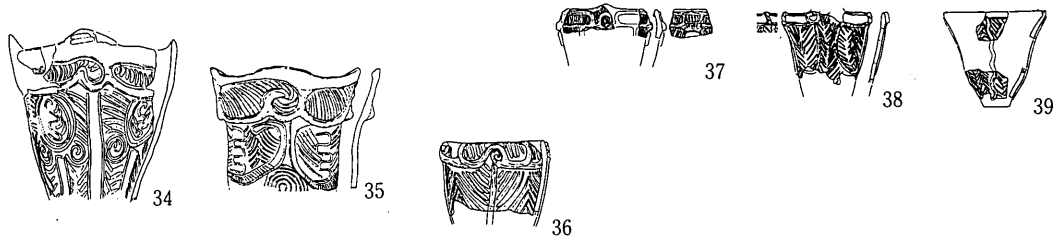
第3段階

第4段階

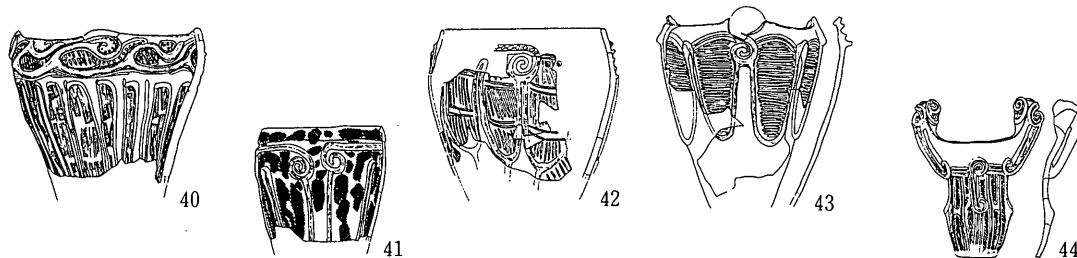




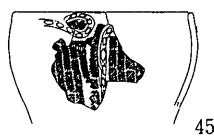
殿村第5・7段階



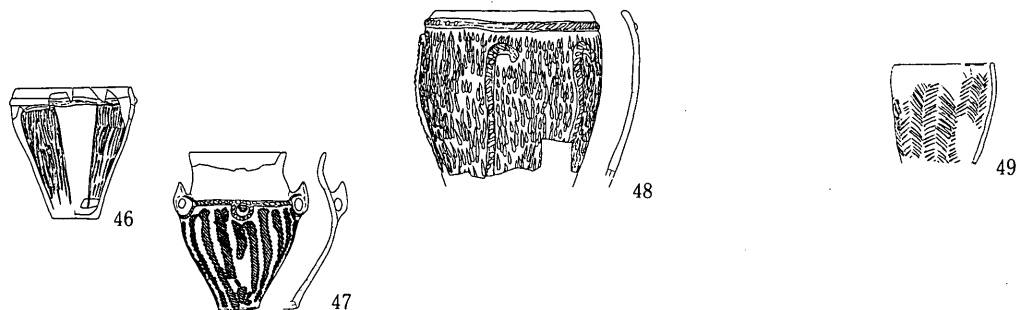
殿村第8・9段階



殿村第10・11段階



殿村第12段階



殿村第13段階 古・新

(百瀬1990を改変)

第111図 四日市遺跡における縄文時代中期後葉の土器変遷

懸垂文が逆U字状を呈するとみられることからE3式のなかでも新しい時期のものと思われる。よってこの資料には第2段階（新）という位置を与えよう。

一方の唐草文系土器であるが、口縁部文様帯に加曾利E式の影響がみられるものが認められるなど、当遺跡における唐草文系土器の在り方を考える上で興味深い現象である。資料はSB80(第111図-35)と屋外埋壘2(第111図-34)で良好な完形資料を得ることができた。両資料とも胴部の沈線による渦巻文などの特徴から殿村遺跡における第9段階の時期を与えたい。SB80出土資料は胴部の大ぶりの渦巻文が形骸化している姿をうかがうことができ、若干時期が新しくなるかもしれない。

また、一对の精緻な把手を有する土器も存在する(第111図-44)。口縁部に幅広の無文帯、胴部には矢羽根状の文様が縦位の区画帯のなかに充填され、渦巻状の突起が装着される。SB61での伴出関係により、当段階に位置づけた。

四日市遺跡第3段階

今回はこの段階に位置すると考えられる良好な完形資料は見当たらなかった。強いて言えば第4段階に位置づけたSB96出土の埋壘(第111図-14)の文様がこの段階の要素を強く残しているといえよう。

この段階は加曾利E4(古)式に併行するもので、波状の沈線文や逆U字状の懸垂文が特徴になる。また、胴部に幅広の縦位の縄文帯と無文帯を有するようになるものもある。また、唐草文系土器は量的にも希薄となり、衰退の一途をたどる。他に前回の調査で圧痕隆帯文系土器(第111図-45)の存在が確認されている。

四日市遺跡第4段階

この段階にはSB48、SB109、SB96、SB97、SB98、SB62出土資料をあてよう。おおむね加曾利E4(新)式以降の一群である。検出された敷石住居址出土資料はおおむねこの段階に位置づけられる。この段階とした資料の中にはあきらかに加曾利E4(新)式とは一線を画すべきものも含まれる。後期称名寺I式との関係など未だ問題を内包していることや筆者の力量不足から今回は新たな段階設定は見送りたい。今後の課題と言えよう。

加曾利E式土器についてはV字状文やW字状文、渦巻状の縄文帯のみられるものや、幅広の縦位の縄文帯と無文帯の組合せで構成されるもの、両耳広口壺などが存在する。SB95出土の小型土器は文様の特徴から本段階に位置づけられよう。

唐草文系土器の様相については資料に乏しく、不明な点が多い。また、曾利V式の特徴を有する深鉢(第111図-49)もみられる。

以上、段階ごとに今回出土した完形資料を中心に検討を加えてみた。前回資料が乏しかった第1段階の土器が若干ではあるが出土し、唐草文系土器と加曾利E式土器が融合し、やがて衰退していく姿を垣間見ることができた。圧痕隆帯文系土器やその他の土器群の検討についてはこれからの課題となろう。

時間的な制約から膨大な数の破片資料のすべてに目を通すことはできなかったため、今後更なる検討が必要であろう。また、今回付け焼き刃な知識で縄文中期土器を扱い、百瀬氏が段階設定された概念とは異なっている点もあり得るだろう。これらは全て筆者自身の責によるものであり、批判は甘んじて受ける次第である。

(2) 石 器

A地区の調査では石器関連資料として、総数1,512点を持ちかえてきた。中期後葉の集落が大きく展開した時期のものが大部分を占めていると思われるが、土器の出土状況を勘案するに、それ以外の時期の石器も含まれていることが予想できる。しかし、それらを明確に分離するのは不可能であり、今回は一括して考えることとしたい。また、その他にも石器組成論が抱える課題がいくつかあるが、ここではそれらを保留しておく。よって提示する石器組成はその点で一定の限界を内包するものであることを、予め承知しておく必要がある。

石器の属性分類については、石器群を扱う場合の共通した作業概念の確立という意味から、長野県明科町北村遺跡の報告書中で用いられた方法（長野県埋蔵文化財センターほか1993）に倣って行なった。ただし、機材・時間等の制約から実施できなかった項目がある。また、あらたに付け加えたり、変更した類型もあり、注意を要する。

石材の鑑定については、町内在住の田畑和秀教諭の指導のもと、『原色岩石図鑑』（益富壽之助 1984 保育社）を手本に肉眼鑑定した。

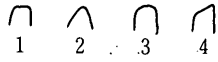
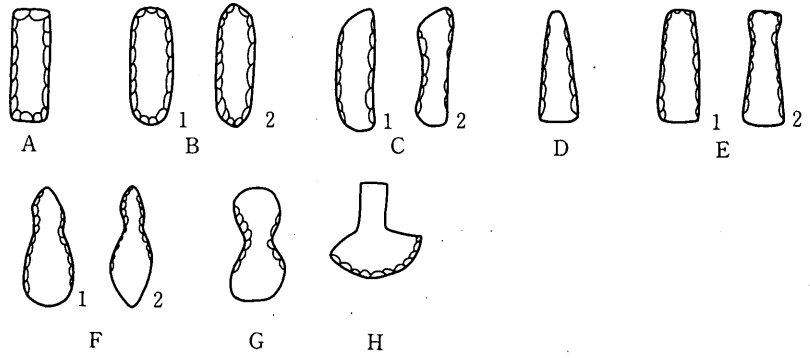
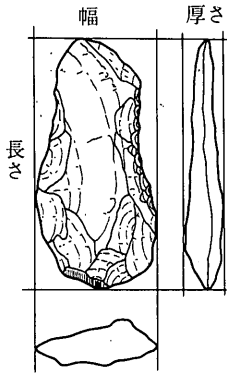
名称 数量	総数	母岩		石 屑		狩猟具	採集具	祭 祀 具		調 理 ・ 加 工 具				加工具			その他
	1,512	原石 1	石核 108	剥片・碎片 612	石鏃 46	打製石斧 548	石棒 3	丸石 2	磨石 49	多孔石 11	石皿 0	石匙 7	刃器・使痕 103	磨製石斧 6	石錘 8	砥石 8	0

第112図 四日市遺跡A地区の石器器種別構成

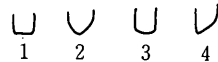
① 打製石斧

四日市遺跡A地区では玄武岩を主要な石材とする。総点数548点の内訳は玄武岩429点、安山岩78点、頁岩38点、花崗岩2点、赤色チャート1点となっている。548点という打製石斧の多さは中部高地の縄文中期に普遍的にみられる現象であり、当遺跡についても例外に漏れない。石器の形態的類別は、全体形とその構成要素（頭部・胴部・刃部）の形状に基づき実施する。

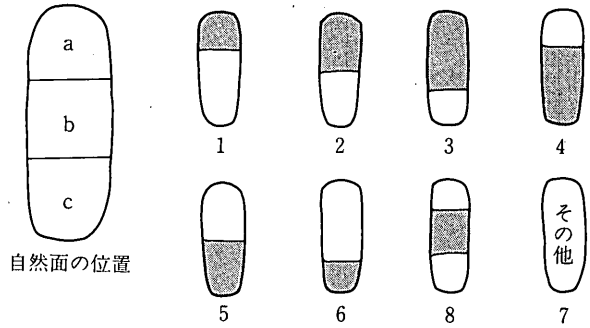
- A類 全体の形状を長方形に整えるもの。頭部1類、刃部1・3類を主体とする。
- B類 全体を楕円形に整えるもの（B1類）。頭部及び刃部3・1類を主体とする。B1類を基本とし両端のやや尖るものをB2類とする。頭部4類が主体。
- C類 全体を半月形に整えるもの（C1類）。頭部4類、刃部3・4類が主体。C1類を基本とし、1側辺の抉りが強いものをC2類とする。頭部3類、刃部3・4類が主体。
- D類 全体を三角形に整えるもの。頭部2類、刃部3・4類を主体とする。
- E類 全体を台形に整えるもの（E1類）。頭部1・3類、刃部3・1類。E1類を基本とし、2側辺の抉りが強いものをE2類とする。頭部3類、刃部3・1類を主とする。
- F類 全体を瓢形に整えるもの（F1類）。刃部3類。F1類を基本とし、端部の尖るものをF2類とする。頭部3類、刃部2類を主体とする。
- G類 全体を8の字形に整えるもの。頭部・刃部3類。
- H類 全体を錨形に整えるもの。頭部1類、刃部3類。



頭部形の類型



刀部形の類型

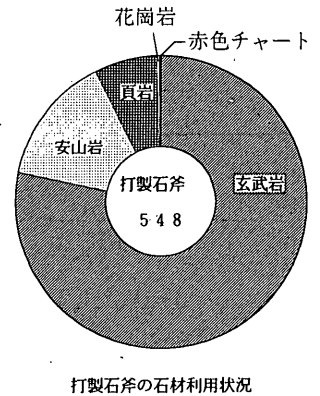


形態分類模式図

欠損部位の類型

第113図 打製石斧類型図

	総数 (個)	完形品 (個)	%	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	刃幅 (cm)	刃部平面形				頭部平面形				欠損部位																
									1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7	8	完								
A	4	1	0.7	21.2	8.5	3.4	600.0	8.2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1								
B-1	51	13	9.3	10.0	4.9	1.9	103.5	4.4	0	0	4	1	3	0	1	5	2	0	2	2	1	8	9	3	0	2	1	5					
B-2	33	15	6.0	10.9	4.7	1.7	103.2	3.9	0	1	5	1	5	0	0	9	8	0	0	0	2	9	6	0	0	0	1	5					
C-1	162	71	29.6	10.3	4.6	1.7	99.9	4.1	2	5	2	6	9	4	6	4	2	2	6	5	2	5	1	4	2	1	2	8	5	1	1	5	7
C-2	69	39	12.6	10.2	4.6	1.8	96.9	4.3	0	2	1	4	4	4	2	1	0	2	8	1	0	4	1	4	6	1	0	4	3	9			
D	57	40	10.4	10.5	4.8	1.7	105.2	4.4	4	3	4	9	2	4	5	1	0	0	2	4	5	1	0	0	0	0	0	3	4	2			
E-1	73	37	13.3	10.1	5.1	1.9	119.3	4.8	5	0	4	5	0	4	5	2	2	3	4	2	6	8	9	6	2	0	3	3	7				
E-2	6	4	1.1	10.0	5.0	1.8	113.0	4.7	1	0	3	0	5	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4				
F-1	10	7	1.8	11.7	5.8	2.0	138.6	5.7	1	0	9	0	2	2	3	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	7					
F-2	3	2	0.5	11.1	5.1	1.8	126.0	4.7	0	2	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2					
G	5	0	0.9	-	-	-	-	-	0	0	3	1	1	0	1	0	0	0	0	2	2	0	0	1	0	0	0	0					
不明	75	0	13.7	-	-	-	-	-	4	1	6	6	4	8	1	2	6	8	1	5	5	0	1	7	8	2	1	9	0				
計	548	229																															



打製石斧の石材利用状況

表27 A地区打製石斧属性表

② 石 鋏

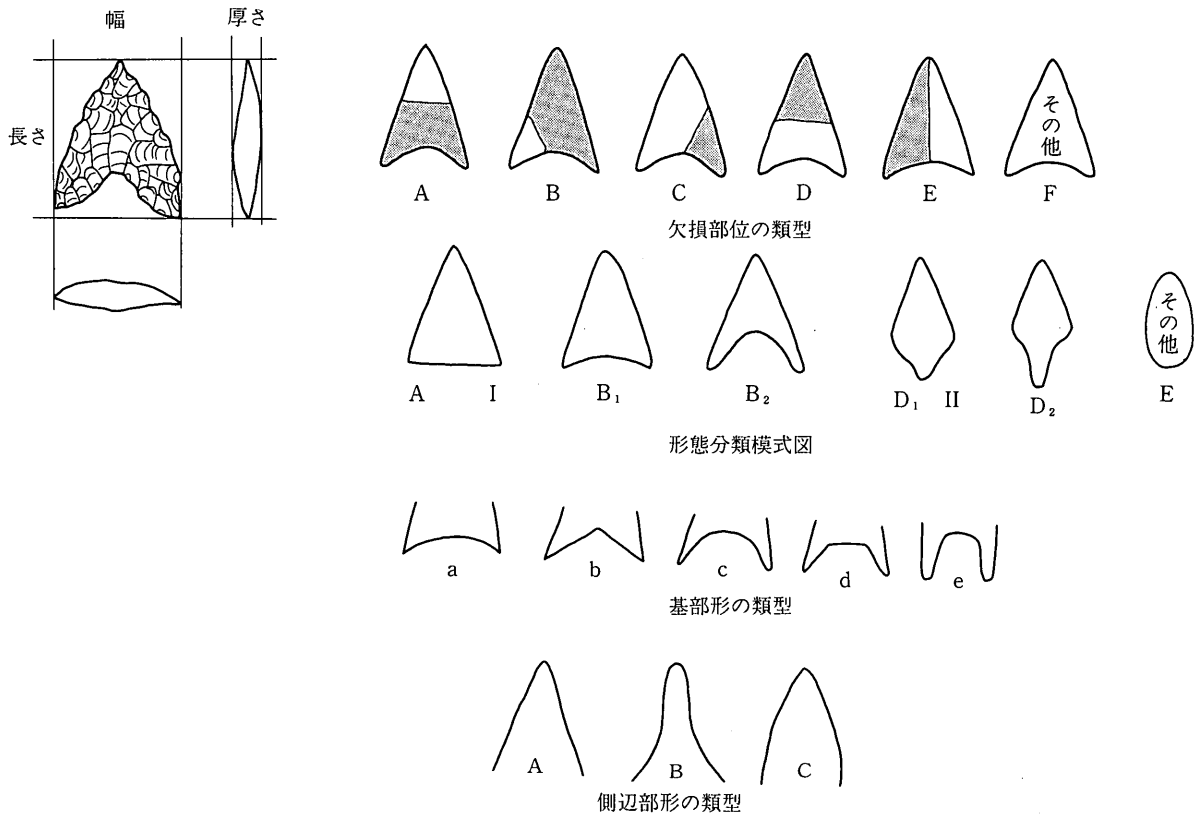
四日市遺跡A地区では黒耀石を主要な石材とする。総点数46点の内訳は黒耀石41点、チャート5点である。石器の形態的類別は基部の形態により4類に細別する。

A類 平らで直線的な基部を呈するもの。側辺部形態はA類が主体。

B類 基部が内湾し挟りが長さの1/3以下のもの。側辺部形態はC・A類が主体。挟りが浅いものをB1類、挟りが深いものをB2類とする。

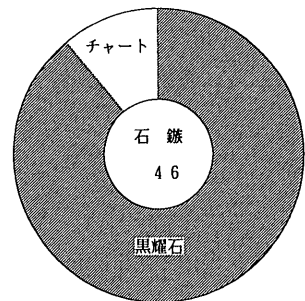
C類 外湾した基部を呈するもの。

D類 基部を有するもので、それが全体の1/3以下のものをD1類、それ以上のものをD2類とする。側辺部形態はA類。



第114図 石鏃類型図

	総数完形品		%	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	基部形状					側辺部形状					欠損部位				
	(個)	(個)						a	b	c	d	e	A	B	C	A	B	C	D	E	F	完
A	7	1	15.2	1.6	1.3	0.2	0.5	1	0	0	0	0	1	0	5	2	4	0	0	0	0	1
B1	9	3	19.6	1.8	1.6	0.4	1.1	7	1	0	0	0	1	0	7	2	2	0	1	1	0	3
B2	14	8	30.4	2.6	1.6	0.3	1.4	1	2	6	0	4	0	4	7	2	2	0	0	0	2	7
D1	1	0	2.2	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
D2	2	0	4.3	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0
E	1	0	2.2	-	-	-	-	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
不明	12	0	26.1	-	-	-	-	0	0	0	0	4	3	6	0	4	0	8	2	1	0	0
合計	46	12																				



石鏃の石材利用状況

表28 A地区石鏃属性表

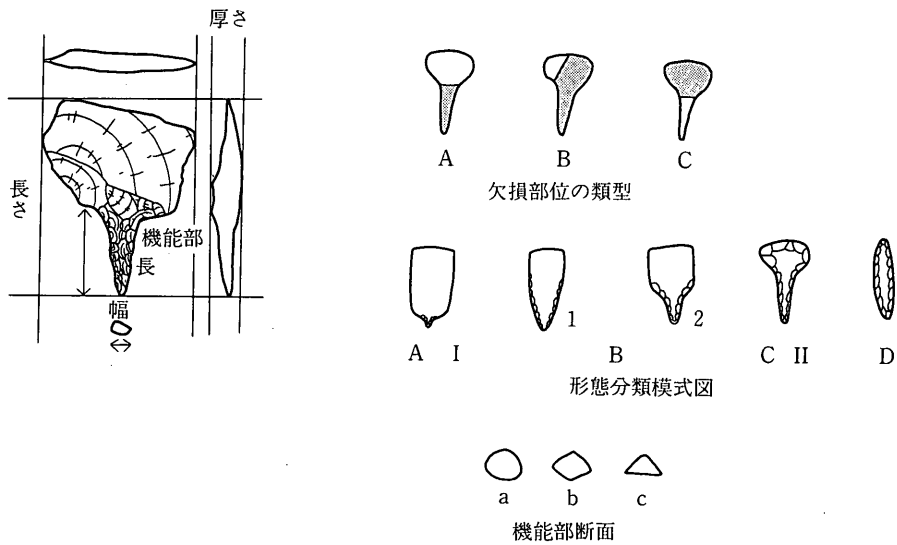
③ 石 鏃

出土した8点の石材は全て黒耀石である。形態と製作技術の点から4つに分類する。

A類 素材の一部にのみ調整を施すもの。

B類 素材の長い2側面にわたり押圧剥離を施すもの。先端機能部と基部の区別が不明瞭なB1類、明瞭なB2類に区分する。

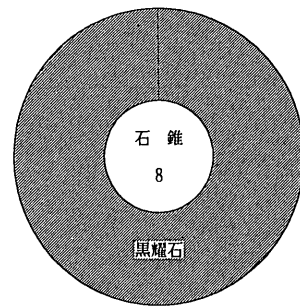
- C類 素材全体に加工を施し、先端機能部と基部の区別が明瞭なもの。
 D類 素材全体に加工を施し、先端と基部の区別がなく、両端の尖ったもの。



第115図 石錐類型図

	総数 (個)	完形品 (個)	%	機能部									
				調整面	断面	形	欠損部位	全体形	完	II	完	II	
A	1	1	12.5	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1
C	5	0	62.5	4	1	2	1	1	1	0	4	0	4
D	2	0	25.0	0	2	0	0	2	0	0	2	0	2
合計	8	1											

表29 A地区石錐属性表



石錐の石材利用状況

④ 磨石・凹石・敲石

割る・する・たたくなどの行為を行なう石器をまとめて扱う。当遺跡における石材利用の状況は、総点数49点はすべて安山岩であった。石器の形態的類別は、全体形に基づき実施する。原石を無加工のまま使用する第1種と、素材の縁辺部に加工を施す第2種に大別する。

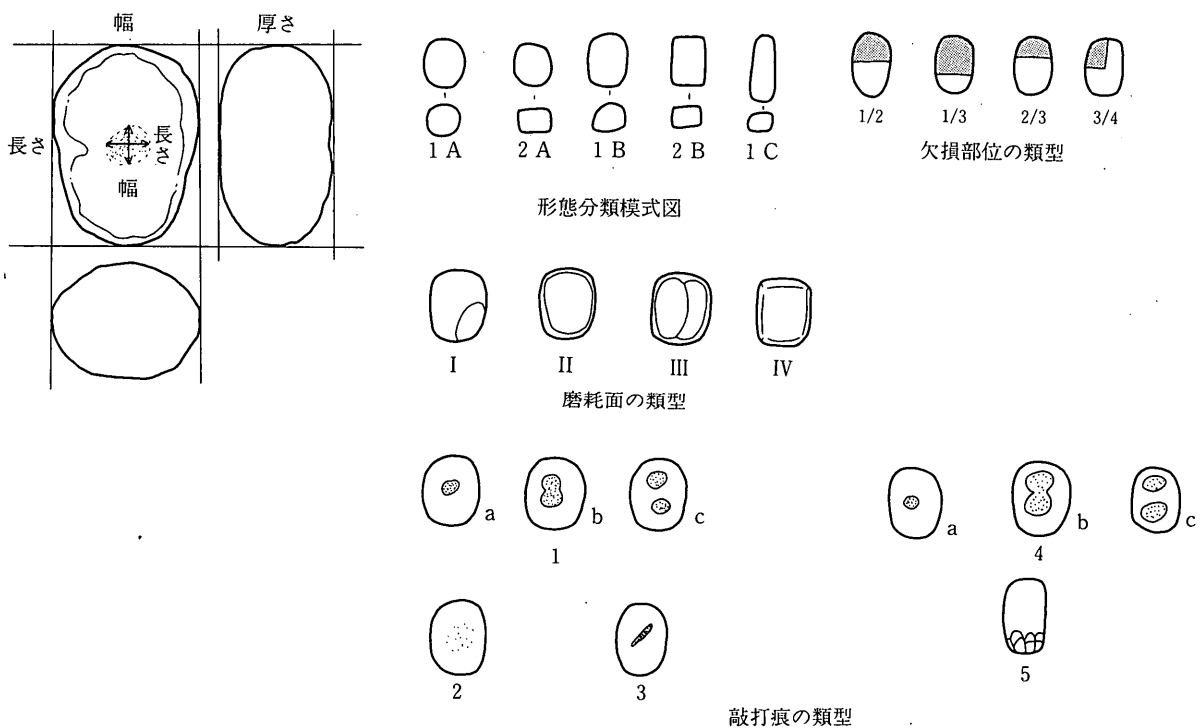
- A類 円形を基本とするもの。第1種のを1 A、第2種のを2 Aとする。
 B類 楕円形を基本とするもの。第1種のを1 B、第2種のを2 Bとする。
 C類 長い楕円形あるいは長方形を基本とするもの。棒状。

磨耗面の類別

- I類 使用面が部分的な1ヶ所に限られるもの。
 II類 使用面が面全体に広がるもので、1面構成をとるもの。
 III類 使用面が面全体に広がるもので、2つ以上の面構成をとるもの。
 IV類 使用面が側面に及ぶもの。意図的に側面を形成し、使用したもの。

敲打痕の類別

- 1類 小さな粒状の凹みが集合し、凹部を形成するもの。凹みが花卉状に広がり、浅い1 aと、2ヶ所以上の凹みが連結した1 b、2ヶ所以上の凹みがそれぞれ独立した1 cを細別する。割る・する・たたくなどの行為の受け手としての用途が想定できる。
- 2類 アバタ状を呈するもの。割る・する・たたくなどの行為の持ち手としての用途が想定できる。
- 3類 細長い溝状のもの。割る・する・たたくなどの行為の受け手としての用途が想定できる。
- 4類 凹みがすり鉢状を呈し、単一の1 aと、2ヶ所以上の凹みが連結した1 b、2ヶ所以上の凹みがそれぞれ独立した1 cを細別する。
- 5類 アバタ状のつぶれと小剥離痕を伴うもの。割る・する・たたくなどの行為の受け手としての用途が想定できる。



第116図 磨石類型図

	総数完形品 (%)			長さ 幅 厚さ 重さ				磨面 表 磨面 裏 磨面				敲打面																						
	(個)	(個)	%	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	頰状	龜状	表面 形状	表面 形状																			
	1 A	2 A	1 B	2 B	1 C																													
	7	7	14.3	7.9	7.1	4.5	297.4	5.7	5.0	4.7	3.7	1	6	0	2	2	3	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0		
	3	3	6.1	10.9	9.6	5.5	703.0	9.0	7.2	7.6	6.4	0	3	0	3	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	
	18	15	36.7	10.3	7.6	4.4	477.0	7.5	5.4	7.1	4.8	0	16	1	1	15	1	2	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	1	0
	3	2	6.1	11.3	8.5	5.0	476.0	9.9	6.8	8.6	6.3	0	3	0	3	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
	16	13	32.7	13.3	5.7	4.1	550.0	10.5	4.0	10.6	3.6	1	13	2	1	12	2	1	1	3	0	1	0	0	0	0	2	0	1	0	1	0	0	0
不明	2	0	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	49	40																																

表30 A地区磨石属性表

⑤ 多孔石

複数の凹みを有し、蜂の巣石とも呼ばれる。総数11点を収集し、すべて安山岩であった。用途については、する・たたくなどの行為の受け手が想定できる。ここでは細分はしない。

⑥ 磨製石斧

総数6点を収集し、石材の内訳はチャート3点、蛇紋岩3点であった。形態的類別については打製石斧に準じ、これに大きさの属性を加える。

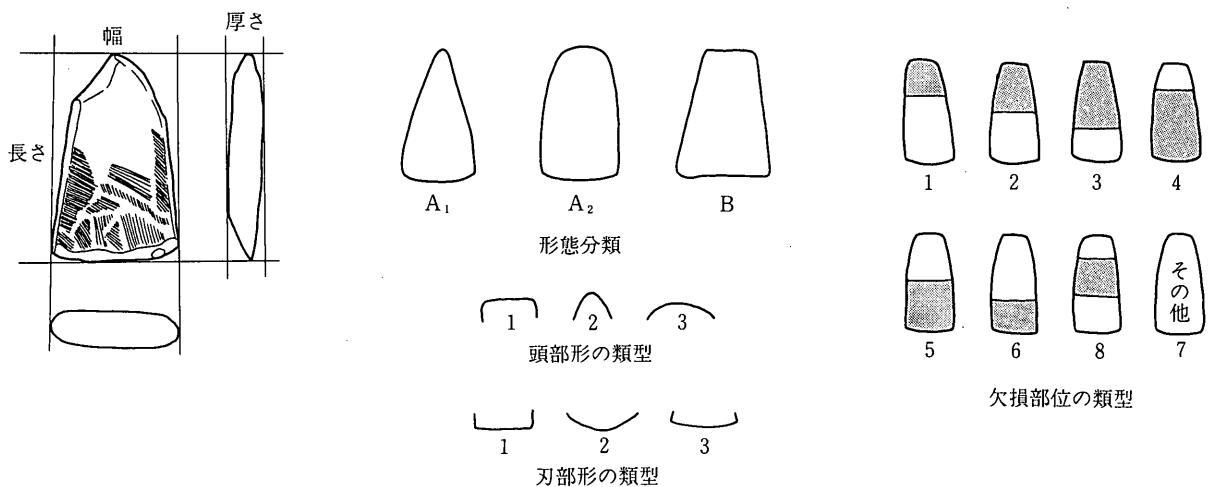
大形A類 全体を台形状に整え、最大厚で3cmを越えるもの。刃部は3類。頭部2類で三角形に近いものをA1、頭部3類で長方形に近いものをA2とする。

大形B類 全体を台形状に整え、最大厚が3cmを下回るもの。刃部1類、頭部1類を主体とする。

中形C類 大形A類と同義で一回り小振りなもの。

小形D類 大形A類と同義で中形C類より小振りなもの。

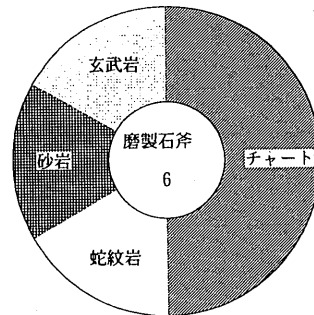
小形E類 大形A類と同義で小形D類より小振りなもの。極小形のもの。



第117図 磨製石斧類型図

総数	数	形態別%	刃部						頭部			
			平面形	平面形	欠損部位	完	平面形	欠損部位				
A	2	1	16.7	1	3	1	2	3	3	8	1	0
C	1	2	33.2	0	0	0	0	1	0	1	0	0
C	3	1	16.7	1	0	1	0	0	0	0	0	1
D	2	1	16.7	0	1	0	0	1	1	0	0	0
不明	1	1	16.7	0	0	0	0	0	0	0	1	0
合計	6											

表31 A地区磨製石斧属性表



磨製石斧の石材利用状況

⑦ 砥石

総数8点を収集した。石材は砂岩が主体である。研ぐ行為が想定できる。ここでは細分しない。

⑧ 原石・石核・剥片・碎片

原石は剥片剥離に供される原材で、一度も剥離作業の実施されていない資料を指す。黒耀石の1点を収集した。

石核は剥片の剥離生産を主目的にしたもので、一回以上の剥離作業が実施された資料を指す。総数108点を収集。黒耀石100点、玄武岩6点、頁岩2点であった。

碎片は剥片剥離の際に生じた石器製作に不向きな資料を指す。総数のカウントは本来なら剥片と碎片を分

離して行なうべきところであるが、今回は両者を分離せずに行なった点をご容赦ねがいたい。総数は黒耀石181点、玄武岩416点、頁岩15点、であった。ただし、調査区内のすべての剥片と碎片を持ちかえることができるほど、丁寧な調査をしたとはいえ、ここでの数値はあくまでも目安程度のものとして認識していただきたい。

2 古墳時代

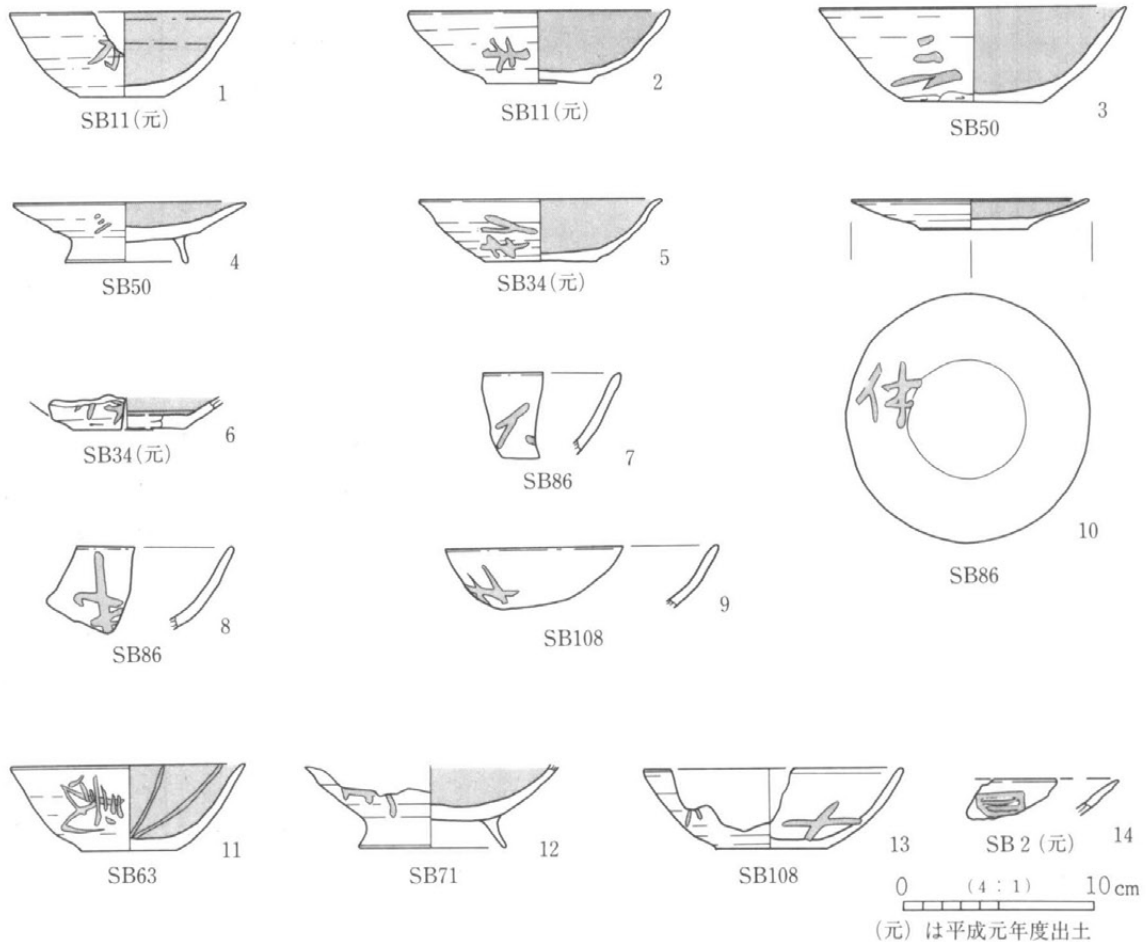
今回の調査では古墳時代の遺構は後期の住居址1軒を検出したのみである。前回の調査でも同時期の住居址を1軒検出している。遺構外からの遺物の出土はなく、この点からもA地区付近には多数の住居は存在しなかったことが窺える。

遺物は住居址から良好な一括資料を得ることが出来た。長胴甕と小形甕、坏、高坏のセットで、特に坏以外の土器については当時の使用状態そのままに出土した。長胴甕は意図的に底部を欠失し、横転していた。竈の前に3つの土器が並べられており、興味深い資料である。また、竈の灰のなかから動物骨が検出され、特にニワトリの検出例は貴重なものである。

当町においては古墳時代の遺構・遺物の検出例はまだまだ少なく、四日市遺跡ではB地区の3軒と平成6年度に調査が行なわれたB地区に隣接するJA施設建設用地での2軒を含めた計7軒である。それ以外の古墳時代の住居址の確認例は、境田遺跡の後期の3軒のみで、両遺跡とも集落の規模等についてはまだまだ不明な点が多い。このような限られた資料で推論するのはいささか危険であるが、当町で古墳時代のひとびとの生活が始まるのは後期になってからのことと考えられる。藤沢古墳をはじめとした後期の小円墳が、四日市や境田の位置する本原扇状地面には多く分布しており関連が窺える。今後の調査に期待したい。

3 平安時代

前回、そして今回の調査によって横尾・四日市地区にはまとまった平安時代の集落が存在していたことが判明した。集落の展開した時期は概ね10世紀代と考えている。周辺では田の造成の際に多くの完形の坏などが発見されており、かなりの遺構が削平等によって失われてしまっている可能性がある。しかし、一連の調査で今回のA地区を含むかなり広い範囲に集落が展開していた様子が明らかになりつつあり、今後の調査に期待される。JA施設建設用地からは、集落内での鉄製品の加工を窺わせる小鍛冶遺構が検出されており、今回の調査でも鎌や紡錘車といった鉄製品が出土した。また、前回につづき、墨書土器が多く出土したことも挙げられる。50号住居址からは「三」の墨書のみられる土器が2個体出土し、特に遺物の多くみられた63号住居址からは「義」の墨書の書かれた土器が出土している。前回も出土した「伴」の墨書土器もみられる。集落の時期や性格を考える上で良好な資料であろう。今後の課題は、平安時代集落の変遷過程の追求であり、そのためには平安時代の土器群の段階設定が不可欠であろう。今後の調査によってさらに多くの資料が蓄積されることが望まれる。



第118図 四日市遺跡出土の墨書土器集成図

第2節 四日市遺跡B地区

1 縄文時代

(1) 四日市遺跡の縄文時代前期土器群について

本調査では縄文時代前期の住居址7軒が検出された。遺構の時期は黒浜式併行期の1軒以外はおおむね関山式に併行する時期の住居址と推定される。

千曲川流域の前期初頭土器群の編年は下平博之・贅田明両氏による塚田式、児玉卓文氏による中道式が設定されている。また、中道式の次の段階は下平・贅田両氏による前期初頭第Ⅲ段階（型式未命名・花積下層Ⅲ式併行）があたるが、良好な資料に恵まれず、型式内容については不明な点が多い。贅田氏は御代田町下弥堂遺跡の報文中で、当町の真田氏館跡から出土した2点の土器片について、その器形が花積下層Ⅲ式に類似している点を挙げ、前期初頭第Ⅲ段階に属する可能性を指摘している（御代田町教委1994）。今回の調査で、この2点の土器片に類似する口縁部破片がSB2とSB20の覆土から多く出土した。SB20では同じく覆土から撚糸側面圧痕を有する花積下層式そのものの破片も出土しており、両者の関連を示唆するものとして注目されよう。

しかし、四日市遺跡で主体となっているのは後続する関山式併行期のものである。今回は良好な完形資料こそ少なかったが、床面直上で大きな破片資料が出土していたりするので、ある程度、四日市遺跡の該期の

土器群の様相について把握することができるのではないかと考える。

床直資料が多く比較的様相の捉えやすいSB17を例にみてみよう(第72～75図)。この住居址では関山式と在地の尖底土器が床面直上で共存している。第72図-1は4単位の波状口縁を呈する。底部は欠失しているが、尖底となるとみられる。縄文はLRLとRLRの附加条1種の原体によりややくずれた羽状構成をとる。在地の土器群の系統で捉えられるものと考え。また第73図-1と第74図-1は関山式土器である。第73図-1は沈線による口縁部文様帯やコンパス文など比較的新しい要素がみられるものである。また、第74図-1は口縁部に鋸歯状の沈線文様に粘土粒をつけた文様帯が配され、頸部以下は羽状縄文のほか、コンパス文がみられる。口縁部は波状口縁となる。底部は平底で上げ底になるものもあるようだ。これらの土器から関山式の新段階の特徴が窺える。この他に平底で羽状縄文または斜縄文の施文される一群があると考えられる。SB2で平底となる斜縄文の施文されたやや小型の個体がみられることから、大型品についても同様になる可能性がある。また、完形資料には恵まれなかったが、薄手の無文土器がある程度の割合で伴うらしい。

さて、該期の四日市遺跡では上記の4者(尖底土器・平底の縄文のみの土器・関山式土器・薄手の無文土器)がどのような割合で存在していたのであろうか。前3者は羽状縄文を有する土器であるが、平底と尖底の違いがある。住居址毎に若干の時期差があるようなので一概には言えないが、当遺跡での全体的な傾向として平底、特に上げ底となるものの出土量が多く、尖底の量が少なかった。このような平底の多くみられる傾向は、本遺跡において関山式土器や、平底の文様が縄文のみで構成される土器の2者が主体となっていることを表しているのではないだろうか。おそらく後者は在地の土器であろう。両者とも羽状縄文を有するため、破片からの単純比較は危険であるが、ループ文やコンパス文が施文されたものが比較的多くみられることもそれを傍証するのではなかろうか。

また、関山式に後続する黒浜式併行期の住居址も1軒検出され、良好な資料を得ることができた。この時期の集落の展開については不明であるが、前期前葉の比較的長期にわたって四日市の地に集落が形成されていたことが推定されよう。

(2) B地区における石器組成について

B地区の調査では石器関連資料として、総数3,820点(うち黒曜石3,530点)を持ちかえてきた。前期以外の土器片の出土がほとんどなかったため、石器も前期の集落が展開した時期の資料がほとんどであると考えられる。しかし、前節でも触れたようにその組成についても一定の限界を有するものであることは否めない。

石器の属性分類については前節と同様であるので、ここでは再述せず、結果のみを提示することとする。石材の鑑定についても同様である。

名称 数量	総数	母岩		石 屑		狩猟具	採集具	祭 祀 具		調 理 ・ 加 工 具				加工具			その他
	原石	石核	剥片・碎片	石鏃	打製石斧	石棒	丸石	磨石	多孔石	石皿	石匙	刃器・使痕	磨製石斧	石錘	砥石	独鈷石	
3,820	0	115	3,257	110	20	0	0	112	0	3	42	40	7	37	5	1	

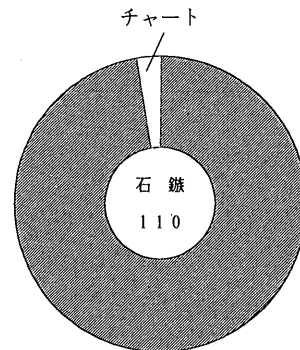
第119図 四日市遺跡B地区の石器器種別構成

① 石 鏃

総数110点の内訳は、黒曜石が107点、チャートが3点であった。B2とした抉りが深いものが最も多く、

全体の61%を占める。製品の大きさはまちまちで、特に長さ1cm程度の個体のなかには住居址覆土をフルイにかけてみつけたものもある。有柄のものは出土しなかった。

	総数		%	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	刃部形状												欠損部位	
	(個)	(個)						a	b	c	A	B	C	A	B	C	D	E	F		完
A	2	1	1.8	1.1	1.0	0.2	0.3	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1
B 1	23	5	20.9	1.6	1.3	0.4	0.6	19	0	0	1	1	0	2	1	6	0	0	0	0	5
B 2	67	26	61.0	1.7	1.4	0.3	0.5	0	2	0	4	2	3	2	8	2	6	6	2	7	1
D 1	0	0	0	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D 2	2	0	1.8	-	-	-	-	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0
不明	16	0	14.5	-	-	-	-	1	0	0	7	1	3	1	8	2	1	3	4	0	0
合計	110	32																			

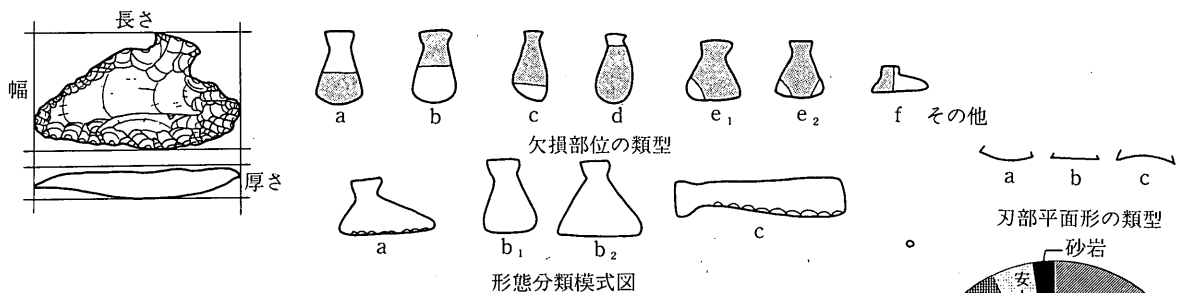


石鏃の石材利用状況

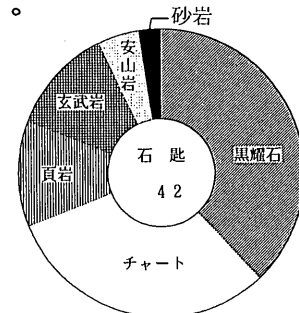
表32 B地区石鏃属性表

② 石 匙

総数42点の内訳は黒耀石16点、チャート13点、頁岩5点、玄武岩5点、安山岩2点、砂岩1点であった。黒耀石が多く用いられているが、石材にバラエティがみられ、他の器種と比較すると特徴的である。形態の特徴として、cとした包丁形の個体やaが多く、また、bには剥片に簡単な調整を行なったのみのものが多くみられた。当遺跡において特徴的な事例である。



	総数		%	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	刃の長さ (cm)	刃の幅 (cm)	刃部形状												欠損部位			
	(個)	(個)								a	b	c	×	a	b	c	d	e	f	完					
a	13	5	30.1	3.8	2.8	0.6	6.4	3.4	0.7	6	6	6	4	1	1	3	0	0	2	1	1	2	2	0	5
b 1	3	1	7.1	6.1	4.2	0.8	21.5	4.2	0.5	1	1	1	0	1	3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1
b 2	3	1	7.1	3.7	2.5	0.7	7.3	3.7	0.6	1	2	1	1	1	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
c	14	7	33.3	-	-	-	-	-	-	5	5	0	5	2	1	1	0	0	6	0	0	0	0	0	4
d	2	1	4.8	4.1	4.8	0.8	18.3	3.6	0.6	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
e	2	1	4.8	2.0	1.8	0.7	2.0	2.0	0.4	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
不明	5	0	12.0	-	-	-	-	-	-	3	1	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
合計	42	16																							



石匙の石材利用状況

表33 B地区石匙属性表

③ 石 鏃

総数37点の内訳は黒耀石35点、チャート1点、頁岩1点であった。形態はB 1とした機能部周辺に細かな調整を行なったものが多い。

⑥ 刃 器

総数40点の内訳は頁岩15点、安山岩11点、玄武岩10点、チャート4点であった。

⑦ 独 鈷 石

1点のみ包含層から出土した。

⑧ 石 皿

3点を計上し、全て住居址内からの出土である。石材は安山岩である。

⑨ 原石・石核・剥片・碎片

黒耀石については石核が115点、剥片・碎片が3,257点であった。その他の石材については一括してしまっただが、剥片・碎片が76点であった。また、特徴的なものとして、おそらく石英であると思われるが、13点・総重量310gを確認した。石英製の石器を検出できなかったため、別の用途のために遺跡内に持ち込まれたものと思われる。土器の混和材であろうか。

(3) 縄文時代前期の土坑列の性格について

直径1m前後の土坑が緩い弧を描いて並んでいる。深さはまちまちであるが、0.5～1m程度である。埋設土器等はみられず、遺物に関しては決して多く出土したとは言えない。しかし、前期の遺物がみられるのみであり、他の時代の遺物の出土がみられないことから、縄文前期の所産であると考えられる。

この土坑の用途については、当初は落とし穴遺構ではないかとも考えた。しかし、集落域のなかにあることから、それは否定されよう。どの土坑の覆土も同じ特徴を持つ3つの層が一樣に堆積しており、土坑が同時期に存在していたことをうかがわせる。柱痕と思われる層は検出できなかったが、1基の底部に一段低い部分があり、柱が立っていた可能性も否定できない。ただし、土坑列が大形の建物の柱穴として機能していた可能性は少ないと考えられる。今後の類例の増加を期待したい。

2 古墳時代

4号住居址とした古墳時代後期後葉の住居址から22個体の図上復元可能な土器が出土した。その内訳は、坏3、鉢4、甕10、小型甕3、甑2となっている（第121図）。

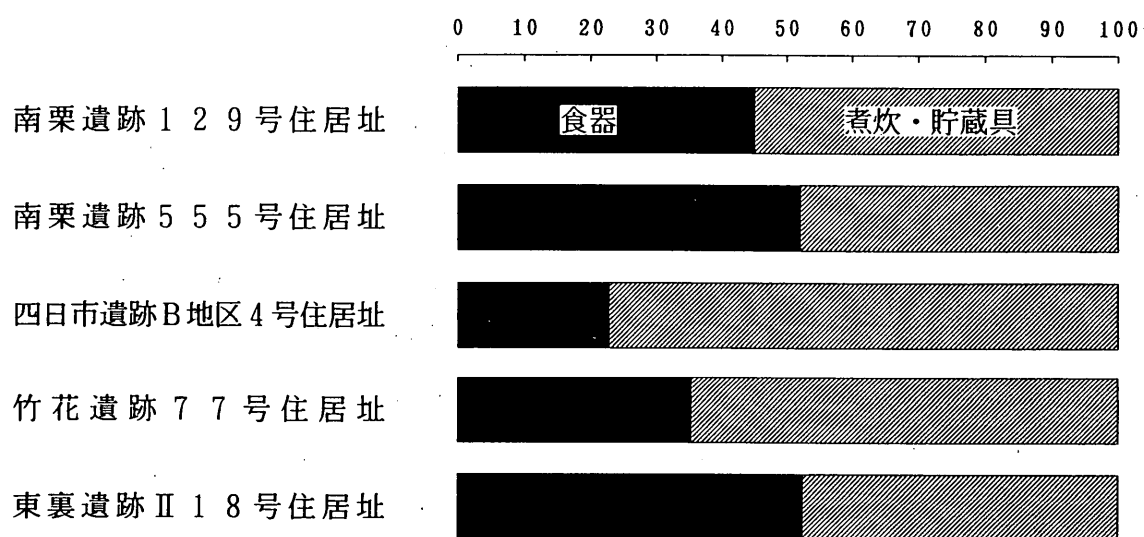
ここで他の遺跡での器種構成との比較を試みてみよう。比較対象とするのは小諸市の宮ノ反A遺跡群竹花遺跡77号住居址（小諸市教委1994）と坂城町の南条遺跡群東裏遺跡II H18号住居址（坂城町教委1994）である。対象とする3者には時間差が認められるが、いずれも古墳時代中期末～後期に属するもので、出土個体数が多く、当時の土器のセットをより忠実にあらわすものと考えたからである。なお、文中の器種分類については、筆者に責がある。

まず、竹花遺跡77号住居址の例をみてみよう（第123図）。坏6、鉢1、甕6、壺2、広口壺1、高坏1の計17個体が出土した。本址の時期は古墳時代後期中葉と考えられる。四日市遺跡4号住居址との大きな違いは土器組成のなかで食器の占める割合が高いことにあるといえよう。

次に東裏遺跡II H18号住居址の例をみてみよう（第122図）。坏9、鉢2、甕3、小型甕1、短頸壺2、小型壺1、高坏1、甑1、蓋1の計21個体が出土した。本址の時期は古墳時代中期末葉～後期初頭と考えられる。四日市遺跡例との大きな違いは竹花遺跡例と同様に土器組成のなかで食器の占める割合が高いことにあるといえよう。そして、坏として分類したなかで器形にバラエティがみられること、そして須恵器が3個体みられることが挙げられよう。

この結果から改めて四日市遺跡の例を検討してみよう。4号住居址では甕、甑といった食器以外の煮炊用・貯蔵用の土器の占める割合が圧倒的に高く、やや特異な感じを受ける。覆土からも食器の破片はわずかに認められたにすぎない。松本市の南栗遺跡の土器組成の検討（長野県埋文センター1990）によれば、今回扱った3つの遺構の属する時期は煮炊用・貯蔵用の土器の占める割合が高いという結果が出ている。データを比較すると南栗遺跡の数値と同じ傾向を示すのは竹花遺跡例のみであり、東裏遺跡例では食器と煮炊・貯蔵器の割合が逆転している。

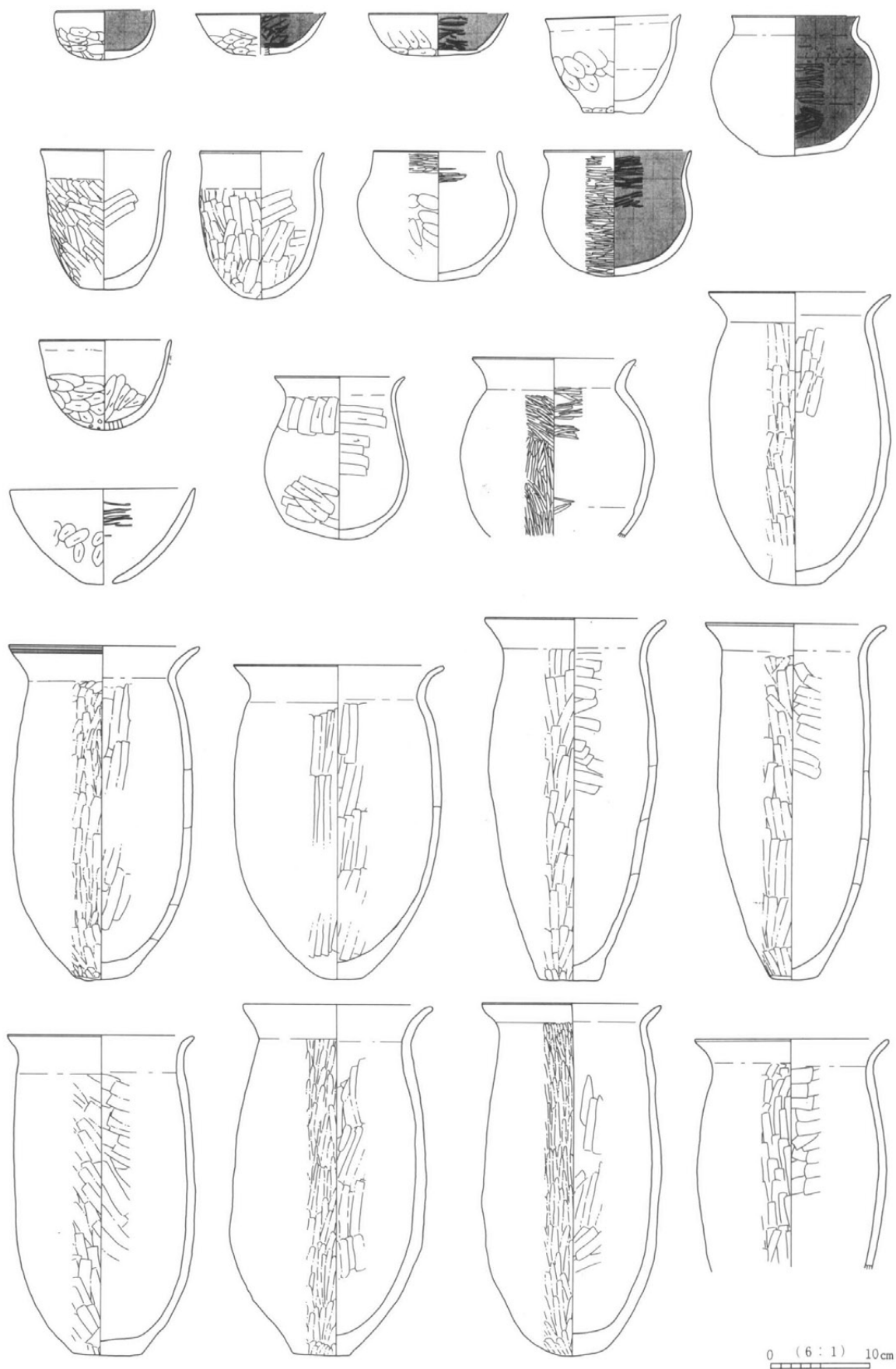
今回は資料的な制約から住居址1軒を対象として、比較を試みた。そのため、このデータのみで四日市遺跡の該期の土器組成を検討するのは危険を伴うが、一応、成果のひとつとして提示しておく。今後、隣接区の調査を控え、将来的には南栗遺跡で行なわれたような遺跡内における土器組成の変遷の検討ができればと思う。



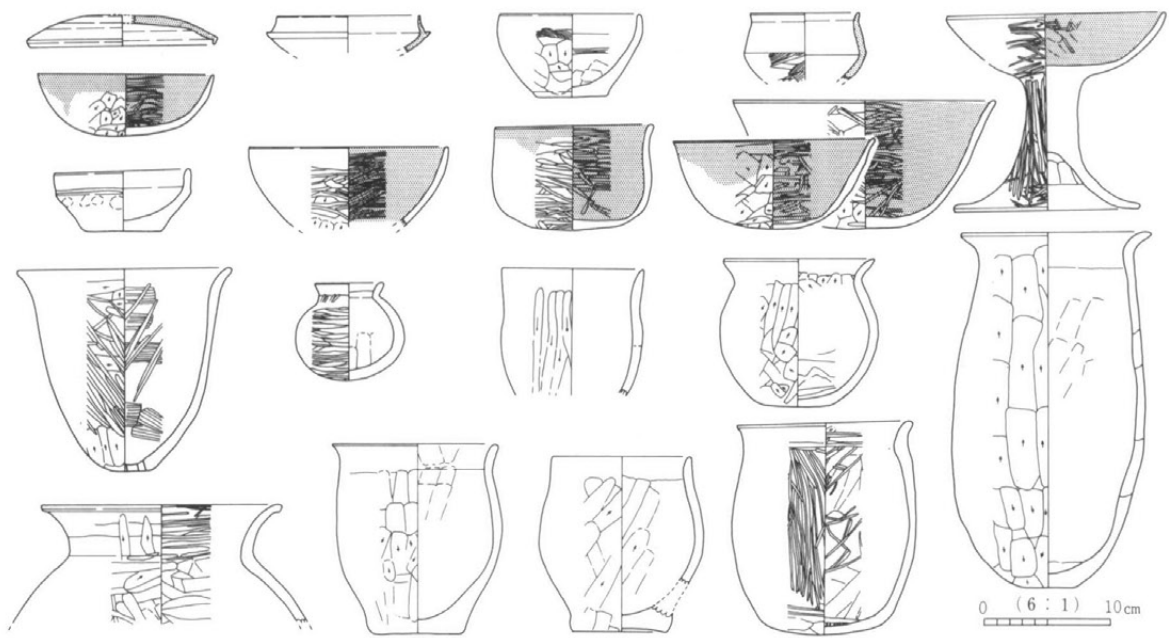
第120図 各遺跡における竪穴住居址出土土器の構成

3 平安時代

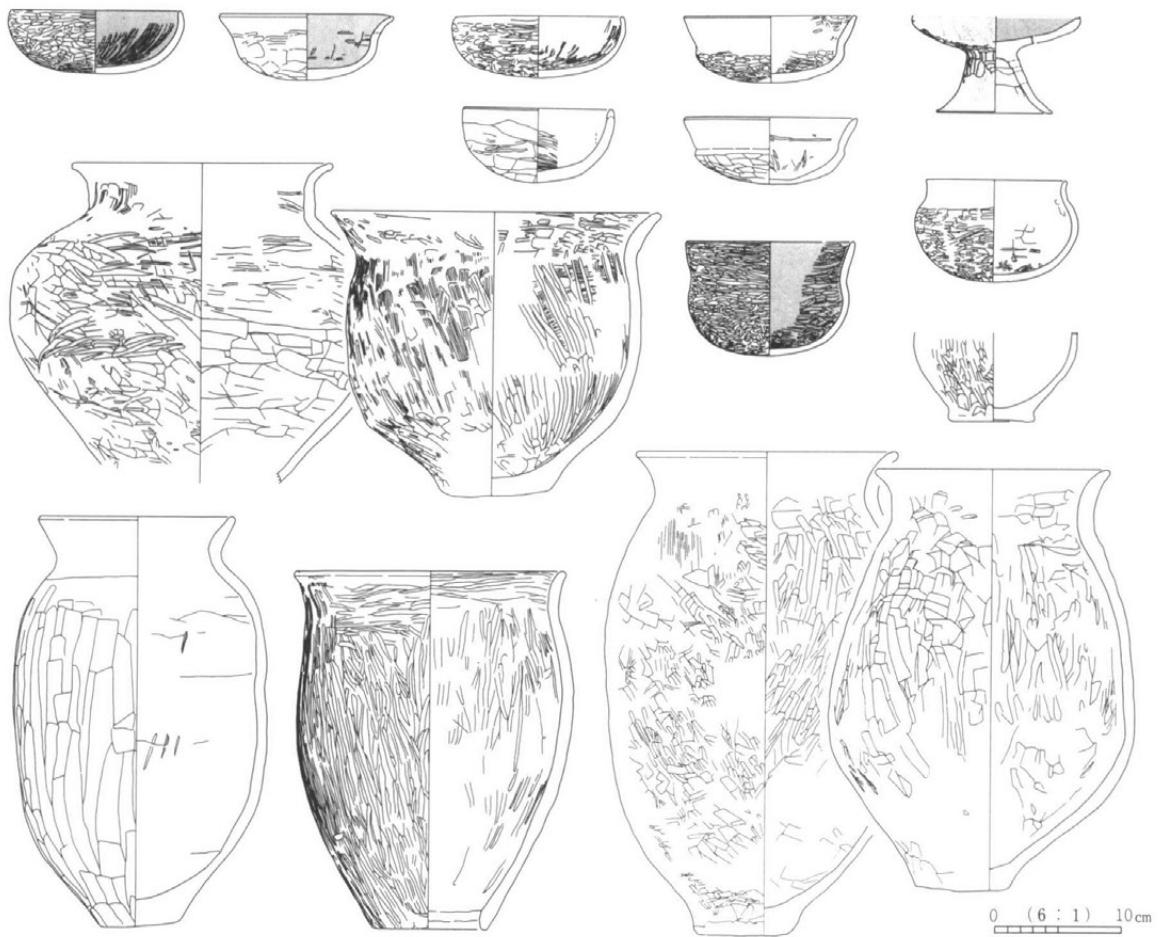
今回の調査で住居址を7軒検出した。A地区でも11軒の住居址が確認されている。時期的にも10世紀代で一致しており、地理的にも近接しているため、同一の集落を形成していたと考えて差し支えないと思われる。表採等による事前調査の段階では、土師器・須恵器等の量が少なかったため、B地区付近に集落の縁辺部を求めることができるのではないかと予想していた。しかし、実際に7軒の住居址が確認され、さらにA地区ではみられなかった平安の遺構どうしの重複がみとめられた。今後の調査に負うところも大きいですが、むしろ集落の中心部はB地区付近に在ったのではないかと推測している。住居址の残骸と思われる焼土の検出が3例あったことを考えると、かなりの遺構が包含層とともに削平または流失した可能性を指摘したい。



第121图 四日市遺跡B地区4号住居址出土土器



第122图 東裏遺跡II18号住居址出土土器



第123图 竹花遺跡77号住居址出土土器

〈引用・参考文献〉

- 小諸市教育委員会 1994 『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』
- 坂城町教育委員会 1994 『東裏遺跡II・青木下遺跡』
- 真田町教育委員会 1990 『四日市遺跡』
- 〃 1992 『真田氏館跡』
- 鈴木保彦・山本暉久 1989 「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観』2
- 縄文セミナーの会 1994 『早期終末・前期初頭の諸様相』
- 長野県史刊行会 1989 『長野県史 考古資料編』1-4
- 長野県埋蔵文化財センターほか 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4
-松本市内その1- 総論編』
- 〃 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11
-明科町内- 北村遺跡』
- 贅田 明 1994 「前期初頭の土器群について」 『下弥堂遺跡』
- 益富壽之助 1995 『原色岩石図鑑』
- 町田勝則 1996 「石器の研究法」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集I
- 御代田町教育委員会 1994 『下弥堂遺跡』
- 1994 『塚田遺跡』
- 百瀬忠幸 1990 「縄文時代中期後葉土器の時間的位置づけ」 『四日市遺跡』
- 山形村教育委員会 1987 『殿村遺跡』
- 綿田弘実 1989 「長野県東北信地方の中期末葉の土器群」 『縄文中期の諸問題』

【小中学生のためのページ】

夏休みのある日、洋和君と正三君の兄弟は自転車に乗って遊んでいました。ふと、通りかかった畑のまんなかで、おじさんやおばさんが土をていねいに掘っているのを見かけました。ここは四日市遺跡のはつくつげんばです。

「おじさん、なにしてんの？」

二人に気付いたおじさんがこっちにおいでと手まねきをしました。

「ほら、みてごらん。」

おじさんが掘っていたあなのなかには不思議な形をしたやきものが埋まっていました。

「すごいだろ。」

洋和君と正三君は小学校の6年生と3年生。洋和君は社会科の時間に先生に教わった縄文土器のことを思い出しました。

「これって、もしかして縄文土器？」

「そうだよ。」

二人は縄文土器に触らせてもらいました。

「ねえ、おじさん。この中にはなにが入っていたの？」

「そうだなあ。人間の骨でもはいていたんじゃないか。」

おじさんのいじわるな言葉に二人は手をひっこめました。

「いやいや、ごめんごめん。でもな、その焼き物に何が入っていたのかは本当はよく分かってないんだよ。」

おじさんたちとさよならをした後も、二人はあの焼き物の中身のことが気になってしかたがありませんでした……。



その夜、洋和君と正三君は夢をみました。なんと動物の毛皮を着た男の子が二人に会いに来たのです。

「洋和君、正三君、いっしょにあそぼう。」

「ねえ、うちにおいでよ。めずらしいものがいっぱいあるからさ。」

ふたりは男の子につれられて歩いていきました。するとそこには地面に穴を掘って作った家がたくさんあったのです。家は丸太や木の枝でつくってあります。

「こっち、こっち。」

どうやらあの家が男の子の家ようです。ふたりは家のなかに入ってみました。

「ようこそいらっしゃい。」

家のなかにはおとうさんとおかあさんがいました。家のなかにはたくさんの縄文土器や石で作ったナイフ、

弓矢などがならべてありました。

「すっげー。」

ふたりははじめてみる道具に目をみはりました。そのうちにおかあさんが食事の用意をしはじめました。ドン、ドン、ドン、ゴリ、ゴリ、ゴリ。お母さんは石のまな板の上でドングリをたたいてすりつぶしています。

「今日は、ドングリクッキーだよ。」

男の子は教えてくれました。すると、おとうさんがごそそと動きだしました。

「二人もいっしょにいくかい？」

どうやらおかずにする動物をとりに行くようです。足の早いおとうさんは洋和君と正三君に「やり」をわたすとどんと草原のなかに入って行ってしまいました。おいてきぼりの二人のところに男の子が戻ってきました。

「イノシシがとれたよ。」

おとうさんの背中にはおおきなイノシシがのっていました。

「今日はごちそうだぞ。」

おとうさんは得意気にふたりに言いました。

食事が終わって、あたりはだんだんと暗くなってきました。いろりに火がつかしました。

「とまっていっかい？」と、おとうさんに誘われたものの、ふたりはもうそろそろ帰らないとお母さんに叱られてしまいます。

「もう帰るよ。」

「それじゃ、ほくが送っていくよ。」

おとうさんとおかあさんにお礼をして、二人は家を出ようとなりました。その時、

「あーっ。」

なんと家の玄関のところに昼間はつくつげんばのおじさんがみせてくれた縄文土器がおいてあったのです。

「おにいちゃん、何が入ってるかのぞいてみようよ。」

二人は昼間のおじさんの言葉を思い出して、おそろおそろ土器のなかをのぞいてみました。でも何も入っていません。

「……？ 何も入ってないよ？」

正三君は首をかしげました。

洋和君はおもいきって男の子に聞いてみました。

「このなかはいつもからっぽなの？」

「そんなことないよ。今も中に入っているよ。」

「えっ？」

洋和君と正三君ともう一回土器のなかをのぞいてみました。でも今度もなにもみえません。二人の様子をみた男の子は言いました。



「この中にはほくたち縄文時代の人には見えないものが入っているんだよ。ほくたちの暮らしている縄文時代は二人の住んでいる時代と違って、お米を作ることができないから、食べ物にふじゆうしたり、お医者さんだっていないから病気もけがもすぐこわいものなんだ。だから、こうやって玄関に土器を埋めておいのりしているんだ。いつまでもみんなが元気で暮らせますように……。てね。」

「なかには何が入っているの？」

二人はどうしても中身が知りたくてたまりません。

「ごめんね、このなかのものは教えることはできないんだ。でも代わりにこれをあげるよ。」

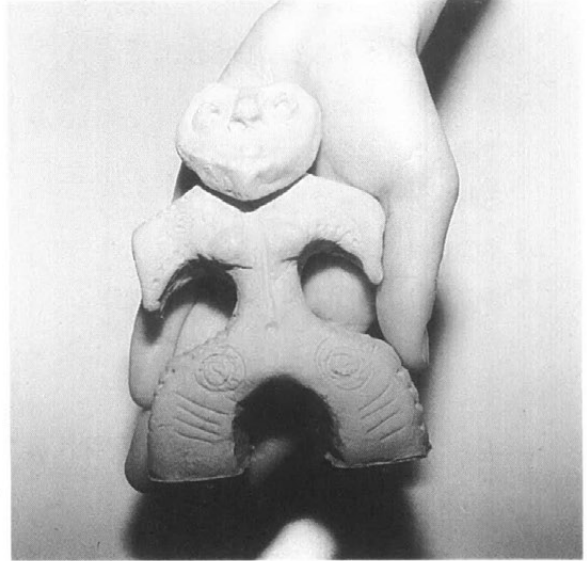
そういつて男の子はポケットから何かを取り出しました。

「なに、これ。」

「これは“どぐう”といって、ほくらのおまもりなのさ。これをふたりにあげるよ。」

よくみるとそれはおかあさんの形をした土の人形でした。

「これがあればきっとまた会うことができるよ。」



家を出てしばらくすると洋和君と正三君の家がみえてきました。

「そろそろお別れだね。」

「また会えるよね。」

涙でだんだんと男の子の姿がみえなくなっていくます……。

「さようなら。」

その瞬間二人は目が覚めました。とてもはっきりした夢だったので、ふたりはなんだかふしぎな感じがしました。そしてふたりが同じ夢をみたことにとても驚きました。

「おにいちゃん、それ。」

ふしぎなことに洋和君の枕の横になんとさつき夢のなかで男の子にもらった人形があったのです。

「ゆめじゃなかったんだね。」

ふたりはお互いの顔を見合わせると、このことは二人、いいえ三人だけの秘密にしようと約束しました。

夏休みの不思議な一日でした……。

洋和君と正三君がみてきたように、縄文時代というのは穴を掘った家に住み、ドングリなどの木の实やイノシシ、シカといった動物を食べていた時代です。真田町でもいまから3千年から5千年くらい前のひとたちはこうして暮らしていたようです。

四日市遺跡の暮らしのようす

・い え

竪穴住居（たてあなじゅうきよ）

穴を掘って、木の枝や草で屋根を付けた家。平らな石を床に敷きつめたものもある。家の真ん中に火をたく「いろり」がある。



石を敷きつめた家の跡

・道 具

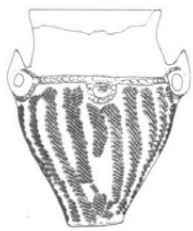
土器（やきもの）

石器（ナイフ、まな板、やり、おのなど）

木の道具（スプーン、舟など）

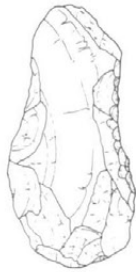
骨の道具（つりばり、ぬいばりなど）

縄文時代の道具と現代の道具



じょうもんどき
縄文土器

なべ
木の実をゆでる



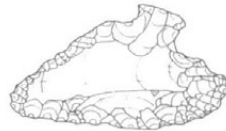
だせいせきふ
打製石斧

スコップ
ヤマイモをほる



ませいせきふ
磨製石斧

のみ
木をけずる



せきひ
石匙

カッターナイフ
いろいろなものを切る



すりいし
磨石

とんかち
木の実の殻を割る



・たべもの ドングリ、クルミ、クリ、ヤマイモ、イノシシ、シカ、ウサギ、サケ、貝、鳥など



くり



ヤマイモ



クルミ



シカ



ノウサギ



ガン



イノシシ



カモ

おわりに

発掘調査の開始から報告書が刊行されるまで足掛け3年を費やすこととなった。右も左も分からないまま見切り発車してしまった感のある1年目。ようやく土層の特色がつかめ、しっかりと平面プランがつかめるようになった2年目。そしてまったく初めての報告書作り。3年間は本当にあっという間だった。

A地区の調査が終わったころ、「この遺跡も別の人に掘ってもらっていたら、もっといい調査になったんだろうな。」と毎日嘆いていた。それはこの報告書の記載内容が如実に示しているだろう。縄文集落を掘るのは初体験。ましてや現場を任されるのも初めてというプレッシャー。「一日も早くこの現場から足を洗いたい。」そんなことばかり願っていたような気がする。

先輩から「報告書なんてもんは理想どおりにはできるもんじゃない。」とよく言われる。その言葉が今身に沁みて理解できるようになった。持ちかえてきた図面をみて、ああすればよかったと後悔の連続だった。また、子供たちが公民館図書室に真田町の縄文時代について調べにくることがよくある。しかし、どれもみな小学生には難しい資料で、説明してはみるものの、子供たちも分かったような分からなかったような顔をして帰ることが多い。当初の目標にせめて中学生に理解できるようなものを作りたいということがあった。しかし、理想は理想。私達の業界は如何に難解な語句を使用しているのか。一般の方にも読んでいただけるような報告書作りを目指したいものである。

この3年間実に多くの方々にご指導、ご協力をいただいた。最後になってしまったが、この場を借りて御礼申し上げたい。ご厚意に沿えず、こんな駄作になってしまったことをお詫びするとともに、今回の調査で得たことは以後の調査で生かしていきたいと思う。

(調査担当者)

写真図版



53号住居址唐草文系土器出土状况(1)



53号住居址唐草文系土器出土状况(2)



61号住居址唐草文系土器出土状况



61号住居址加曾利E式土器出土状况



91号住居址石棒出土状況



98号住居址（柄鏡型住居址）全景・南西から



屋外埋甕 1・2 出土状況



竪穴状遺構 1 縄文中期後葉土器出土状況



82号住居址平安時代鎌出土状況



106号住居址竈内出土ニワトリ寛骨（古墳時代後期）



106号住居址古墳時代後期土器出土状況



現地説明会



平成5年度発掘調査参加者



61号住居址出土唐草文系土器



80号住居址出土唐草文系土器



81号住居址出土加曾利E式土器



屋外埋甕 1 出土加曾利 E 式土器



屋外埋甕 2 出土唐草文系土器



98号住居址出土烧成粘土块



包含層出土石器



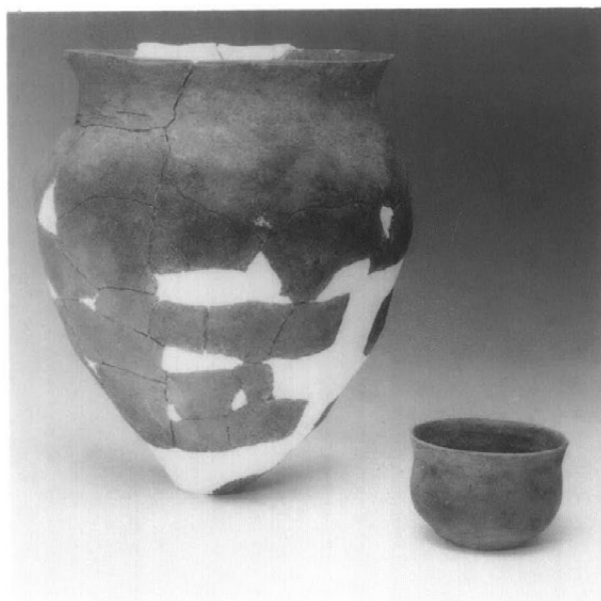
包含層出土土偶体部（出灰土偶）



74号住居址覆土出土打製石斧



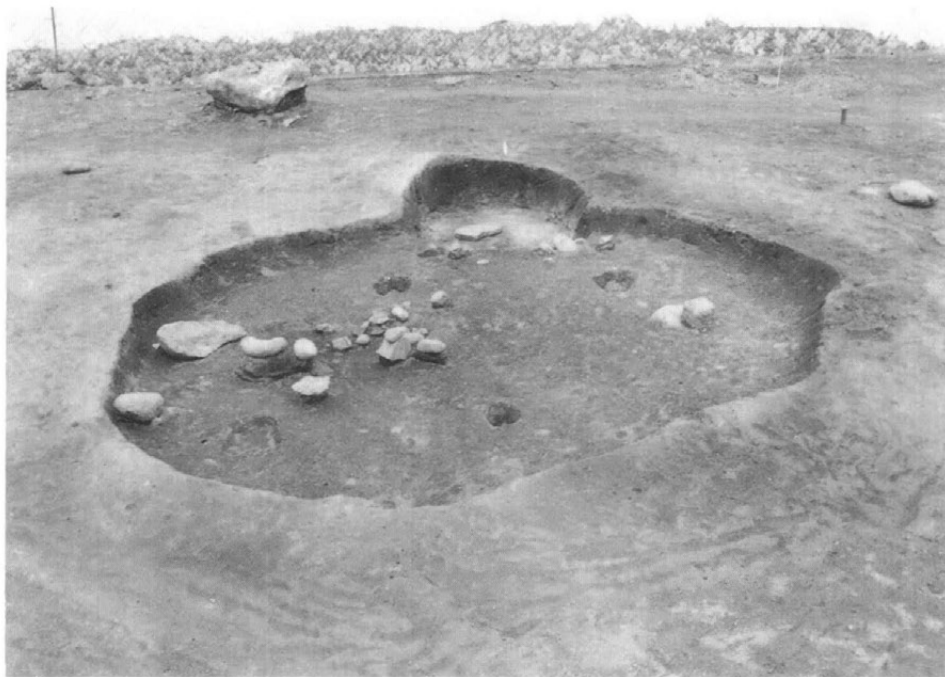
106号住居址出土古墳時代後期土器



50号住居址出土平安時代土師器



82号住居址出土平安時代須恵器



3号住居址および4号土坑全景・南から



15号住居址全景（南から）および炉体土器出土状況





1号住居址全景・南から



1号住居址古墳時代後期小型甕検出状況



4号住居址（古墳時代後期）全景・上空から



4号住居址竈西側土器出土状況



4号住居址竈東側土器出土状況



4号住居址貯藏穴土器出土状況



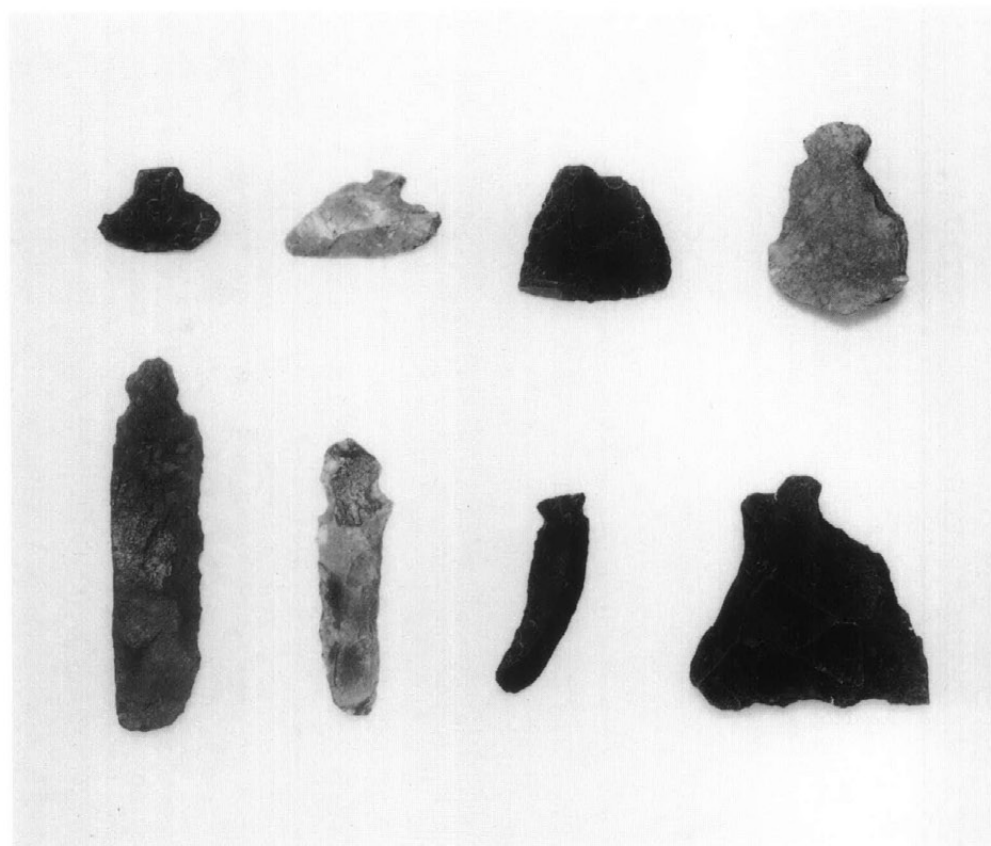
焼土遺構3 平安時代皿出土状況



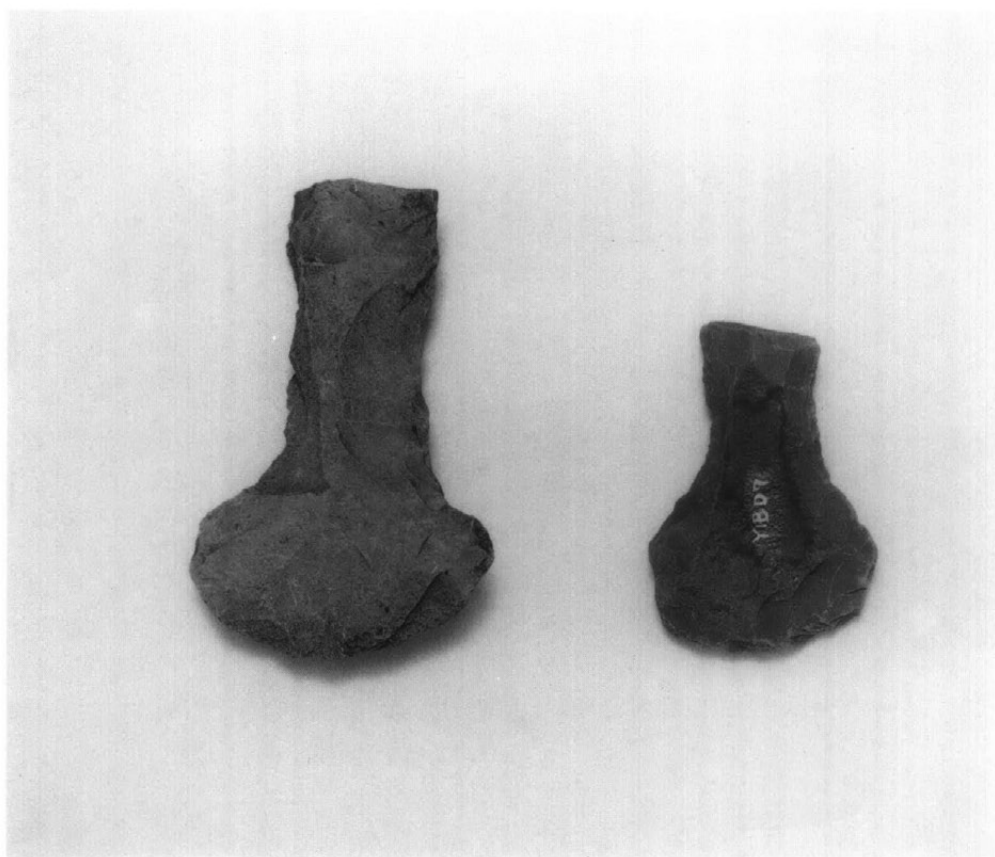
平成6年度発掘調査参加者



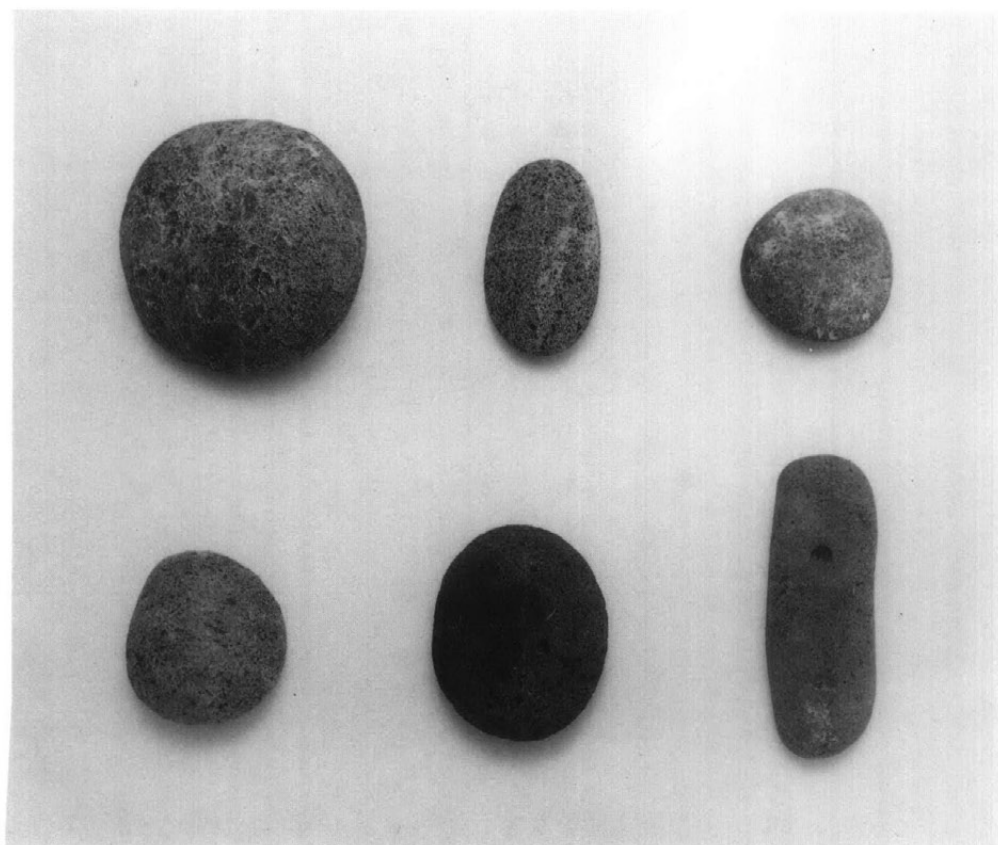
2号住居址出土縄文前期土器



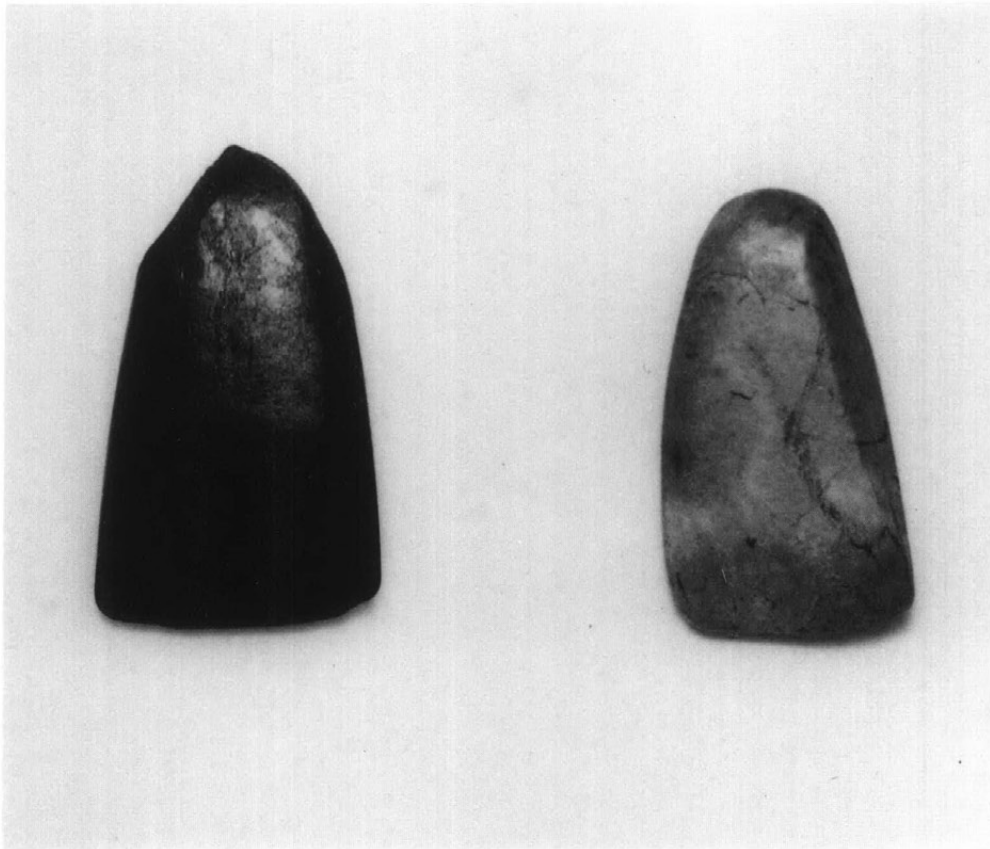
B地区出土 石匙



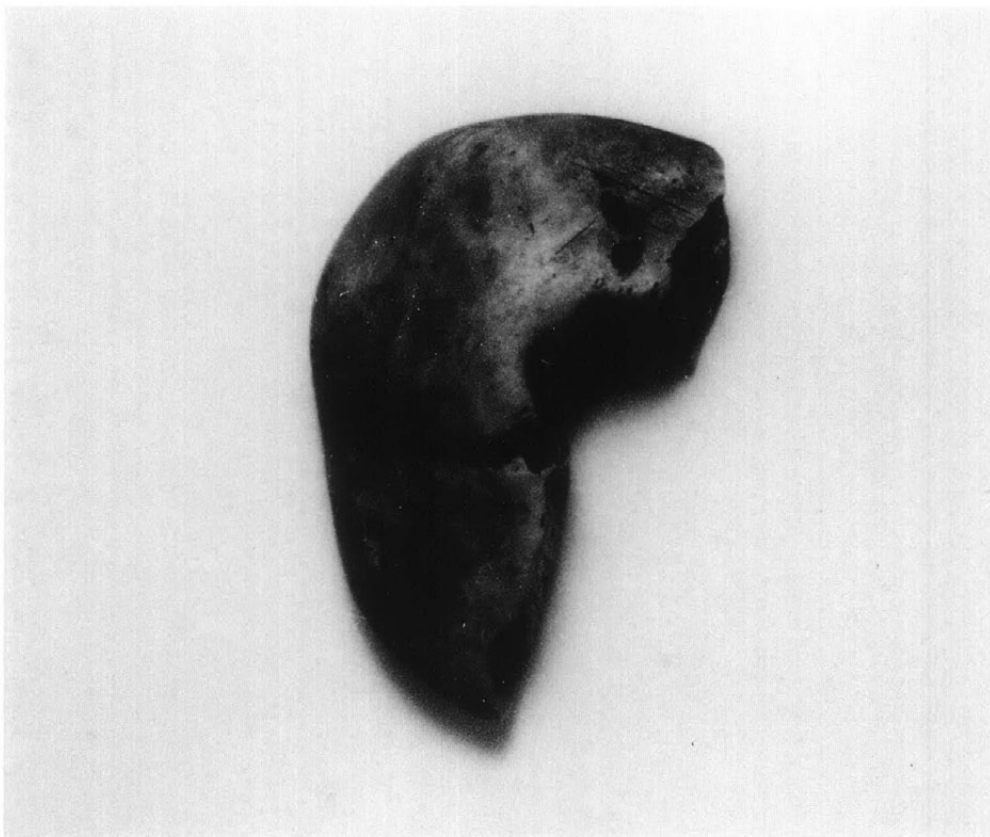
包含層出土 打製石斧



B地区出土 磨石



磨製石斧 (左：SB20、右：包含層)



20号住居址出土 玦状耳飾り



1号住居址古墳時代後期土器



6 a号住居址古墳時代後期土器

報告書抄録

ふりがな	よっかいちいせき に							
書名	四日市遺跡 II							
副書名	横尾地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	真田町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
著者名	和根崎 剛・川上 麻子							
編集機関	真田町教育委員会							
所在地	〒386-22 長野県小県郡真田町大字長7199-1 ☎ (0268) 72-2655							
発行年月日	1996年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	南緯 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よっかいちいせき 四日市遺跡 ちく A地区	ながのけんちいせきがたくん 長野県小県郡 きなだまちおおあざおき 真田町大字長 あざよっかいち 字四日市		89			1993年 5月7日～ 1993年 8月31日	3,500㎡	県営ほ場整備 事業に伴う事 前調査
よっかいちいせき 四日市遺跡 ちく B地区	同上		89			1994年 8月26日～ 1994年 11月10日	2,000㎡	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
四日市遺跡 A地区	集落址	縄文 中期後葉 古墳 後期 平安	縦穴住居址 (柄鏡型住居址 (敷石住居址 (土器溜まり 土坑址 集石遺構 屋外埋甕 縦穴状遺構	43軒 3基) 2基) 1基) 8基 2基 2基 1基	縄文土器 早期～後期 打製石斧・石鏃 磨製石斧 土師器・須恵器 灰釉陶器 鉄製品(鎌・紡錘車) 動物焼骨 イノシシ・ シカ・ニワトリ	縄文時代中期後葉の集 落が発出され、柄鏡型 住居址等の遺構や多く の遺物を出土した。 平安時代の良好な一括 資料が発出された。		
四日市遺跡 B地区	集落址	縄文 前期 古墳 後期 平安	縦穴住居址 土坑址 掘立柱建物址 焼土址	19軒 26基 1基 3基	縄文土器 前期～中期 石鏃・石匙・磨石 磨製石斧・打製石斧 独鈷石 块状耳飾り・垂飾り 土師器・須恵器 灰釉陶器 鉄製品(鎌・刀子)	縄文時代前期の集落が 検出され、住居址から 前期の完形土器や块状 耳飾り等の遺物を出土 した。 古墳時代の良好な一括 資料が発出された。		

真田町埋蔵文化財発掘調査報告書

- 1973 第1集 『日向畑遺跡』 中世の墳墓群の調査。五輪塔などが出土。
- 1975 第2集 『雁石・藤沢』(品切) 縄文後晩期の配石遺構、石棺墓、亀形土製品などが出土。
- 1977 第3集 『山本畑遺跡緊急発掘調査報告書』(品切) 平安時代の住居址、須恵器の耳皿、刻書土器。
- 1982 第4集 『真田氏城跡群』 本城、横尾城跡など概要調査報告書。
- 1990 第5集 『四日市遺跡』 縄文中期後葉・平安時代の集落址の調査。加曾利E式土器、唐草文系土器が主体。
- 1992 第6集 『真田氏館跡』 真田氏館跡の調査。厩跡、土塁等を確認。
- 1996 第7集 『四日市遺跡II』
- 1996 第8集 『境田遺跡・西田遺跡』 古墳時代後期～平安時代の集落址の調査。石製模造品や石組みの煙道が出土。

四日市遺跡 II

— 横尾地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 —

1996年3月22日 発行

編集 真田町教育委員会

発行 上小地方事務所
真田町教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
